

馬場遺跡・杉ヶ撓遺跡 客山墳墓群・連行遺跡

国道431号線バイパス建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書VII

2002年3月

島根県教育委員会

馬場遺跡・杉ヶ撓遺跡 客山墳墓群・連行遺跡

**国道431号線バイパス建設予定地内
埋蔵文化財発掘調査報告書VII**

2002年3月

島根県教育委員会

序

本報告書は、島根県教育委員会が島根県土木部から委託を受けて、平成10年から12年にかけての三か年で実施した松江市上本庄町、邑生町の国道431号線川津バイパス建設予定地内に所在する馬場遺跡、杉ヶ撓遺跡、客山墳墓群、連行遺跡の発掘調査の成果を記録したものです。

この調査では、客山墳墓群においては島根半島部2例目となる弥生時代の墳丘墓を検出しています。また、連行遺跡においては、松江市北東部において初めてとなる総数15以上の大規模な横穴墓群を発見しています。これらの遺構、遺物の発見により、弥生時代から古墳時代、奈良時代にかけての本庄地区の集落と墳墓の変遷を知る貴重な資料となりました。本書が、埋蔵文化財に対する理解と関心を高めることに少なからず寄与すれば幸いです。

最後になりましたが、発掘調査と報告書の作成にあたり御協力いただきました地元住民の方々、松江市教育委員会、島根県土木部をはじめとする関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成14年3月

島根県教育委員会

教育長 山崎悠雄

例　　言

1. 本書は島根県土木部の委託を受けて、島根県教育委員会が平成10年から12年にかけて実施した国道431号線川津バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査の記録である。

2. 本書で扱う遺跡は次のとおりである。

馬場遺跡　　島根県松江市邑生町245他

杉ヶ撓遺跡　　島根県松江市邑生町680

客山墳墓群　　島根県松江市邑生町836他

連行遺跡　　島根県松江市邑生町103-4他

杉ヶ撓遺跡は、当初「杉ヶハム遺跡」として発掘通知を提出していたが、地元の聞き取り等で明らかになった正しい字名を取って、遺跡名を変更した。

3. 調査組織は次のとおりである。

調査主体　　島根県教育委員会

(平成10年)

事務局　勝部　昭（文化財課長）、宍道正年（埋蔵文化財調査センター長）、島地徳郎（課長補佐）、秋山　実（課長補佐）、松本岩雄（課長補佐）

調査員　丹羽野　裕（埋蔵文化財調査センター調査第5係長）、梅木政志（調査補助員）、福田市子（調査補助職員）

(平成11年)

事務局　宍道正年（島根県埋蔵文化財調査センター所長）、秋山　実（総務課長）、松本岩雄（調査課長）、今岡　宏（総務係長）

調査員　丹羽野裕（調査第5係長）、福田市子（調査補助員）、原　和美（調査補助員）

(平成12年)

事務局　宍道正年（島根県埋蔵文化財センター所長）、内田　融（総務課長）、松本岩雄（調査課長）、今岡　宏（総務係長）

調査員　広江耕史（調査第6係長）、原　和美（調査補助員）、守山義博（調査補助員）

4. 調査指導　渡邊貞幸（島根大学文学部教授）、井上貴夫（鳥取大学医学部教授）、大久保徹也（徳島文理大学文学部講師）

5. 調査にあたっては、以下の方々から有益なご助言、ご助力をいただいた。

宇垣匡雅、大谷晃二、竹広文明、平木伴佳

6. 挿図中の方位は、測量法による第III座標系の軸方位である。

7. 本書で使用した遺構記号は以下のとおりである。

SI（堅穴住居）、SB（堀立柱建物跡）、SK（土壙）、SX（特殊遺構など）、SD（溝）

8. 本書の執筆と編集は、丹羽野と広江が協議してこれを行った。なお、馬場遺跡石塔については間野大丞が執筆した。

9. 本報告書に使用した実測図は、各調査員、調査補助員が作成し、浅井順子、谷戸節美、佐々木澄江、門脇弘美、小瀧理恵、田中由紀が清書した。

10. 出土遺物及び実測図、写真は島根県埋蔵文化財調査センターで保管している。

本文目次

第1章 調査に至る経緯	1
第2章 遺跡の位置と環境	2
第3章 馬場遺跡	
第1節 調査の経過と概要	4
第2節 調査の結果	7
第4章 杉ヶ撓遺跡	
第1節 調査の経過と概要	22
第2節 調査の結果	24
第5章 客山墳墓群・連行遺跡	
第1節 調査の経過と概要	35
第2節 調査の結果	39
第6章 まとめ	167
第7章 自然科学的分析	171

第1章 調査に至る経緯

一般国道431号は、出雲市を起点として、平田市から松江市・境港市を経て米子市に至る総延長95.8kmの道路である。この道路は、出雲平野部の宍道湖、中海をはさみ南側の国道9号線と共に北側を結ぶ大動脈である。松江市とその周辺地域においては、昭和40年代以降急激な都市化に伴い交通量が増大し、市街地では慢性的な交通渋滞を引き起こしている。島根県はこの対策として、松江市西川津町から野原町間の総延長9,130mの区間のバイパス計画を立て、平成48年度より道路改良事業に着手し、平成6年に松江市西川津町から坂本町間が開通している。これにより松江市内と本庄方面の所要時間の短縮と島根大学付近の交通渋滞の緩和と通学路の確保がなされることとなった。平成6年度以降は坂本町～野原町間の整備工事に着手している。

島根県教育委員会は、昭和48年に松江土木事務所から依頼を受けて、路線決定に先立ち遺跡の分布調査を行っている。この分布調査の結果26か所で遺跡の存在が確認された。この調査内容をもとに島根県教育委員会と松江土木事務所で協議し、遺跡を可能な限り保存する方向で国道のルート決定を行った。

その後ルート内の遺跡について発掘調査を行うこととなり、昭和51年に橋本遺跡、柴遺跡、中頭遺跡の調査を行い報告書の作成を行っている。柴遺跡については、昭和56年にも調査を行っている。昭和62年には、西川津町の祖子分長池古墳と祖子分胡麻畑遺跡の調査を行っている。八色谷遺跡の調査は、昭和63年と平成3年に試掘調査を行い、平成4年に発掘調査を行っている。

坂本町から野原町にかけての遺跡は、昭和62年に土木部から分布調査依頼を受け、同年分布調査を行っている。その結果、6か所の遺跡と6か所の要注意個所が確認された。島根県教育委員会では、平成6年に坂本町以東の遺跡について土木部から調査依頼を受け、平成8年、9年に本庄川条里制遺跡、荒船古墳群の調査を行っている。この2か年の調査により、条里制の残る水田部分の調査を終え、この後は平野東側の丘陵部の馬場遺跡、杉ヶ撓遺跡を平成10年に、客山墳墓群、連行遺跡の横穴墓と西斜面を平成11年、連行遺跡の横穴墓の一部と東斜面を平成12年に調査している。

本庄川条里制遺跡の残る水田部分のバイパスのルート以外の場所は、松江市教育委員会により圃場整備に先立ち松江北東部遺跡発掘調査として昭和61年度から平成9年度まで調査が行われている。

(広江)

参考文献

1. 『主要地方道松江－境港バイパス関係埋蔵文化財調査報告』I 島根県文化財愛護協会 1976年
2. 『主要地方道松江－境港線バイパス関係埋蔵文化財調査報告』II 島根県教育委員会 1982年
3. 『祖子分長池古墳』 島根県教育委員会 1988年
4. 「八色谷古墳」『国道431号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』IV 島根県教育委員会 1993年
5. 「本庄川流域条里制遺跡」『国道431号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』V 1998年

第2章 位置と環境

馬場遺跡、杉ヶ撓遺跡は、本庄川により形成された本庄平野の北東部の丘陵上に位置している。この丘陵の北側に狭い谷が東に向いており、枕木川により形成される谷に続いている。客山墳墓群と連行遺跡は、北側の枕木山から流れ中海に注ぐ枕木川の東側の丘陵部に位置している。遺跡の立地する場所は、島根半島の東西に連なる北山から派生し南側の中海まで伸びる低丘陵である。

遺跡の周辺において、旧石器時代まで溯る遺跡の存在は確認されていないが、本庄川の南を並行して流れる新庄町の南川の河川改修において発見された石器がルヴァロア型尖頭器の可能性が指摘されている。

縄文時代の遺跡では、荒船遺跡において草創期の有舌尖頭器が発見されている。新庄町の松崎遺跡においては、後期と思われる打製石器が出土している。本庄地区の周辺部においては、手角町寺の脇遺跡、夫手遺跡において後期のドングリの貯蔵穴が検出されている。東方に隣接する八束郡美保関町においては、中海に面した場所に洞窟遺跡として、サルガ鼻洞窟遺跡、権現山洞窟遺跡、小浜洞窟遺跡が知られている。

弥生時代の前期から中期にかけての遺跡は夫手遺跡で確認され、後期になり的場遺跡において住居跡が検出され、古墳時代まで継続して集落が営まれている。

古墳時代になると、前期古墳として確認されたものは少ないが新庄町の八日山1号墳がある。一辺23.5mの方墳で、三角縁神獣鏡が出土している。中期になると扇状地を取り巻く丘陵上に多くの古墳群が造られるようになる。新庄町客山1号墳は、方墳で主体部が木棺直葬であり、小型の倣製九乳文鏡、刀子、管玉、ガラス小玉、櫛が主体部から出土している。丘陵部から離れた平地の的場遺跡においては、11基の方墳が墳丘を削平された状態で検出されている。後期の古墳として本庄川上流部の丘陵上に位置する中西古墳群がある。横穴式石室を主体部とし、円筒埴輪も出土している。横穴は新庄町宮島谷古墳群、梅廻古墳群があり、坂山横穴墓群は柿畠の造成中に墓道の一部が削平され遺物が出土し、約10穴の存在が想定されている。

律令時代の遺跡としては、前代から継続している上本庄町京殿遺跡がある。遺構は検出されず手捏土器、土馬等の祭祀遺物が出土し、硯、丹塗り土師器などから官衙関係の遺跡の可能性もある。中世の遺跡としては、的場遺跡において掘建柱建物と土壙墓が確認されている。土坑墓は、木棺と思われ、和鏡の上に中国製同安窯の青磁の完形品が伏せられた状態で出土している。建物の多くは、庇を有する大型の建物であり、豪族の居館の可能性もある。館を備えた山城として上本庄町の城山城がある。この城は北側のあん山城との関連も指摘されている。(広江)

参考文献

松江市教育委員会 「本庄地区県営圃場整備事業に伴う松江北東部遺跡発掘調査報告書」 松江市文化財調査報告書第78集
1999年

島根県教育委員会 「本庄川流域条里制遺跡発掘調査報告書」 国道431号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書V 1997年

松本岩雄 「原始から古代へ」『ふるさと本庄』 1994年

内田律雄 「奈良・平安時代の本庄」『ふるさと本庄』 1994年



第1図 本庄地区遺跡分布図

- 1 馬場遺跡 2 杉ヶ撓遺跡 3 客山墳墓群 4 連行遺跡 5 萩平遺跡 6 兵ヶ谷古墳群 7 家床遺跡
- 8 上松古墓 9 月光寺遺跡 10 鉢古墳群 11 尊場遺跡 12 的場遺跡 13 塚根古墳 14 天神山遺跡
- 15 天神山古墳 16 大塚古墳 17 本庄川流域条里制遺跡 18 金比羅古墳群 19 小馬枝古墳群
- 20 中西古墳群 21 京殿遺跡 22 深迫古墳 23 六田遺跡 24 荒神古墳群 25 千歳遺跡 26 原ノ後遺跡
- 27 荒船遺跡 28 荒船古墳群 29 前田遺跡 30 松音寺古墳 31 扇ノ平古墳 32 あん山城跡 33 城山城跡
- 34 坂山横穴群 35 客山古墳群 36 松崎遺跡 37 ドロケ遺跡 38 久羅弥神社遺跡 39 宮島谷古墳群
- 40 梅廻横穴群 41 梅廻古墳群 42 城山城跡

第3章 馬場遺跡

第1節 調査の経過と概要

調査の経過

馬場遺跡は、平成10年度に東側に隣接する杉ヶ撓遺跡とともに発掘調査を行った。当該年度の調査は、まずは杉ヶ撓遺跡東側の谷部に広がる水田部分（川原遺跡）の確認調査（トレンチ調査）から始め、杉ヶ撓遺跡の確認調査、本調査と進めていった。馬場遺跡はその大部分が畠地として耕作されていたため、収穫が終わる秋になってから調査を開始し、確認調査を始めたのが9月18日である。調査は杉ヶ撓遺跡と平行して進め、確認調査の結果、古墳2基と建物跡等の存在が確認され、移転の終了していない墓地部分と水道管が埋設されている道部分を除いた丘陵のほぼ全域を対象として本調査を行うこととした。

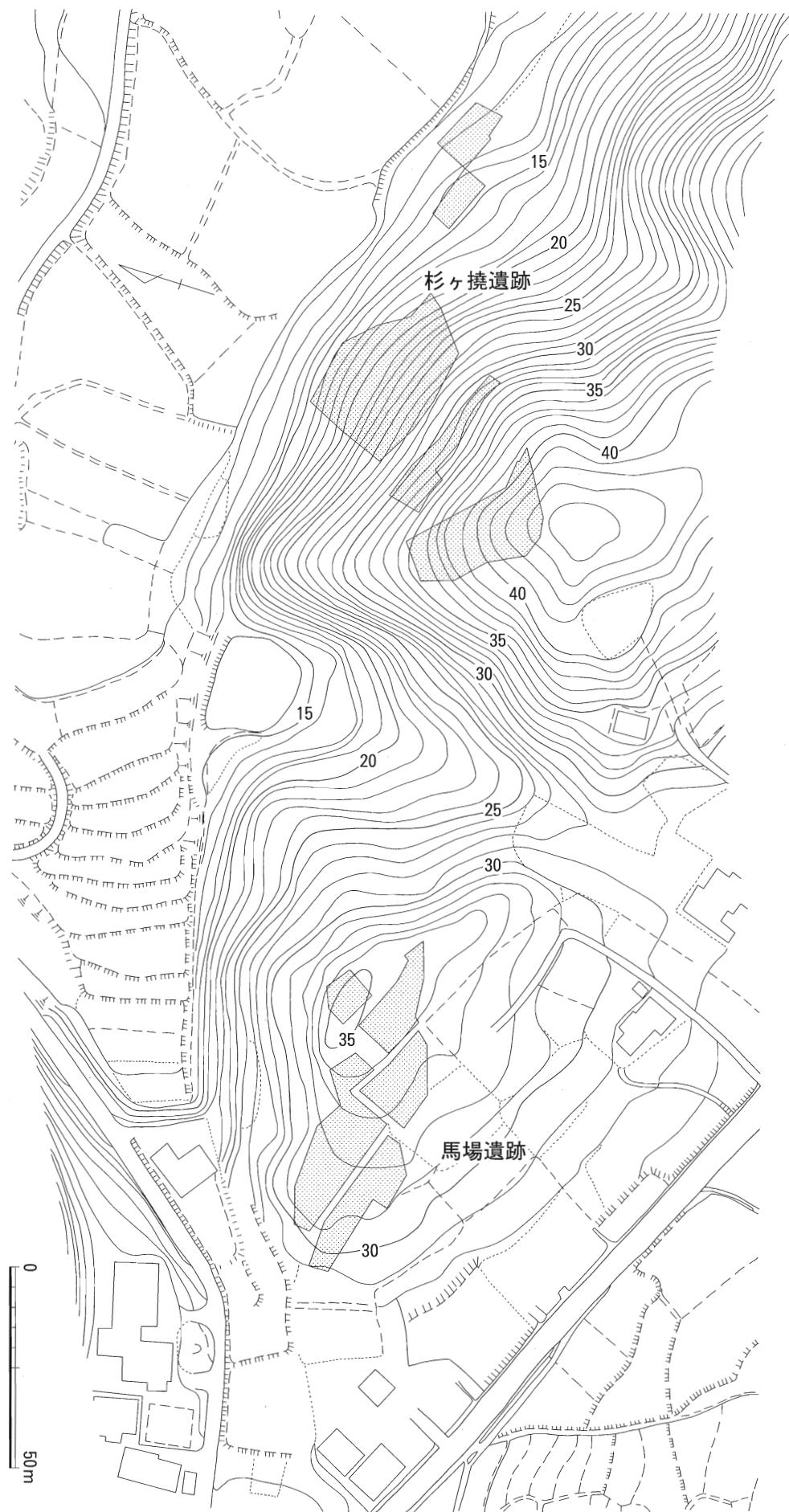
本調査は10月28日から、まずは丘陵頂上部付近から開始し、次第に丘陵下方へ掘り進めていった。古墳2基からは、土師器や埴輪等の遺物が多量に出土し、用地買収や作物の関係でモザイク状の調査になったこともあって予定よりも時間がかかり、終了したのは12月18日であった。12月21日に航空写真撮影、航空測量を行い、全ての調査を終了した。

なお、杉ヶ撓遺跡の東側水田（川原遺跡）の確認調査では、9か所のトレンチを設定して調査を行った。調査の結果、当該箇所は非常に軟弱地盤で、粘質の土壤が深く堆積していることが明らかになった。人間が歩いても膝までつかるような軟らかい田で、重機が沈んで動かなくなったこともあったという。遺物は黒曜石片、弥生時代後期の土器、古墳時代後期の須恵器、奈良～平安時代の須恵器・土師器、近世の陶磁器類等が出土している。ただいすれも断片的で流入遺物と判断されたため、確認調査のみで調査を終了した。

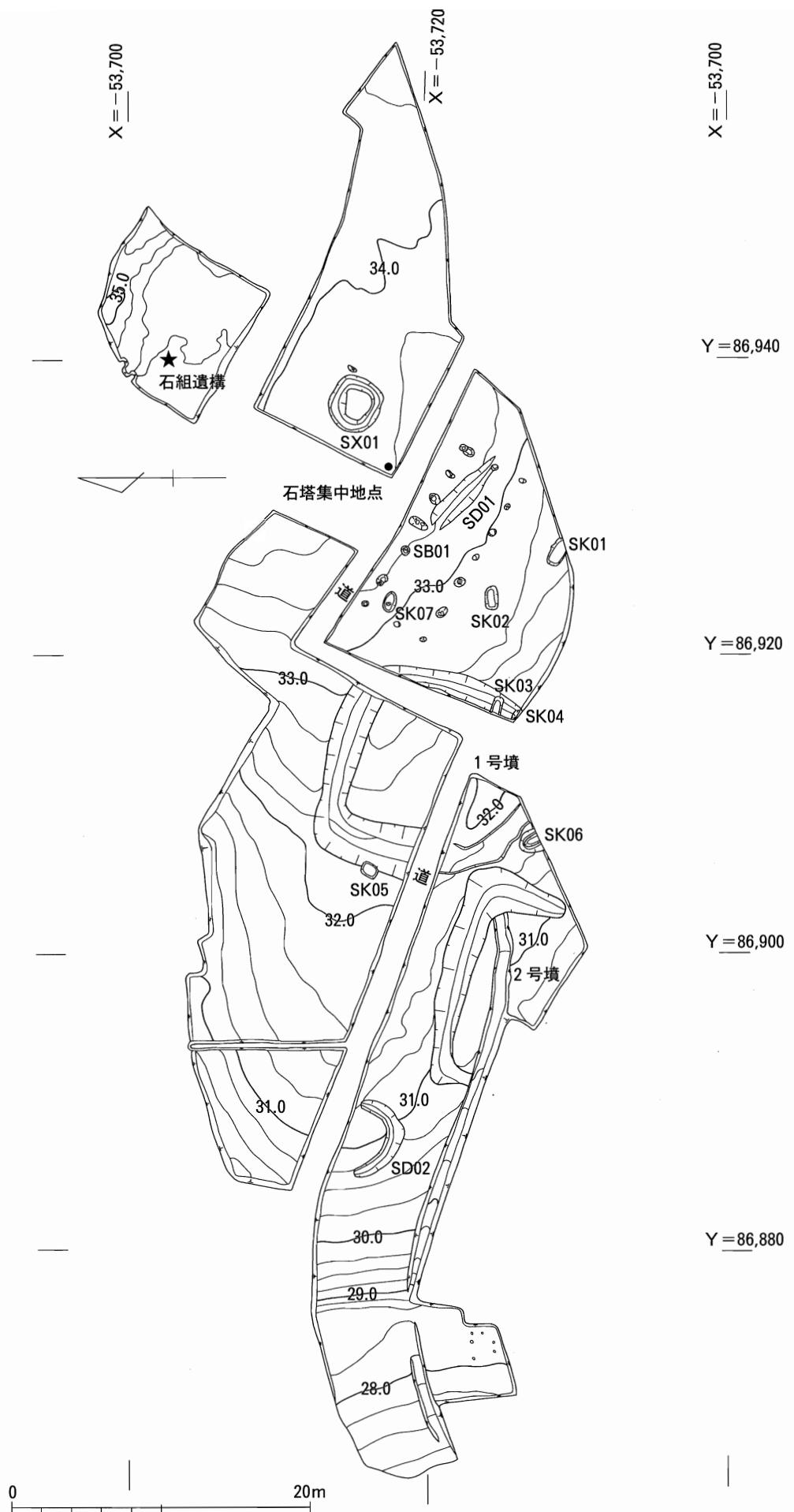
調査区の設定と遺跡の概要

馬場遺跡は、本庄川により形成された本庄平野の北東丘陵上に位置する。眼前に水田が広がる緩やかな斜面で、標高は30～35m前後である。小さな谷を挟んで東側丘陵上に隣接して杉ヶ撓遺跡が存在する。調査区は、建設予定地の西向きの緩やかな斜面のほぼ全域に設けたが、調査区内に水道管が埋設された道が通っており、その範囲は除かざるを得なかった。

検出された遺構の概略は以下のとおりである。調査区のほぼ中央、標高31～33m程度のところで古墳の周溝と考えられる溝が2ヶ所で検出され、東から1号墳、2号墳と呼んだ。1号墳の周溝の周辺からは、土坑が6基検出されており（SK01～SK06）、覆土の状況などから墓壙の可能性があるものもある。1号墳の東側には6間×2間のやや大型の掘立柱建物（SB01）が検出されている。また建物跡付近からは落とし穴と考えられる土坑（SK07）も検出された。SB01の北側の頂上に近い斜面からは、隅丸方形に溝で囲まれ、その内部に焼土が見られる遺構（SX01）が検出されている。またこのSX01の南西側に、石塔類が集積しておかれているのが調査前から確認されており、採集の上、実測図を掲載している。丘陵頂上部付近からは、5個の礫を並べた石組み遺構が検出されている。



第2図 杉ヶ撓遺跡・馬場遺跡 調査区配置図 (S=1/1500)

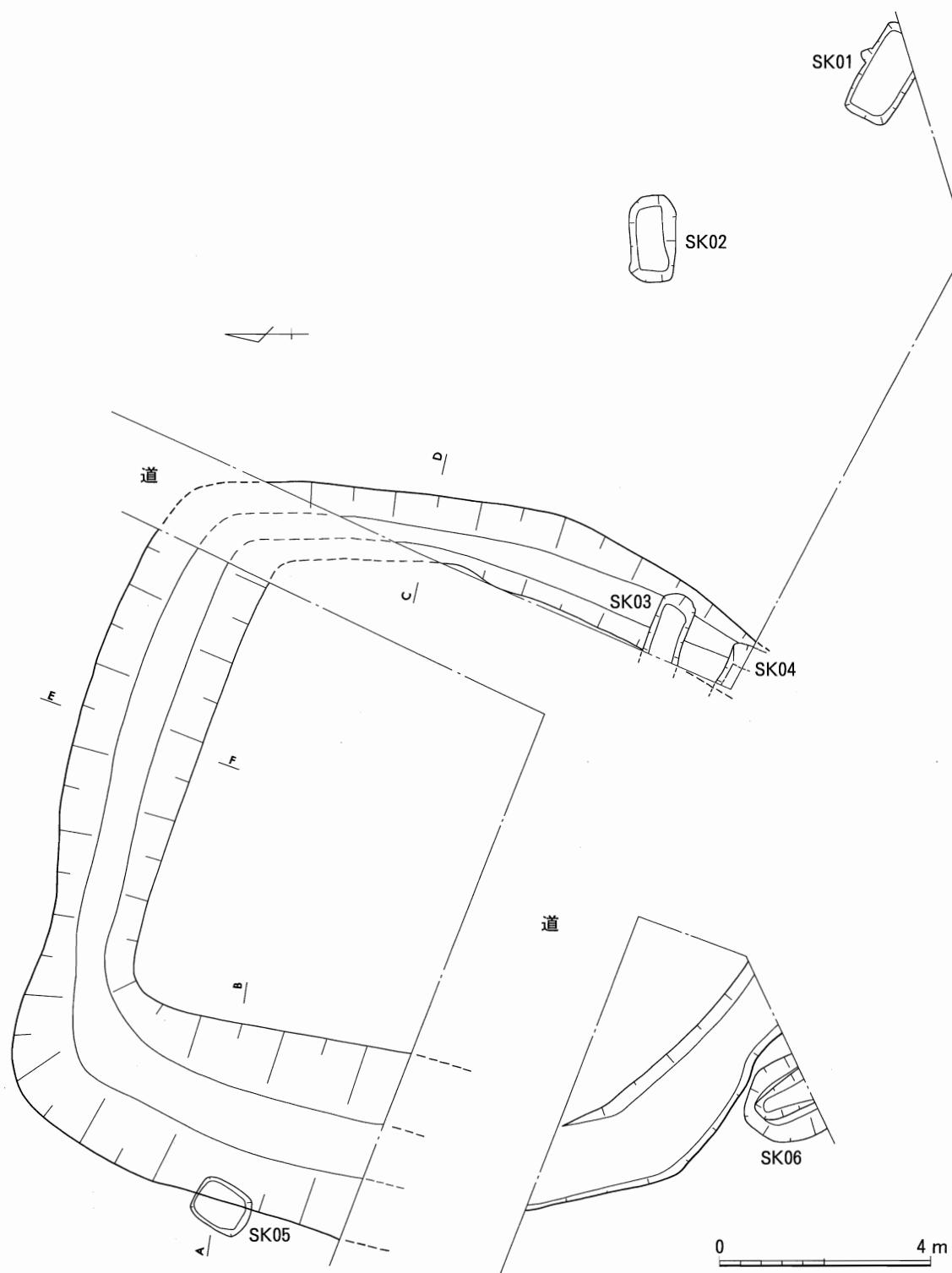


第3図 馬場遺跡 発掘調査後地形測量図 (S=1/400)

第2節 調査の結果

馬場1号墳（第4図）

南西向きの緩やかな斜面で検出された古墳である。墳丘は削平されているが、周溝と考えられる溝がほぼ四周を廻ることが確認され、その覆土から多くの高杯を中心とする土師器が出土したことから古墳と判断した。調査区内を通る道や未買収地が間に有ることから、全てを完結して調査することはできなかったがおおよその全体像は把握することができた。ただ道をはさんで南北側の調査



第4図 馬場遺跡 1号墳・SK01～SK06 平面配置図 (S=120)

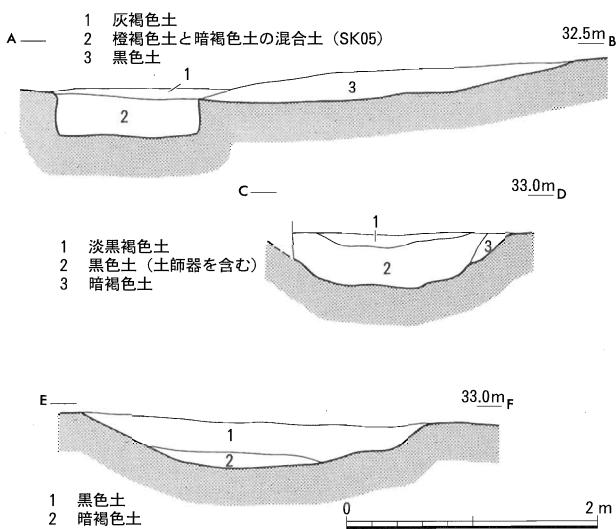
区は、北側に比べ一段低く削平され、溝は浅くしか残存していなかった。また北側の溝との方向が若干ずれているものの、およその連続性は見られることから基本的に一連のものと判断した。

溝の規模は、幅が底面で0.5~1.1m、検出面の広い部分で3.6m程度あり、全体形はおよそ方形を呈す。溝の方向は東西南北に近い方向で、溝から推測される古墳の規模は、東西方向で10.8m、南北方向で12m程度である。現況での深さは、深い部分でも40cm前後、浅い部分では10cm以下と浅く、全体的に大きく削平されたことが推測される。溝に囲まれた内部には、主体部等の痕跡は全く検出されなかった。

遺物出土状況（第7図） 溝の底部から覆土内にかけて、多くの土師器が出土している。溝内からアトランダムに出土しているのではなく、大きく2か所に分かれて出土している。ひとつは北西コーナー付近で、少なくとも7個体以上の高杯が底面から外寄りの溝斜面部分を中心に出土している。もうひとつは東側溝の中央付近で、底面部分を中心に高杯が少なくとも4個体以上、甕が2個体出土している。また単独では北側溝の中央やや東寄りで甕が1個体、北側溝の調査区南端付近（SK04と重なる部分）で高杯1個体が出土している。

遺物（第8図） 1~24は土師器高杯である。いずれも橙色ないし赤色系の色調を呈す。杯部の形態や脚部の形態にはバリエーションが認められる。1はボール状の杯部に短めの脚部がつくもので、復元口径15cm前後、底部は底が厚く、中心には径7mm程度の穴があいている。脚部は、外面は緩やかな弧を描いて開いていくが、内面は中途で折れ曲がっている。器高9.4cm、脚部高4.2cm、軸径2.5cm、脚端径9.6cmである。2は深めのボール状の杯部に短小な脚部がつくもので、口径13.5cm、器高8.0cm、脚部はいわゆる軸部分がなく、接合部分から脚端に向って開く低脚のタイプである。脚部高2.3cm、脚端径7.8cmを測る。3は復元口径14.5cm前後、浅めで体部がさほど湾曲しない杯部である。外面には粗いハケメを施す。4はボール状の杯部に径2.8cmの軸部がつくもので、体部外面にはハケメが見られる。5は浅いボール状の杯部である。復元口径17cm前後、杯部の高さ4.3cmで外面はハケメの後なでている。6は復元口径12cm前後の杯部で、器壁が7~8mm前後と厚手である。杯部の高さ4.7cm前後でやや浅めである。外面には口縁下方に1条の沈線が見られ、その下方にはハケメを施している。また内面にはヘラミガキを施しているようである。脚部は杯部の底部を窪ませて、接合していたようである。7は復元口径16cm前後のボール状の杯部である。

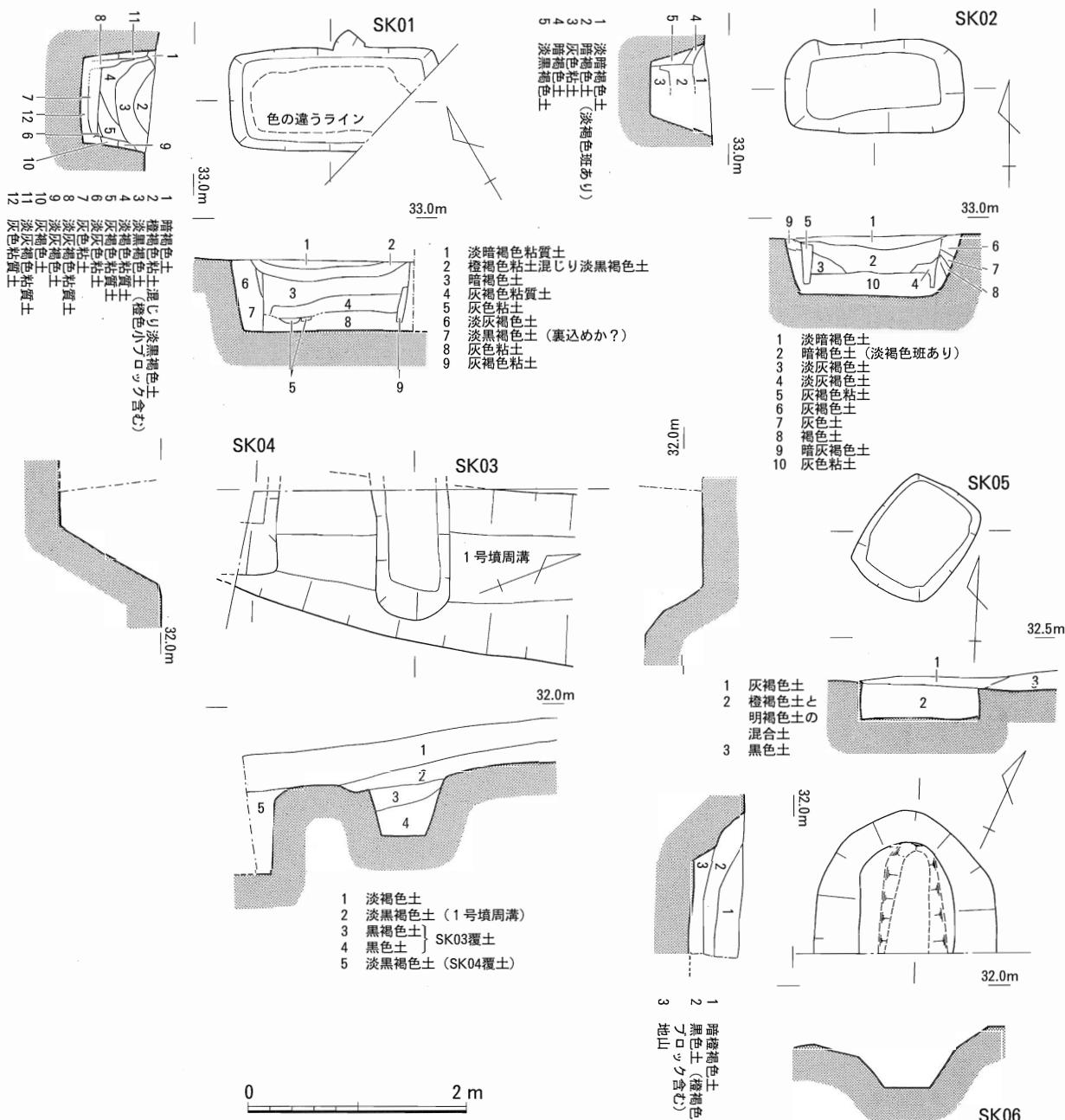
8は軸部から杯部にかけての破片で、脚部は杯部の底を窪ませて、差し込むよう接合しているようである。9は軸部から杯部にかけての破片で、軸部径が3.1cmである。10は杯部の外面に段を持つ高杯である。内面には変曲点を持たず、外面を突帯状にすることで段を設けている。内面には横方向にヘラミガキを施した後、放射状にヘラミガキを行っている。軸部の径は3.4cm程度で、杯部の底には粘土を充填している。



第5図 馬場1号墳 周溝土層断面図 (S=1/60)

る。11は端部が擬口縁となる杯部で、中途に段がつくタイプの可能性もある。

12は円筒状に近い軸部から脚裾部にかけて大きくくびれ、緩い角度で脚端部に向う脚部である。残存部の軸部径3.2cm、脚端径11.7cmで、脚裾の内面にはクモの巣状にハケメが施されている。13は軸部の短い脚部で、軸部の中央付近には沈線が一条見られる。軸径2.7cm、脚端径9.2cm、脚裾の内面にはクモの巣状にハケメを施す。頂面は剥離面で、杯部の底の凹面に差し込まれていたものと考えられる。14は軸部から杯部にかけての破片で、稜部の境付近に刻むような沈線を施している。軸径2.5cmである。15は脚部高5.5cmとやや低めの脚で、円筒状の軸部からくびれて脚裾部にいたる。軸部の中央やや上方には刻むような沈線が見られ、軸部から杯部にかけては放射状にハケメを施している。脚端径は10cm前後である。16は杯部から軸部にかけての破片である。軸部は円筒状で

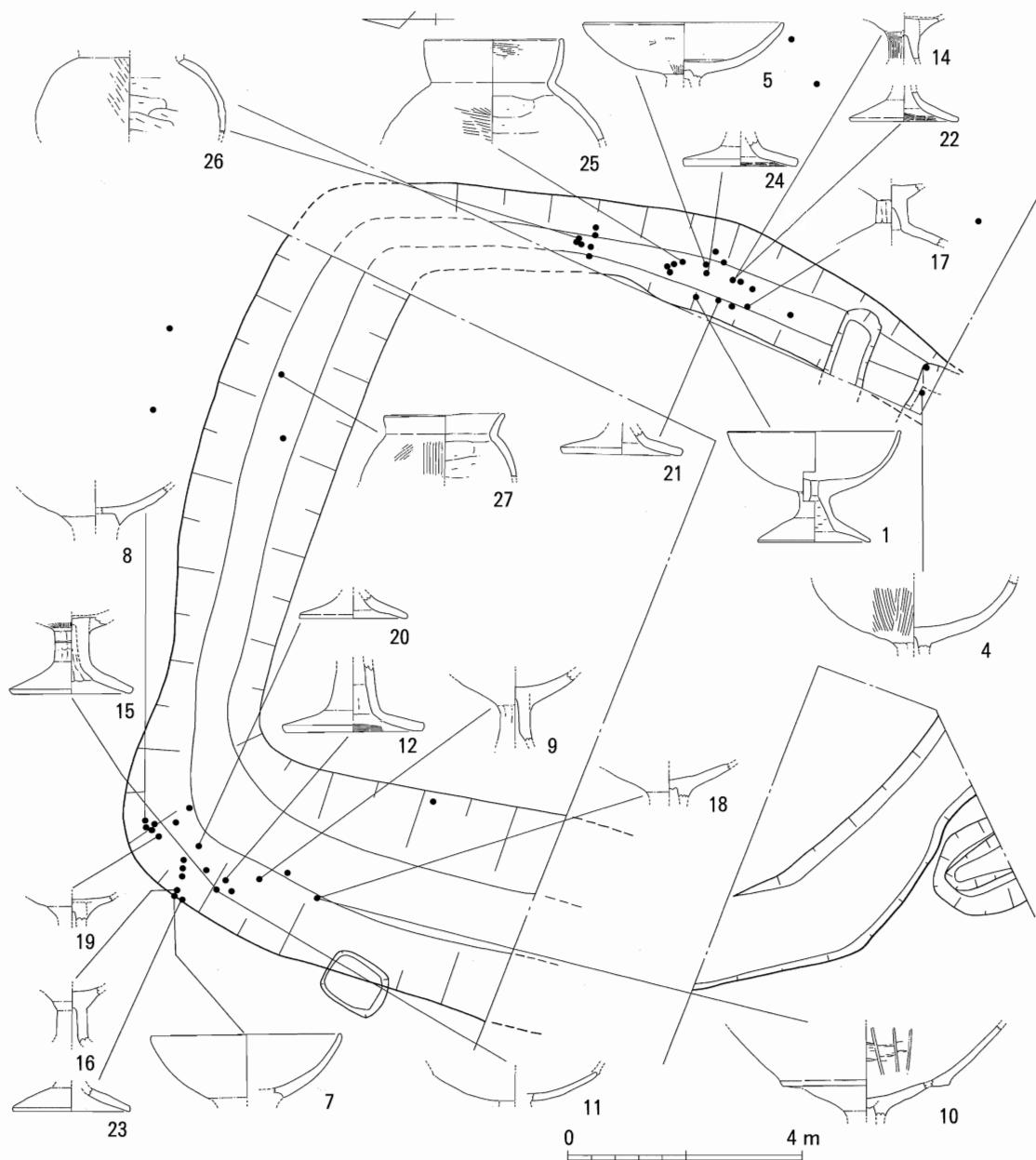


第6図 馬場遺跡 SK01・SK02・SK03・SK04・SK05・SK06 実測図 (S=1/60)

径2.5cmである。17は軸部長1.9cmと短脚の高杯で、円筒状の軸部から屈曲して脚裾部に向う。

20～24は脚部の裾から脚端部分で、およそ同様の特徴を持っている。軸部からくびれて脚裾にいたり、脚端の径は9～10cm程度である。脚裾の内側にはクモの巣状にハケメを施すものも見られる(22、24)。

25～27は、小形の甕もしくは壺である。25は頸部が屈曲し、単純な口縁を持つ甕で、口縁部は内湾しながらほぼ上方に立ち上がり、端部は内側にわずかながらつまみ出している。復元口径12cm前後で橙褐色を呈す。26は復元胴部径16cm前後の壺もしくは甕の胴部で、外面には粗いハケメが見られる。球形に近い胴部と推測され、橙褐色を呈す。27は小形で単純な口縁の甕で、頸部は緩くくびれ、胴部外面にはハケメを施す。ややいびつで口径は9.5～10.0cmである。



第7図 馬場遺跡 1号墳周溝内遺物出土状況 (S=1/120)

出土土器と古墳の時期 多量に出土している高杯を見ると、ボール状の杯部を持つ高杯が中心を占め、短脚化した脚部も目立つなどの特徴から、須恵器は出土していないものの松山編年のIV期（松山1991）以降と考えられる。よって詳細は不明ながら5世紀後半以降と考えられよう。

1号墳周辺土坑群（第6図）

1号墳の周溝部分及びその周辺から6基の土坑が検出された。2基は東側周溝を横切るように、互いに平行して検出され（SK03、04）、1基は西側周溝の外側斜面に重なって検出された（SK05）。周溝の外側からは、東に約10m離れてSK01が、約6m離れてSK02が検出、南側に隣接してSK06が検出された。

SK01（第6図）

1号墳周溝の外側、約10m東で検出された土坑である。一隅が調査区外にあたり、検出されていないが、ほぼ全容を知ることができる。検出面での長さが1.92m、幅が0.96m、底面の長さが1.67m、幅0.78mの整った長方形を呈す。壁は90°に近い角度で掘り込まれ、深さは検出面から0.7mとかなり深い。長軸方向はN59°Wである。

平面的に検出した時点では、堆積土の壁から20cm前後内側に色の違うラインが認められ、棺状のものの存在が想定されたが、土層断面においても平面的観察に対応する立ち上がりを認めることができた。長軸では北西壁から25cm前後離れて、短軸では6cm前後離れて立ち上がりが見られ、復元される棺の規模は長さ1.3m程度、幅0.7m程度である。この立ち上がりラインには、側板もしくは小口板痕跡と思しき幅で灰褐色粘土が見られる部分もある。また底面には灰色粘土が認められ、棺底の下に敷かれた可能性もある。遺物は出土していない。

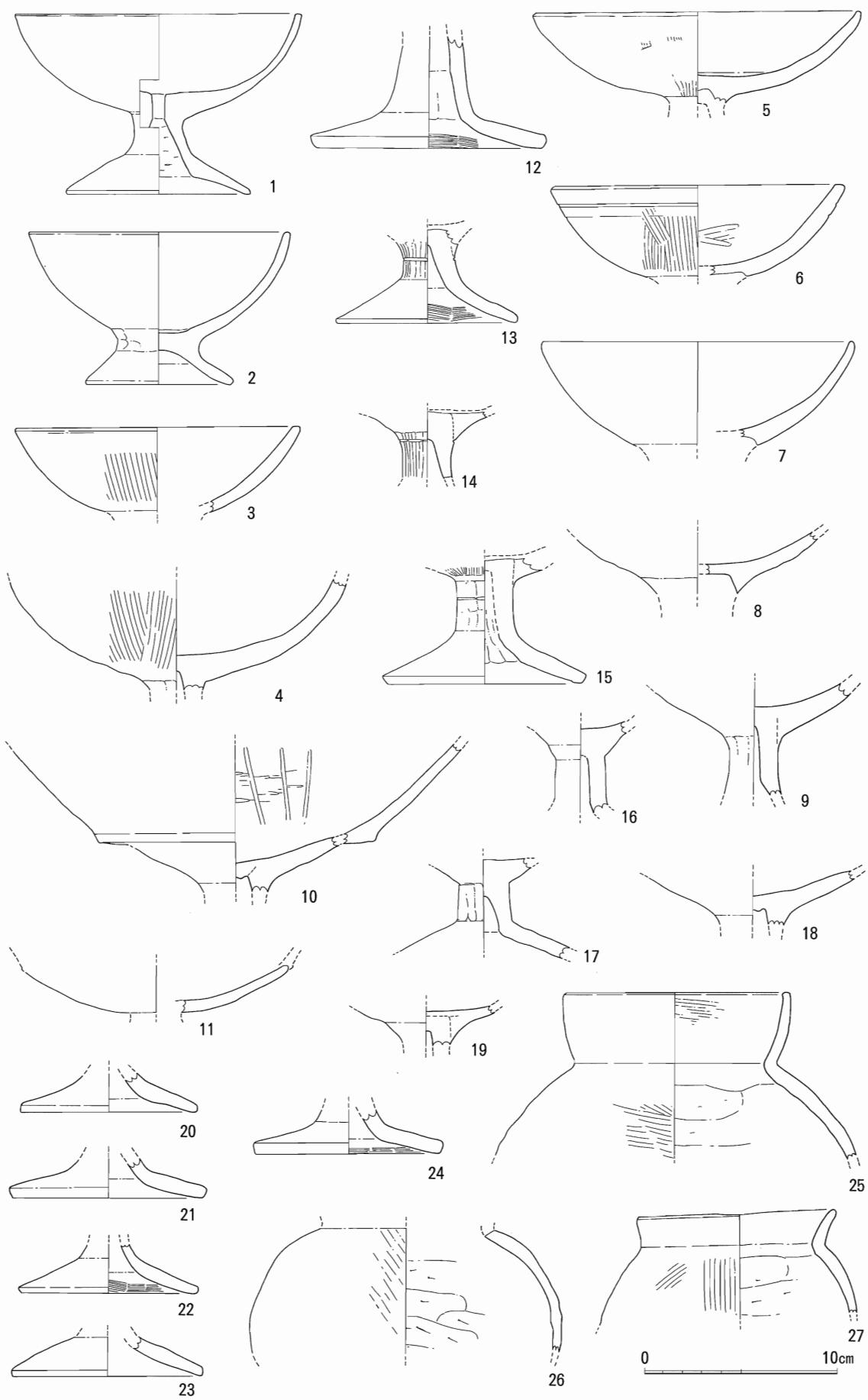
SK02（第6図）

1号墳周溝の外側、約6m東で検出された土坑である。長軸方向はN94°Wとほぼ東西方向を向く。ほぼ長方形を呈す土坑で、検出面での規模は1.62m、幅が0.8m程度、底面で長さ1.2m、幅が東側で0.42m、西側で0.51mで、壁は角度を持ってやや斜めに掘り込まれている。深さは検出面から0.55m程度で、わずかながら西側が標高が高い。

堆積土層を観察すると壁の内側に棺壁らしき立ち上がりが、長軸方向、短軸方向とともに観察され、板の痕跡らしき土層も観察される。棺と推測される構造の規模は長さ1.2m程度で、土坑の底面の幅とほぼ一致する。棺床らしきラインは底面より20cm前後上方に認められ、側板、小口板の底面よりも上にあったようである。遺物は出土していない。

SK03（第6図）

1号墳の東側周溝の南寄り、未検出だが南東コーナーに近い部分と考えられる箇所で検出された土坑である。周溝の方向とほぼ直行して、周溝を横切るように設けられており、N71°Wと東西南北と若干ずれた方向に長軸を向けている。道によって西側の端を知ることはできないが、検出面の幅が0.7m前後、底面での幅が0.45m、検出できた部分の長さが検出面で1.2m、底面で0.92mである。深さは検出面で0.6m前後である。堆積土層を見ると、SK01、02のような木棺痕跡状の立ち上がりは認められない。遺物は出土していない。



第8図 馬場遺跡 1号墳周溝内遺物実測図 (S=1/3)

SK04（第6図）

SK03の約90cm南側に、SK03とほぼ平行する形で検出された土坑である。南側は調査区外に広がり、西側は道の下に伸びているため全容は不明であるが、検出された部分の検出面で長さ0.78m、幅0.33mである。深さは検出面から最も深い部分で0.9mあり、かなり深い土坑といえる。狭い範囲の調査しかできなかったため、土層の十分な観察はできなかったが、観察できた範囲内では全体に一様な土砂が堆積していた。遺物は出土していない。

SK05（第6図）

1号墳西側周溝の検出面肩付近で検出された土坑である。検出面で長さ1.1m、幅0.87m、底面で長さ0.93m、幅0.72mの長方形を呈している。深さは検出面から0.35m程度で、さほど深くはない。遺物は出土していない。

SK06（第6図）

1号墳の南側周溝に隣接して検出された土坑である。南側が調査区外に続いているため、全容は不明だが、北側の端は丸みを帯びており、長楕円形状の平面形が想定される。二段掘り状になっているのは誤って底面を掘り抜いたためで、実際は壁の傾斜が緩めの一級掘りの土坑である。検出された部分の幅は検出面で1.68m、底面で0.87m、長さは検出面で1.3m以上ある。深さは現状で検出面から0.33mほどである。

土坑群の性格と時期 これら1号墳の周辺から検出された土坑群は、規模や状況がすべてが同様ではなく、性格等も異なる可能性が高い。その中である程度性格が限定できるのがSK01、02とともに木棺痕跡状の立ち上がりが認められることから墓壙である可能性が高い。SK03、04は木棺痕跡等は認められないものの、推測される形状や深さなどから、やはり墓壙の可能性がある。その一方でSK05、06は形状等から見て墓壙と考える積極的な根拠はない。

時期については、遺物が出土しておらず直接的な根拠はない。ただSK03、04については、土坑の覆土上に周溝の覆土が堆積していることや土坑の覆土より上から古墳に伴う可能性の高い土師器高杯片が出土していることなどから、古墳周溝と同時期もしくは古いものと考えられる。その方向性の一致を勘案すれば、1号墳と同時期の可能性も高いものと考えている。SK01、02、05、06は直接的な古墳との関係は知り得ず、時期不明といわざるを得ない。

馬場2号墳（第9図）

1号墳の南西コーナーにほぼ接するような状況で、斜面上方側を「コ」字形に掘削した溝が検出された。覆土内から多量の埴輪片等が出土したことから、古墳の周溝と判断した。周溝は、丘陵の尾根からやや南側に下った位置に設けられており、いわゆる山寄せに近い形である。標高は高い北東コーナー付近で31m程度である。

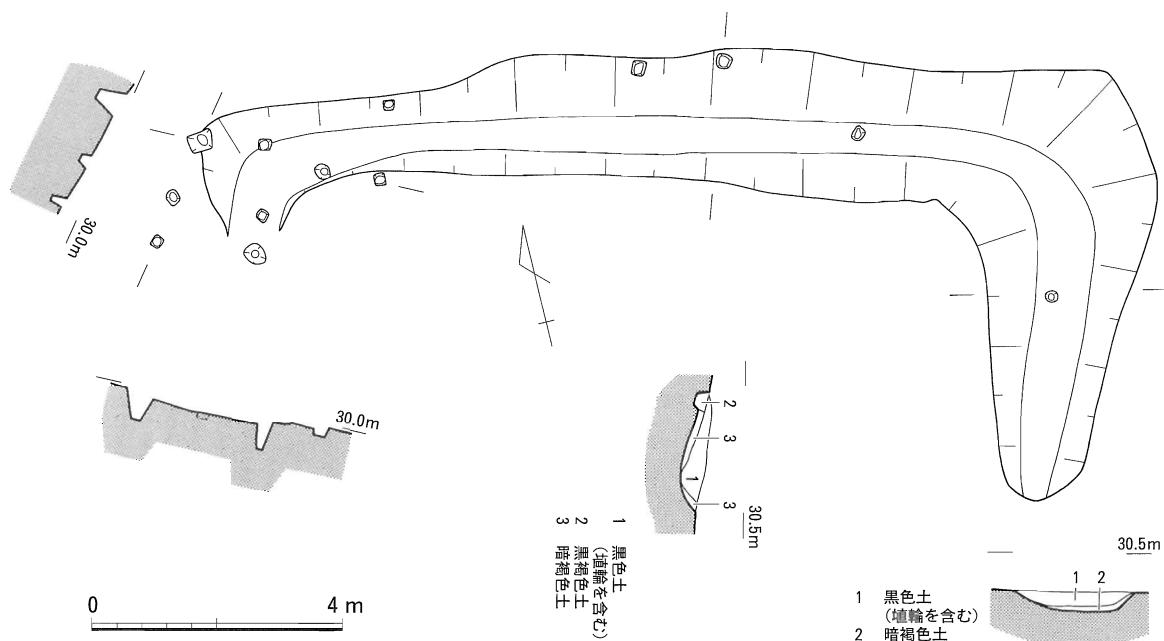
周溝は現地形が高い部分しか残されていないが、低い側の北西コーナーが辛うじて残存しており、およその形態・規模を推定することができる。古墳の形態は、北側の溝が直線的に伸び、ほぼ90°の角度で下方に折れて伸びることから方墳と考えられ、東西方向の規模は溝の底面内側で測って

約12mとなる。溝の幅は底面で0.5~0.85m、深さは深いところでも検出面から0.4m前後で、残存状態は悪い。周溝の周辺からは、小規模なピットが多く検出された。これらのピットは、平面形が方形もしくは隅丸方形のものが多く、規模は20~25cm程度と小形である。深さは15cm程度から40cm程度までばらつきがあり、柱穴内には周溝に堆積している黒色土と同様の土層が堆積していた。ピットと古墳の関係は不明だが、この種のピットは2号墳周辺でしか検出されておらず、何らかの関係がある可能性もある。

遺物出土状況（第10図） 周溝内の黒色土から、多くの埴輪片が出土した。埴輪片は周溝のほぼ全域から出土しているが、アトランダムな出土状況ではなく疎密を持って出土している。ただ、底面に据えた状況は全く認められず、基本的には墳丘からの転落、流入したものと考えられよう。疎密状況は、墳丘でのあり方を一定程度反映したものと考えたい。また東側の周溝覆土からは、土師器の小形壺が出土している。

遺物（第11図） 1は土師器の小形の壺である。胴部は球形に近く、径は9.6cm、外面にはハケメを施し、底付近にはヘラケズリを行っている。内面は上半にはヘラケズリ、下半には指頭圧痕が見られる。口縁は欠損しているが、頸部はほぼ上方に立ち上がっている。

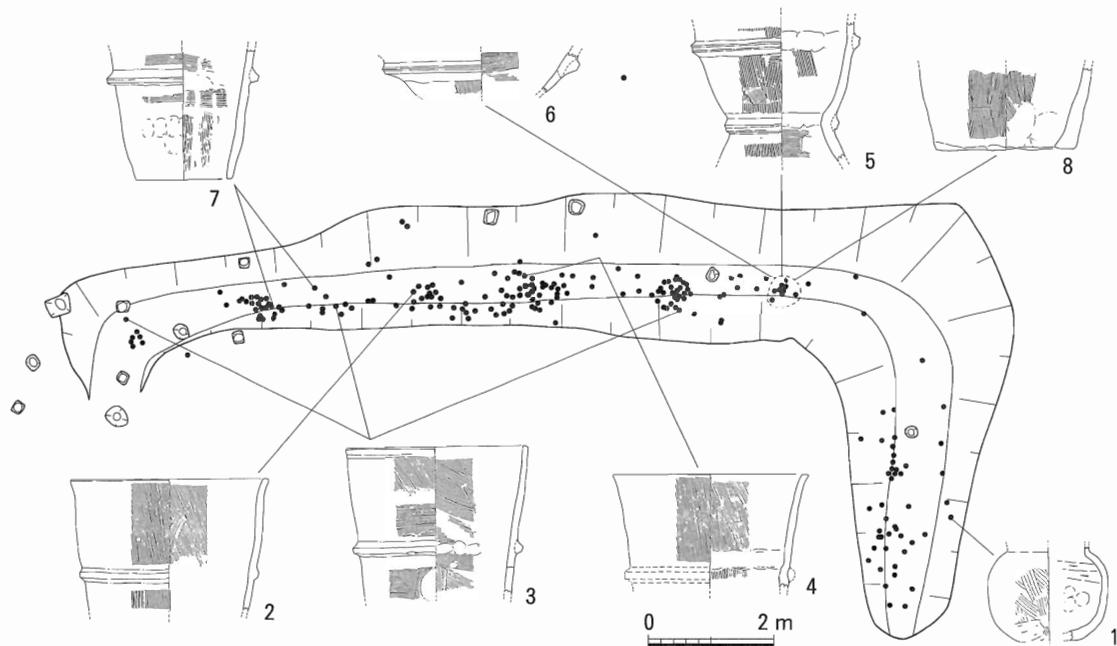
2~9は円筒埴輪、朝顔形埴輪の破片で、いずれも黒班は見られず、須恵質のもの以外は橙褐色を呈す。1は円筒埴輪の口縁部から胴部にかけての破片で、復元口径26cm前後である。上方に向けてやや開いて立ち上がり、内外面とも縦ないし斜め方向のハケメを施す。タガは幅が1.8cmで高さが0.4cmと比較的低い。3は円筒埴輪の口縁部から胴部で、上方に向かって開く形態である。須恵質で灰色を呈す。残存部が少なく不正確な復元だが、口径は24cm前後、胴部には円形のスカシを設ける。1次調整は内外面とも斜め方向のハケメを施し、外面は口縁の下半に横方向のハケメ、胴部にはB種ヨコハケが見られる。タガ相当部の内面には指頭圧痕が見られる。タガは幅1.8cm、高さが0.8cmで2に比べて高い。4は円筒埴輪の口縁部分で復元口径は26cm前後、上方に開く形態である。



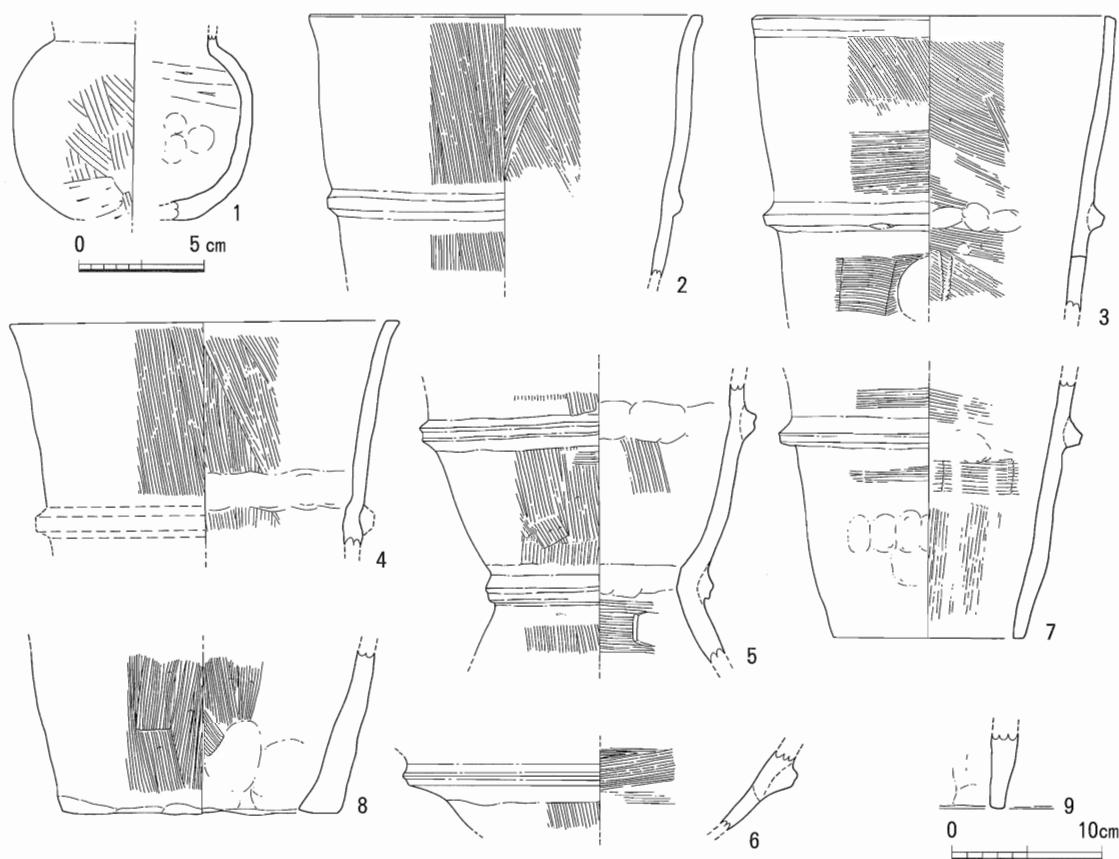
第9図 馬場遺跡 2号墳実測図 (S=1/120)

タガ部分は剥落しており、その内面部分には連続して指頭圧痕が施される。調整は内外面とも縦から斜め方向のハケメである。

5は朝顔形埴輪の頸部付近と考えられる。上下の判断が難しい個体だが、ハケメの施文方向から図のような復元を行った。くびれ部の復元径はタガも含めて15cm前後、タガ相当部の内面には連続



第10図 馬場遺跡 2号墳周溝内遺物出土状況 (S=1/120)

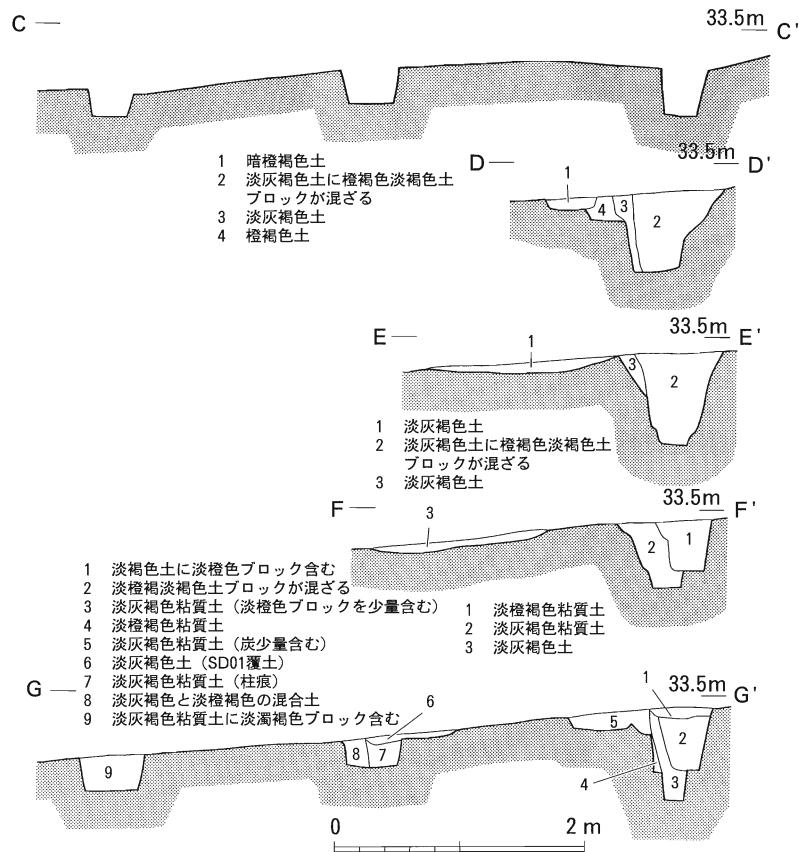


第11図 馬場遺跡 2号墳周溝内出土遺物実測図 (埴輪 S=1/5・土器 S=1/3)

して指頭圧痕が見られる。調整は縦方向のハケメを基本とするが、一部横方向のハケメも見られる。また最上部外面のタテハケは、タガ接合後施している。6は朝顔形埴輪の口縁付近で、内面には横方向のハケメ、外面には縦方向のハケメが見られる。

7は円筒埴輪の底部から胴部と考えられ、須恵質である。底部の残存部分が少なく、不正確な復元だが底径13cm前後である。タガは幅2.2cm、高さ1cmと他に比べると比較的突出しており、タガ相当部分の内面には指頭圧痕が見られる。いわゆる底部調整は、外面はナデ及び指頭圧痕が見られ、内面は縦方向のハケメの後になでている。底面はシャープな平坦面で、最終的にカットしている可能性が高い。タガの上下付近には内外面ともにヨコハケが見られ、内面のタガ下付近はB種ヨコハケを施している。8は底部であるが、いわゆる底部調整が認められず、朝顔形埴輪の底部の可能性がある。復元底径18.5cm前後、底部に向けて分厚になっていく。内外面ともに縦方向のハケメを施している。9は底部の破片で、径の復元は不可能だった。小破片で風化もあり、調整の詳細は不明だが底部に向って薄くなっている。底部調整は行われていると考えられる。底面は若干の凹凸が見られ、カットしたものではなくナデ等による最終調整が行われた可能性が高い。

出土遺物と古墳の時期 古墳の時期を考える材料としては埴輪の型式がある。黒班がなく須恵質の埴輪が含まれることから、窯窓焼成であることは間違いない。また底部調整が見られる個体もある。出雲地方東部で底部調整が施された埴輪の最古例は、公表されているものでは古曾志大谷1号墳であるが本古墳は大谷1号墳と同様のハケメと底面カットが認められ、近い時期であることが想定される。またタガの突出度が1cm以下と比較的低いのも特徴である。これらの特徴から見ると、藤永編年3期（藤永1997）と考えて大過ないと思われ、須恵器編年でいう山本I期（山本1960）、

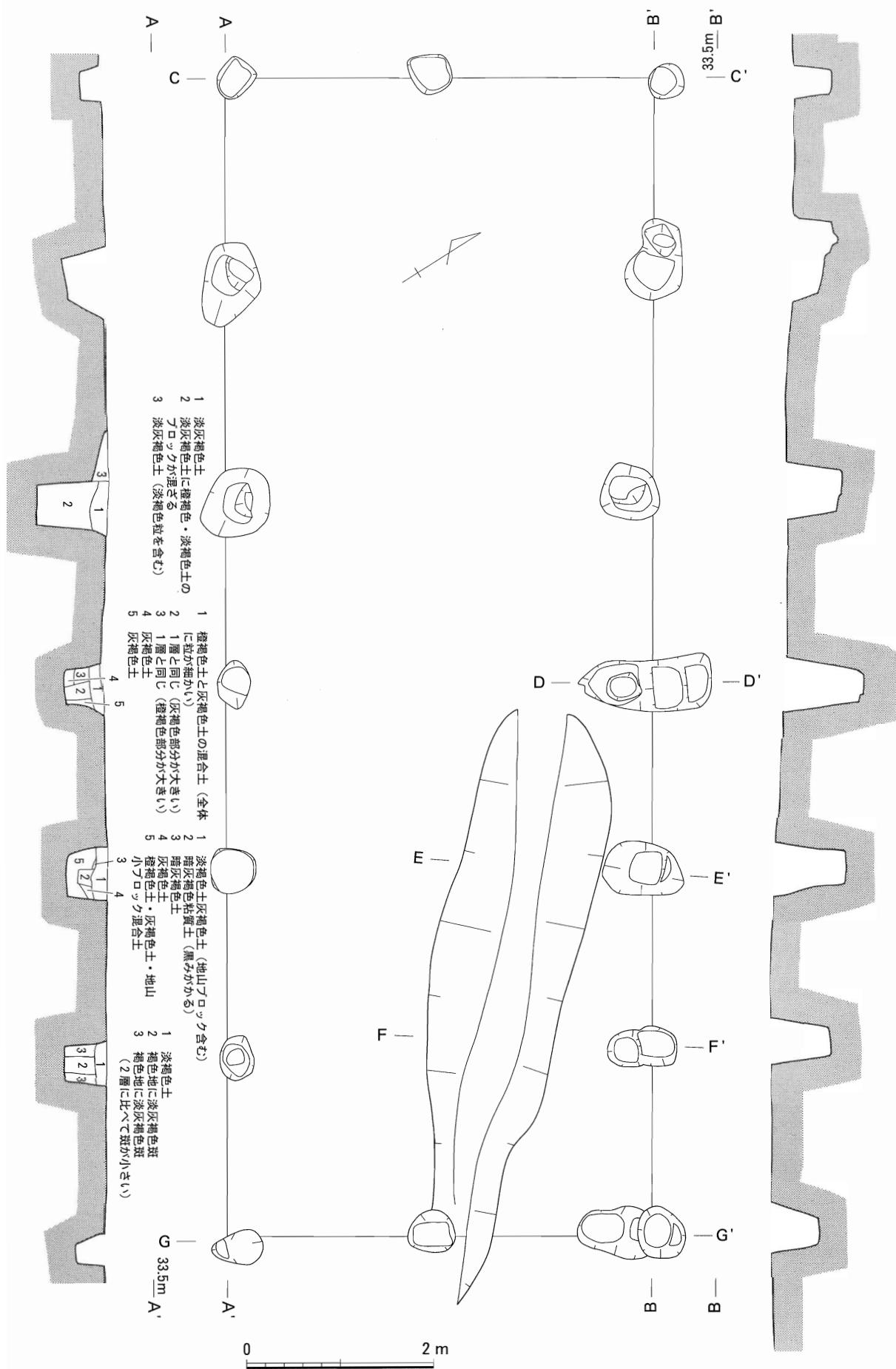


大谷編年出雲1期（大谷1994）に併行するものと考えられる。

SB01（第13図）

1号墳の2~3m東、丘陵尾根の頂上から若干南に下りた緩斜面で検出された掘立柱建物跡である。2間×6間、4.6m×12.6mと比較的大型の建物跡で、柱間は1.9m~2.4mと不ぞろいであるが、合意対応する柱の位置はそろっている。柱穴の平面形はおおむね円形で、径は35cm前後~70cm前後までばらつきがある。深さは深いもので85cm程度、浅いもので25cm程度で、堆積土を見ると柱痕が見

第12図 馬場遺跡 SB01 柱穴断面図 (S=1/60)



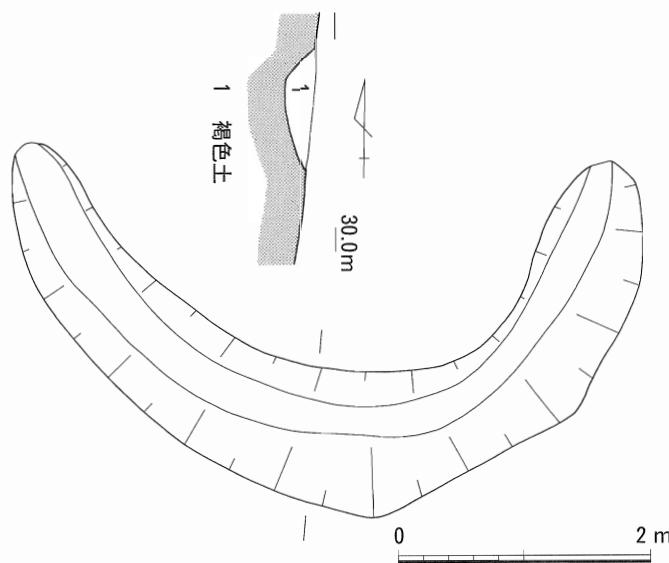
第13図 馬場遺跡 SB01・SD01 実測図 (S=1/60)

られるものもある。北側の柱列では、若干ずれて柱穴が重なっているものが多く、建替えが行われた可能性が高い。

遺物は柱穴の覆土から須恵器の小片が1点出土しており、古代にさかのぼる可能性もあるが、覆土でも上方の流入土内出土で確定はできない。遺構以外からの出土遺物では中世のものが多く（第18図）、その時期のものである可能性もある。建物跡に重なって、浅い溝状の遺構が検出されている（SD01）。およそ6.5mにわたって検出されているが、深さ10cm以下で上面がかなり削平されているものと思われる。

SD02（第14図）

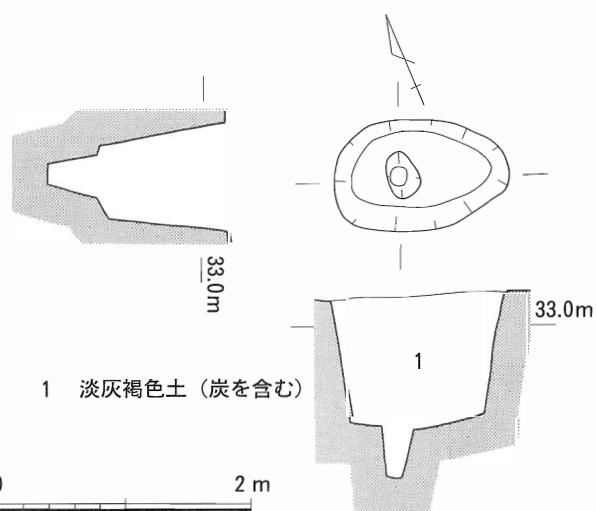
2号墳の西側、緩やかな尾根の先端部分で検出された溝状遺構である。弧状に検出されているが、レベルの高い側でも途切れているため、流出によるものではなく本来的に弧状を呈していたものと考えられる。現状での差し渡し幅が4.2m（底面内側）、底面の幅が25～35cmで、壁の角度は緩やかである。覆土から備前系陶器の擂鉢が出土（第18図1）しており、中世以降のものと考えられるが、性格は不明である。



第14図 馬場遺跡 SD02 実測図（S=1/60）

SX01（第16図）

SB01の北側の緩やかな斜面で検出された、隅丸方形に完結する溝の遺構である。溝の外側で測った規模は3.7×3.4m、溝の底面の内側（内側の掘り残し部分）で測ると2.6×2.3mとなる。溝の規模は底面で幅20cm～40cmで、深さは検出面から20～30cmである。中央の掘り残された部分の北コ



第15図 馬場遺跡 SK07 実測図（S=1/60）

ナー付近には60~70cm程度の広がりをもつ焼土面が認められる。この焼土面が、溝と直接かかわりあるものかは不明である。遺物は出土しておらず、時期、性格ともに不明である。

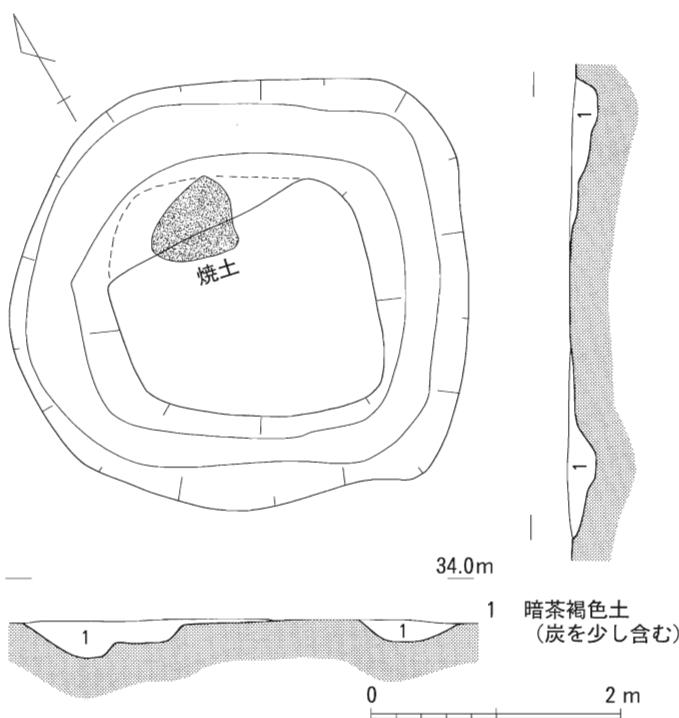
石組み遺構（第17図）

丘陵のほぼ頂上部で検出された遺構である。やや角張った自然礫5個を並べて配置したもので、その下面や周囲に土坑等は確認できなかった。礫は長さ60~100センチ程度のもので機能等は不明だが、礫の内側にはほとんど空間がなく、また礫間の隙間が大きい部分もあるため、石棺状の機能は想定しにくい。遺物も出土しておらず、時期も不明である。

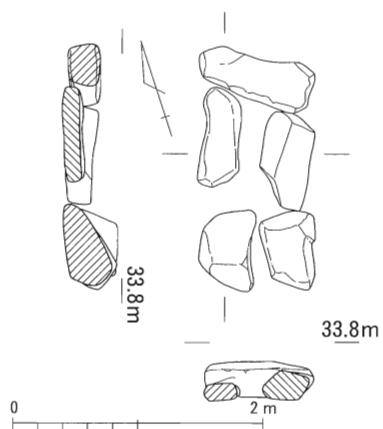
その他の遺物（第18図）

1はSD02出土の備前系陶器で、前述のとおりである。2は青磁である。見込に櫛状の工具で文様が刻まれている。磁胎は灰白色、透明感のある淡緑色の釉がかかる。

3は青磁碗の底部である。青白色の釉が高台の外面全面にまでかかる。高台は削りだしで、底が厚い。4は頂上付近で採集された寛永通宝である。5は須恵質の土錐である。紡錐形で長さ5.0cm、最大径3.3cm、孔の径1.6cmである。
(丹羽野)



第16図 馬場遺跡 SX01 実測図 (S=1/60)



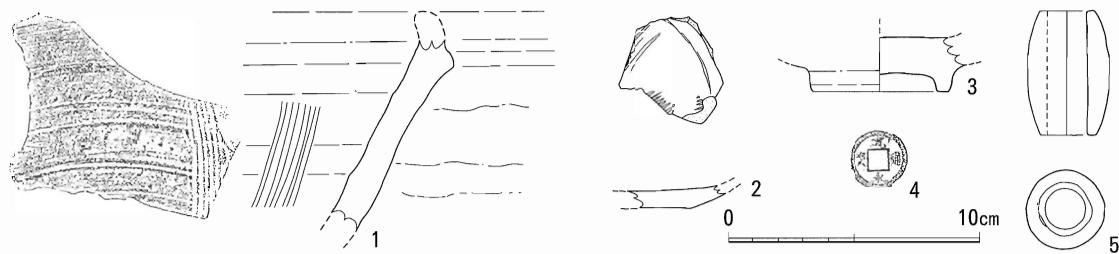
第17図 馬場遺跡 石組遺構実測図
(S=1/60)

石塔類は組合せ式の五輪塔と宝篋印塔の部材が出土している。石材は、いずれも来待石（凝灰質砂岩）を使用している。風化が進んでおり遺存状態はあまり良くない。各部材とも30cm以内の切石から加工された小型品である。

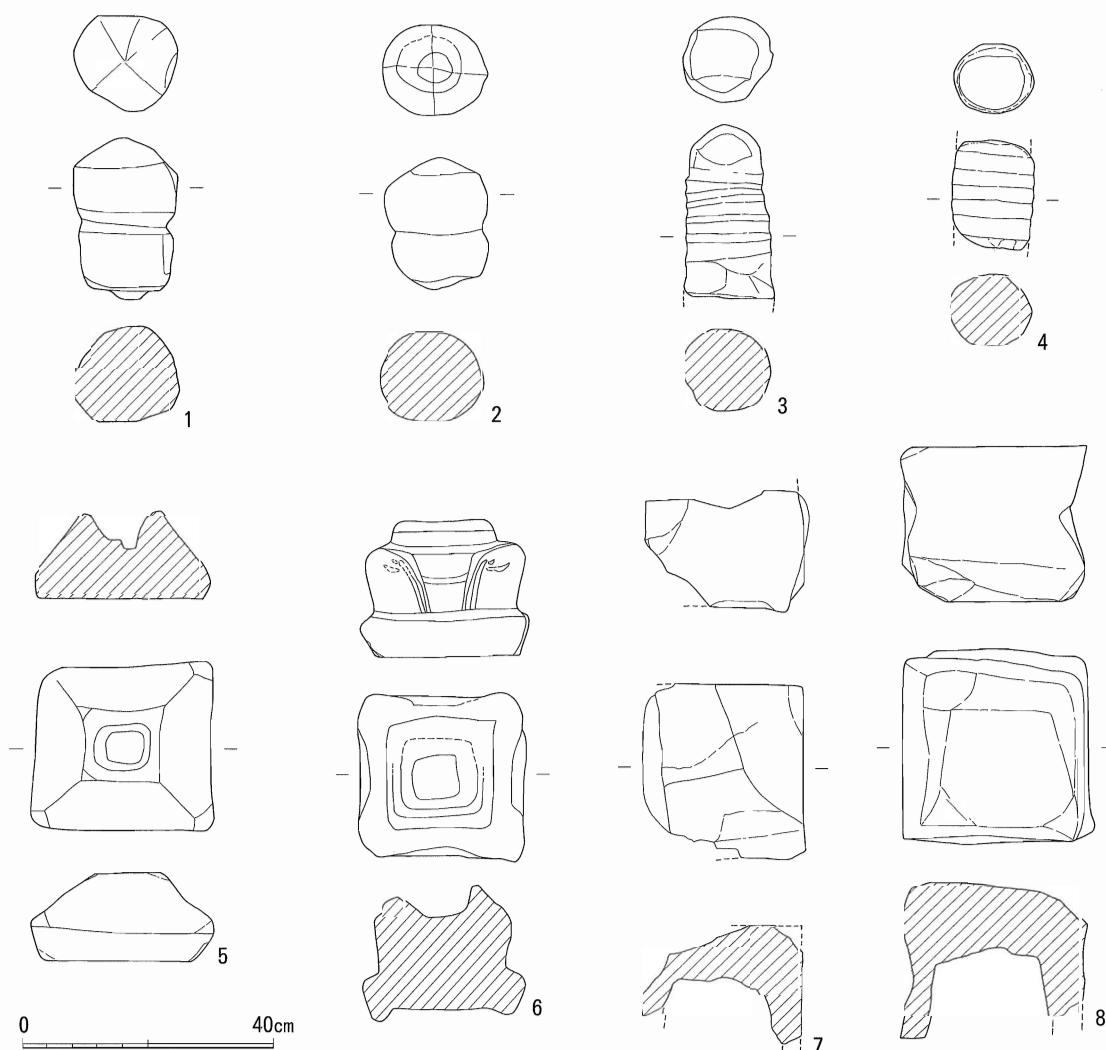
1・2・5・7・8は五輪塔の部材である。1・2は空風輪部。2点とも一石で造られている。全体に角張った感じの造りで、1は横断面が円形でなく多角形になっている。空輪と風輪の境のくびれは浅い。5は火輪部。幅と高さの比率は約2:1となる。降棟はわずかに反る。軒の厚さは一定でなく端部が厚くなり、軒口は斜めに切り落としている。7と8

は五輪塔の地輪部と考えられる。8は幅30cm、高さ24.8cmで、幅に比して高さがある。2点とも下面を深く抉ってあり、製作時の幅1.5cmの鑿跡が良く残っている。重量を軽くするために為されたものであろうか。

3・4・6は宝篋印塔の部材である。3、4は相輪部。接合できないが同一個体の可能性も考えられる。4は、あるいは天地逆かもしれない。形態は九輪の中程が膨らむ傘状を呈するものと考えられる。各輪は幅5mm程度の浅い溝で区画している。6は笠部。軒は6cmと厚く、その上には三級の段形をもつ。軒下は段を造り出していない。隅飾突起は単弧でわずかに外反して立ち上がるが、



第18図 馬場遺跡 遺構に伴わない遺物実測図 (S=1/3)



第19図 馬場遺跡 出土石塔類実測図 (S=1/12)

軒の幅以上には傾かない。側面には線刻による模様が確認できる。笠下面是縁を残して、深さ 2 cm ほど掘り窪めている。塔身をはめ込むためと思われる。

これら石塔類の所産年代は16世紀後半から17世紀前半を中心とする時期と考えられる。 (間野)

注

大谷晃二 1994 「出雲地域の須恵器の編年と地域色」 『島根考古学会誌』第11集 島根考古学会

藤永照隆 1997 「出雲の円筒埴輪編年と地域性」 『島根考古学会誌』第14集 島根考古学会

松山智弘 1991 「出雲における古墳時代前半期の様相」 『島根考古学会誌』第8集 島根考古学会

山本 清 1960 「山陰の須恵器」 『島根大学開学十周年記念論文集』

第4章 杉ヶ撓遺跡

第1節 調査の経過と概要

調査の経過

杉ヶ撓遺跡は、平成10年度に東側に隣接する馬場遺跡とともに発掘調査を行った。この遺跡は、当初は枚ヶハム遺跡として、発掘通知を提出し、当該年度の島根県埋蔵文化財調査センター年報にも掲載していた。これは、当初島根県土木部より入手した切図写し（用地測量図）に、字名として「枚ヶハム」と記されていたためだが、地元での聞き取り等で「杉ヶ撓」が正しい字名であることが確認できたため、遺跡名を変更して報告することとした。当初参考とした切図写しは、書き写す際に何らかの理由で誤記されたものと推測している。

当該年度の調査は、まずは杉ヶ撓遺跡東側の谷部に広がる水田部分（川原遺跡）の確認調査（トレチ調査）から始め、7月14日から杉ヶ撓遺跡の確認調査を行った。確認調査の結果、丘陵の頂上尾根上に古墳が2基確認され、尾根全域の本調査を行うこととした。また北東側の斜面については、遺物は出土しなかったが、落ち込み状の「遺構」が認められたため調査区を設定、水田近くの丘陵裾付近では住居跡状の遺構が検出されたため、本調査を行うこととした。

本調査は、丘陵尾根上の古墳群から開始し、北東斜面、斜面裾へと広げていった。北東斜面は急峻な斜面だが、確認調査で黒色土をかんだ落ち込みが複数検出されたため、広い範囲で調査を行ったが、落ち込みの形状は不安定で遺物等も検出されなかった。また黒色土も炭等を全く含まず、人の営為を思わす痕跡を見出すことができなかった。

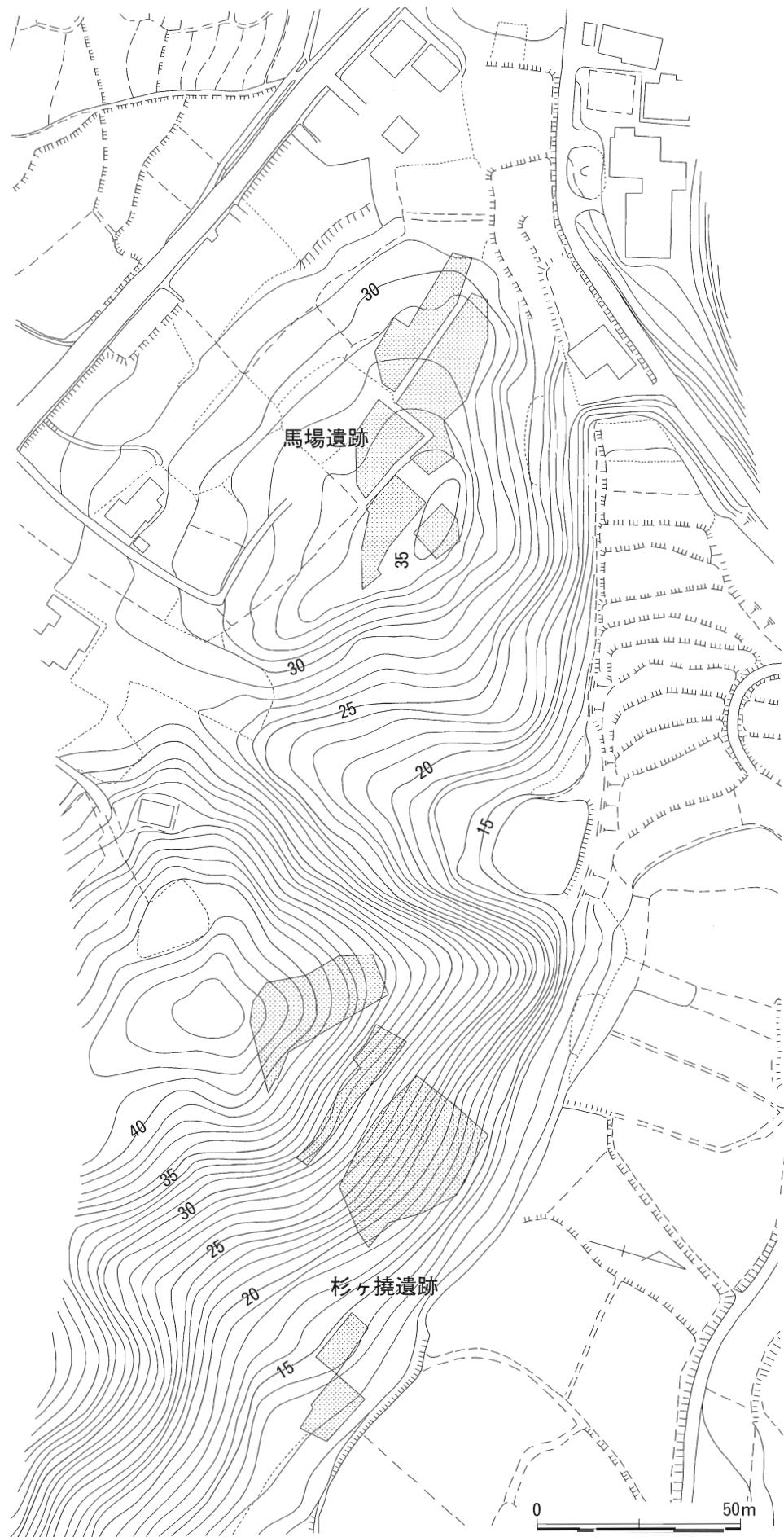
なお、杉ヶ撓遺跡の東側から連行遺跡に至る水田（川原遺跡）の確認調査では、9か所のトレチを設定して調査を行った。調査の結果、当該箇所は非常な軟弱地盤で、粘質の土壤が深く堆積していることが明らかになった。人間が歩いても膝までかかるような軟らかい田で、重機が沈んで動かなくなってしまったこともあったという。遺物は黒曜石片、弥生時代後期の土器、古墳時代後期の須恵器、奈良～平安時代の須恵器・土師器、近世の陶磁器類等が出土している。ただいずれも断片的で流入遺物と判断されたため、確認調査のみで調査を終了した。

調査区の設定と遺跡の概要（第20図）

丘陵尾根上からは古墳が検出されたため、尾根上から斜面にかけて約400m²の調査区を設定した。古墳は2基検出され、ともに尾根に沿って築造されており、丘陵の背後は溝を切って区画している。ともに方墳と考えられ、正確な規模は不明だが上方の1号墳が10m程度、下方の2号墳が6～7m程度と考えられる。

北東側斜面は、調査用に取りつけた重機用通路を挟んで上下に分かれ、約680m²の調査区を設定した。上述したように、確認調査では黒色土の入った落ち込みが複数確認され、調査区を広げたが、自然的な営為によって生じたものの可能性が高いと判断された。

斜面の北東側裾からは、古墳時代前期の竪穴住居跡が検出されたため、遺構の周辺を広げる形で約60m²の調査区を2か所隣接させて設定した。全形は不明だが、ともに方形である。また竪穴住居跡と重なって、段状の遺構と掘立柱建物跡も検出された。

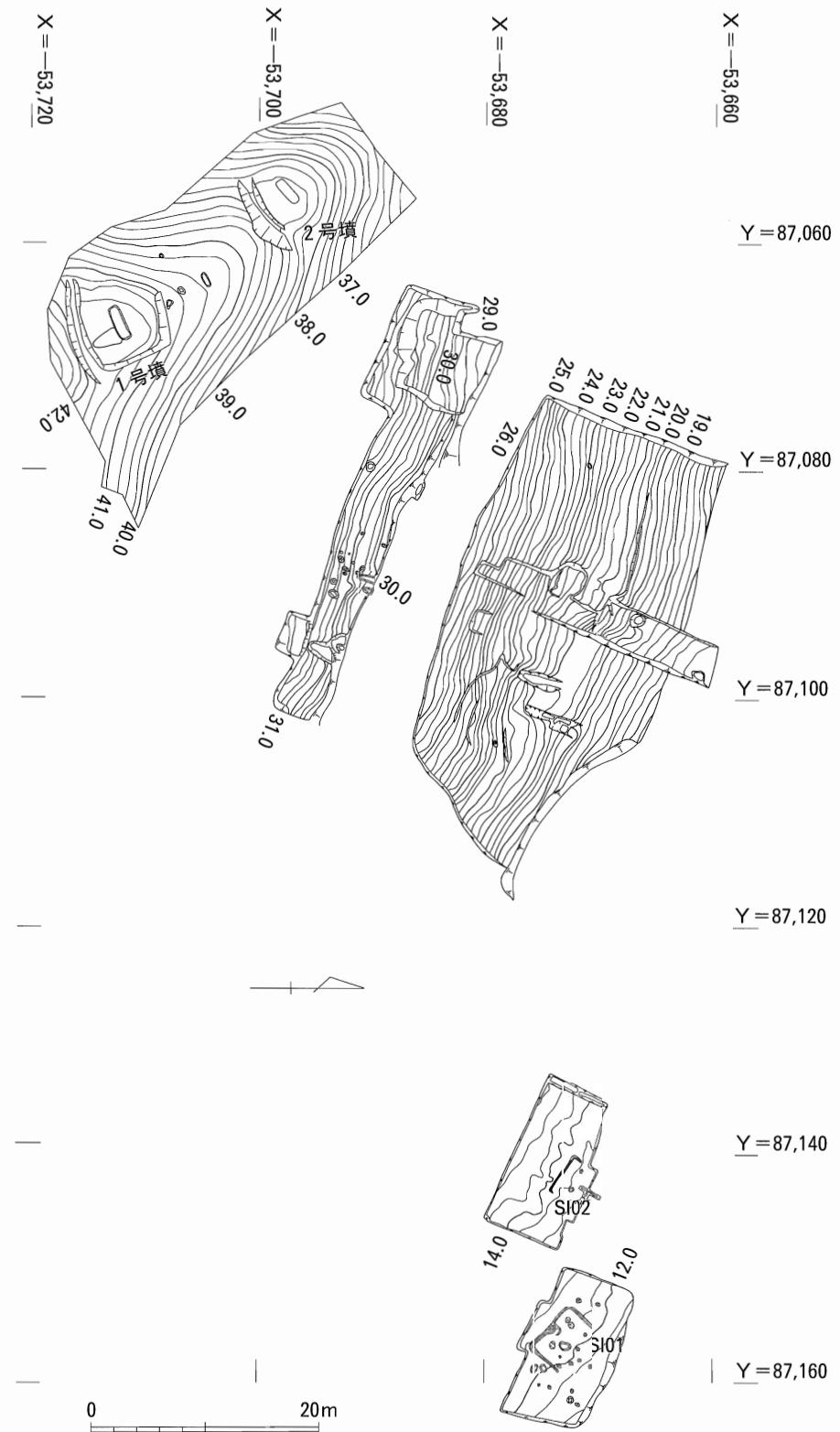


第20図 馬場遺跡・杉ヶ撓遺跡 調査区配置図 (S=1/1500)

第2節 調査の結果

杉ヶ撓古墳群

標高約44m程度の丘陵頂上から北西に伸びる尾根の上で検出された古墳群である。調査区は、頂上からやや下方に下りた、標高42m以下の部分だが、調査区より外側南側の頂上部にも墳丘状の高まりが存在する。調査区内では2基の古墳が確認でき、南側（上方）の古墳から1号墳、2号墳と



第21図 杉ヶ撓遺跡 発掘調査後地形測量図・遺構配置図 (S=1/600)

呼んだ。調査前の状況（第22図）は、明瞭な高まりは観察できず、尾根の流れの中で不自然な平坦面が2箇所で認められる状況であった。

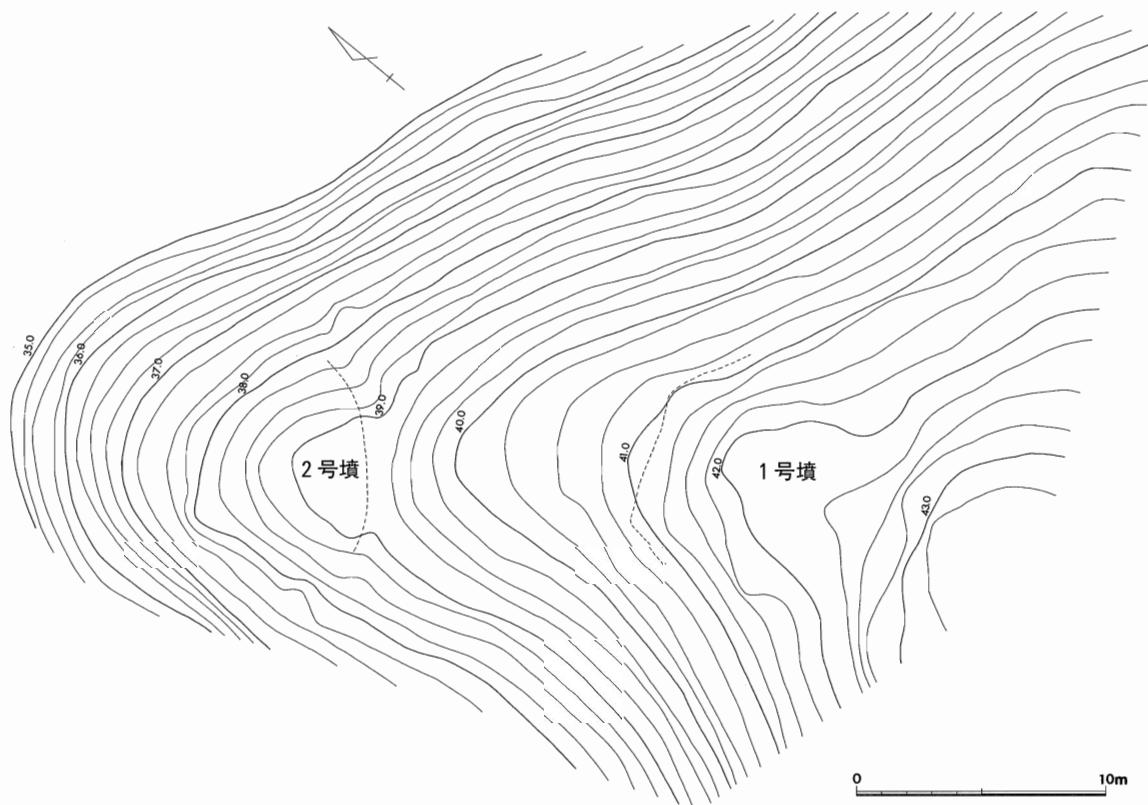
杉ヶ撓1号墳（第23図～第25図）

丘陵の頂上部から15mほど北西に下りた尾根上（標高41～42m前後）で検出された古墳である。尾根の高い側を溝で切って区画し、他の裾部分（少なくとも北側と東側）は地山を加工して裾を作り出している。西側については流出のせいか、検出時においては明瞭な裾を検出することができなかった。南北長（尾根の中軸に沿った長さ）が10.4mの方墳で、現況での高さは南裾（溝底）から0.4m、東裾から0.95m、北裾から1.3mと低平である。

土層を見ると、最大で35cm程度と薄いながらも盛土が認められ、北側から東側にかけては旧表土と考えられる黒色土も見られる。後に述べる主体部の深さから見て、現況よりも高い墳丘であった可能性が高い。墳頂の平坦面の広さは、現況で8.5×7m程度である。丘陵上方側に切られた溝は、検出時の上端の幅が1.4～2.1m、底面での幅が0.4～1.2mで、長さが12.5mにわたって検出されている。墳丘の方向は東西南北から多少ずれた方向である。

主体部は墳丘のほぼ中央で検出された。検出面での規模が長さ3.1m、幅が東側で1.0m、西側で0.81mの長方形の土壙である。長軸方向はN66°Eである。盛土から掘り込まれており、深さは検出面から35cm程度浅く、本来はさらに高い面から掘り込まれた可能性が高い。長軸土層を観察すると、掘り方の壁より内側に微妙な差ながら土層の異なる立ち上がりが検出され、木棺の小口を反映している可能性がある。仮に木棺痕跡とすると、棺の内法は2.1m前後となる。

遺物（第26図） 墳丘上及び溝から土師器もしくは埴輪片が、裾外より須恵器片が出土している。



第22図 杉ヶ撓遺跡 1号墳・2号墳 発掘調査前地形測量図 (S=1/300)

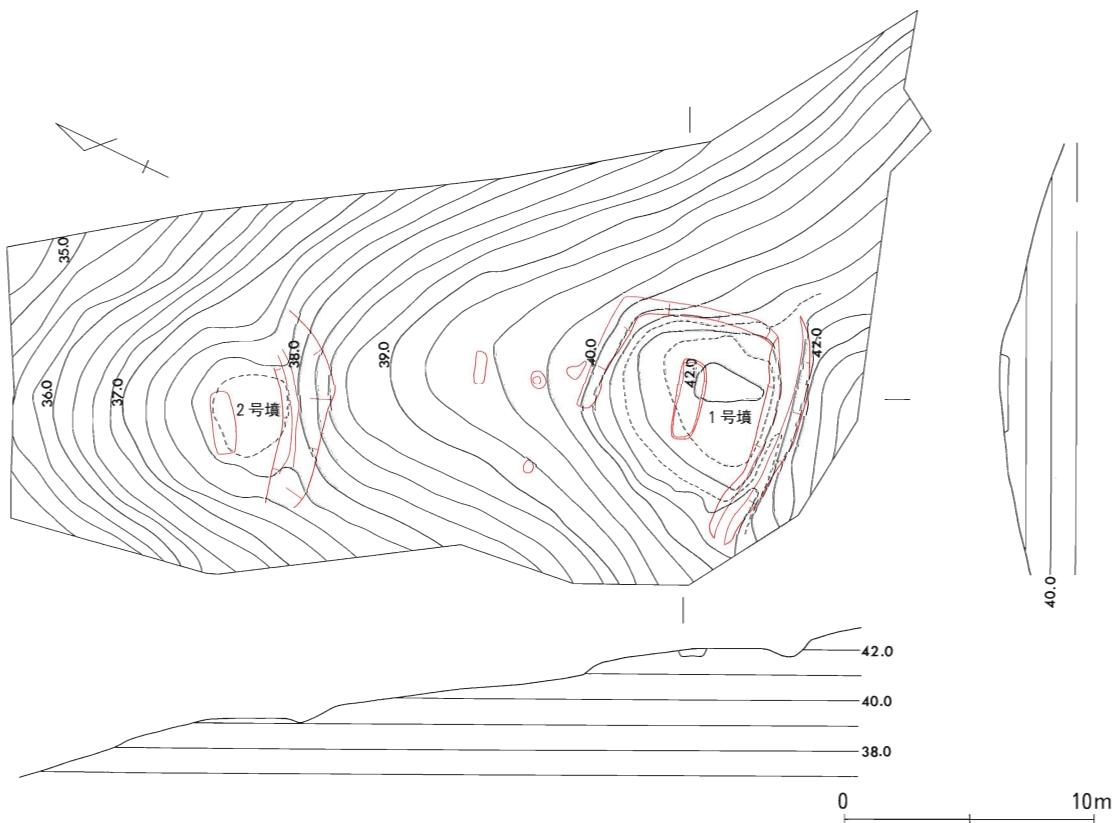
1は須恵器壺である。胴部から頸部にかけてはくびれて立ち上がり、明瞭な屈曲を示さない。胴部の内面は同心円タタキだが、外面は自然釉がかかり不明瞭である。復元頸部径は9.5cm前後である。2は器壁が1.3~1.4cm前後の厚手の土器片で、埴輪片の可能性もある。内面には複数方向のハケメが見られるが、外面は不明である。

古墳の時期であるが、須恵器については古墳に伴うかどうか不明であり、埴輪状の土器は時期の判別が困難である。ただ細長い形状の土壙の特徴から、古墳時代の前半期にさかのぼる印象をもつが、確証はない。

杉ヶ撓 2号墳（第23図、第27図）

1号墳の北西下方約10m、標高約38~39mの箇所で検出された。1号墳と同様、上方の尾根を溝で切って、墳丘を作っているが、残る3方の裾は流出のためか不明瞭で、墳丘の形態や規模については不明である。溝の形態を見ると、わずかに弧も描いており、円墳と取れなくもないが、全体の規模から見て弧の線形がゆるく、方墳と見たほうがよいと考えている。規模は地形から見てさほど大型にはなりえず、せいぜい7~8m前後の小形の古墳であった可能性が高い。溝は上方側からは80cm前後とかなり切り込んでおり、底面の幅は20~30cmと狭い。溝底から検出時の墳頂との高さの差は15cm前後とわずかであり、墳丘はかなり流出した可能性が高い。

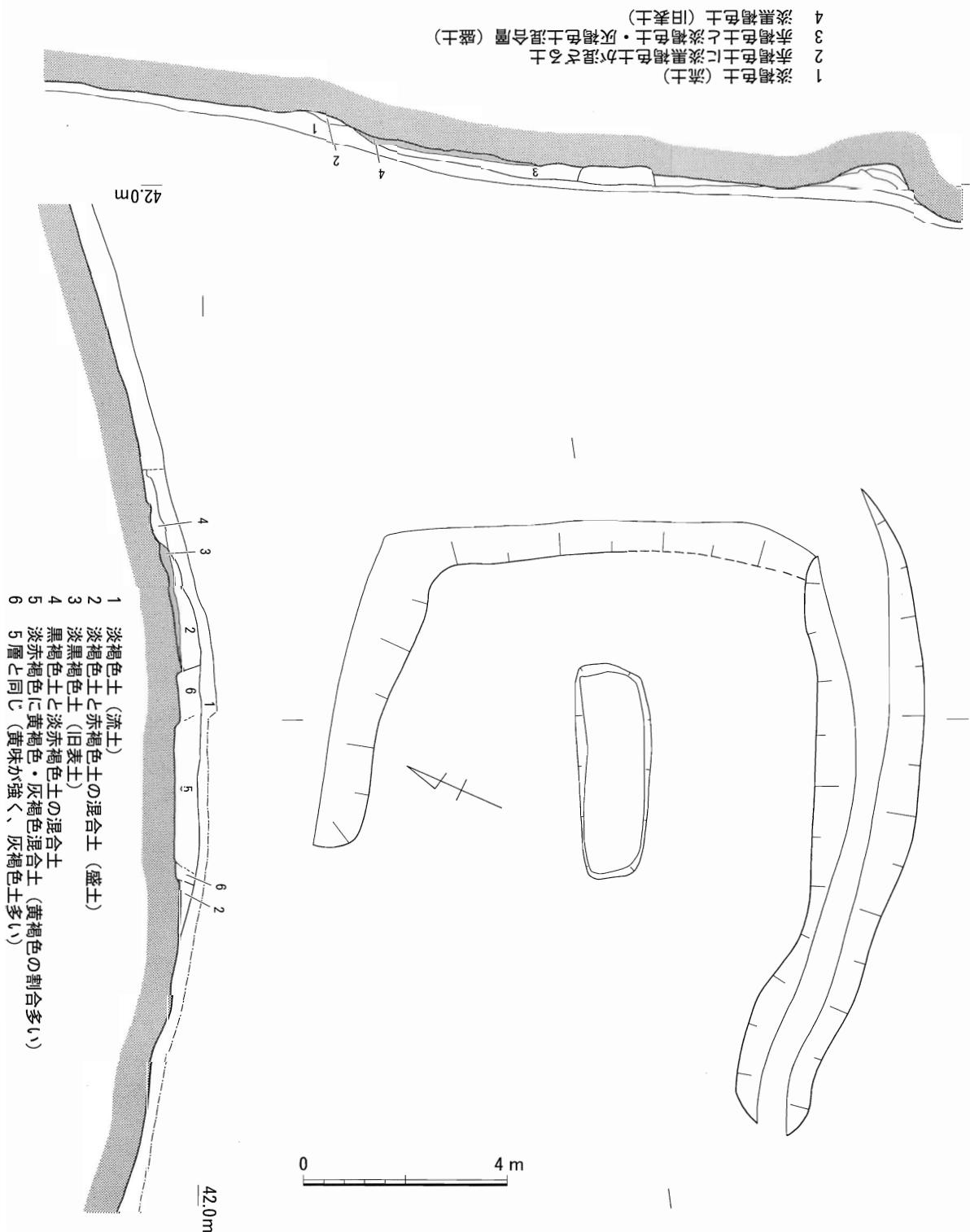
溝からおよそ2.5m北西側で、主体部らしき土坑状の落ち込みが検出された。ただ検出面からの深さが5~10cm前後と非常に浅く、調査においても主体部としての確証が得られなかった。検出できた範囲での規模は、2.8×1m程度である。この落ち込みからは土師器片が出土しているが、小片のため図化はできなかった。また土器の時期も不明である。



第23図 杉ヶ撓遺跡 1号墳・2号墳 発掘調査後の地形測量図 (S=1/300)

SI 01 (第28図～第30図)

丘陵北東側斜面の裾付近、標高12m前後の緩やかになった斜面で検出された竪穴住居跡である。眼前は谷で、現在水田が広がっている。斜面のため、下方側（北東側）が流失し、全形は不明だが、平面方形の竪穴住居跡である。現在確認できる東西方向の規模は4.75m（壁体溝の内側で測った規模）、壁際には幅5～10cm前後の壁体溝がめぐる。コーナーは若干丸みはあるものの、明確な角を持っている。主柱穴は4穴と考えられるが、対応する1穴は未検出である。柱穴径は40～60cm、



第24図 杉ヶ撓遺跡1号墳 実測図 (S=1/120)

深さは45~50cm程度で、柱穴間は2.2~2.4mである。

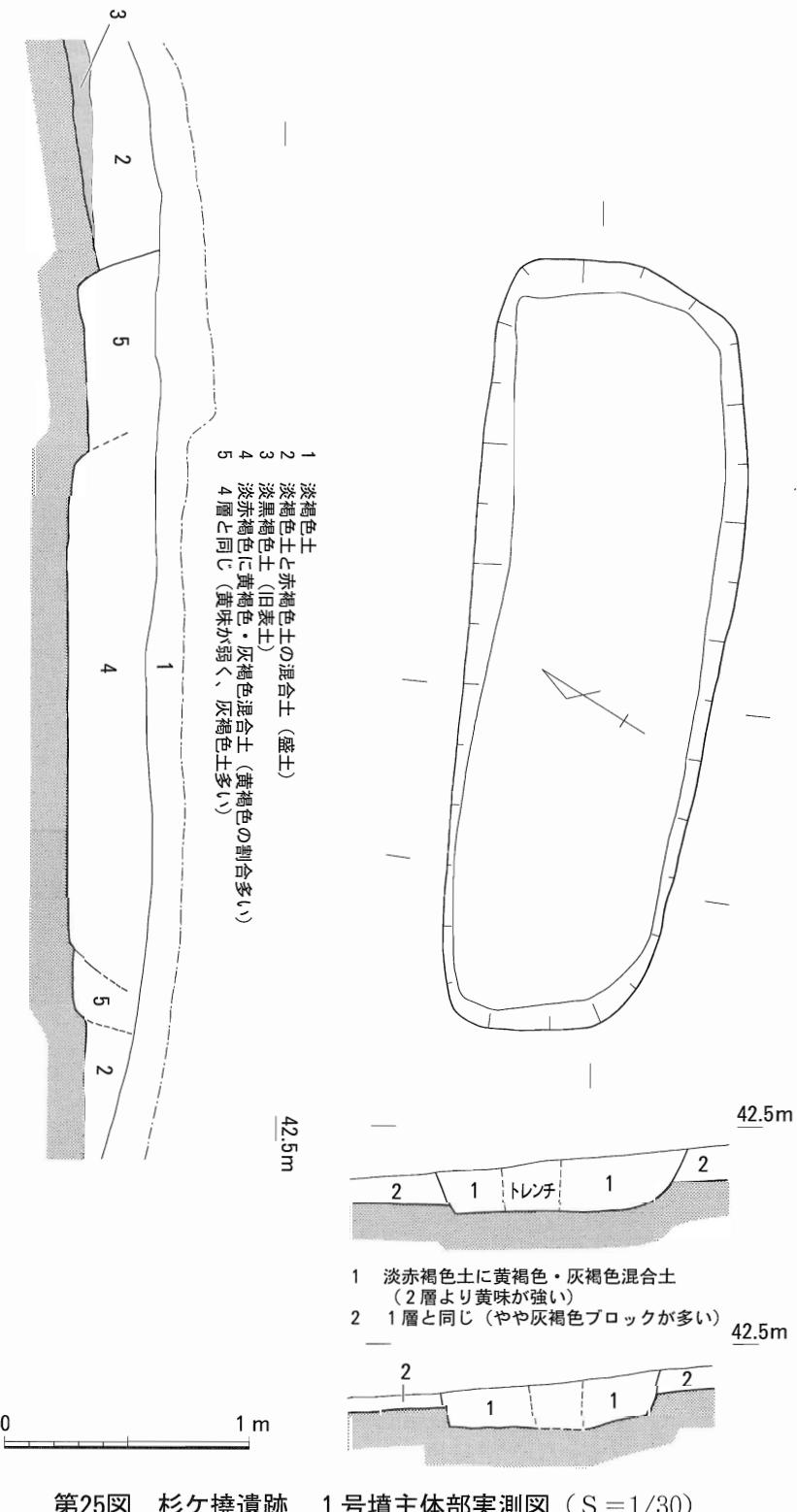
南側の壁際には隅丸方形のピットが検出された。

ピットの周囲には95×105cmの方形の浅い落ち込みが認められる。ピットは42cm四方、深さが45cm前後で、内部には炭を多く含む黒褐色土が堆積していた。床面には40×50cm程度の焼土面が見られる。

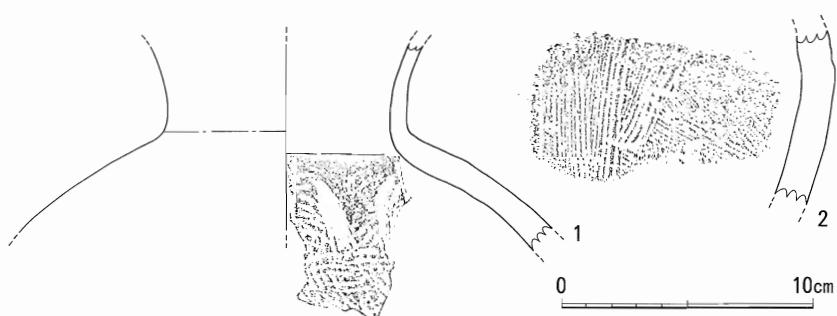
遺物（第32図） 1~5、7、8がSI 01から出土した遺物である。1は覆土から出土したやや大形の甕で、復元口径24cm前後である。複合口縁で、稜は横方向に突出し、口縁端はわずかに外方に折れるようにして収めている。2は壁際ピット内から出土した甕である。頸部は屈曲し、複合口縁の稜は断面三角形で横方向に突出する。口縁部は直線的に開き気味で立ち上がり、端部は横にわずかにつまむように仕上げ、上端に面を設けている。復元口径15cm前後である。3は単純口縁の甕と考えられる。

内湾して立ち上がる口縁で、端部は薄く仕上げている。復元口径11.5cm前後である。

4は頸部に突帯がつく壺の口頸部である。突帯は胴部と頸部の境あたりに貼り

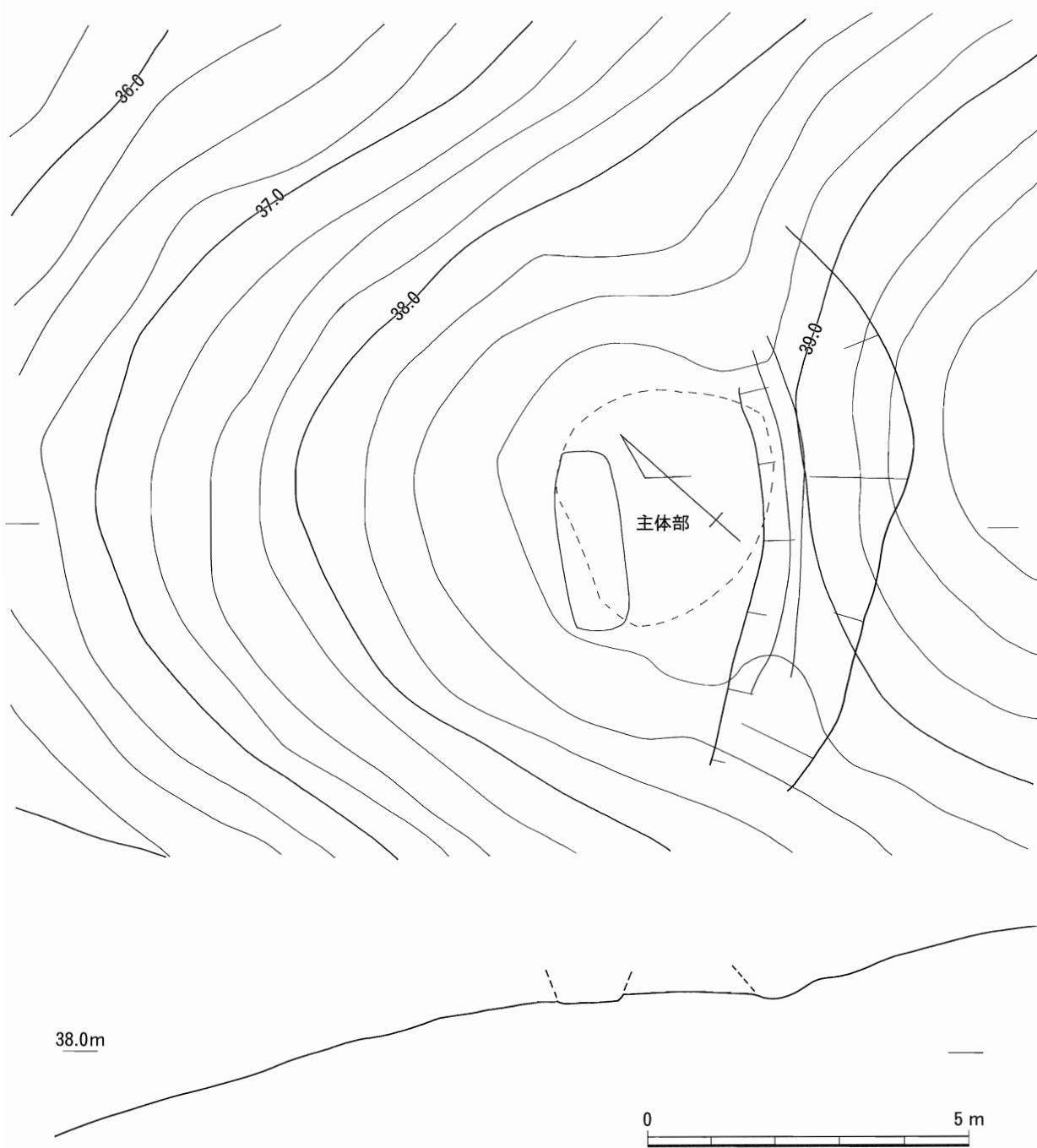


第25図 杉ヶ撓遺跡 1号墳主体部実測図 (S=1/30)



第26図 杉ヶ撓遺跡 1号墳墳丘周辺出土遺物実測図 (S=1/3)

付けられ、幅1cm、高さ0.8cm前後である。頸部は外に開きながらわずかに湾曲して立ち上がり、口縁部に向けてはほぼ水平に開く。端部は接合面と考えられ、さらに口縁部が接続していたものと考えられる。復元頸部径12cm前後、口縁部が取り付く接合部分の復元径は21.5cm前後である。表面は風化し、調整は不明である。5は覆土から出土した突帯付きの壺である。基本的な形態は4と同様で、頸部と胴部の境付近に断面四角形の突帯が取り付く。突帯の幅は0.7cm、高さ1.2cm程度である。頸部はやや内湾しながら立ち上がり、口縁に向けては大きく外方に開いていく。頸部中央付近には鋭い工具で長さ2.5cm程度の線状の刺突文がほぼ1cm間隔でめぐっている。頸部径は11cm前後である。



第27図 杉ヶ撓遺跡 2号墳 実測図 ($S = 1/100$)

7は覆土から出土した高杯の脚部である。短脚で外方に開いていく形態で、最小径は2.0cmである。上面は接合面で杯部にそのまま接合していたと考えられる。8はコシキ形土器の把手部分である。把手部の長さが7.5cm程度、幅は4cm程度、縦方向に取り付いている。接合は、器壁を削り抜いて行っている。

遺物は草田編年6～7期（赤沢1992）に併行するものと考えられ、住居跡の時期も古墳時代の前期と考えられる。

SB01 SD01（第29図）

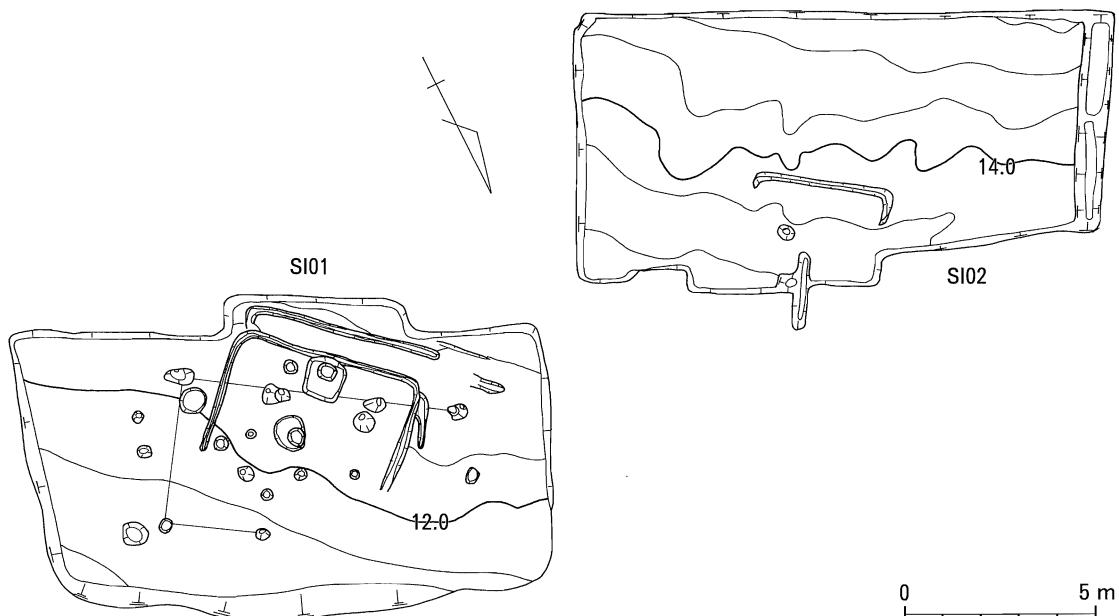
SI 01と重なる形で掘立柱建物跡と、建物等に付随すると考えられる小規模な溝が検出された。SB01はSI 01と若干ずれた方向で重なって検出された。斜面の下方では検出できなかった柱穴もあるため全容は不明だが、桁行3間以上、梁間1間の建物と考えられる。規模は桁行3間とすれば長さ7.2m、幅3.8mで、桁行の柱間はそろっていない。柱穴は円形で、深さは40～50cm程度である。

SD01はSI 01の南側（上方）で検出された。直線的な溝で、東側は直角に折れ曲がっており、建物等に伴う溝の可能性が高い。検出された部分で、長さ5.1m、底面の幅は10～15cm程度である。そのほかにも断片的に溝状遺構が検出されたが、詳細は不明である。

遺物（第32図） 6がSD01の内側で検出された土師器甕である。単純な口縁の甕で、頸部は緩やかにくびれている。復元口径21cm前後である。時期については、古墳時代中期以降と考えられるが、それ以上の限定はできない。

SI 02（第33図）

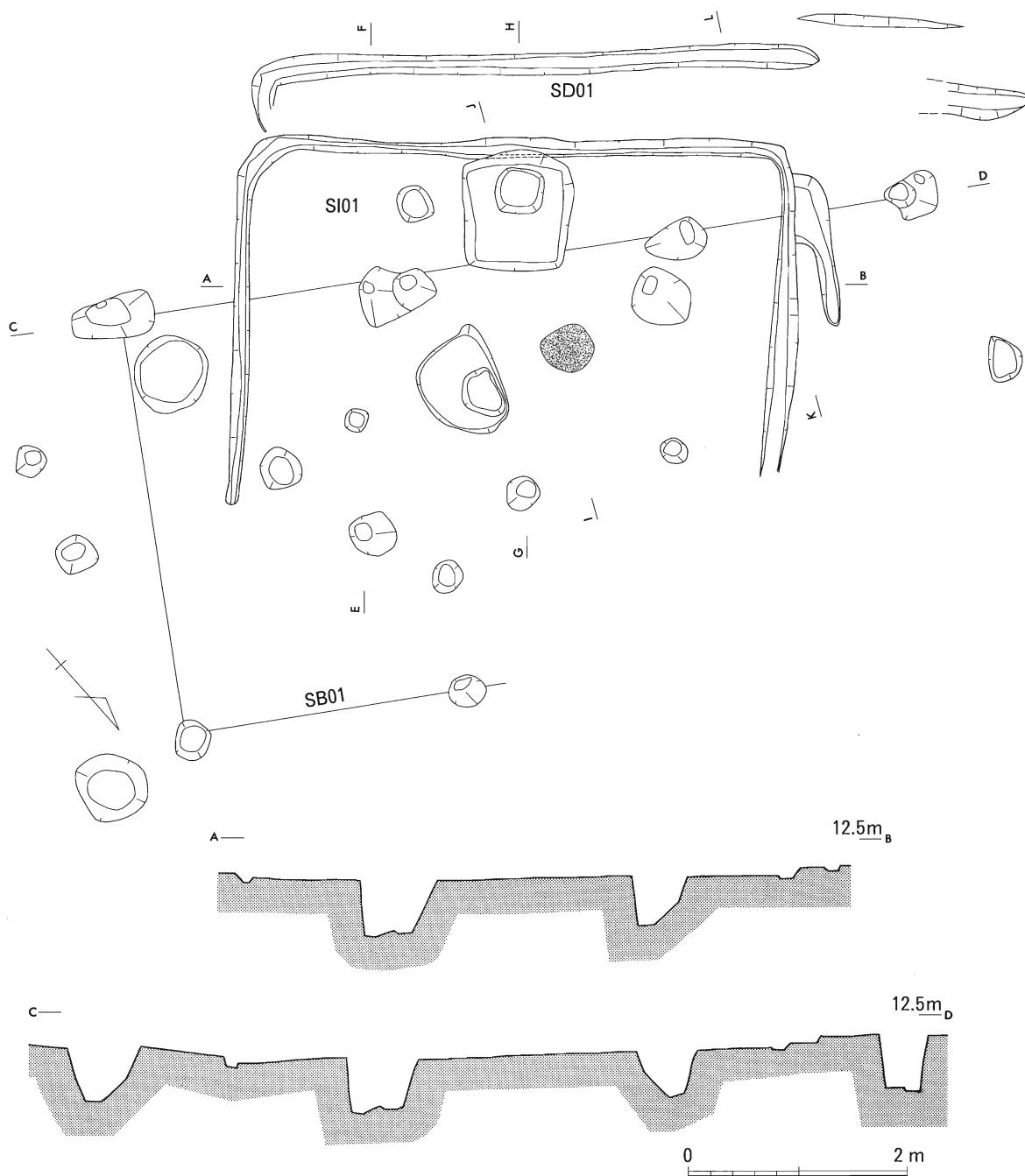
SI 01の西側約10m、標高14m程度の緩やかな斜面で検出された竪穴住居跡と考えられる遺構である。斜面下方側が流出して、全容は不明だが方形の竪穴と考えられる。コーナーが明確な角を持つもので、壁際には3～10cm程度の幅の壁体溝がめぐっている。床面規模は、残存している東西方



第28図 杉ヶ撓遺跡 竪穴住居跡配置図 (S=1/200)

向で3.1mと小規模である。柱穴状のピットは1穴検出されたが、深さ10cm程度と浅く、主柱穴とは想定しにくい。また床面には50×80cm程度の長楕円形の焼土が検出された。焼土厚は5cm前後と比較的厚い。

遺物（第35図） 1は壁体溝内にはまり込んで出土した小形丸底坩である。比較的扁平な胴部から屈曲して外側に開く口縁部に続いており、くびれ部分はハケメ原体状の工具で押さえるような調整を行っている。くびれ部分は比較的浅く、胴部外面にハケメ、内面はヘラケズリと考えられる。復元口径15cm前後、頸部径9.2cm、胴部径10.7cmである。2は覆土内から出土した土師器高杯である。脚はやや開いて伸び、残存部分で長さ4.5cmと比較的長く伸びる。杯部は脚から屈曲して開いており、底部には円盤を充填している。円盤の底には細くて深い孔があいており、脚部の最小径は2.95



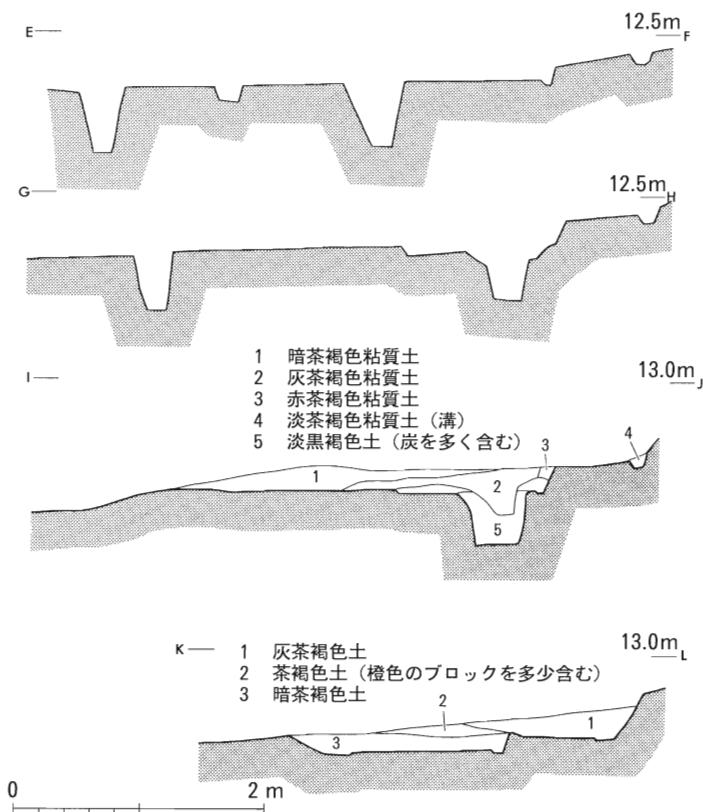
第29図 杉ヶ撓遺跡 SI 01・SB01・SD01 実測図 (S=1/60)

cmである。3は土師器高杯の脚部で、最小径が2.5cmとやや小形だが、3と同様の形態である。

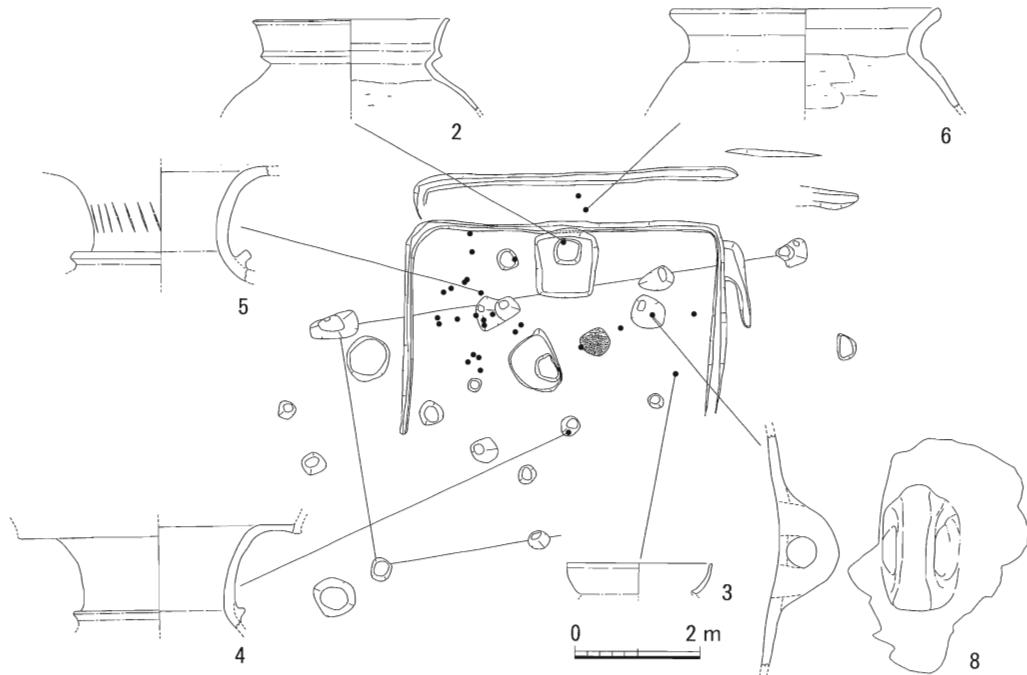
遺物は草田編年7期に併行すると考えられ、SI 02の時期も古墳時代前期と考えられる。

遺構に伴わない遺物（第36図、第37図）

第36図1は北東斜面の調査区から出土した、細粒凝灰岩と考えられる黒色緻密石材製石核である。一側縁の表裏から、交互に横長もしくは縦横1:1程度の剥片が剥離されている。表裏には自然面が残る。長さ10.9cm、幅4.7cm、厚さ4.2cmである。2は杉ヶ撓古墳群周辺から出土した黒曜石製の石鏸である。最終的な細かな剥離は見られず、不定な三角形を呈すことから、未製品の可能性もある。長さ2.5cm、幅2.3cm、厚さ0.5cmである。



第30図 杉ヶ撓遺跡 SI 01・SB01・SD01断面図
(S=1/60)



第31図 杉ヶ撓遺跡 SI 01・SB01・SD01 遺物出土状況 (S=1/120)

第37図は、斜面裾、竪穴住居跡の周辺から出土した遺物である。1、2はSI 02の南側から出土した須恵器蓋杯である。1は口縁部と天井部の境に段を設けた蓋で、口径13.0cm、器高4.3cmを測る。天井部は広い範囲にヘラケズリを施し、口縁内面には斜めに面を設けている。焼成は甘く灰白色を呈す。2は口縁が比較的高く立ち上がる杯身で、口縁端は丸く収める。底部外面は広い範囲で回転ヘラケズリを施している。口径11.5cm、最大径14.0cm、器高4.5cmで、焼成は良好、青灰色を呈す。1、2はともに完形で、周辺に古墳時代の何らかの遺構があった可能性が高い。大谷編年出雲2～3期と考えられる。

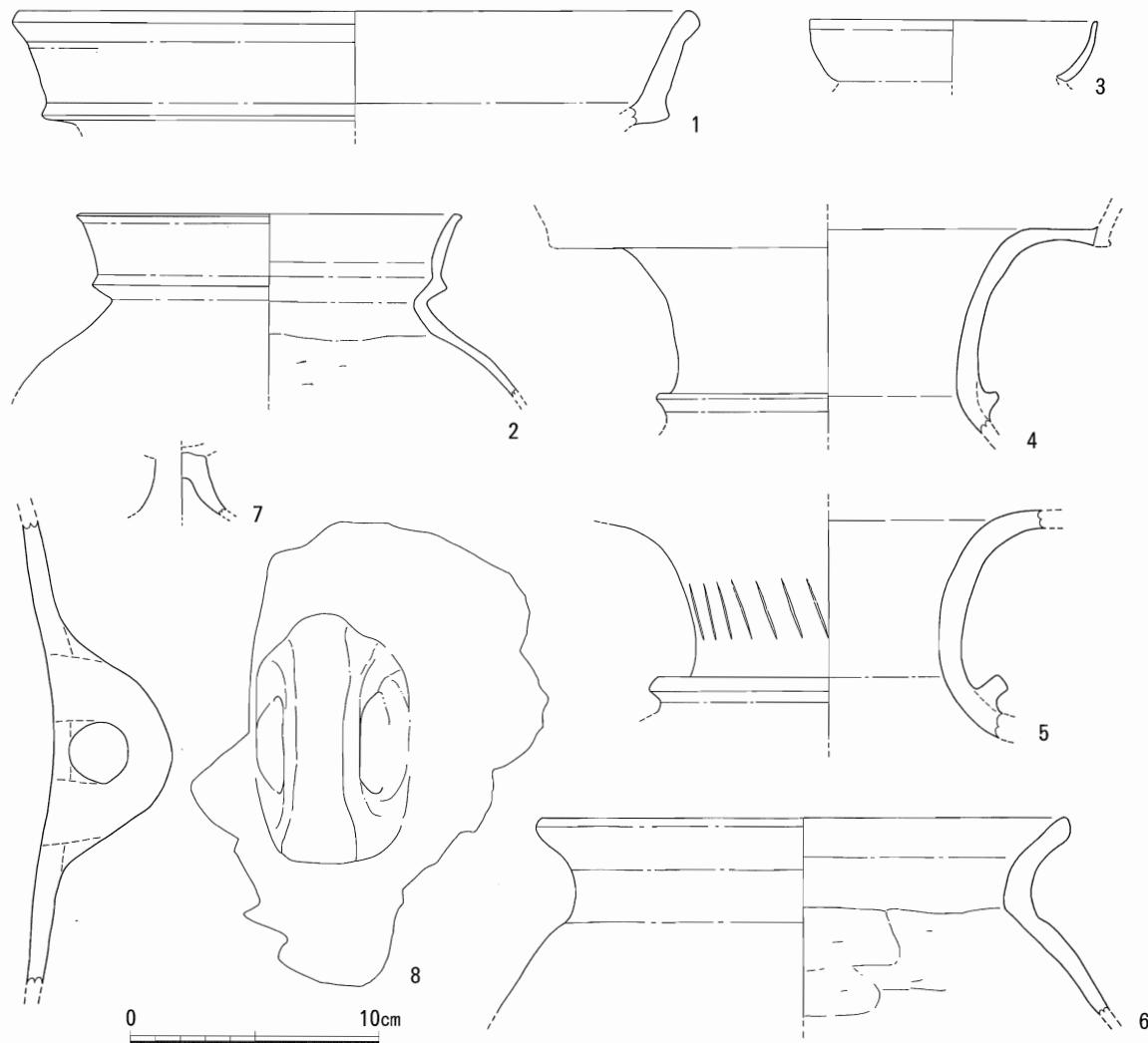
3は備前系陶器の擂鉢である。底部と口縁部が出土しており、同一個体の可能性がある。4は土師器の杯である。復元口径12cm前後、復元底径7cm前後、器高4.1cm程度で底部には不明瞭ながら回転糸切り痕が残る。外面には回転ナデにより明瞭に稜が見られる。9～10世紀前後の遺物であろうか。

(丹羽野)

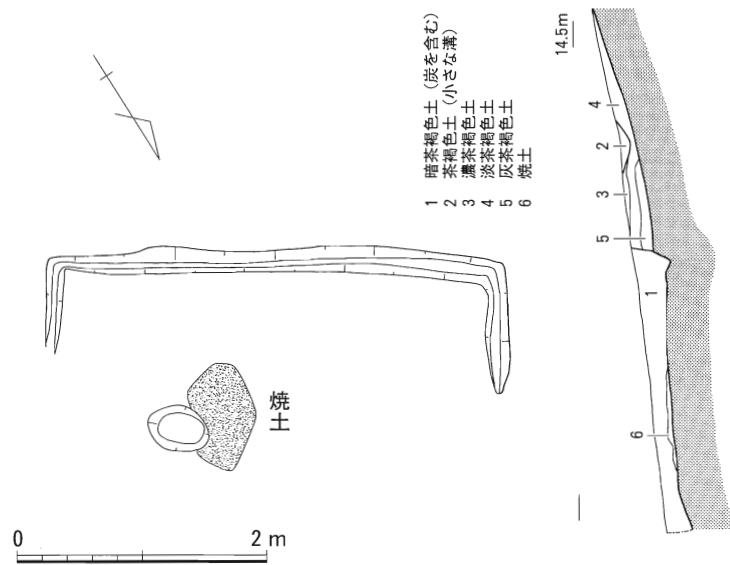
注

赤沢秀則編 1992 『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書5 南講武草田遺跡』 鹿島町教育委員会

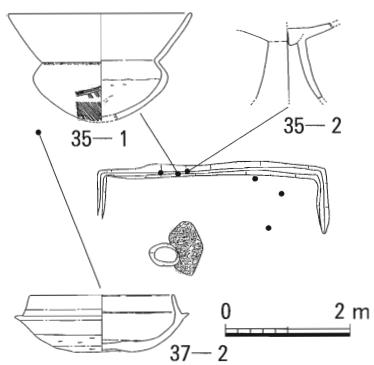
大谷晃二 1994 「出雲地域の須恵器の編年と地域色」『島根考古学会誌』第11集 島根考古学会



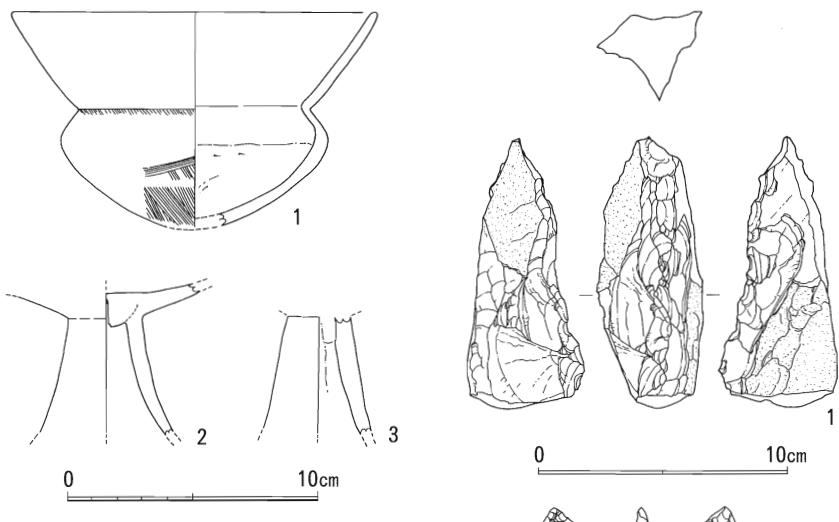
第32図 杉ヶ撓遺跡 SI 01・SB01・SD01 出土遺物実測図 (S = 1/3)



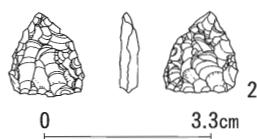
第33図 杉ヶ撓遺跡 SI 02実測図 ($S=1/60$)



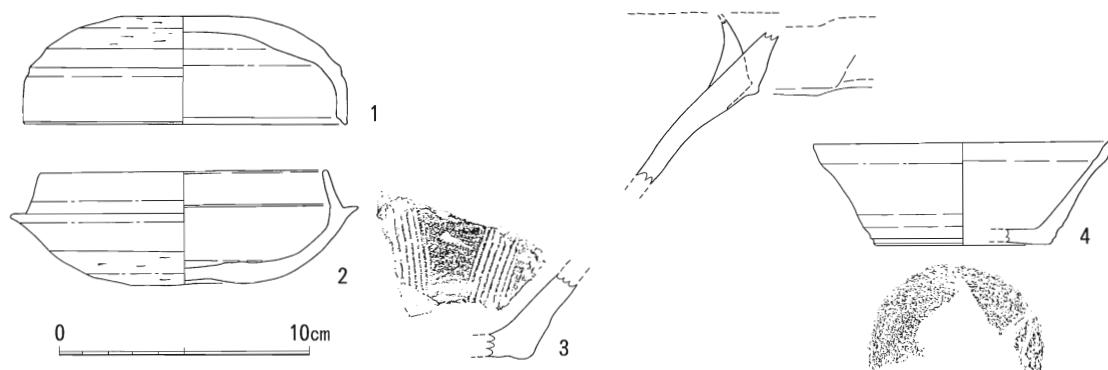
第34図 杉ヶ撓遺跡SI 02周辺
遺物出土状況



第35図 杉ヶ撓遺跡 SI 02
出土遺物実測図
($S=1/3$)



第36図 杉ヶ撓遺跡 遺構に伴わ
ない遺物実測図 (1)
(1は $S=1/3$ 、2は $S=2/3$)



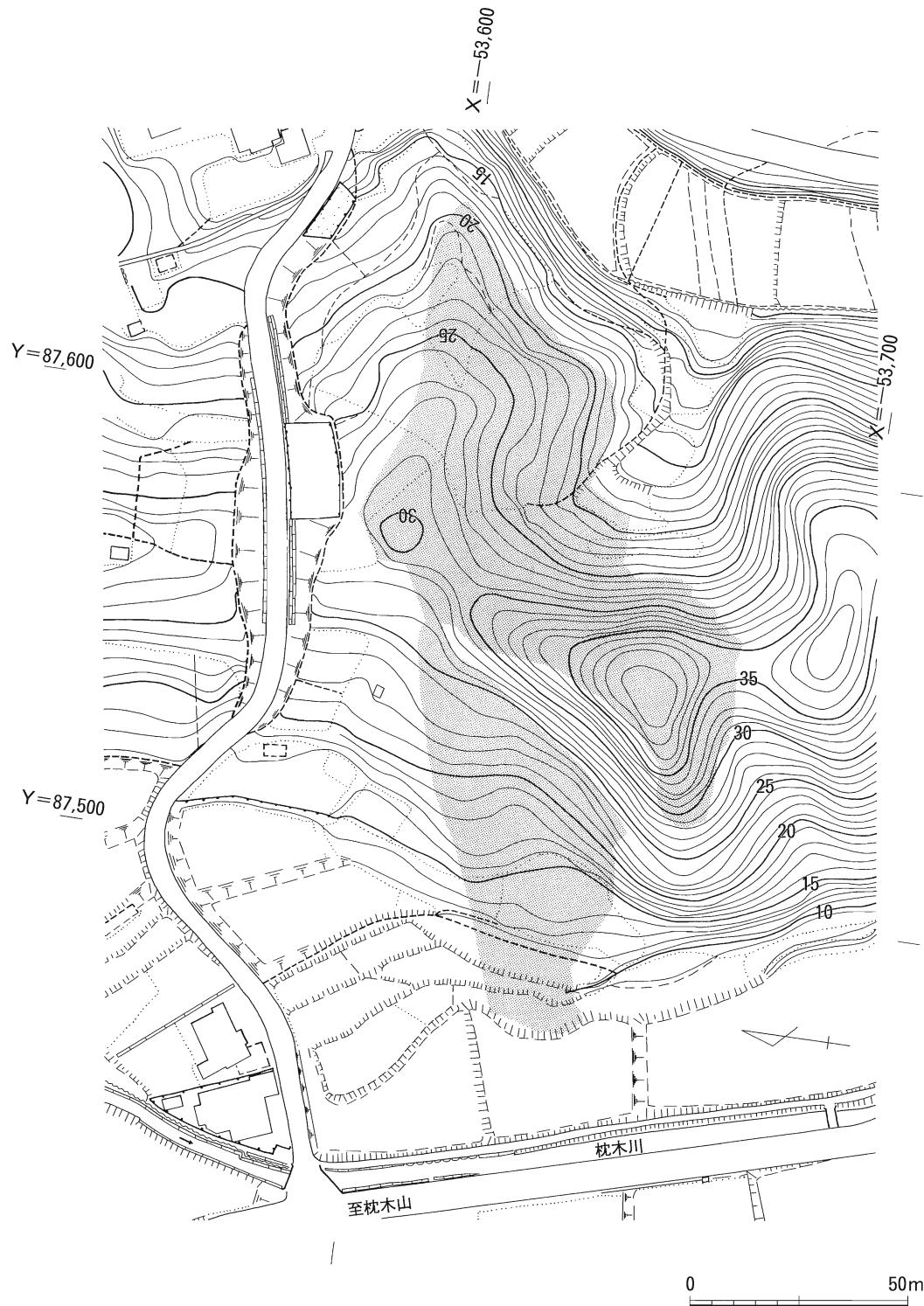
第37図 杉ヶ撓遺跡 遺構に伴わない遺物実測図 (2) ($S=1/3$)

第5章 客山墳墓群・連行遺跡

第1節 客山墳墓群・連行遺跡の調査の経過と概要

客山墳墓群は、遺跡地図に登載されている、客山1号墳として調査を行っている。もともと、この古墳状の高まりが注目されたのは、1965年12月12日の本庄考古学グループの調査によるものである。その調査によると、一辺10m前後の方墳で、南側に別区を設けているとされている。

客山墳墓群と連行遺跡の現地調査は、平成11年6月17日に着手し平成12年1月14日まで実施して



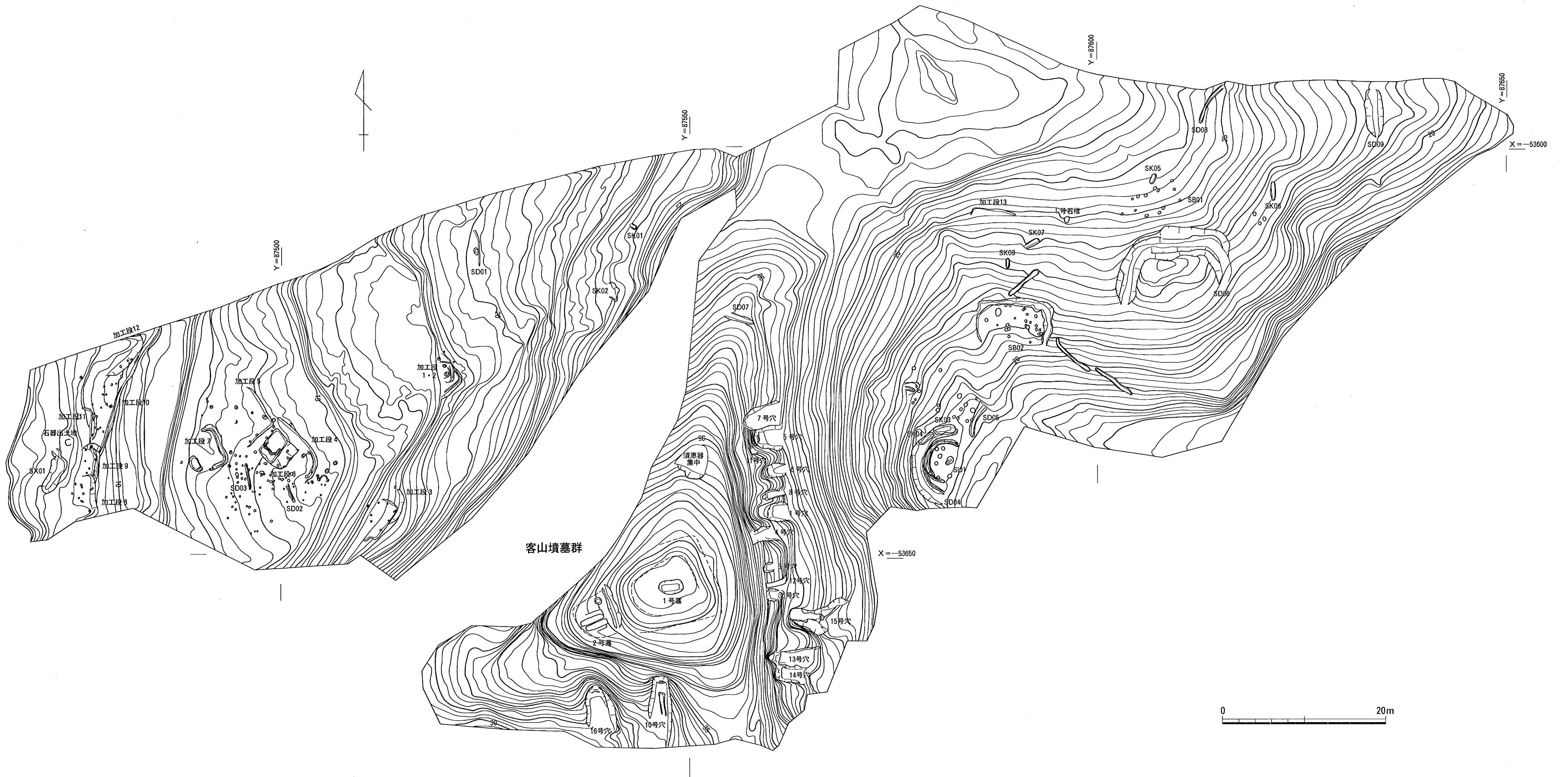
第38図 連行遺跡 周辺地形図 (S = 1/1500)

いる。調査の準備に時間を使い、現地調査に入るのに手間取ってしまった。客山墳墓群については、平成11年度に終了した。客山墳墓群は2基の墳丘墓であることが確認された。西側の斜面は、畑の耕作により階段状の造成が行われているとも思われたが、各階段の平坦面からピットが確認され、建物跡であることが確認された。東側の斜面には古墳がマウンドを削平され周溝のみ残る状態で確認された。客山墳墓群の東側の斜面は急峻であるが、トレンチ内から須恵器が出土し、横穴墓の前庭部らしき跡が確認され、横穴墓の存在が明らかとなった。横穴墓は何段かに築成されており、しかも天井部が崩落しており地山を広く掘削する必要があり、横穴墓全体の調査が年度内に完了しなかった。そのため連行遺跡の横穴墓の一部と東側の斜面については、平成12年4月27日から8月1日まで調査を実施した。横穴墓は東側の斜面から新たに見つかったものを含め、総数15穴の横穴墓群であることが判明した。東側斜面において、古墳の周溝以外にも土抗墓、掘建柱建物跡を確認した。

(広江)



第39図 客山墳墓群・連行遺跡 横穴墓 配置図 (S=1/300)



第40図 客山墳墓群・連行遺跡 遺構配置図・調査後測量図 (S = 1/400)

第2節 調査の結果

客山墳墓群

連行遺跡の頂上部には、方形の高まりの存在が知られ、分布調査時に既に客山古墳（島根県遺跡地図No.D475）として遺跡台帳に登録されていた。前述のように、この墳墓群は連行遺跡の一部ではあるが、従来より別の遺跡として登録がされていることから、調査開始段階ではその名称を活かし、連行遺跡の一部として、客山古墳と呼称することとした。

なお調査の経過の中で、頂上の「古墳」は弥生時代にさかのぼる可能性もあることから「墳墓」と読み替えることとし、西側にもう1基の墳墓の存在が明らかになったことから「群」をつけて「客山墳墓群」と称することとした。また従来「客山古墳」と称されていた頂上部の墳墓を「客山1号墓」と、西側に新たに検出された墳墓を「客山2号墓」と称することとした。

客山墳墓群の立地と調査前の状況

客山墳墓群は、連行遺跡が存在する標高約40mの丘陵頂上部に位置する。丘陵の尾根はおよそ南北に伸び、頂上付近から西側にも尾根が派生している。客山1号墓はこの三方向に伸びる尾根が収斂する位置にあたる。北側に続く尾根は緩やかに下りながら枕木山方向に連なる丘陵に続き、南側に続く尾根はわずかに下って鞍部を形成した後、再び1号墓よりやや低い頂上部に繋がっている。この南側に隣接する頂上部にも不明瞭ながら墳丘状の高まりを認めることができる。

眼前は南北方向に伸びる狭長な谷に面しているが、現在の本庄地区の集落越しに本庄平野、中海を望むことができる。南東の方向には中国地方一の高さを誇る大山を遠望し、北には北山山地の秀峰、枕木山（453m）を望む位置にあたる。

調査前の状況としては（第41図）、南東の隅付近が道により削られ、北西隅付近が急峻な地形で流出していること以外は比較的保存状態は良いものと考えられ、11m×12m程度の方墳であると推測された。墳裾と推定されるラインの外側には、削平、流出部を除いて平坦面が形成されていることが観察された。特に西側に伸びる尾根には比較的広い平坦部が認められていたが、この部分は結果的に2号墓が検出されることとなった。なお、調査前に担当者の不注意により西側と南側の墳裾平坦面付近にまで重機が侵入し、地形を破壊してしまったのは遺憾であった。

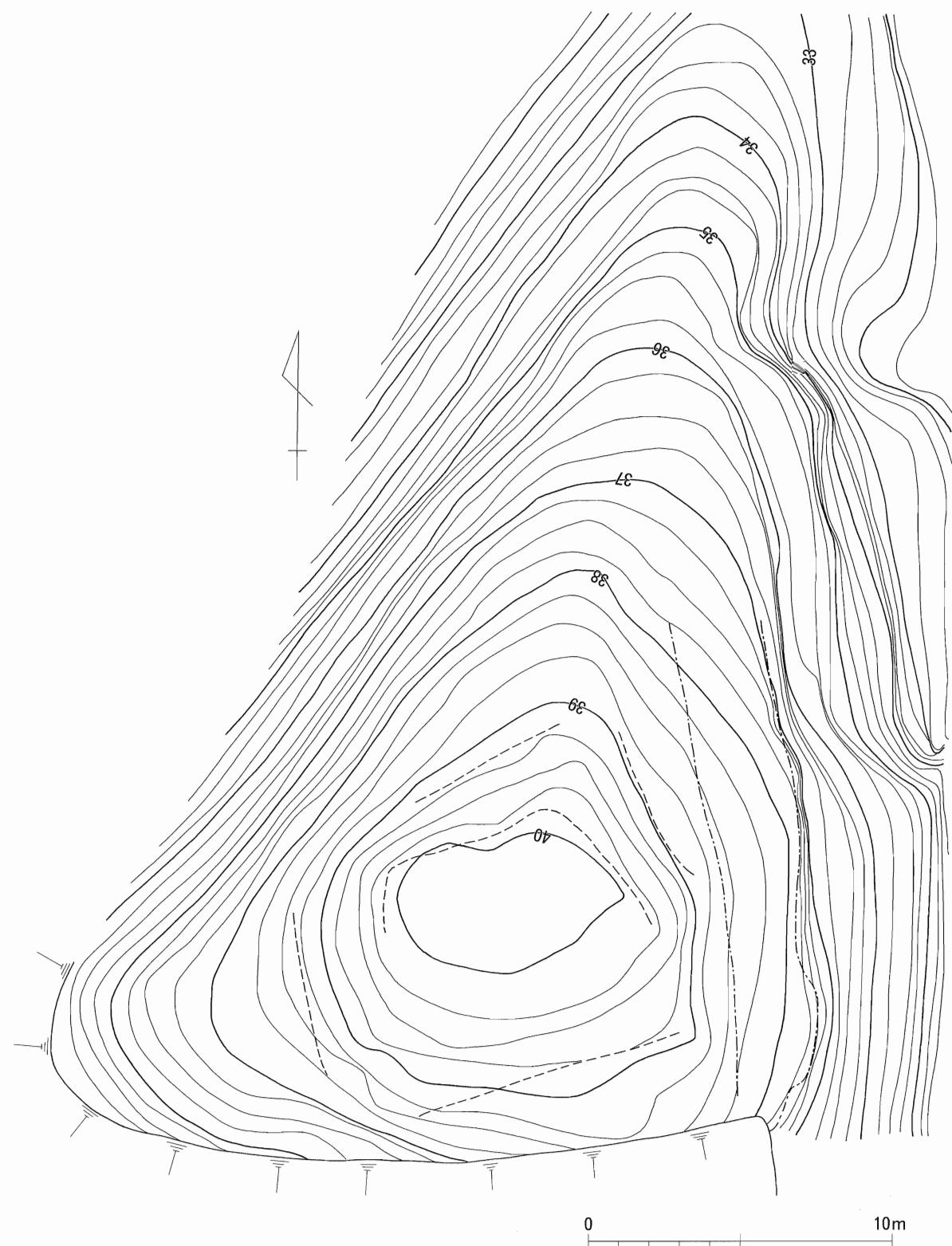
客山1号墓

墳丘 連行遺跡の頂上最高所に位置するのが客山1号墓である。調査の結果、墳丘は西側に派生する尾根方向に長軸を取る13×10mの長方形を呈することが明らかになった。ただし、前述したように南東隅は後の道で削られ、北東隅は急峻な地形により流出している。西側の墳裾は2号墓の溝によって削られている可能性がある。墳丘の高さは現状で、北、南、東の裾からは0.9～1.2mを測るが、西の裾からは2号墓の溝を基点とすれば1.9mとかなり高くなる。ただ前述したように、西側は2号墓が新しく削って築成されたものとすれば、築成時はもう少し上方に裾があった可能性もある。もちろん本来的に集落側を高く見せるために段違いの裾を設けた可能性も否定できない。いずれにしても1号墓を遠望した際に明瞭な高まりを形作っていることは間違いない。

盛土は全く認めることはできず、現況の墳丘はすべて地山を削り出すことによって形成している。後述するように主体部が1m以上の深さを残していることを勘案すると、本来的に盛土はあったと

してもさほど多くはなかった可能性が高い。

墳頂の平坦面は肩を明確に画すことはできない（特に西側と南側）が、およそ $8\text{ m} \times 7\text{ m}$ 前後であったものと思われる。



第41図 客山墳墓群 調査前測量図 ($S = 1/200$)

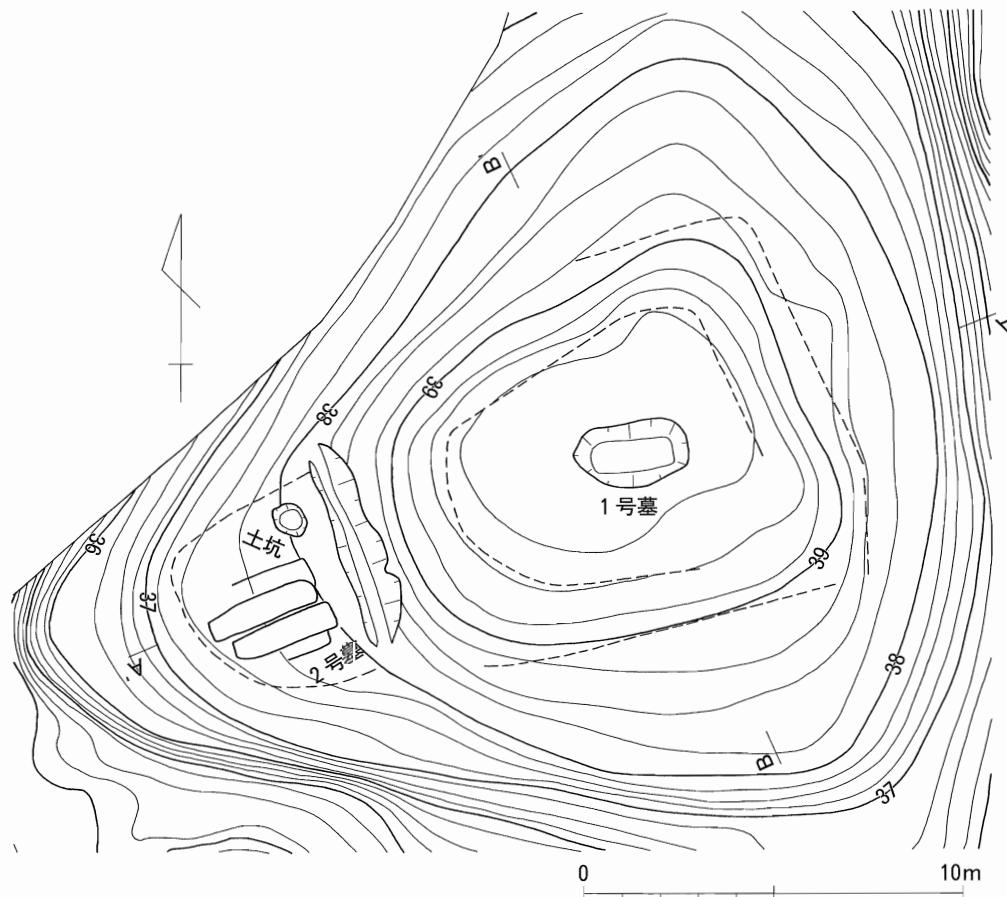
主体部 主体部は墳頂平坦面の中央やや東寄りに1基のみが検出された。墳丘の長軸からややずれて、ほぼ東西（N83°E）に長軸を取る土壙である。形態は検出面で長楕円形を呈すが、底面の形がほぼ長方形であることや北側や東側の掘り方のラインは直線状を呈すことから、基本的には長方形を指向したものと推測される。規模は検出面で最大長3.1m、最大幅1.7m、底面で長さ2.2m、幅0.7m（東側小口部分）～0.87m（西側小口部分）を測る。底面は若干の凸凹は見られるが、ほぼ水平で、深さは1mとかなり深い土壙である。

壁は比較的急角度で掘りこまれており、特に側壁と東側壁の底面から20cmほど上方からは、角度を変えて垂直に近い急な角度で掘りこまれている。断面図では、二段掘り状に見えるが、これは部分的な壁の凹凸が現れているもので、全体的には素掘り状の土壙である。

土壙内の土層を見ると、短軸の土層では底面から垂直に近い角度で立ち上がるラインが観察され、木棺痕跡の可能性がある。木棺痕跡とすれば箱型の木棺が想定され、両側の立ち上がりライン間の幅は約60センチを測る。ただ長軸においては、この種の立ち上がりラインを認めることができなかった。地山はやや軟質の岩盤であり、その掘削土をそのまま埋め戻したせいか、土壙内の堆積土には礫が多く含まれている。よって概して土層の違いを見分けるの困難な状況で、長軸では短軸でみられた様な立ち上がりを認め得なかったのはそのためと考えられる。

最上層の1層は皿状に中央に向かって窪んだ層で、木棺の腐朽によって崩落した後に落ち込んだ土層の可能性が高い。後に述べるように、この層からは土器など多くの遺物が出土している。

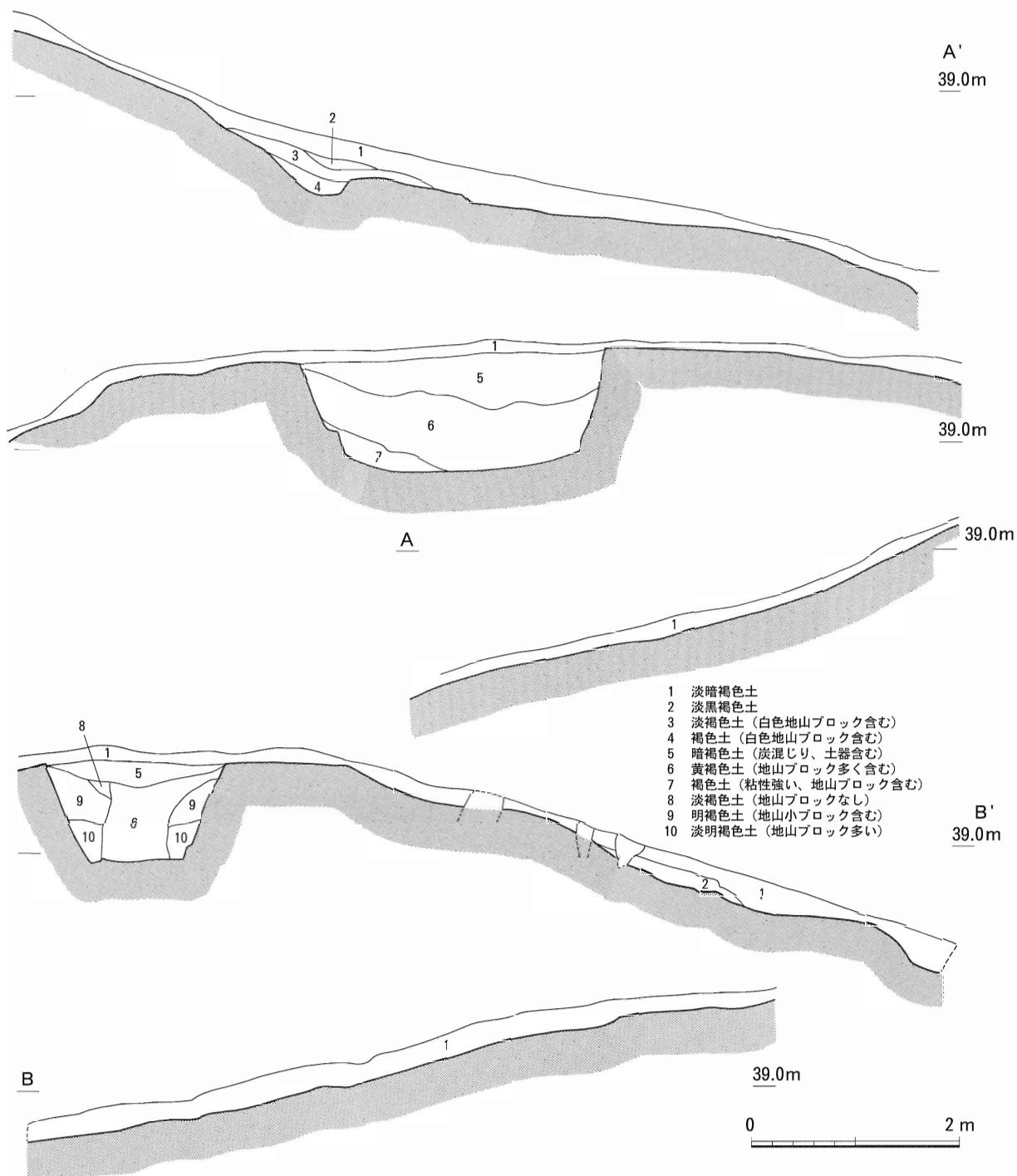
なお、副葬品と考えられる遺物は全く出土していない。



第42図 客山墳墓群 調査後測量図 (S=1/200)

主体部上遺物出土状況（第45図） 主体部土壙埋土の上面から1層内にかけて、土器類をはじめとした遺物が出土した。土器はいわゆる標石と推測される礫を中心に出土した。この礫は、底面の東端から約50cmの、両側壁から見るとほぼ中央部から出土した。仮に東側を頭位とすると、ほぼ胸の上の位置にあたるが、幅は西側が広く何ともいえないところである。

礫の底部のレベルは検出面から約40センチ下方（底面から約60センチ上方）で、第45図に示したように他の遺物はこれより下方からは出土していない。この礫が標石として機能していたとすれば、一定程度埋め込まれていた可能性もあり、それが他の遺物との高さの差を生じさせているのかもしれない。前述したように、棺の腐朽により落ち込みが想定できるなかで、この礫の落ち込みの深さ

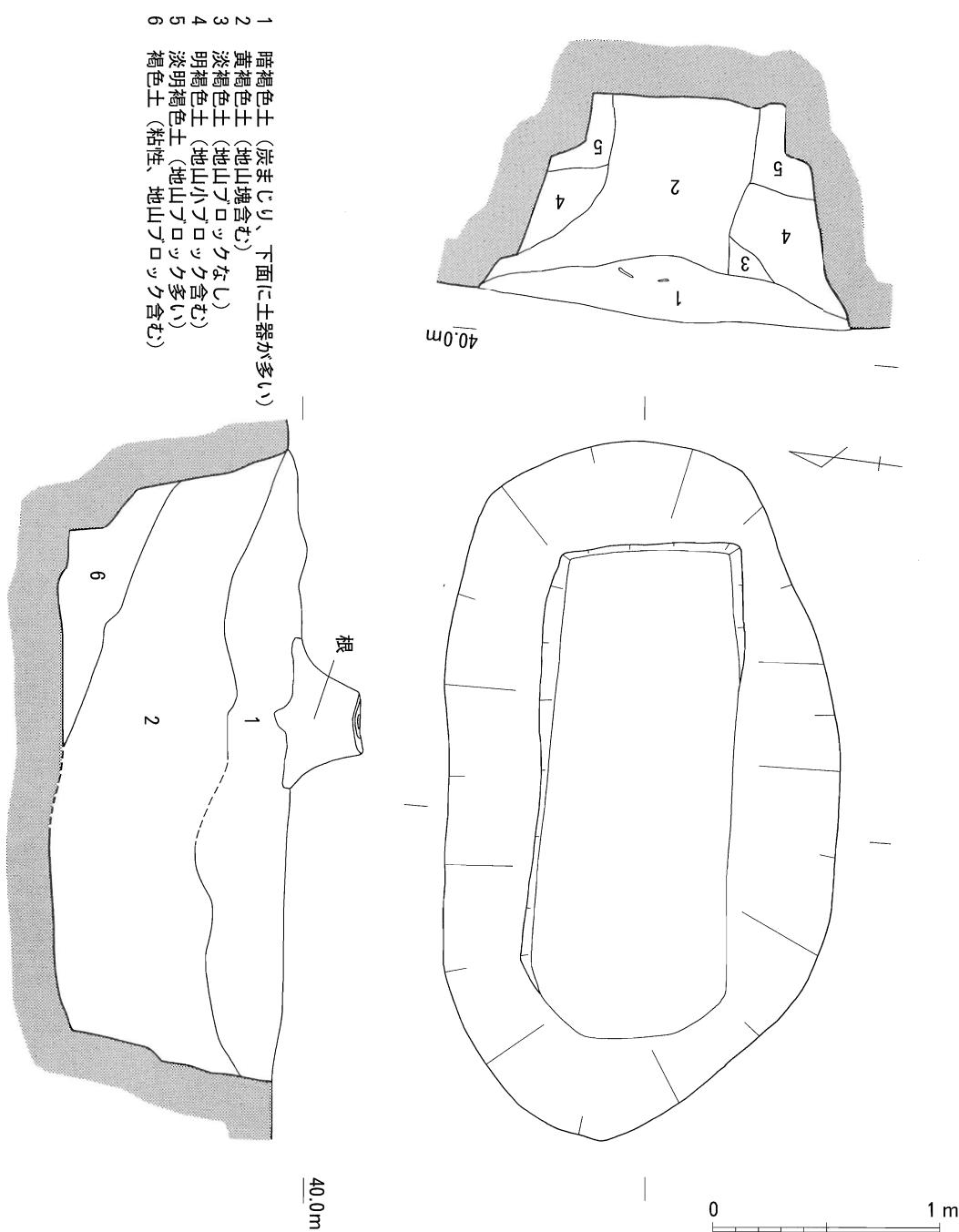


第43図 客山墳墓群 1号墳墳丘土層図 (S=1/60)

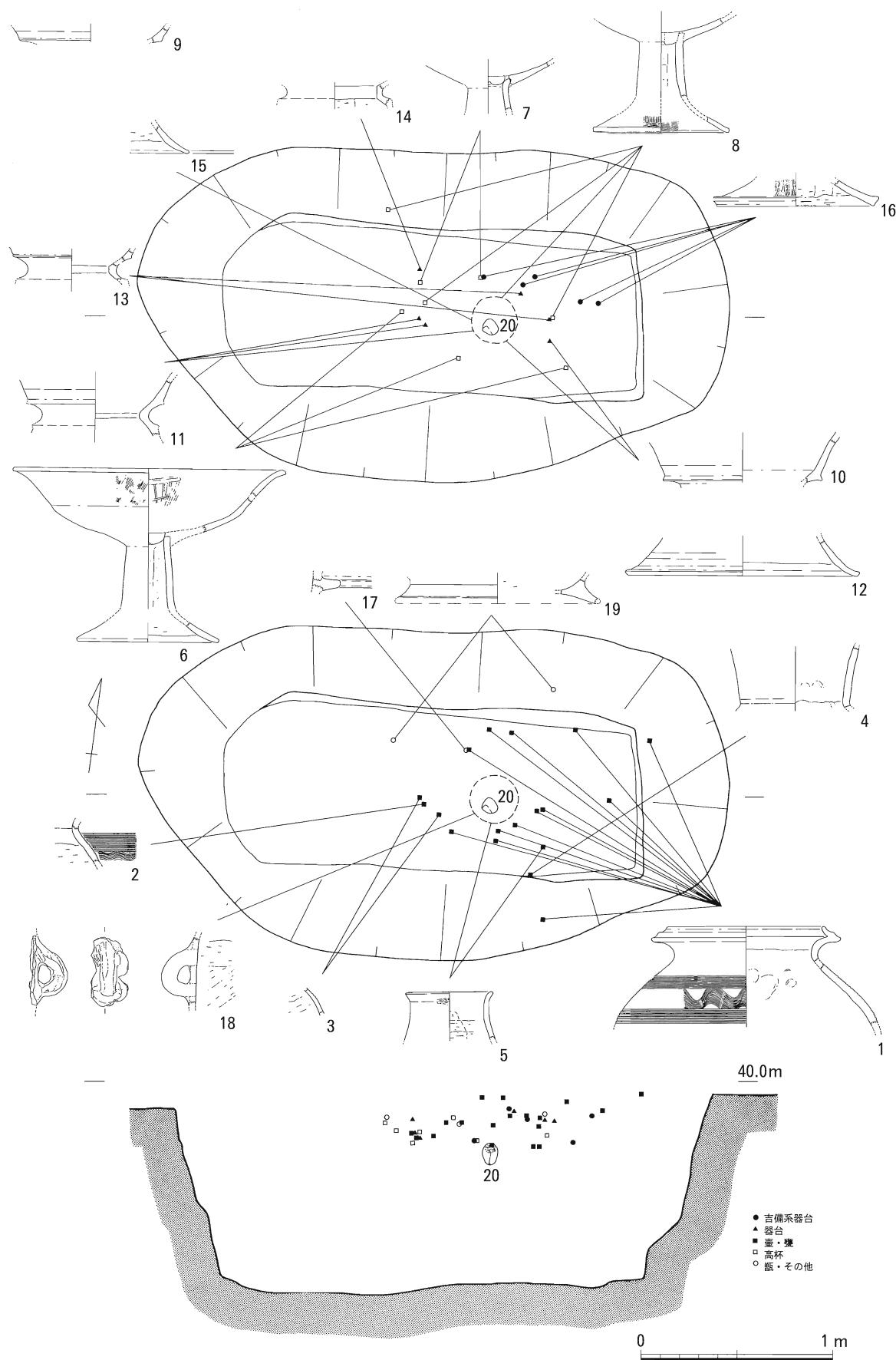
が棺の高さを反映している可能性もある。

礫は後に詳述するが、自然礫と考えられるものの、火を受けて変色している部分がある。出土状況は、長楕円の礫が立った形で出土しており、変色部分は上を向いていた。ただ立てられた状態での場所で火を受けたのかどうかは不明である。

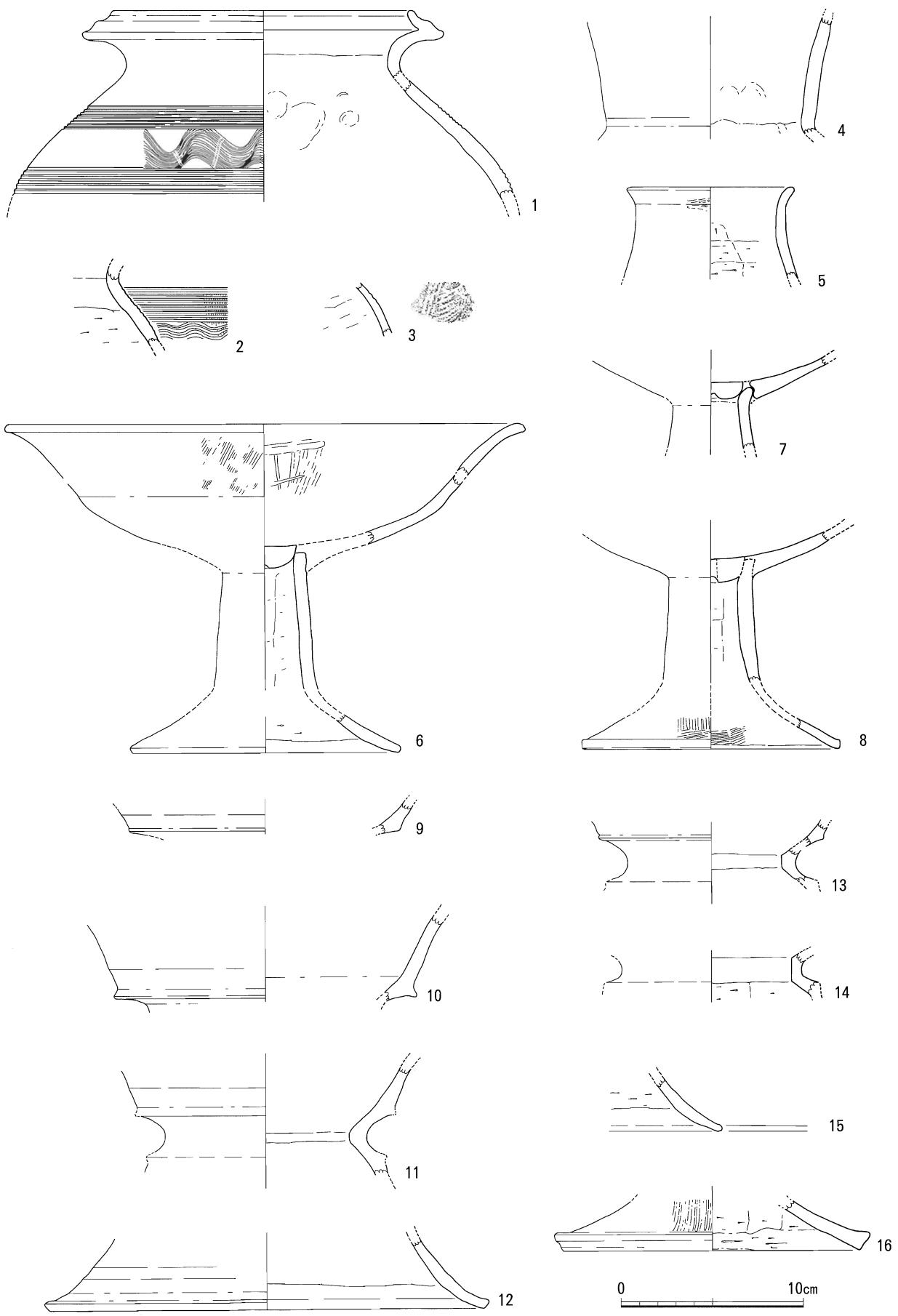
土器は礫の周囲、半径60cm以内を中心にして出土している。棺の腐朽による沈み込みの影響や標石直上付近に大きな木の根があったことも影響して、原位置を正しく反映していないのは言うまでもないが、傾向として標石の東側と北側に厚く、西側と南側に薄い遺物分布を示している。個体別に見ると、たとえば壺は標石の北側を中心に、吉備系の器台は標石の北東側を中心に、といった大まかな傾向は認められることから、破碎してバラまくような状況は考えにくい。当地域の一般例と



第44図 客山墳墓群 1号墓主体部 実測図 (S=1/30)



第45図 客山墳墓群 1号墓 遺物出土状況 (S=1/30)



第46図 客山墳墓群 1号墓 出土遺物実測図(1) (S=1/3)

同様、土壌を埋め戻した後にまとめて置かれた可能性が高いものと考えられる。

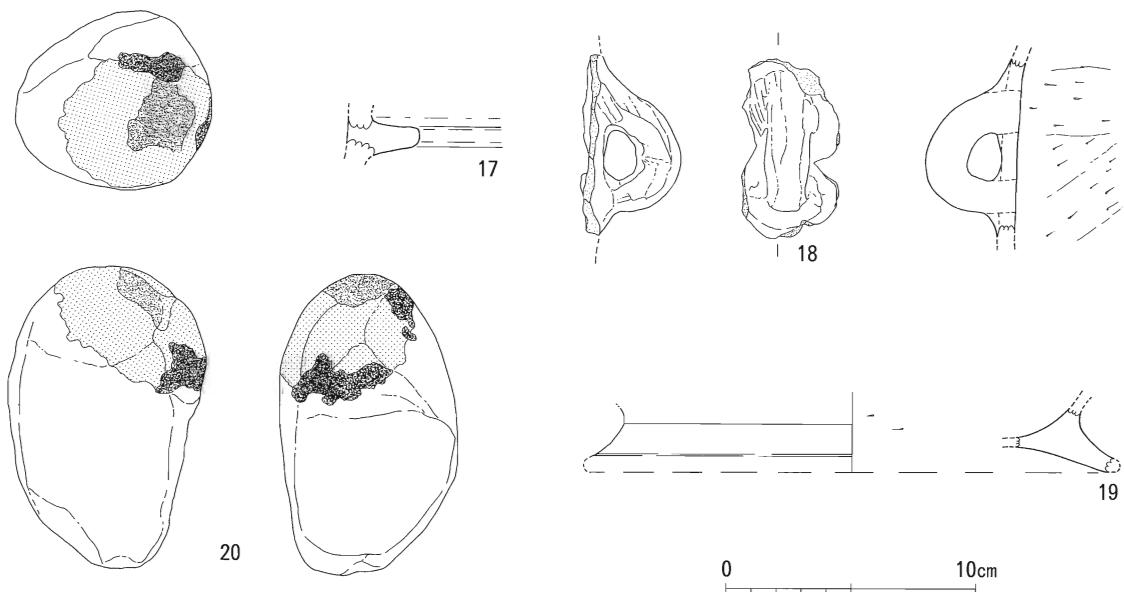
出土遺物（第46図、47図） 1は口縁部が内傾する壺である。複合口縁は鋭角に深く内傾しており、外面には浅い凹線状のくぼみが2列見られる。復元口径は16.5cm、口縁部の稜の部分の復元径は20cm前後を測る。胴部は大きく張っており、頸部の下方には二段に渡って擬凹線が施され、その間に比較的振幅の大きい櫛描波状文が施されている。2、3は甕の胴部、頸部下方付近と考えられる。2は横方向の平行したハケメの下に振幅の浅い櫛描波状文が見られる。3は横方向の平行ハケメの下にヘラ状工具で刺突する文様を密に施している。4は器種が不明瞭だが、直口壺であろうか。5も器種不明の土器である。口縁端は外方にわずかに屈曲して開いており、端部は丸くおさめている。外面にはヘラミガキを施しており、内面下半にはヘラケズリが見られる。

6～8は高杯である。いずれも脚柱部は円筒状で、脚部と杯部を別個に成形した後に接合し、杯部の中心部には円盤を充填している。脚柱部の内面には横方向のヘラケズリが認められ、脚柱部の天井（充填された円盤の下面）中心には3～5mm程度の浅い小孔が見られる。6は接合はしないものの、ほぼ同一固体と判定できる破片で全形を推測し得るものである。軸部径4.5cm、復元口径28.0cm前後、復元脚端径15cm前後、復元高さ18cm前後、杯部は比較的浅く、中央付近でわずかに屈曲しながら上方に向かい、口縁端付近でわずかに外反する。杯部内面にはヘラミガキが見られる。

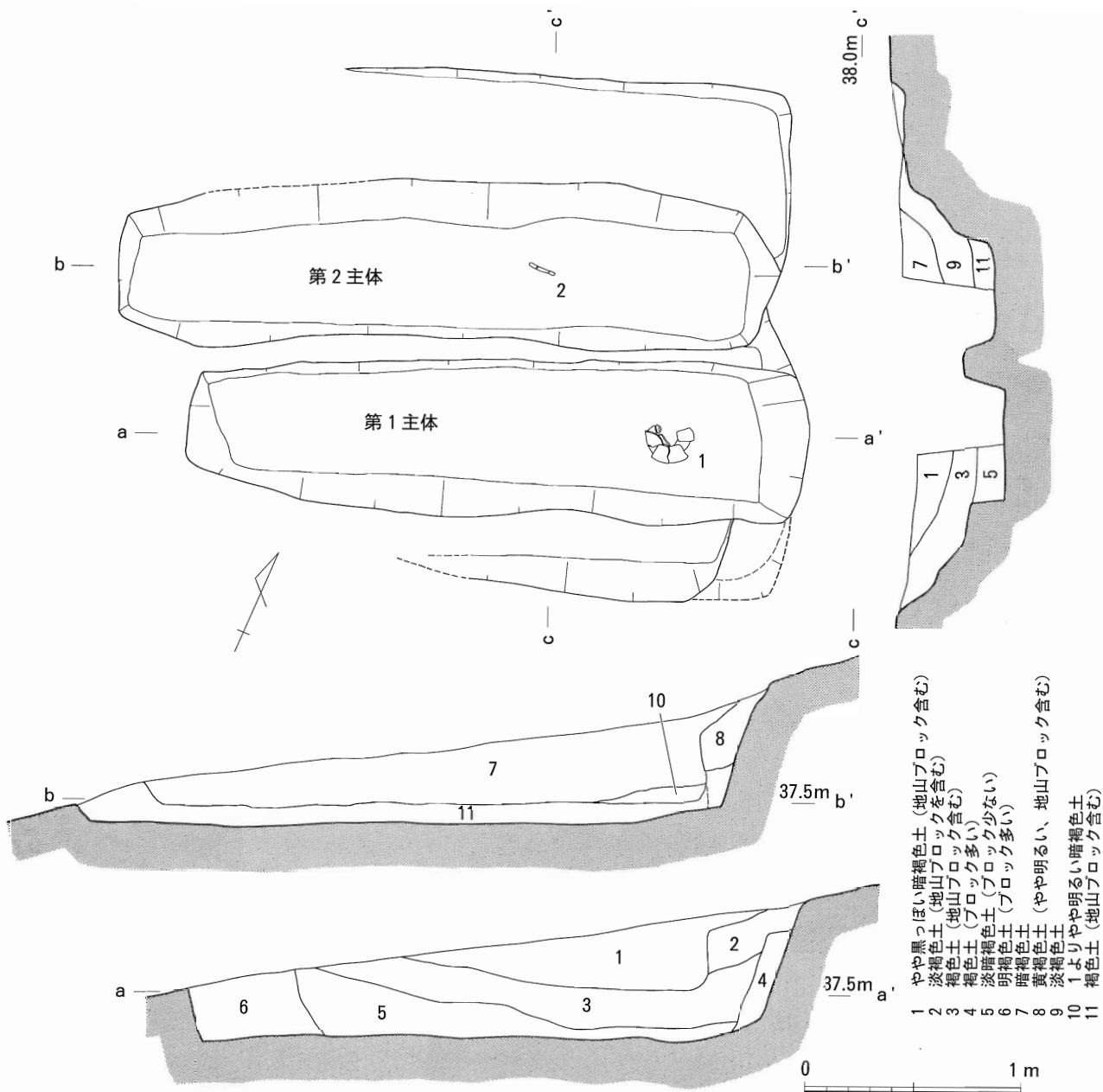
8～14は鼓形器台である。全形を知り得る個体はないが、いずれも筒部間が短く、口径・底径に比して筒部径の大きい形態と考えられる。受部の端部を知る個体はないが、脚端部についてはあまり屈曲せず、スムーズに端部に移行する個体を知ることができる（12、15）。また筒部の内面は、受部と脚部の間に面を持つ。16は吉備系と考えられる小型器台の脚部である。脚端は外面に突き出すようにやや肥厚し、外面にはヘラミガキ、内面は横方向のヘラケズリが見られる。外面には丹を施す。吉備から持ち込まれた可能性もある^{注1}。

20は標石と考えられる礫である。いびつな長楕円形で、人為的な加工や使用等の痕跡は認められないで、自然の礫と考えられるが、一端は火を受けたらしく変色している。

18は把手部分の破片である。把手は器壁を貫通して取り付けており、内面はヘラケズリを施す。



第47図 客山墳墓群 1号墓 出土遺物実測図（2）（S=1/3）



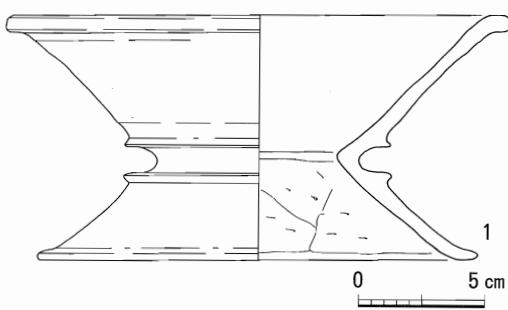
第48図 客山墳墓群 2号墓主体部 実測図 (S=1/30)

瓶形土器の特徴を持つが、一般例に比べてかなり小型である。17は突帶部分である。小片のため詳細は不明だが18とセットとなる可能性もある。

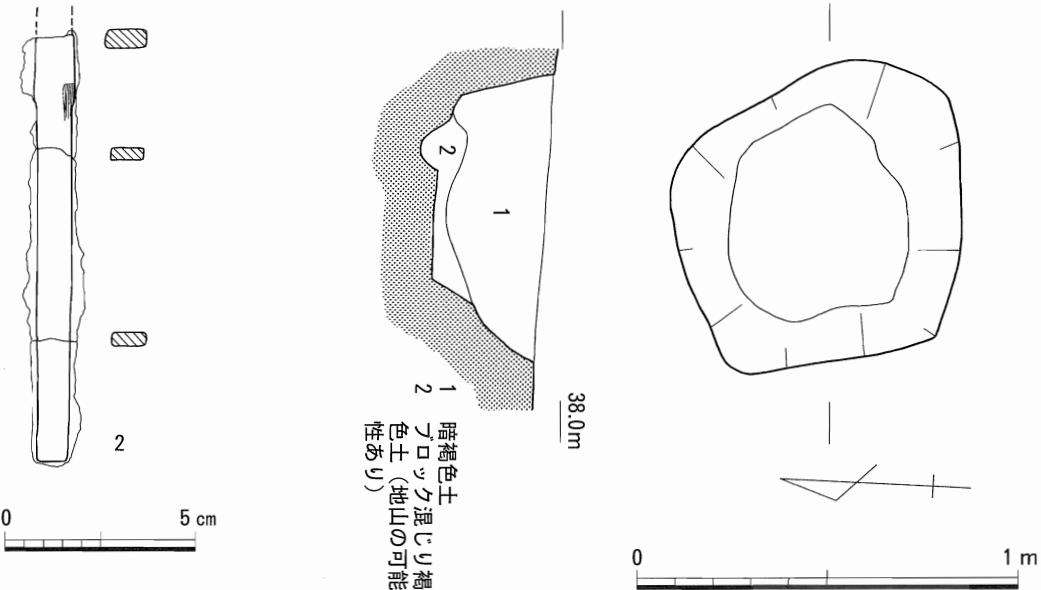
19は器種不明の破片である。何らかの底部とも思えるが、天地も定かではない。内面にはヘラケズリ痕が見られる。小片のため復元した径も不確定である。

客山2号墓

客山1号墓の西側に隣接して検出されたのが客山2号墓である。1号墓の墳丘斜面の一部を削り



第49図 客山墳墓群 2号墓
出土遺物実測図(1) (S=1/3)



第50図 客山墳墓群 2号墓
出土遺物実測図 (2)
(S=1/2)

第51図 客山墳墓群 2号墓 北側土坑実測図 (S=1/20)

こむように、直線状の溝を設けて区画し、その西側に平坦面を作り出して墓域としている。溝の幅は、検出面で約1.6m、底面で0.2~0.4m、深さは東側（1号墓側）の深い部分で約1m、西側で0.15mを測る。

溝の西側には不正方形の平坦面が広がり、その広がりが一定の墓域を表現しているように見える。検出状態での平坦面の規模は南北の最大幅が5.5m程度、東西の最大幅が溝の下端から測って4.9mで、西側は尾根の形に添って肩のラインは丸みを帯びている。ただ、この平坦面が2号墓の墓域そのものであるかどうかは疑問もある。後述する主体部を見ると、第二主体の墓壙西側の底と検出面の深さは10cmに満たず、また同じく第二主体の1段目掘り方の深さは5cmにも満たず西側で消失している。この土壤と検出面との関係から見ると、本来はもう少し高いレベルに土壤の掘削面があったと考えるのが合理的である。地盤が軟質とはいえ岩盤であることを考えると、地山部分の流出は考えにくい。とすれば一定の盛土が存在した可能性を考慮する必要がある。この考え方にして、現況で観察できた平坦面も1号墓の築成時に作り出されたものである可能性も捨てきれない。

主体部 平坦面の中央より南にずれて、少なくとも二つの主体部が検出された。ともに狭長な土壤で、非常に近接して、長軸を平行にして設けられている。長軸はN68°Eと若干東西方向からずれている。南側のやや深い土壤を第1主体、北側の土壤を第2主体と呼ぶ。第1主体は両側に、第2主体は少なくとも北側の側面にさらに1段浅く掘りこんだ平坦面が認められる。いわゆる二段墓壙の1段目の面と見るのが妥当であろうが、別の主体部が重なっている可能性も完全な否定はできない。なお両者の前後関係については、ちょうど両土壤の間に試掘トレンチを入れており（第48図横

客山2号墓 主体部計測値一覧表

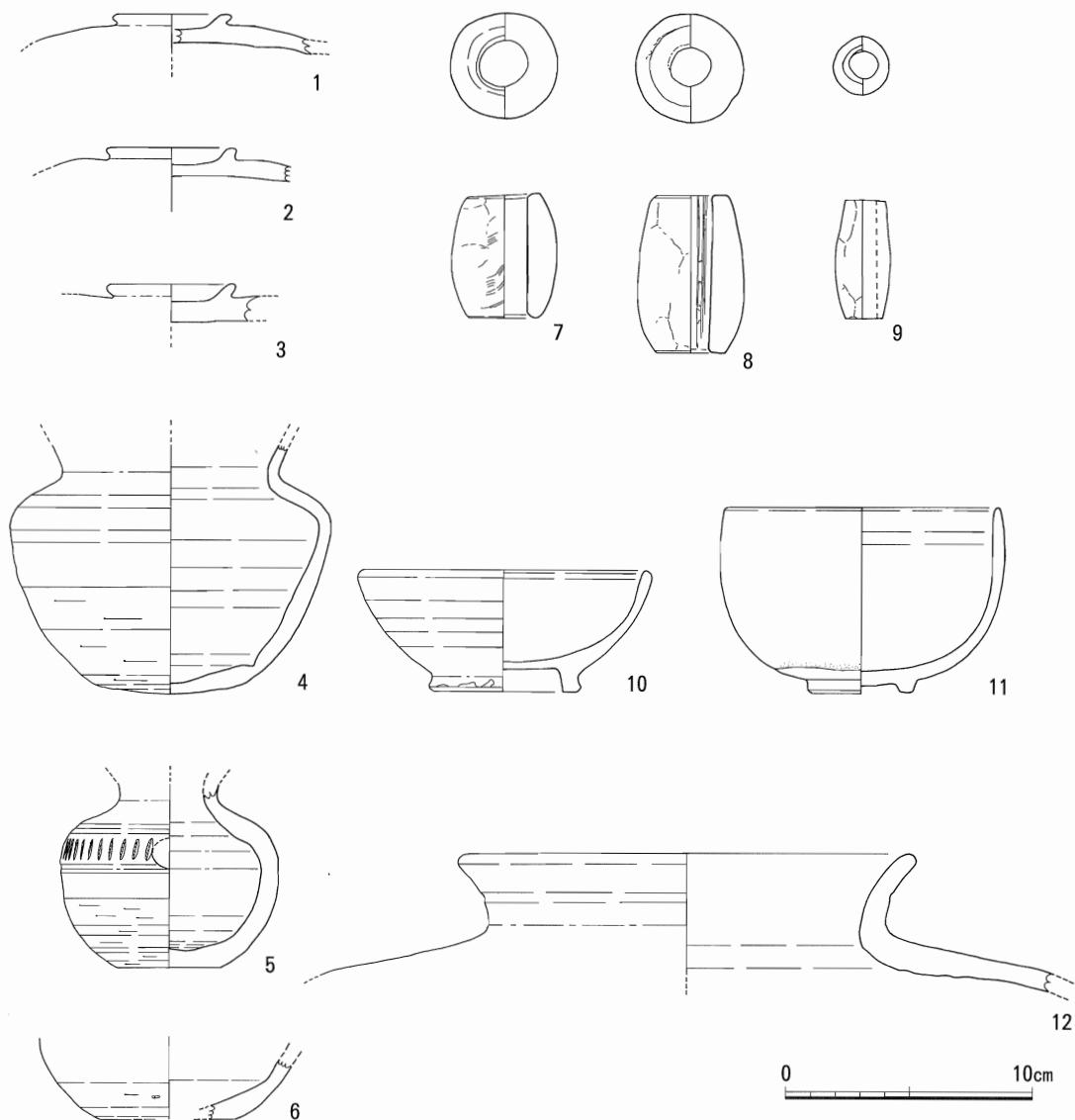
	長さ(m)		東側幅(m)		西側幅(m)		底面高(標高)		深さ(m)		最大幅 (検出面)
	検出面	底面	検出面	底面	検出面	底面	東側	西側	東側	西側	
第1主体	2.88	2.53	0.73	0.58	0.45	0.42	37.41	37.26	0.61	0.24	0.76
第2主体	3.03	2.83	0.65	0.5	0.51	0.35	37.47	37.39	0.63	0.1	0.79

断土層図の空白部分)、切りあい関係を確認することはできなかった。

第1主体は計測表のように、狭長で第2主体より若干深く掘りこまれている。底面レベルは東側が高く、幅も広いので東が頭位の可能性が高い。後述する遺物出土状況もそれを首肯させる。両側には15~20cmほど高いレベルにもう一段平坦面が設けられている。土層堆積状況を見ると、長軸では縦方向の立ちあがりが観察でき、あるいは木棺の痕跡の可能性もあるかも知れない。

第2主体は第1主体よりもわずかに規模が大きい。同様に東側の底面が高く、かつ幅も広いため、東頭位と見るのが妥当であろう。少なくとも北側には、40cmほど高いレベルに50cm前後の幅で平坦面が検出されている。この平坦面の深さは深い部分でも5cm程度で、西側に行くと検出できなっている。前述したように本来の掘り方はさらに上方のレベルであった可能性が高い。また南側は第1主体と重なっており、本的に同様の平坦面があったかどうかは定かではない。

遺物出土状況 第1主体からは、底面直上から鼓形器台が1点出土している。底面東端からおよそ40cm離れて、短軸上の中央に据えられた形で出土している。位置関係から枕として用いられた可能性もある。第2主体からは、底面東端から約90cm離れて鉄製品が1点出土している。床面出土である。この鉄製品は新しい割れで欠損しているが、これは試掘トレーナーを入れた際に新しい割れ部分



第52図 連行遺跡 尾根付近遺構外出土遺物実測図 (S=1/3)

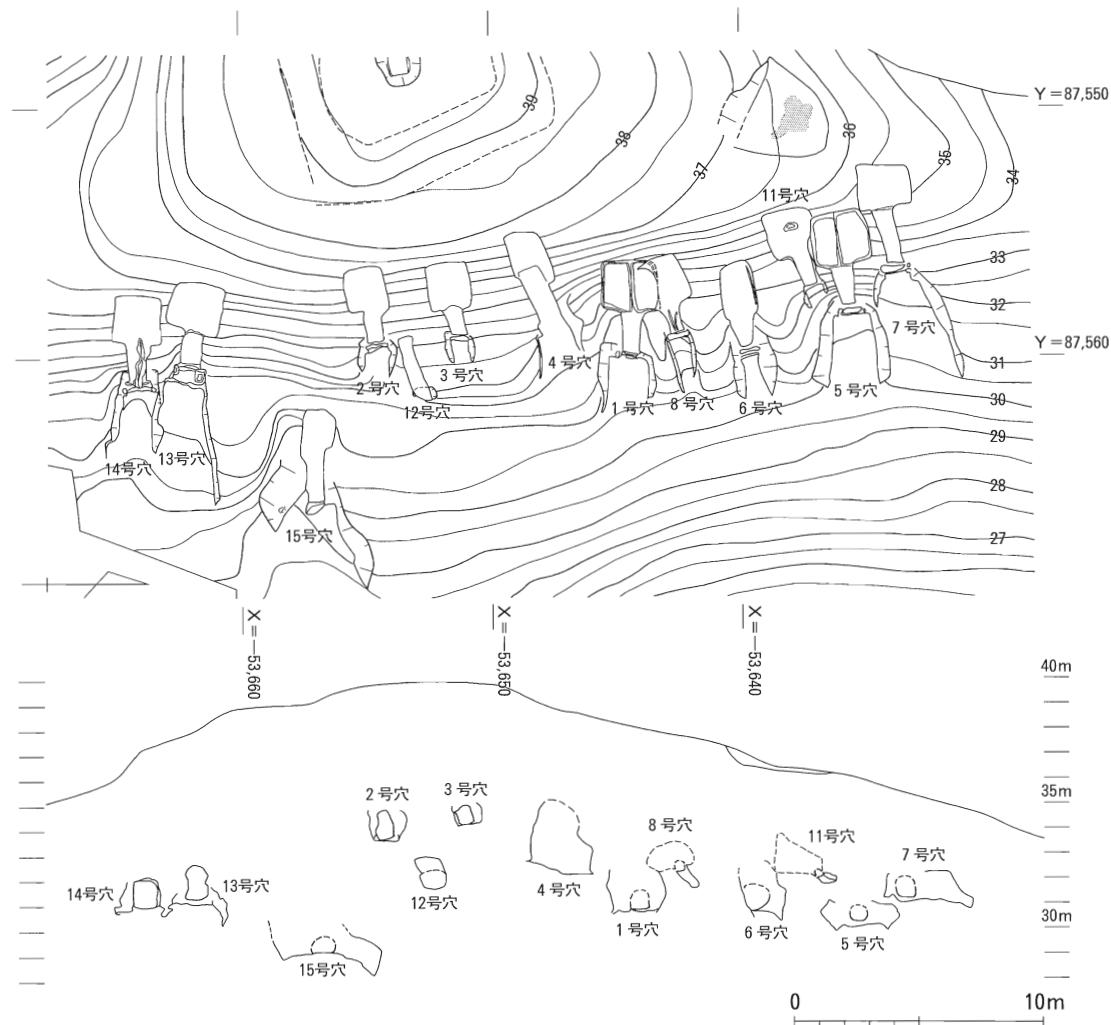
がトレントの壁に偶然あたり、欠損して遺失した結果である。

遺物（第49図、50図） 第49図1は鼓形器台である。完形に復元でき、口径20cm、筒部径8.0cm、底径17.4cm、器高9.8cm、筒部高さが1.0cmを測る。筒部が短く器高も低いのが特徴で、口縁端および脚端は稜を持って折り返すようにしている。また筒部の内面はわずかな平坦面しか持たない。2は鉄製品である。柄の部分しか残存しておらず、詳細は不明だが鉗であろうか。現況で長さ11.0cm、柄部分は幅9mm、厚さ3.5mm程度で、欠損部付近はやや大型になり幅11mm、厚さ5mmとなる。（丹羽野）

連行横穴墓群

東斜面横穴墓群の分布

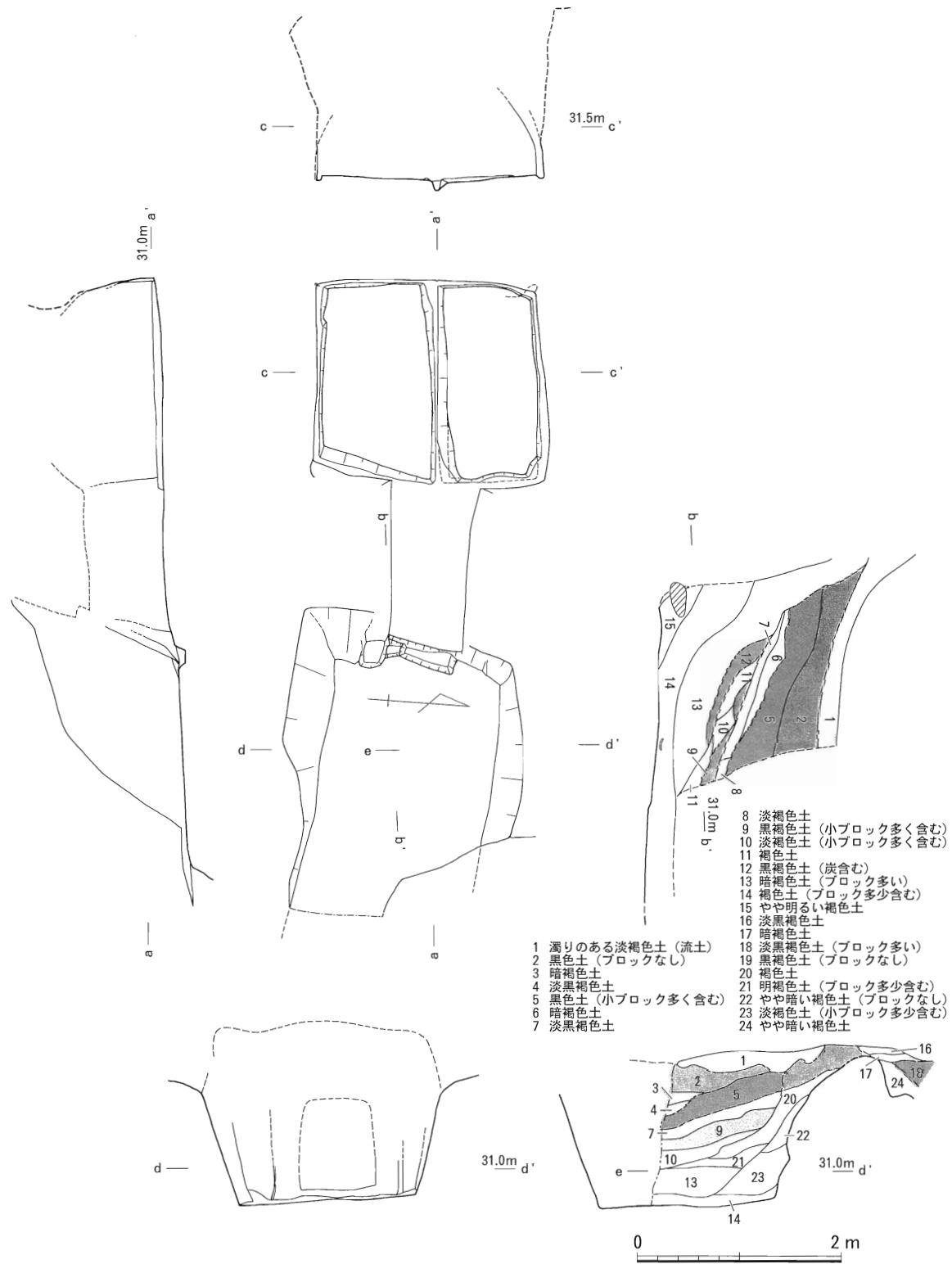
客山墳墓群が存在する丘陵尾根の東側斜面から、13穴の横穴墓が検出された。南側斜面からも2穴（さらに調査区外にも続いている可能性が高い）が検出されており（p99）、合計15穴の横穴墓が検出されたことになる。東斜面の横穴墓は、幅約35m、高低差約6mの間で検出された。標高30～33m前後を中心に上下2段、全体にわたって見ると計3段にわたって作られており、特に北側の上下2段の6穴は高低差が少なく、玄室の床面が陥没しているものも見られる。分布の粗密から見ると、北側の7穴（1・4・5・6・7・8・11号穴）、中央の3穴（2・3・12号穴、小型および掘削中途の横穴墓）、南側の3穴（13・14・15号穴）におおまかに群が分かれそうである。



第53図 連行遺跡 東斜面横穴墓 配置図 (S=1/300)

なお、北側の一群（5・7・11号穴）の上方尾根には、削り出して平坦面（3m四方程度）が作られており、破碎された須恵器大甕片がまとまって出土した。この甕片は1号穴前庭出土の大甕口頸部片と接合しており、この平坦面が横穴墓群にかかわる遺構であることは間違いない。須恵器については1号穴の出土遺物の項で述べる。

1号横穴墓



第54図 連行遺跡 1号横穴墓 実測図 (S=1/60)

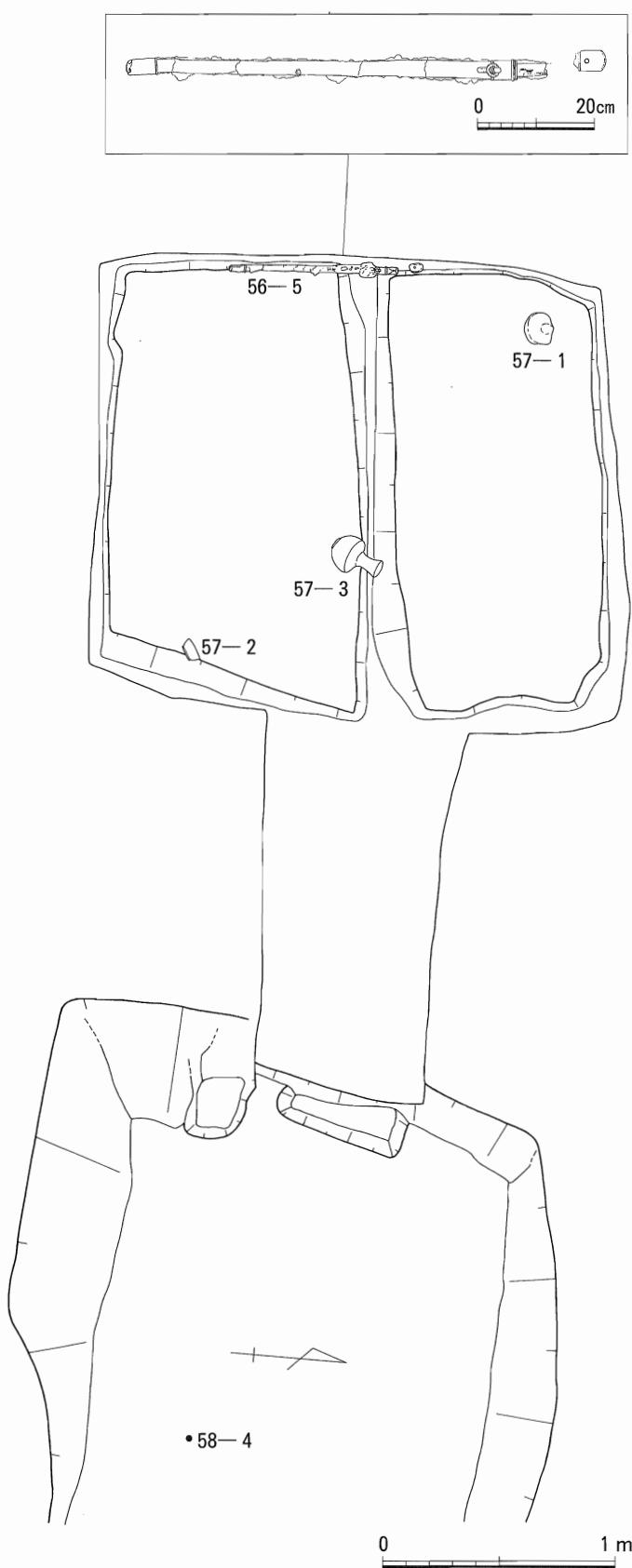
横穴墓群のほぼ中央付近、標高31m付近で検出された横穴墓である。当初の試掘調査のトレンチで前庭部を検出している。N 86° E とほぼ東向きに開口する。

前庭部 幅1.7m、長さは検出部分で2.5mの長方形の前庭部である。奥壁部分の高さは少なくとも1.6mを測る。試掘トレンチで検出されているため、土層堆積状況を完全に知ることができないが、横断土層で見ると2度の掘り返しの可能性がある。縦断土層は羨門部分にかかっていないため、穴内部への侵入（追葬）に直接かかわる掘り返しかどうか確認できないが、その可能性が高いだろう。

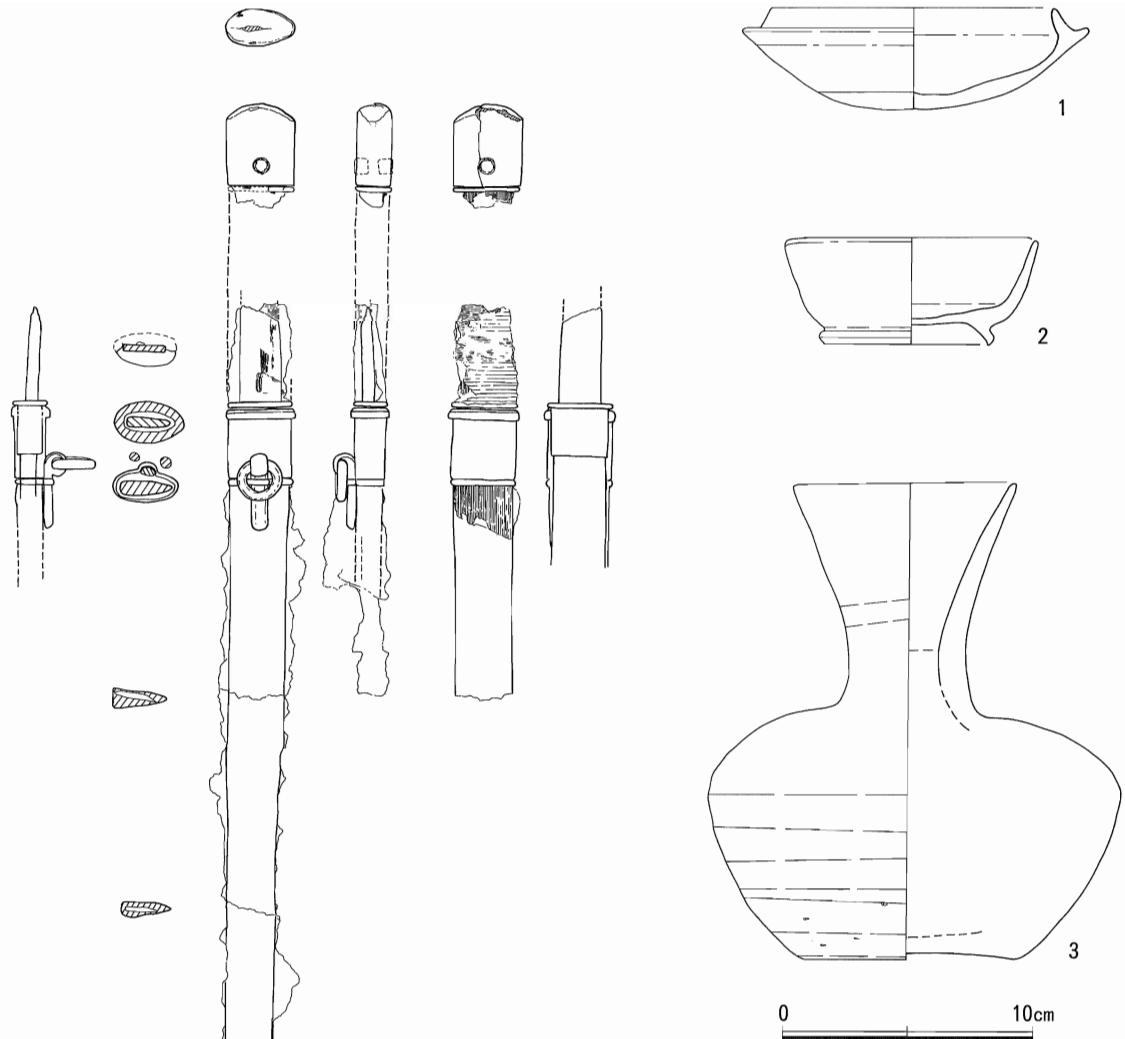
羨道 長さ1.6m、幅は羨門側が0.75m、玄門側が0.9mで、天井が崩落しているため高さは不明である。羨門部には幅20cm、深さ12cm程度の長方形の溝が掘りこまれ、その南側側面にはほぼ25cm四方ほどの穴も設けられている。閉塞にかかわる何らかの構造であろう。

玄室 奥行きが玄門付近で2.0m、右壁で1.9m、左壁で1.75m、幅は奥壁で2.16m、玄門側で2.3mと平面がやや横長の長方形を呈す。天井は崩落しており、高さや天井の構造は不明である。ただ四壁の界線の立ちあがりは曲線的な立ちあがりであり、少なくとも壁と天井の界線はないタイプの可能性が高い。4周には5~38cm幅の浅い溝がめぐり、長軸中央やや右よりも溝が設けられている。溝の底のレベルが羨道床面のレベルとほぼ等しく、よって玄室の床面は羨道床面よりも一段高くなる。

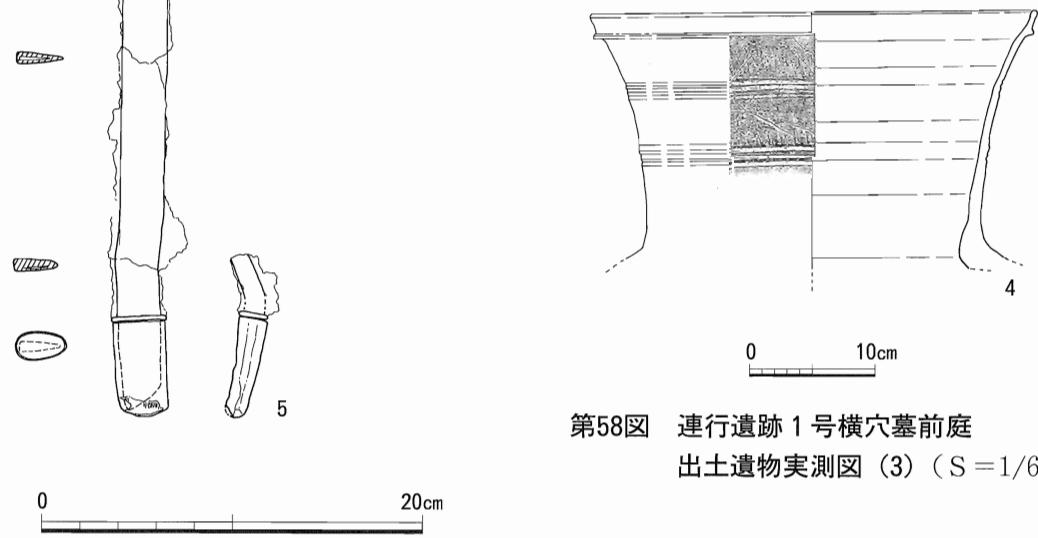
遺物出土状況 前庭部の床面からは、須恵器大甕の口頸部が出土している。この須恵器は尾根上の平坦面から集中的に出土した須恵器の一部と接合している。この須恵器が混入とは考えられず、尾根上平坦面での行為が1号横穴



第55図 連行遺跡1号横穴墓遺物出土状況 (S=1/30)



第57図 連行遺跡 1号横穴墓
出土遺物実測図 (2) ($S = 1/3$)



第58図 連行遺跡 1号横穴墓前庭
出土遺物実測図 (3) ($S = 1/6$)

第56図 連行遺跡 1号横穴墓 出土遺物実測図 (1)
($S = 1/4$)

墓前庭部での甕を用いた行為と連動していることは明らかである。

玄室の奥壁沿いのほぼ中央部から、銅装の圭頭大刀が出土した。ほぼ床面上で、刃側を手前に向けて壁沿いの溝にやや落ち込むような形で出土した。表面を上にしており、柄の腐食で離れて出土した圭頭との関係から見ても、ほぼ原位置を保っていると考えてよかろう。玄室の中心やや玄門寄りからは須恵器長頸壺が、奥壁と右壁のコーナー付近からは須恵器杯身（1）が、左袖手前壁際から須恵器杯身（2）が出土している。

遺物（第56図、57図、58図） 第56図5は銅装圭頭大刀である。柄の一部が腐朽により欠損しているが、出土状況から鞘口～柄頭責金具間の内法を10.7cmと復元すると全長82.5cm、刀身長66.1cm、大刀長は茎の先端を欠損していて不明だが、現状で71.5cmを測る。刀身の幅は鞘口金具部分で3.1cm、鞘尻金具部分で2.25cmである。佩裏の鞘口金具部分には、鞘木の木質が残っている。茎は現況の長さが鐔から5.2cm、幅は2.0～2.2cmを測る。鐔は長径3.4cm、短径1.85cm、幅0.25cmと小型、銅製で、柄木、鞘口とほぼ同じ幅であり、はみ出すことはない。鋸は鞘口内に隠れているが、X線撮影で確認したところでは、鐔に密着し、長さ2.55cm、長径2.9cm、短径1.3cmである。

鞘口金具は銅製で、長さ3.7cm、長径3.4cm、端径1.6cmを測る。鐔と接する部分は段差を設けて厚く作っており、口部分の幅は5mm、端部には面を取っていて、厚みは5mm前後と考えられる。佩表には環付足金物が付随しており、足金物と鞘との間は銅製の責金具で固定している。環の直径は2.2～2.3cm、厚みは5mm程度である。鞘尻には端部が丸みを帯びた銅製の鞘尻金具が見られる。長さは5.0cm、口部分には小型の銅製の責金具が重なることなく接している。

柄木は、茎の部分に残存している。佩裏は比較的残りがよく、表面には幅2mm前後の紐状のものが巻き付けてあるのが観察でき、いわゆる葛巻と考えられる。この紐状の部分と木質の間には纖維状の構造が観察できるため、布が巻いてあったものと考えられる。

柄頭は銅製のいわゆる圭頭で、頭部には直線状の割れが観察できることから表裏を接着して製作したものと思われる。長さ4.3cm、幅は頭部側がわずかに広く3.6cm、口の部分では3.5cmを測る。表裏には孔がうがたれ、直径7.5mm、長さ7mmほどの円筒形の金物が差し込まれ、表面で折り返されている。茎側の口には銅製で幅2mm程度の責金具が接している。

第57図は須恵器である。1～3は玄室内から出土した須恵器で、1はかえりのある杯身である。口径11.3cm、最大径13.7cm、器高4.1cmを測り、底部には回転ヘラケズリを施す。2は高台を持つ杯である。わずかにゆがみがあり、口径9.8～10.0cm、底径6.6cm、器高4.3cmと小型である。3は長頸壺である。口径8.3cm、頸部最小径4.7cm、胴部最大径16.4cm、器高19.1cmを測る。胴部はよく張っており、底部付近は回転ヘラケズリを施す。底部は平底で高台は持たない。

4は前庭部から出土した大甕で、復元口径35cmを測る。頸部には2段にわたって3条の沈線をめぐらし、その間に櫛描波状文を施すが、自然釉がかかって明瞭な観察はできない。前述したように、5、7、11号穴上方の尾根を削り出した平坦面から出土した須恵器大甕の一部と接合する。

横穴墓の時期 出土した須恵器のうち最も古い特徴を持つものは1の杯身であり、これを築造時期とすると大谷4期にあたる。

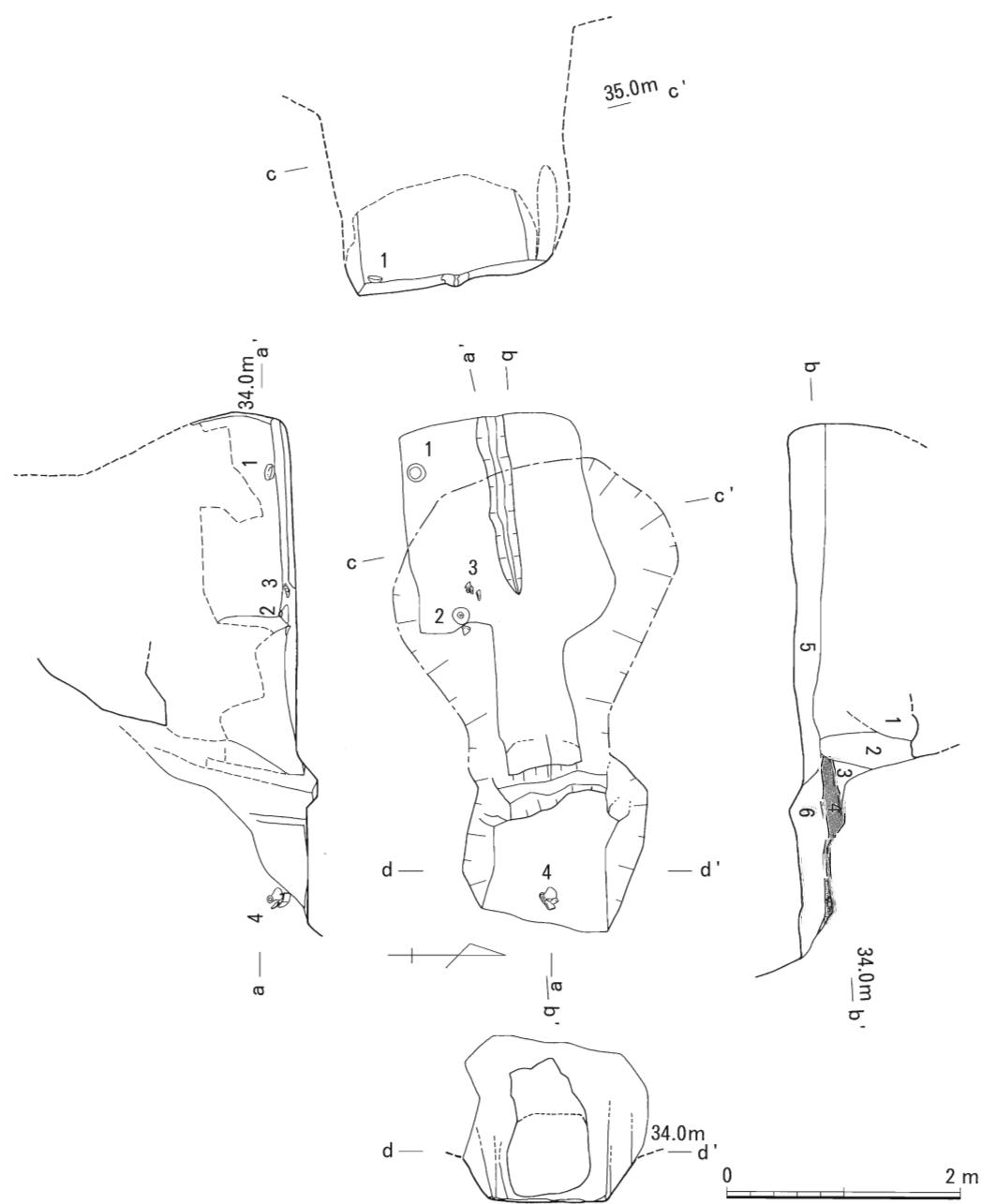
（丹羽野）

2号横穴墓

横穴墓群中央の支群の南側に位置し、3号穴とほぼ同様の標高に造られた横穴墓である。東向きに開口している。

前庭部 幅1.1m、長さは検出部分で1.2mと短いものである。奥壁部分の高さは1.4mを測る。土層堆積状況から、淡黒褐色土に須恵器を含む土がみられ追葬によるものと思われる。

羨道 長さ1.35m、幅が羨門側が0.65m、玄門側で0.6mを測る。天井部が崩落しているため高さは不明である。羨門は深さ0.15m、長さ0.8m、幅0.4mの溝状の落込みが見られ、閉塞を行うための構造と考えられる。羨道より前庭の床面が5cm低くなっている。



第59図 連行遺跡 2号横穴墓 実測図 (S=1/60)

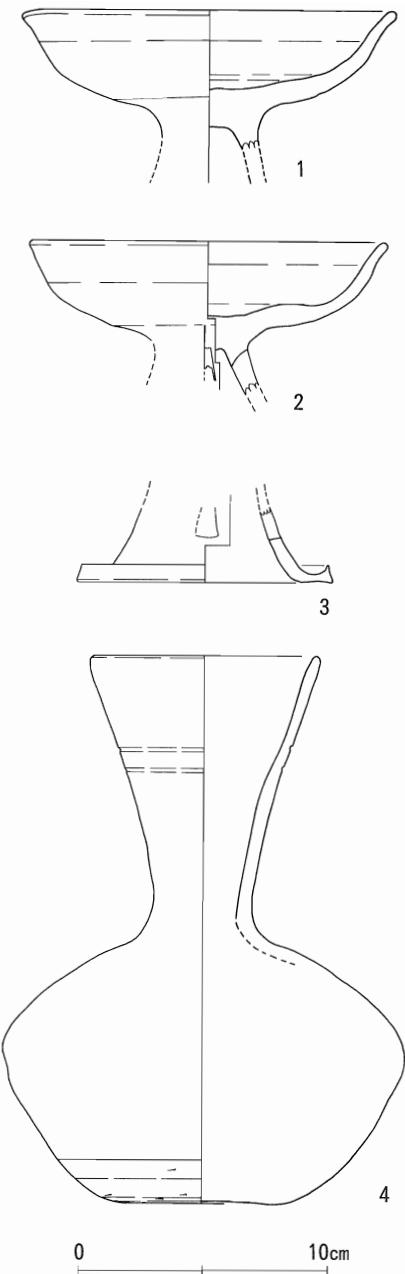
玄室 平面形は縦長の長方形を呈しており奥行きは、玄門付近で1.8m、左壁で1.7mを測る。右壁部分は崩れており、原形を留めていない。天井部は崩落しており、高さ、構造は不明である。壁の残った部分で見ると奥壁と左壁の界線は直線的でやや内側に傾斜して立ち上がり、天井部については残っていない。床面の4周に溝は無く、中央部の奥壁から玄門近くまで溝が掘られている。溝の幅0.18~0.2m、長さ1.5m、深さ4cmを測る。奥側の方が8cm高く、玄門に向かって下がっている。玄室の床面と羨道の床面の高さは同一である。

遺物出土状況 前庭の前側中央の床面から浮いた状態で壺(4)が出土している。玄室床面においては、奥側の左壁寄りからは高杯・杯部(1)が、玄門寄りからは高杯・杯部(2)、脚部(3)が出土している。

遺物(第60図) 1~4は須恵器で、1, 2は高杯の杯部である。杯部の口縁部にかけてわずかに外反するものである。口径15cmを測る。2は、口径が14cmで脚部に透かしが残っている。3は脚部の破片で透かしが残り、脚端部が屈曲し外面に平坦面を有している。4は壺で、体部がよく張り出し、口縁が直線的に立ち上がる。口縁部の外面に2条の沈線を巡らしており、底部外面に回転ヘラケズリを施している。いずれの須恵器の色調も明灰色のものである。

横穴墓の時期 出土した高杯より大谷編年5期にあたる。

(広江)



3号横穴墓（第61図）

3号横穴墓は客山1号墓のほぼ直下、2号横穴墓と並んでN97°Eとほぼ東向きに開口する横穴墓である。未完の12号横穴墓も含めて小形の3穴で一群を形成しているようである（第53図）。

前庭部・羨道部 検出時で奥行1.1m、幅が床面で0.75m前後と狭い前庭部である。羨道との境には深さ10cm弱の溝が設けられ、羨道よりは一段低い面となっている。

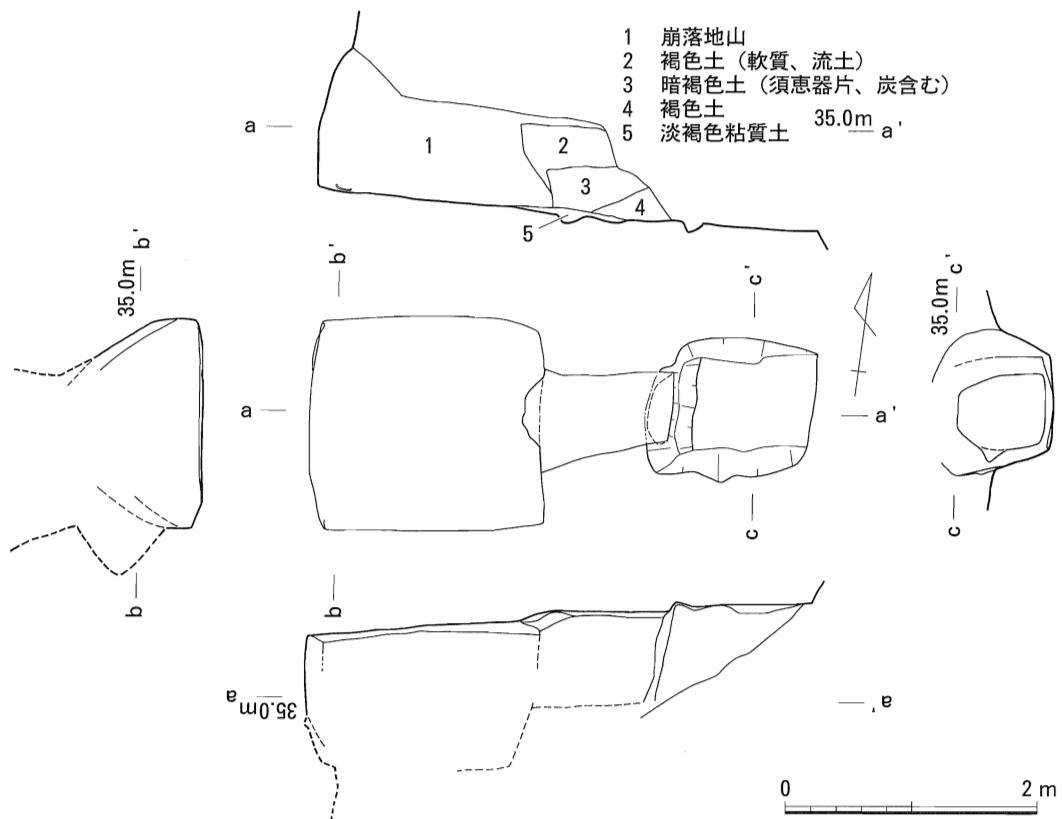
羨道は奥行1.1m、幅は羨門部で0.55m、玄門部で0.84mと奥に開く形となっている。玄門部は高さ0.7mで正面観が不正台形を呈すが、それ以奥は崩落のため高さ、形態等は不明である。

玄室 玄室は奥行1.83m、幅が1.6~1.7mとやや縦長の長方形を呈す。床面は羨道から一段高くなってしまっており、奥壁、前壁は直角に近い角度で立ち上がっていくが、両側壁は直角に立ち上るのはわずかで、すぐに傾斜を持ち始めており、総体としてはテント形に近い形態となっている。高さは崩落のため不明である。

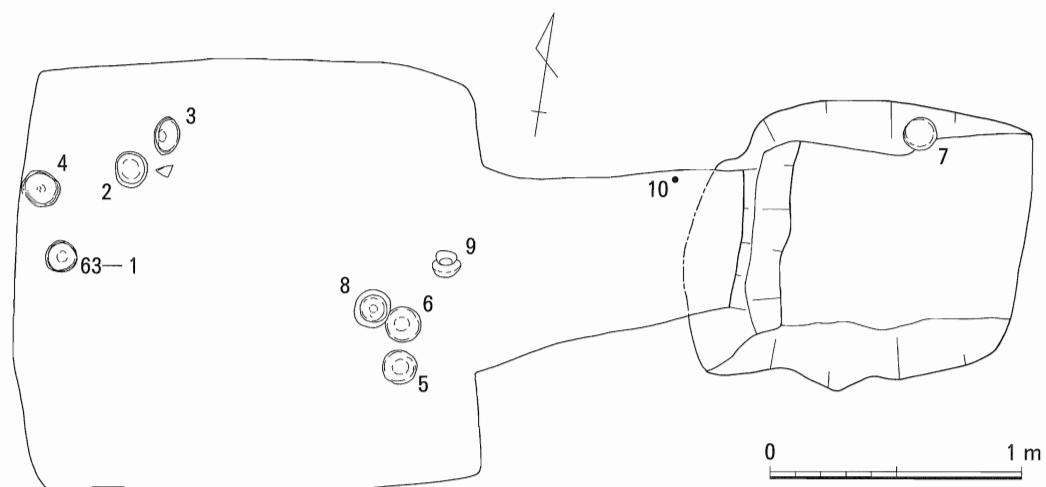
第60図 連行遺跡 2号横穴墓
出土遺物実測図
(S=1/3)

遺物出土状況（第62図） 前庭部右側壁寄りで床から浮いた状態で須恵器蓋が出土している。玄門中央付近からは小形の壺が1点やや床から浮いて出土し、その左壁寄りに伏せた杯身2点と高杯が置かれていた。また奥壁沿いには杯身3点と蓋1点が出土している。

遺物（第63図） 1は玄室内出土の蓋で天井には回転ヘラケズリが見られ、口縁部と天井の境には浅いながら凹線を施して境としている。天井には「×」のヘラ記号が認められる。2～4は歪んだ杯身である。いずれも分厚なつくりで特に口縁の立ちあがり部分が厚く感じられる。2は底部に回転ヘラケズリを施すが、3、4はヘラ切りの後ナデている程度である。5、6は2～4よりは薄い



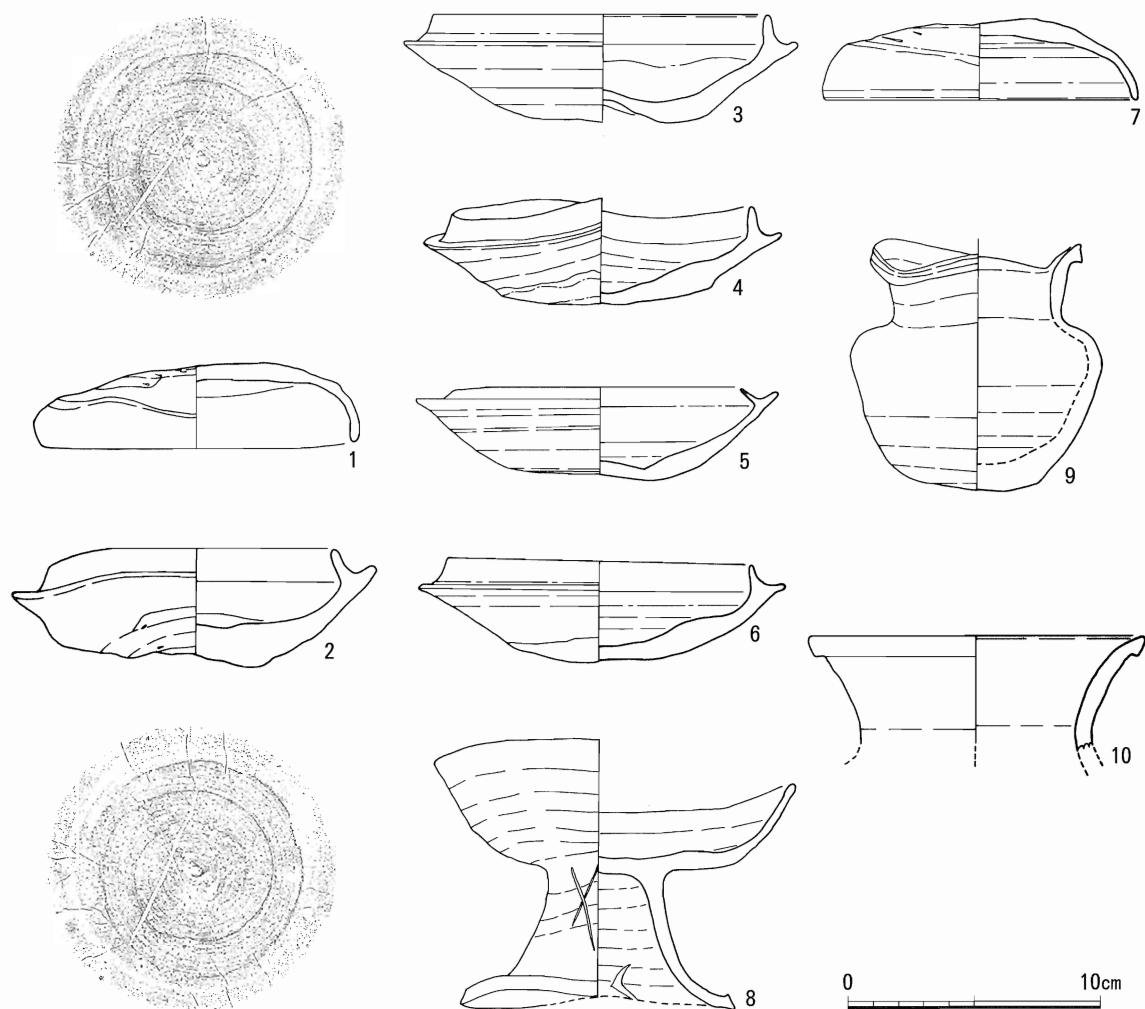
第61図 連行遺跡 3号横穴墓 実測図 ($S=1/60$)



第62図 連行遺跡 3号横穴墓 遺物出土状況 ($S=1/30$)

つくりの杯身で底部にヘラケズリは見られない。7は前庭出土の蓋で口縁と天井の境は不明瞭でヘラケズリもかすかになでつける程度である。8は高杯でひずみが見られる。脚部にスカシはなく、「×」のヘラ記号が認められる。9も歪んだ須恵器壺である。10は前庭出土の須恵器片で、壺、瓶類の口縁である。

横穴墓の時期 横穴墓の時期は最も古い特徴を持つ須恵器から考えて出雲4期と考えられるが、同様の特徴を持ちながら底部ヘラケズリの見られない個体も共存しており、やや下る時期になる可能性もある。



第63図 連行遺跡 3号横穴墓 出土遺物実測図 (S=1/3)

4号横穴墓（第64図）

東斜面横穴墓群のほぼ中央部、標高33m付近で検出された横穴墓である。表土掘削中、天井が崩落して発見されたもので、その際重機が一部掘削を行い、玄室の一部、羨道、前庭部の大半を破壊してしまったものである。

前庭部・羨道部 重機による掘削で大半失っているが、左側壁が辛うじて残存していた。左側壁が示す長軸線は後述する玄室の軸線とややズレて、N92°Eとほぼ東側を向いている。検出時で長さ1.8mを測る。羨道はほぼ完全に失われているが、羨門部前の割り込みと見られる平面的な段差が前庭左側壁に続いて認められた。

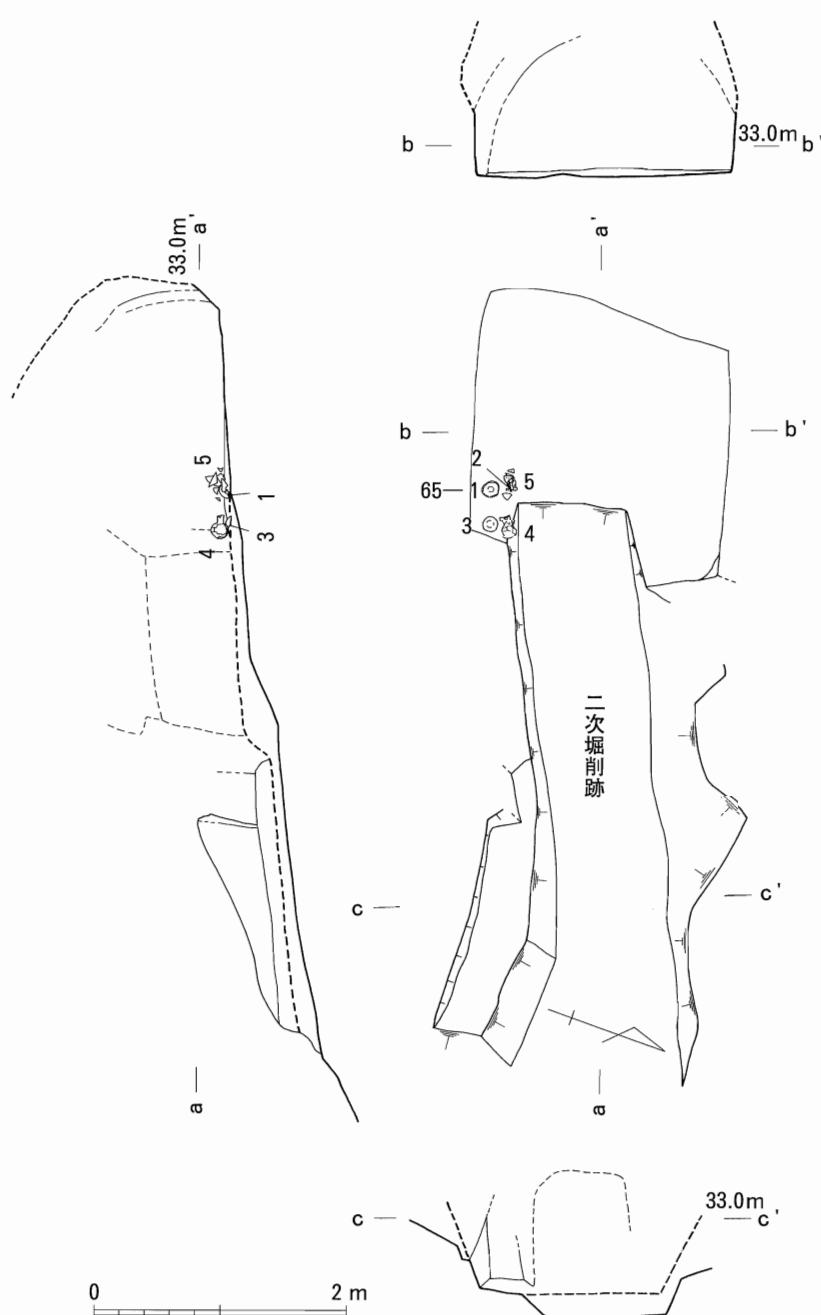
玄室 玄室は、玄門部が失われている以外、平面的には残されており、形態的特徴は把握できた。

側壁と奥壁、前壁が直角

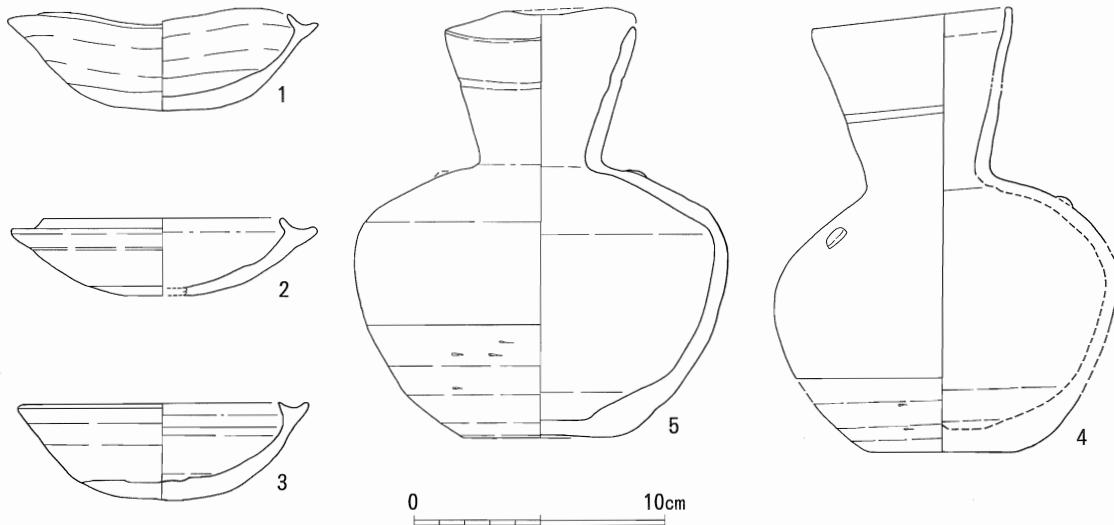
に交わらず、全体として
いびつな平行四辺形のよ
うな形態を呈す。規模は
奥行きが右側壁部分で1.

8m、左側壁部分で1.95
m、幅は奥壁部分で2.0
m、前壁部分で2.05mを
測る。天井は完全に崩落
しているが、四壁の界線
の立ちあがり方から見て、
壁と天井の界線はない形
態と考えられる。天井の
高さは、遺存している部
分で1.15mで、本来的に
もこれよりはそう高くは
ならないものと想定され
る。玄室の壁方向は、前
庭部壁面の方向と若干異
なり、N104°Eと東から
やや北方向にずれている。

遺物出土状況 玄室の前
壁と右側壁コーナー付近
の床面から須恵器杯身3
点、壺2点が出土した。
杯身は2点が側壁際に並
んで出土、それに対応す
るように壺2点が杯身に
近接して出土し、杯身1



第64図 連行遺跡 4号横穴墓 実測図 (S=1/60)



第65図 連行遺跡 4号横穴墓 出土遺物実測図 (S=1/3)

点は壺5と重なるように出土した。

遺物（第65図） 1～3は須恵器杯身である。いずれも口径が小さく、口縁の立ちあがりが低くて底部はヘラ切りの後ナデを施している。1は全体に歪んでおり、口径9.4～10.9cm、最大径11.9～13.0cm、器高3.6cm程度を測る。2は口径9.6cm、最大径12.2cm、器高3.1cmを測る。3は口径9.2cm、最大径11.5cm、器高3.9cmを測り、口縁の立ちあがりが非常に低いため、伏せておくと立ちあがりを確認できない個体である。

4、5は須恵器壺である。ともに肩の上部に4は2か所、5は1か所ボタン状の突起が付着しており、平瓶が退化した形態とすべきかもしれない。特に4は若干ながら非対称な形態であり、よりその傾向が強い。4は口径7.7cm、頸部最小径4.9cm、胴部径13.7cm、器高17.9cmで、底部は平底で下半には回転ヘラケズリを施している。口頸部の中央付近には、浅い凹線が見られる。5は形態的にはほぼ4と同様な特徴を持つが、ほぼ対称形でより本来的な壺の形態に近い。口径7.4cm、頸部最小径4.8cm、胴部径14.8cm、器高17.3cmを測る。

横穴墓の時期 杯身3点の時期は、大谷編年出雲5期と考えられる。

(丹羽野)

5号横穴墓 北側の支群中で7号横穴墓と11号横穴墓の中央に隣接して造られている。ほぼ東向きに開口する。

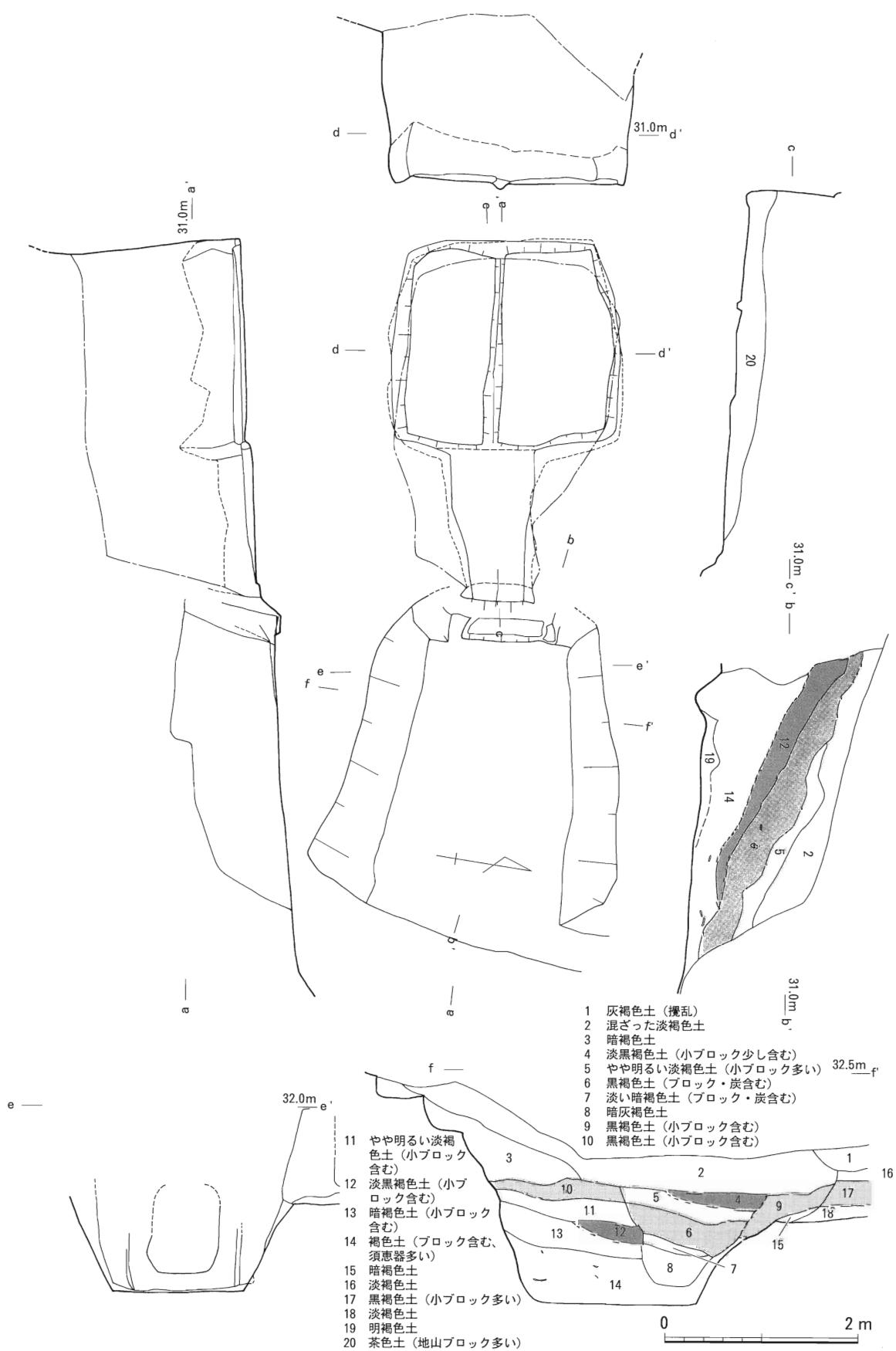
前庭部 長さ3.2m、幅1.5~2.0mと前側が広がる台形状の平面形を呈している。入り口に向け傾斜しており、高低差10cmを測る。土層堆積状況は、上下2層の黒褐色の土があり、2回にわたり掘り返しが行われた可能性がある。横断面の右側には、上端1.3m、下端0.35mの掘り込みが見られ、玄室まで続くものと思われ、追葬等によるものと考えられる。

羨道 長さ1.7m、幅が羨門側が0.5m、玄門側が0.86mで天井が崩落しているため高さは不明である。羨門部には幅25cm、深さ5cmの溝が掘り込まれており、その溝の右側に8×10cmの穴があり、左側には平坦面がある。閉塞のための構造と思われる。

玄室 奥行きが玄門付近で2.2m、右壁で2.0m、左壁で1.9m、幅は奥壁で1.9m、玄門側で2.3mの



第66図 連行遺跡5~7・11号横穴墓 蔊片出土状況 (S=1/60)



第67図 連行遺跡 5号横穴墓 実測図 (S=1/60)

ほぼ正方形に近い形である。

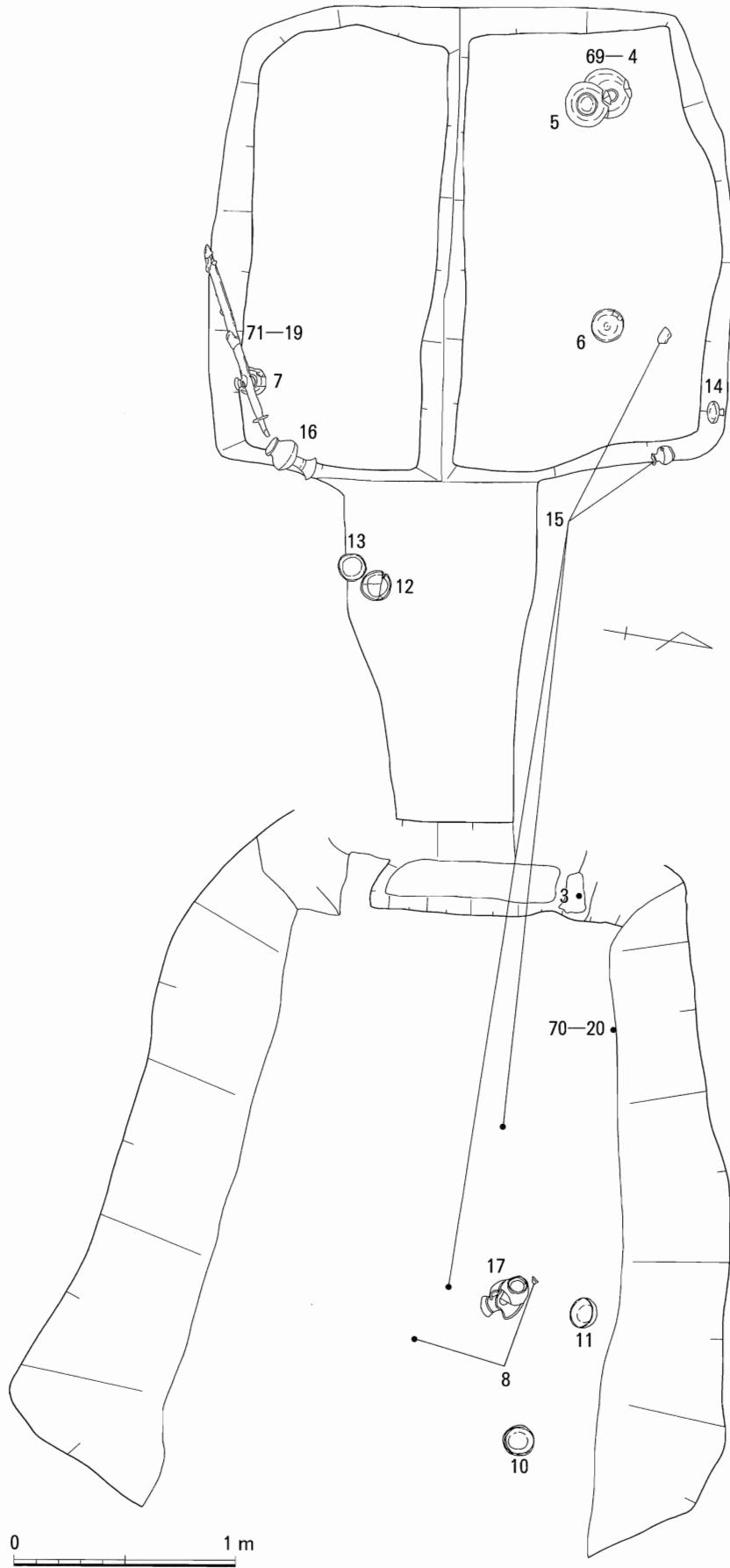
天井は崩落しており、高さや天井の構造は不明である。四壁の界線の立ち上がりはやや内湾するものの直線的である。

4周と中央を縦断する様に8~20cmの溝がめぐる。羨道の床面より玄室の床面が6cm高くなっている。

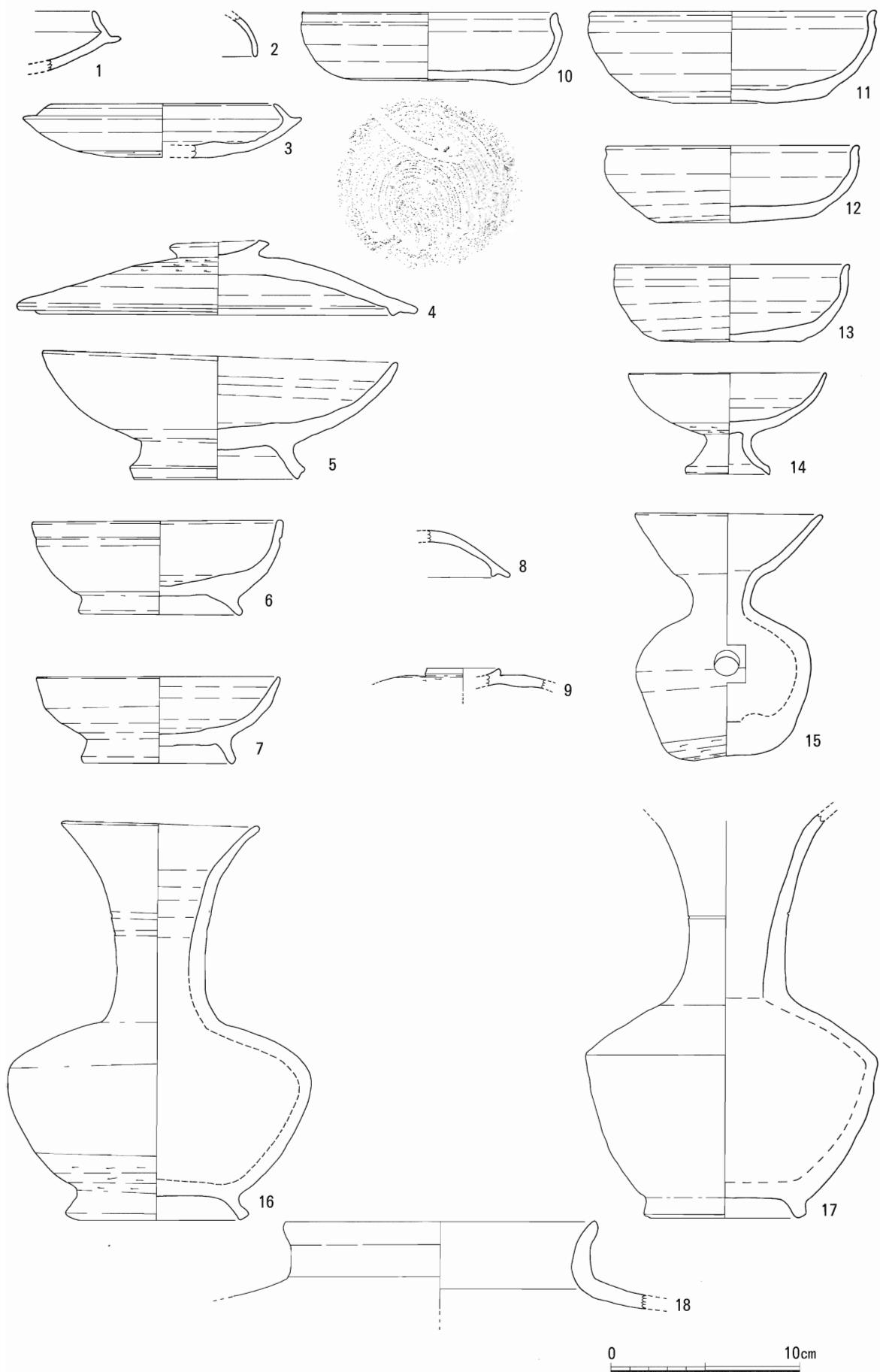
遺物出土状況（第66図、68図） 前庭部の床面から浮いた状態で須恵器の甕3個体が破片の状態で出土している。

このうち2は11号横穴墓の羨道部出土須恵器と3は6号横穴墓出土のものと接合関係にある。床面から浮いた状態で出土していることから、本来11号横穴墓の前庭部にあったものを削平している可能性もある。

前庭部床面からは、須恵器・壺が出土し、玄室内のものと同様の形態である。前庭出土の杯2個体と羨道出土の2個体も同様の時期のものであるが、横穴が廃絶する時期のものと考えられる。玄室の床面、左壁よりからは



第68図 連行遺跡5号横穴墓 遺物出土状況 (S=1/30)



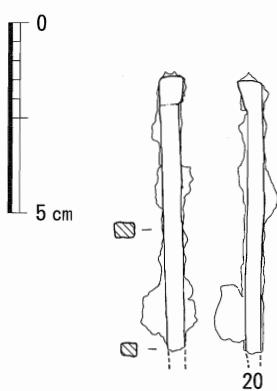
第69図 連行遺跡 5号横穴墓 出土遺物実測図 (S=1/3)

杯の上に重なるように大刀が切先を奥壁に向けて出土している。右側の奥から杯・蓋・身がセットで出土している。

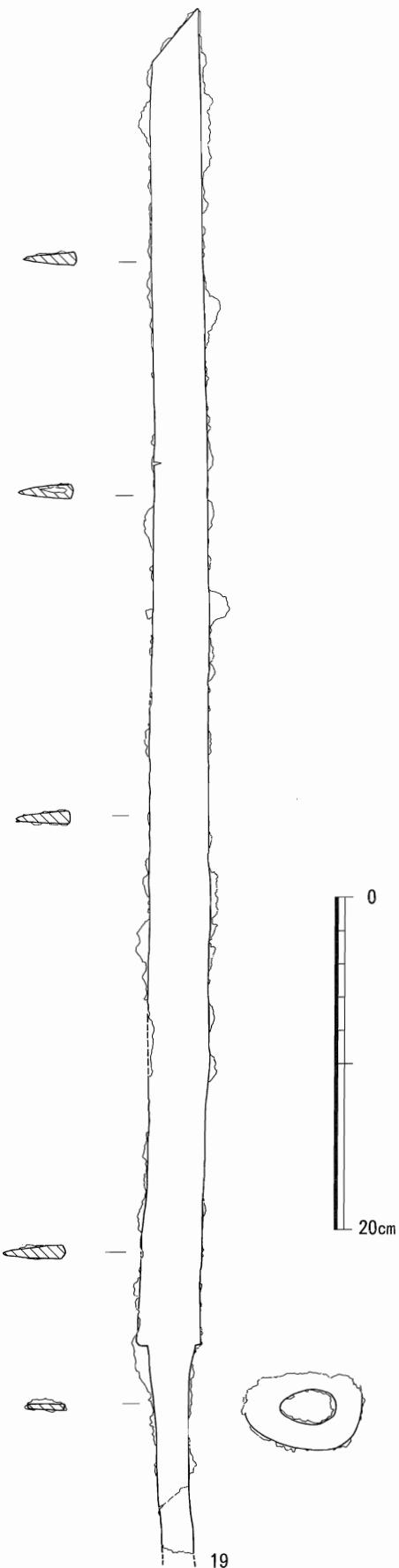
遺物（第69図、70図、71図） 第69図 1、3は須恵器杯身で口縁の立ち上がりが低いものである。4は輪状つまみが付き、口縁内側の返りが低いものである。5は高い高台を有している。4、5共に大型の杯である。6、7の杯は、高台を有している。8、9は杯。蓋で輪状つまみを有すもので、6、7とセットになるものである。10から13は底部外面に回転糸切り痕を残す杯である。14は、小形の脚を持つ杯である。15は腹で外面に飾りを施さず、底部外面にヘラケズリを施す。16、17は壺でともに高台を有し、口縁に沈線がめぐる。19は大刀で茎の先端を欠き残存長93cmを測り、両闘である。鍔は鉄製で平面が卵型で長径7センチである。20は鉄鎌の茎で断面が長方形を呈している。

横穴墓の時期 出土した須恵器の内、1から3は、大谷4期、4から9は大谷6期、10から13は奈良時代に入るるものであり3つの時期に分かれる。1～3の土器は11号横穴墓からの流れ込みの可能性もあり、大谷6期が横穴の初葬段階で後の奈良時代に何らかの祭祀を横穴で行った可能性が考えられる。

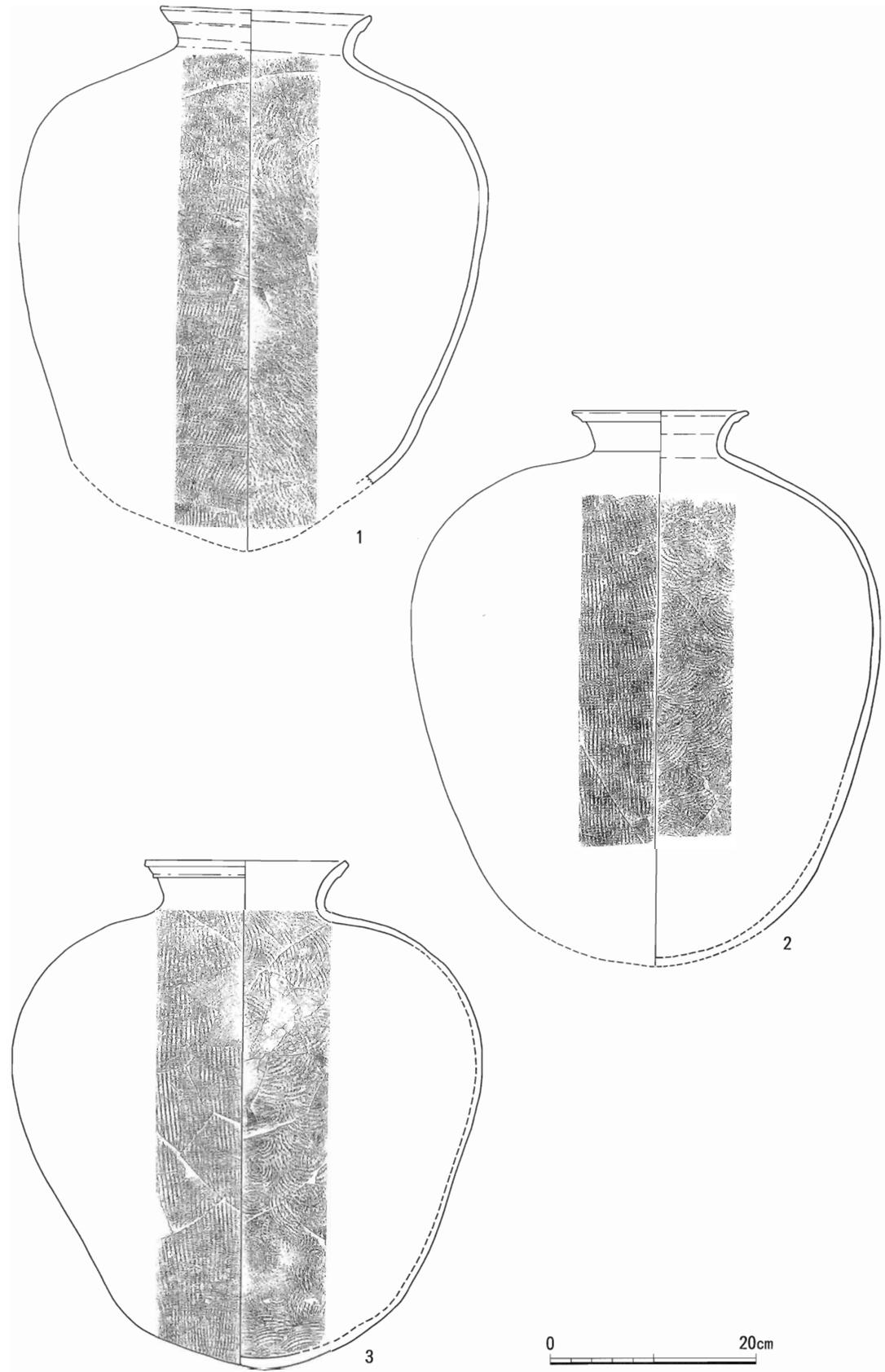
(広江)



第70図 連行遺跡 5号横穴墓
出土遺物実績図(2) (S=1/2)



第71図 連行遺跡 5号横穴墓
出土遺物実測図(3) (S=1/4)



第72図 連行遺跡 5～7・11号横穴墓 出土甕実測図 (S=1/6)

6号横穴墓（第73図）

北側7穴の支群のほぼ中央部、5号横穴墓と隣り合って検出された横穴墓である。標高は約31m付近にN96°Eとほぼ東向きに開口する。

前庭部 検出時の長さ2.1m、床面幅は最小部分で0.6m、最大となる前端部付近で約1mとやや狭長な感のある前庭部である。羨道部との境（羨門）には高低差12~3cmの段差が認められ、さらにその外方15cmの部分には上端幅20cm前後、下端幅6cm前後の溝がもうけられている。この溝は前庭部側壁にも連続して設けられており、板状の閉塞施設をはめ込むのに適した構造となっている。本来的にはこの溝が前庭部と羨道の境となるものかもしれない。

前庭部の土層の堆積状況を見ると、横断土層から大きな掘り返しが少なくとも一度あったことがうかがえる。土層番号でいう8層下面がその掘り返し面の底面で、後述するようにその面から須恵器が出土していること、縦断土層で見るとその面（8層底面）が床面とほぼ平行に羨門につながっていることなどを考慮すれば、追葬面と考えて問題ないものと考えられる。なお、玄室の土層との直接的な関係は、羨道が崩落し非常に狭い中での作業上連続的な土層断面が設定できなかったため、不明であるが、玄門付近まで堆積している18層に連続する可能性もある。

堆積土層の上半部には2枚の黒色味の強い土層が見られる（3層黒褐色土、5層淡黒褐色土）。この土層は横断面で見るとレンズ状に堆積し、縦断面で見ると地形に沿った斜めの堆積をしており、自然に生じた旧地表面の可能性が高いものと思われる。

羨道 前述したように、前庭から一段床面を高くして羨道が設けられている。平面的には玄室に向かって逆「ハ」字状に開く形態で、奥行1.2m、幅は羨門側で0.45m、玄門側で0.99mを測る。天井は崩落しており、高さや形態は不明である。

玄室 奥行が2.3m、幅が玄門側で1.53m、奥壁側で1.47m、最大で1.66mの縦長長方形を呈している。右側壁に沿っては、幅10cm前後の溝が設けられているが、全周をめぐってはいない。天井の高さや形態は、崩落しているため不明である。

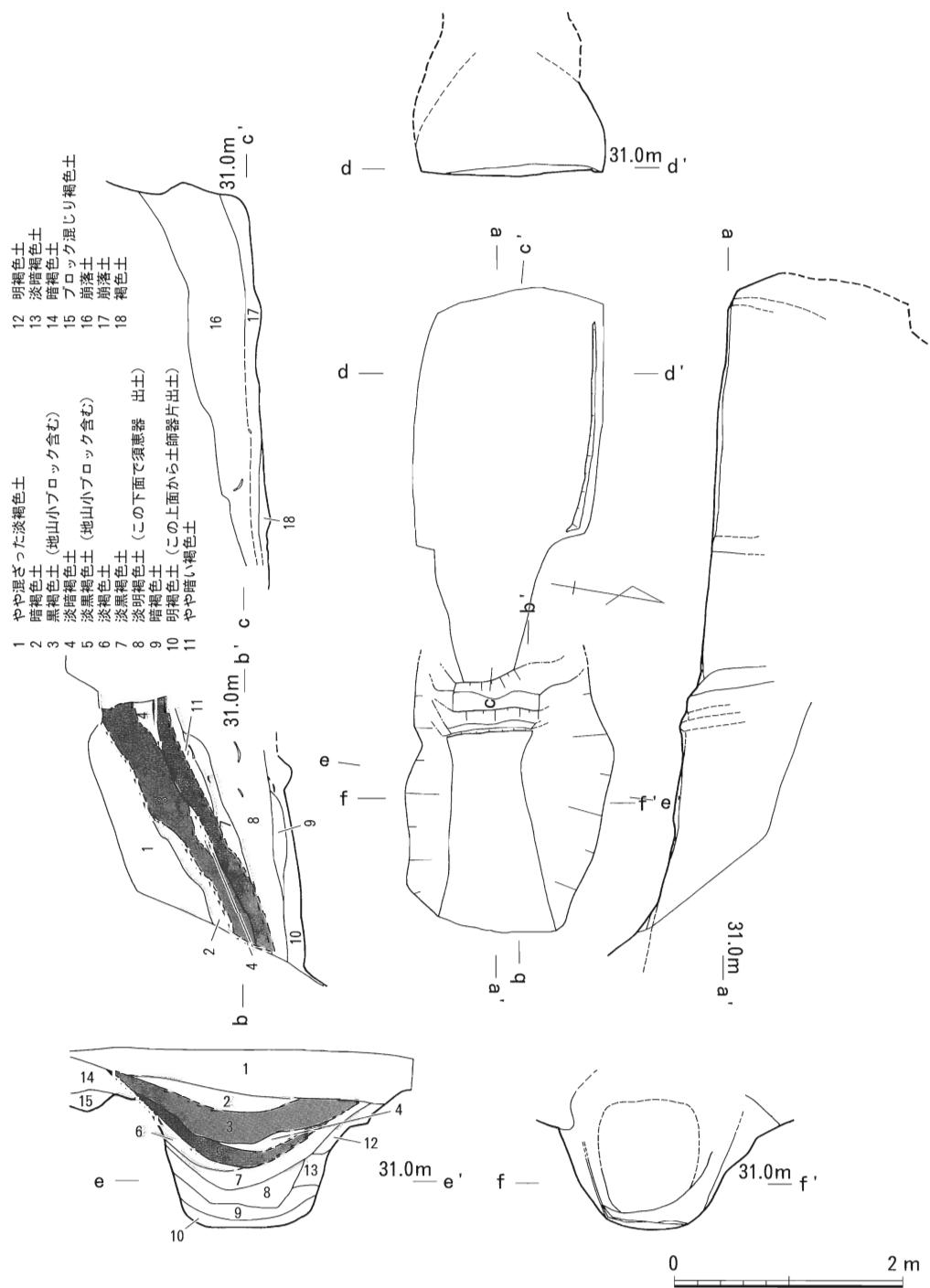
遺物出土状況（第74図） 前庭部からは8層直下のほぼ前庭中央部から須恵器の杯身が1点、完形で出土した。また2層から8層にかけて須恵器大甕片が多量に出土（第72図3）しており、これらの破片は8層直下を下限とすることから、追葬面に杯身を据えた後、埋めながら須恵器片をまいた状態およびその再堆積が想定される。また前庭の前方（東側）を中心に、10層内から土師器片甕片が出土している（第75図16）。

羨道から玄門付近にかけては、多くの須恵器が出土した。羨道左壁中央付近からは、床から浮いて状態で杯身が1点上向きに出土した（4）。そのやや奥壁寄りからはやはりやや浮いて、須恵器高杯が倒れた状態で出土している（13）。口縁、脚端付近が破損しているが、破片は玄門右壁寄りの須恵器集中個所周辺から散らばって出土している。玄門のやや羨道寄り、ほぼ中央部には高杯が正立して置かれていた（12）。やはりやや浮いた状態（3cm程度）で、脚部を破損しているが破片は周囲から出土している。

玄門の右壁付近には、直口壺1点、平瓶1点、蓋杯類4点が床面に集中して置かれていた。玄門からやや玄室に入った部分と、玄室左袖からは破損した蓋と杯（7、8）が出土している。玄室奥側にはいずれも伏せた状態で蓋と杯身が出土している。中央寄りの2点（1、11）はほぼ床面上だが、奥壁沿いの1点（5）は床から浮いた状態で出土している。

玄室のほぼ中心部付近からは、縦に並んで耳環が2点出土している。また耳環からやや右に寄った個所で鉄製刀子が2点出土している。

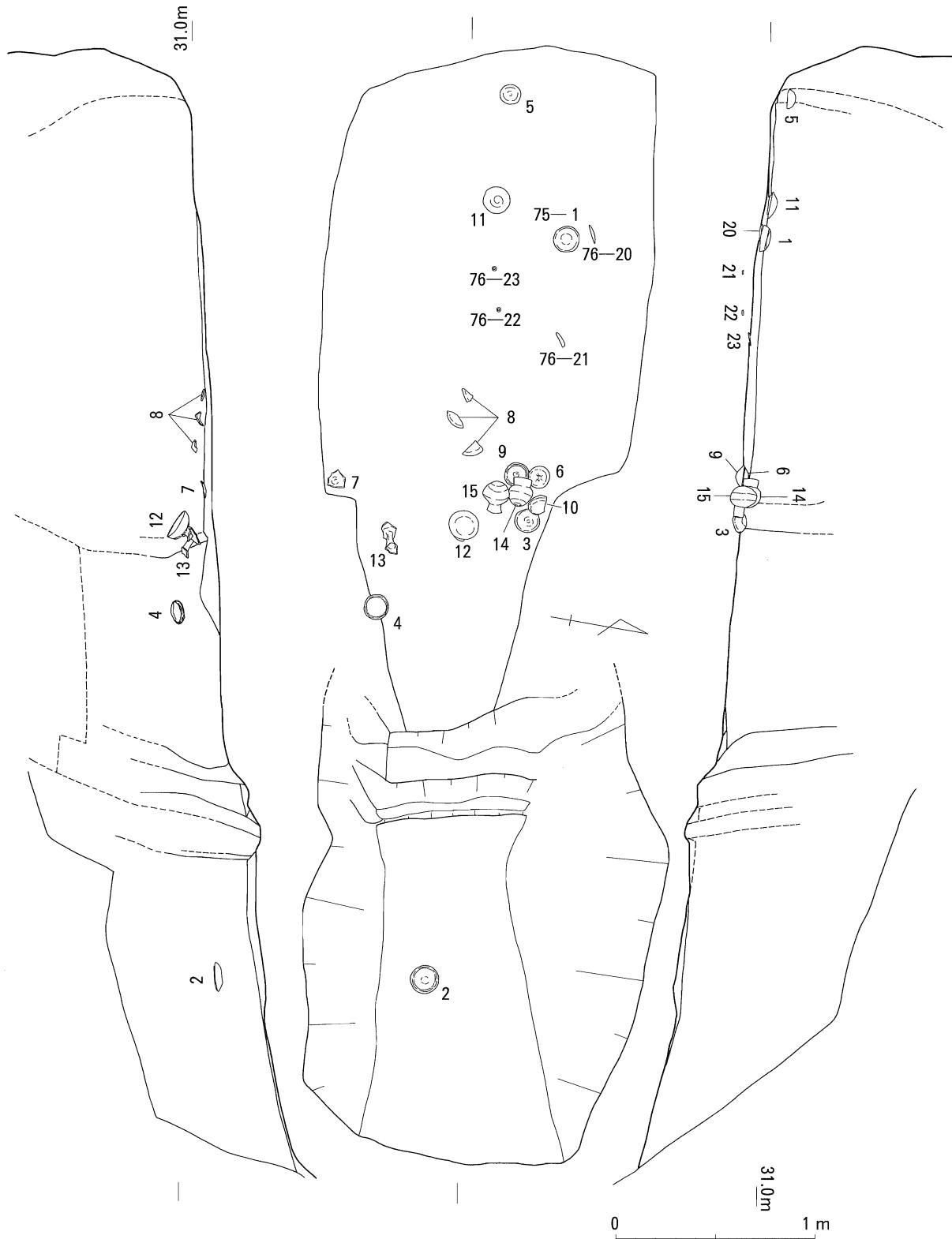
遺物（第75図、76図） 第75図は須恵器、土師器で、2と16は前庭部出土、他は羨道部、玄室内出土である。1は口径13.1cm、器高4.2cmを測る蓋である。天井部と口縁部の境には浅いながらも凹線で段を表現し、天井部には形式的に浅くヘラケズリを施している。2は口径11.4cm、最大径14.1cmの杯身で、口縁の立ち上がりは低めで底部にヘラケズリは見られない。3は口縁部と天井の界線のない蓋で、口径12.2cm、天井に4本ほど平行に引かれたヘラ記号が見られる。4は低い立ち上がりの杯身で、底部はヘラ切り後粘土を削り取ったような痕跡が残っている。口径11.0cm、最大径13.



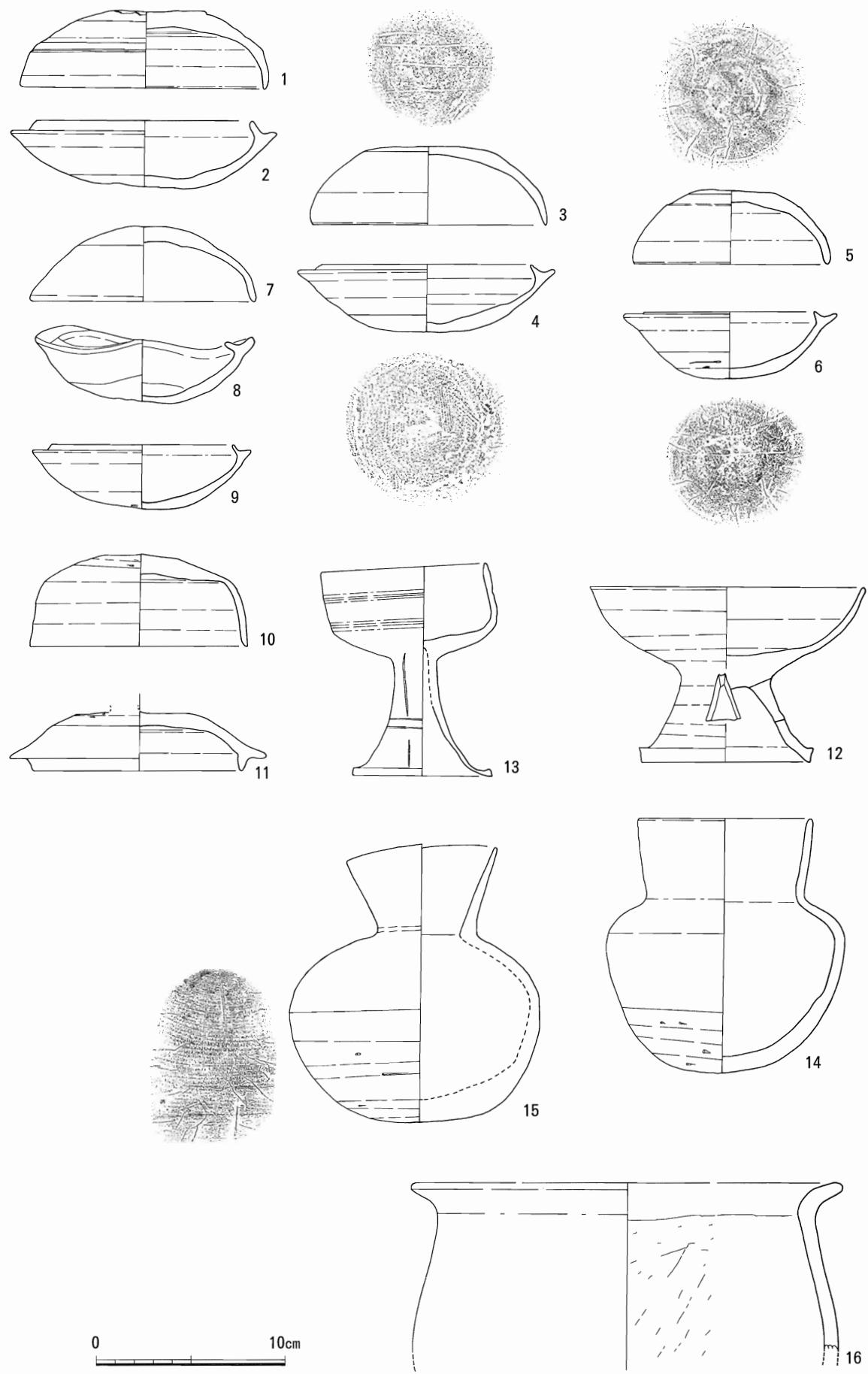
第73図 連行遺跡 6号横穴墓 実測図 (S=1/60)

5cmを測る。5は口径10.0cmと小形の蓋で、天井外面に「×」状のヘラ記号を施している。6は口径9.0cmのやはり小形の杯身で、底部外面に「＊」状のヘラ記号が見られる。7は口径11.8cmの蓋。8は歪んだ杯身で口径7.1～12.0cmを測る。9は口径9.6cmの杯身で、かえりが非常に薄いのが特徴である。

10は短頸壺等の蓋と考えられる。口径11.4cm、器高5.0cmで天井には回転ヘラケズリを施す。



第74図 連行遺跡 6号横穴墓 遺物出土状況 (S=1/30)



第75図 連行遺跡 6号横穴墓 出土遺物実測図 (1) (S=1/3)

11はかえりのつく蓋であるが、乳頭状のつまみが剥がれた痕跡が中心からずれて残っている。口径11.0cm、最大径13.6cmを測り、天井には回転ヘラケズリ痕が残る。12は無蓋の高杯である。脚部には2方向に三角形のスカシが施されている。口径14.6cm、脚端径9.3cm、器高9.3cm、脚部高5cm前後を測る。13は長脚の無蓋高杯である。脚部は細長く、2段にわたって2方向にスカシ痕跡の切り込みが見られる。

14は小形の直口壺である。口径9.2cm、器高13.5cm、底部下半には回転ヘラケズリを施している。15は平瓶である。ややゆがんでいて、口径5.1~7.8cm、器高14.8cmを測る。ボタン状の突起は見られず、底部下半には回転ヘラケズリを施す。肩付近には2段にわたってヘラ記号を施している。16は復元口径23cm前後の土師器甕片である。

第76図は鉄器と耳環である。18は刀子で茎には木質が残る。刃部は内反りにやや湾曲し、背側に闊が見られる。19も刀子だが、茎も断面三角形を呈すようである。ともに両端を欠損している。20, 21は青銅製耳環である。ともに径が1.9×1.8cm前後である。

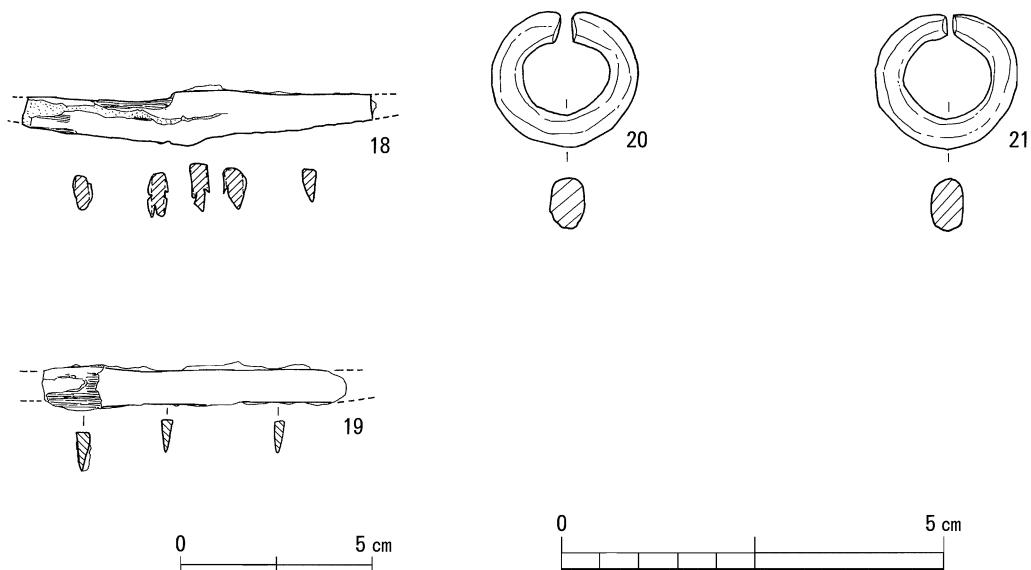
横穴墓の時期 1が最も古い特徴を持ち、出雲4期にあたるが、ヘラケズリも浅くななるような状態で当該期だととしてもより新しい時期になる可能性が高い。

7号横穴墓（第77図）

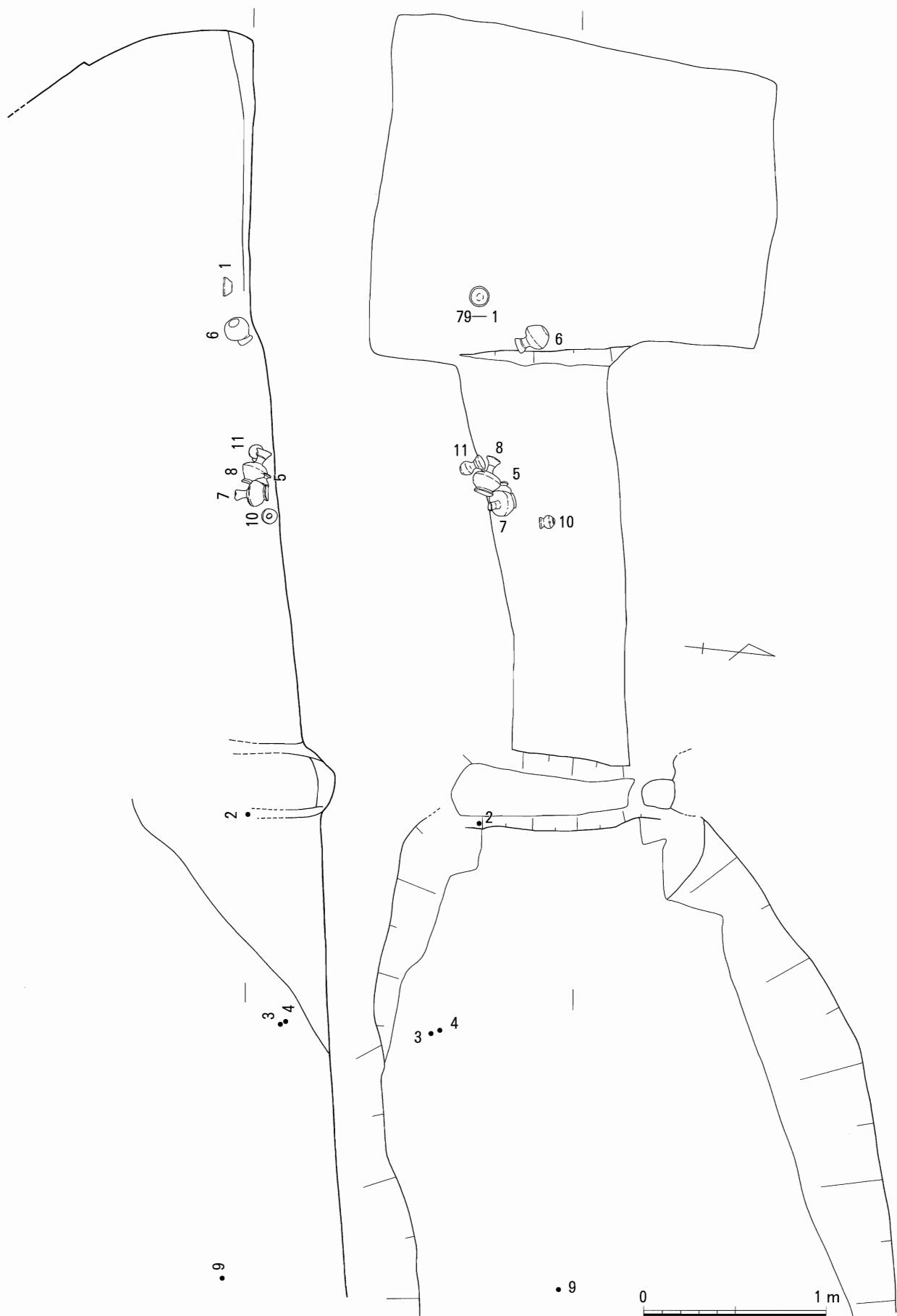
横穴墓群の最も北側、標高31.5m付近で検出された横穴墓で、頂上尾根との高低差は最も少ない部分にあたり、3.5mほどしかない。N99°Eとほぼ東向きに開口する。

前庭部 羨門側から前方に向かって「ハ」字状に開く平面形であるが、南側壁の多くは隣接する5号穴の前庭部により切られている。規模は検出時で長さ3.6m、幅は羨門側（西側）で1.4m、前方斜面側（東側）の検出状況で2.7mを測る。前庭と羨門との間にはわずかながら幅が1mほどに狭まった部分が見られる。

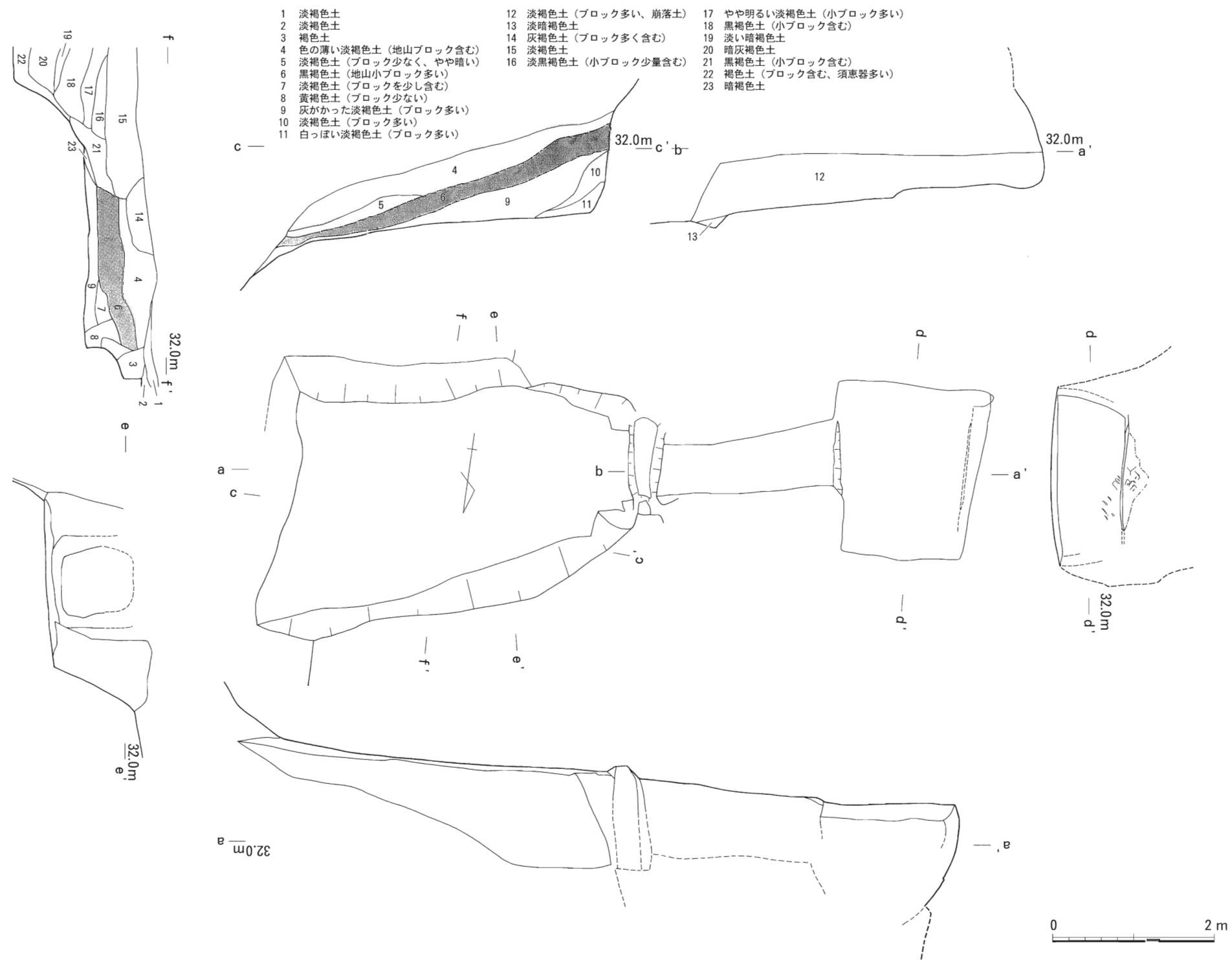
羨道部 羨道は奥行2.05m、幅は玄門付近で0.75m、羨門付近で0.6mと非常に狭長である。隣接する5号穴の玄室との重なりを避けるために、細長くなったものの可能性がある。天井は崩落してい



第76図 連行遺跡 6号横穴墓 出土遺物実測図 (2) (18、19はS=1/2 20、21はS=1/1)



第77図 連行遺跡 7号横穴墓 遺物出土状況 (S=1/30)

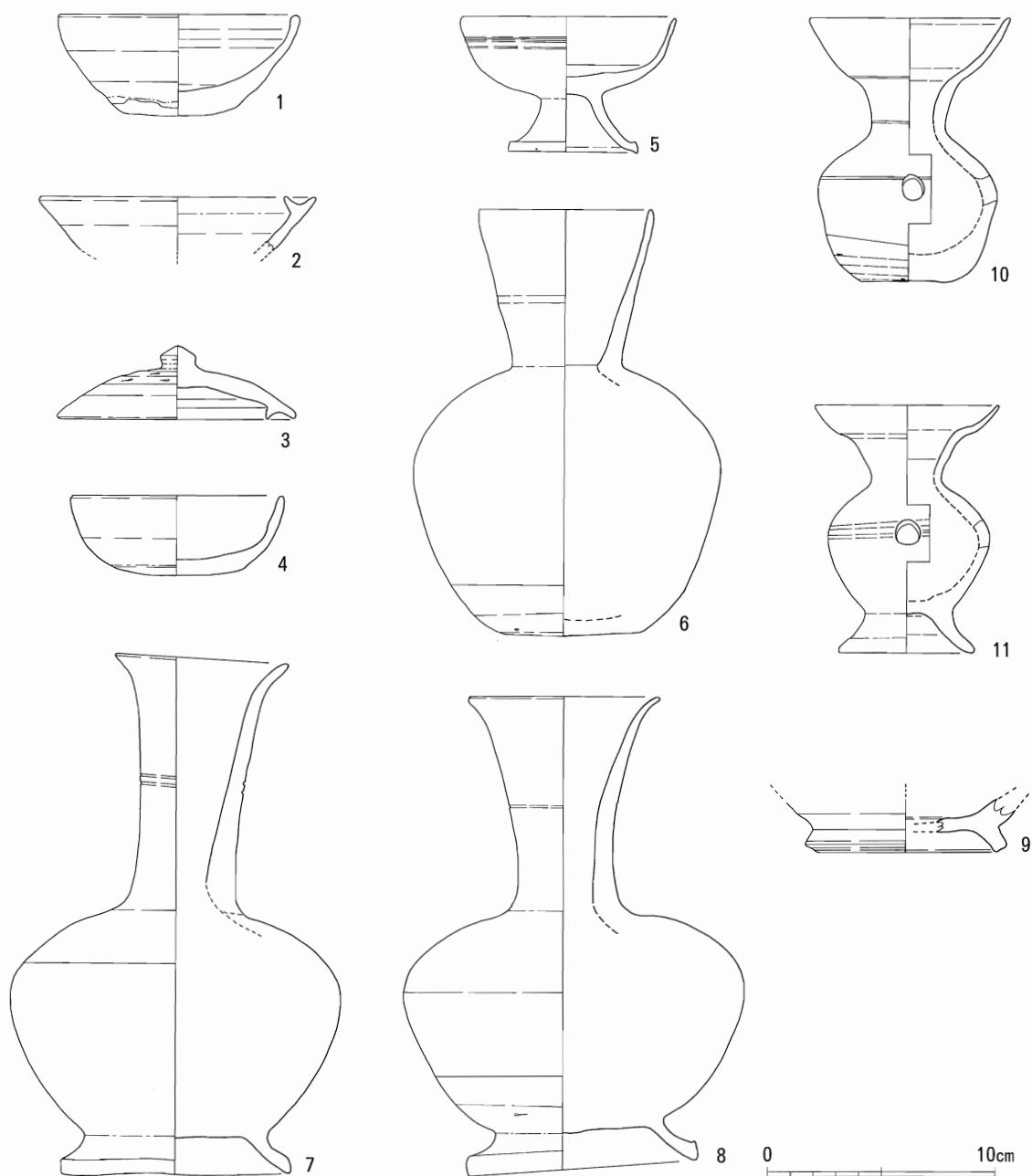


第78図 連行遺跡 7号横穴墓 実測図 (S=1/60)

る。羨門付近の床には長さ96cm、幅が底面で15~30cmの溝が設けられており、左壁では側壁に割り込みとして続いている。何らかの閉塞構造を受けていたものと思われる。また溝の北側（右壁際）には17×20cmほどの不正方形のくぼみが設けられており、溝と同様右側壁の割り込みに連続している。あるいは門柱状のものを受けている可能性もある。

玄室 奥行が左壁で1.86m、右壁で1.47m、幅は奥壁側、前壁側とも2.1mと、やや横長の台形状を呈し、羨道は中央ではなくやや左寄りに接続している。天井は崩落しているが、奥壁は比較的残りがよく、狭い面を設けることで天井と壁の界線を表現しているのがわかる。

遺物出土状況 前庭部前方の覆土上方からは須恵器壺類の破片（9）が、羨門寄りの左壁に近い部分からは20cm前後浮いた状態で蓋杯各1点が出土している。ただ9は流入したもの可能性が高い。また前庭の土層を見ると、前庭の左壁付近はかなり広い範囲で5号横穴墓の前庭掘削によって切り崩されており、3、4は5号横穴墓に伴う遺物の可能性もある。



第79図 連行遺跡 7号横穴墓 出土遺物実測図 (S=1/3)

羨道の中央やや奥寄りからは、長頸壺2点、醜2点、小形高杯1点がまとまって出土した。このうち高杯(5)は長頸壺の底付近に密着して支えるように出土している。玄門中央付近には直口壺(6)が、その左奥からは杯身(1、蓋?)が出土した。いずれも若干床から浮いている。

遺物 1は口径10.6cmの小形の杯(もしくは蓋)である。2は復元口径9.5cm前後の杯身で、かえりは短い。3はかえりを持ち、宝珠つまみのある蓋である。口径8.0cm、最大径10.4cmと小形で、天井にはヘラケズリが見られる。4は3とセットとなる杯身であろうか。口径10.4cmと小形である。5は小形の高杯である。脚は短小でスカシは見られない。口径9.3cm、脚端径5.6cm、器高6.9cm、脚部高2.5cm程度を測る。5は、口径7.5~7.7cm、最大径13.4cm、器高18.7cmの長頸壺である。高台はなく、底部には回転ヘラケズリを施している。7, 8はともに高台を持ち、口縁端部が外反する長頸壺である。ともにほぼ同様の特徴を持つが、8がやや器高が低く、胴が張り気味である。9は前庭流入土出土の

壺類の底部と考
えられる破片
で、底部にはか
すかに糸切痕が
観察できる。

10, 11は小形の
醜である。よく
似た特徴をもつ
が10がやや小形
で高台を持つ。

横穴墓の時期

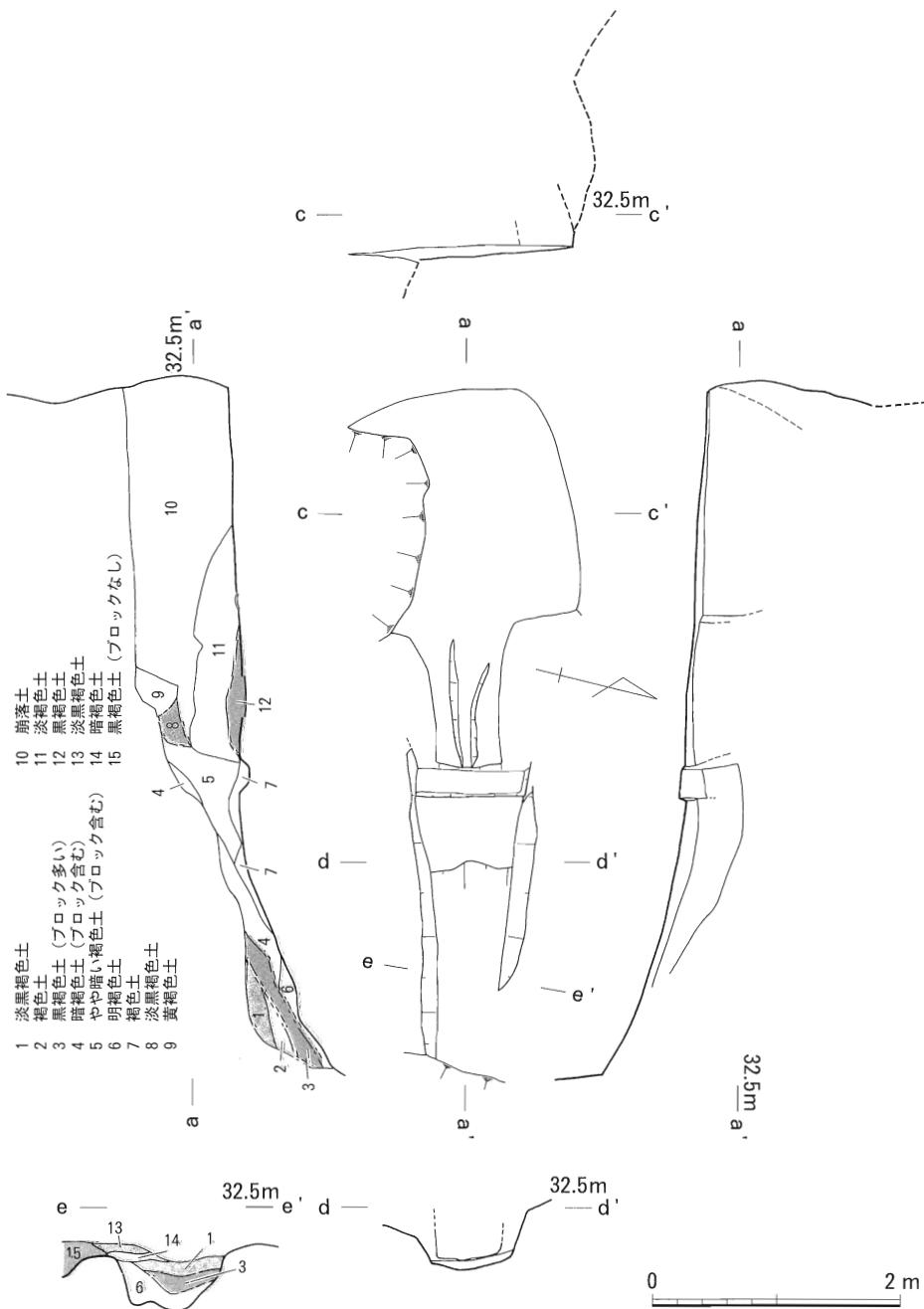
須恵器杯身1か
ら判断すると出
雲6期と考えら
れる。

8号横穴墓

(第80図)

1号横穴墓と
6号横穴墓の間
の標高32.5m前
後に作られた横
穴墓で、N104°
Eとほぼ東に向
かって開口す
る。

前庭部 検出時



第80図 連行遺跡 8号横穴墓 実測図 (S=1/60)

での長さ2.3m、幅が床面羨門側で0.81m、斜面側で0.48mと狭長な形態である。床面は比較的傾斜がきつく、側壁が低いのは後世の耕作による削平のためである。

羨道 奥行1.15m、幅は羨門側で0.55m、玄門側で0.8mを測り、中央には中軸に沿って溝が設けられている。羨門の前面には、長さ87cm、幅20cm前後の整った長方形の溝が設けられている。閉塞にかかる施設かと思われる。

玄室 玄室の左袖部分が、密接して作られた1号横穴墓の玄室に向かって崩落しており、全形を知ることはできない。奥行は1.92m、幅は不明だが1.8m前後と推測され、正方形に近い平面形だったと考えられる。

遺物出土状況（第81図） 玄室内の右袖には、一面に須恵器大甕を破碎した破片が敷き詰められていた。1個体にはほぼ復元でき、その場で破碎して敷いた可能性も考えられる。

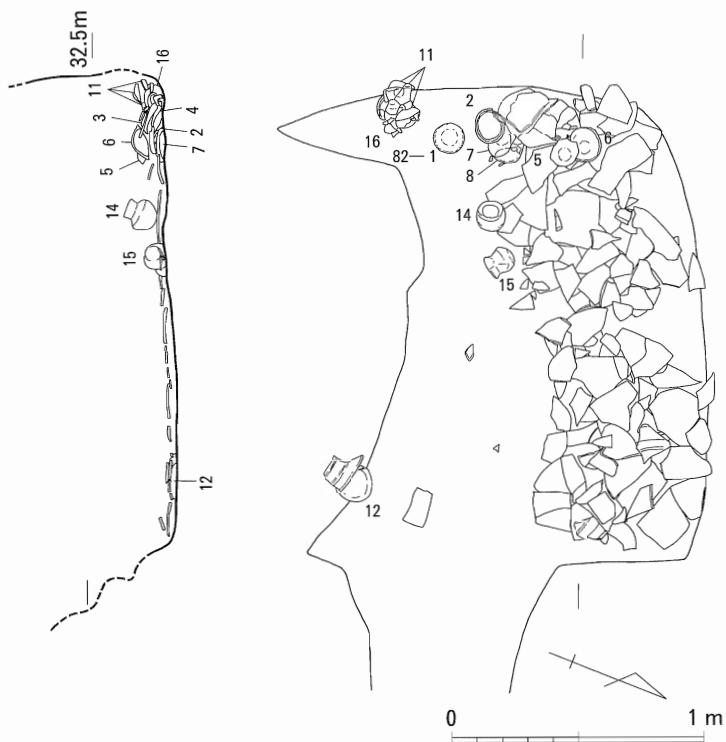
玄室内奥壁寄りからは折り重なるように蓋杯類が出土している。須恵器床の中央付近には蓋と杯身がともに伏せて一部重なるように出土（5, 6）、また須恵器床の南縁辺付近にも蓋杯類4点が一部重なり合いながら出土（1, 2, 7, 8）した。一方で須恵器床の下に隠れる形でも蓋杯（3, 4）が出土している。奥壁沿いのほぼ中軸線上には、蓋1点（11）と提瓶1点がつぶれるように折り重なって出土した。

奥壁沿いの蓋杯類よりはやや中央寄りに、須恵器床の縁辺に沿う形で小形の壺類が2点並んで出土した。玄門のやや左奥にも、蓋が1点出土している。

遺物（第82図、83図） 1～13は蓋杯類である。蓋のうち、1, 3, 5, 7, 9, 11は口縁と天井部の間に1ないし2条の沈線によって境を設け、天井には浅いながらもヘラケズリを施している。口縁の内側にも程度の差はあれ浅い沈線を引いてアクセントをついている。口径は12.5～13cm程度でそろっている。12, 13はいずれも橙色で還元していない個体である。口縁部と天井の境には辛うじて沈線を引いてはいるが、その境は不明瞭であり、口縁内面のアクセントも認められない。天井のヘラケズリの有無は、確認できない。口径は14cm前後でやや大形である。

杯身（2, 4, 6, 8, 10）はいずれも口径11cm前後、口縁の立ちあがり部分は薄手でシャープに形作られており、底部には浅いながら回転ヘラケズリを施している。

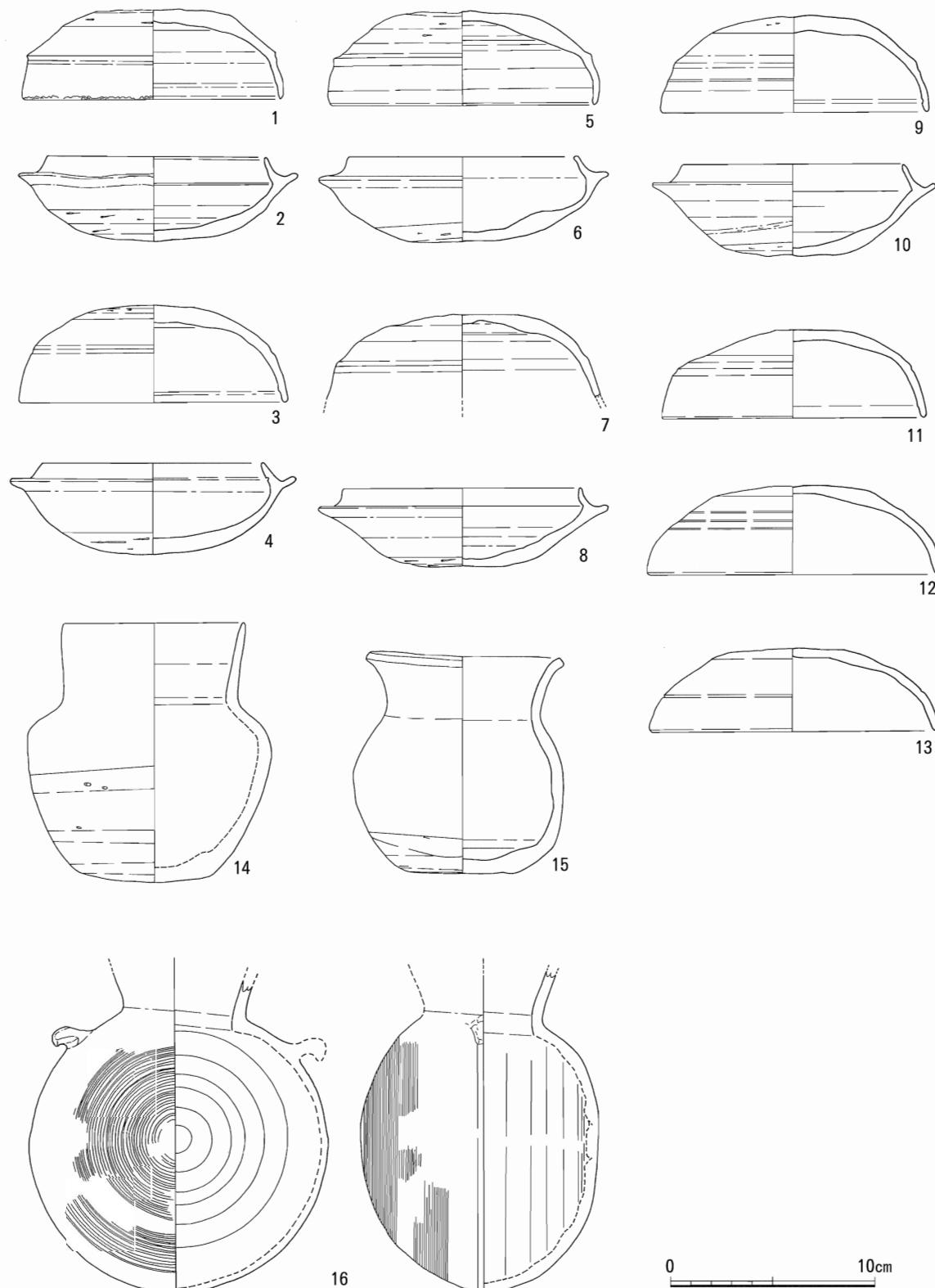
14は直口壺である。口径8.7cm、胴部最大径11.8cm、器高12.7cmを測り、胴部下半には回転ヘラケズリが認められる。15は小形の壺である。全体的に不整形で、胴部と口頸部との境もシャープでは



第81図 連行遺跡 8号横穴墓 遺物出土状況 (S=1/30)

なく、緩やかなくびれが認められる程度である。口縁部は外反し、端部には面を設ける。口径9.1cm、胴部最大径10.1cm、器高10.9cmを測る。

16は提瓶である。胴部の正面観はほぼ正円、側面観はシンメトリーで、ラグビーボールに近い橢円形を呈す。表裏にカキメを施しており、肩部にはカギ状の把手が付着している。胴部の長径は14.5cm、短径は11.4cm、頸部の最小径は5.7cmを測る。口縁部は欠損している。

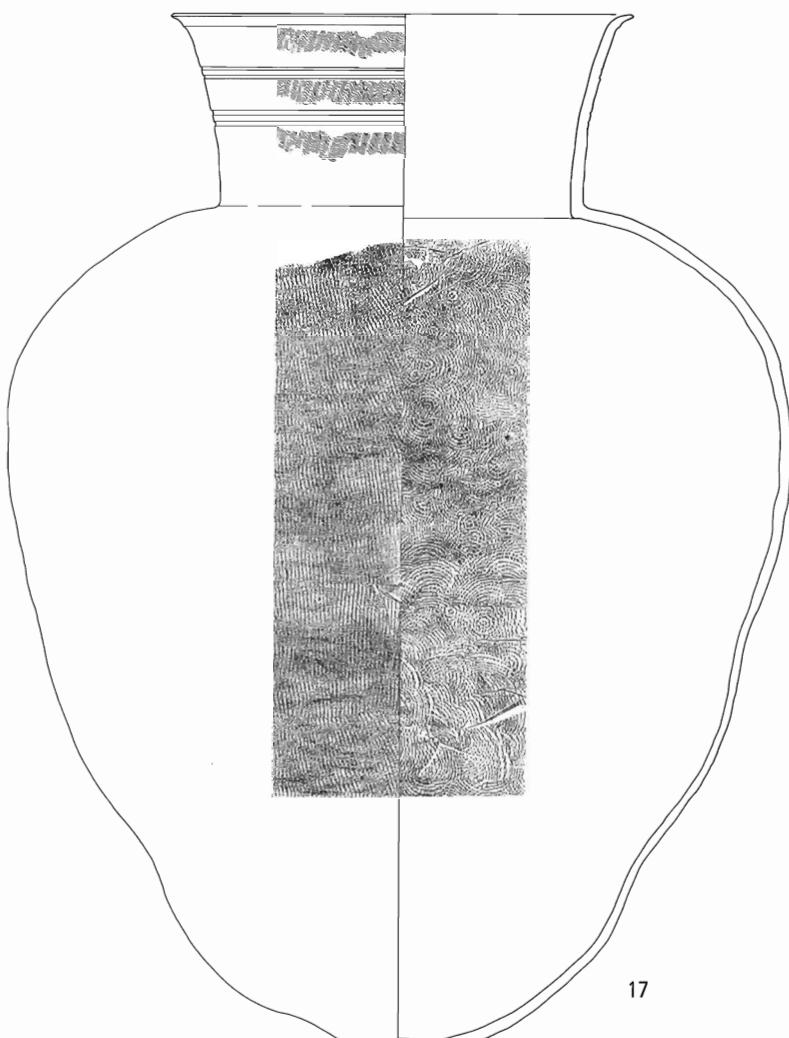


第82図 連行遺跡 8号横穴墓 出土遺物実測図 (1) (S = 1/3)

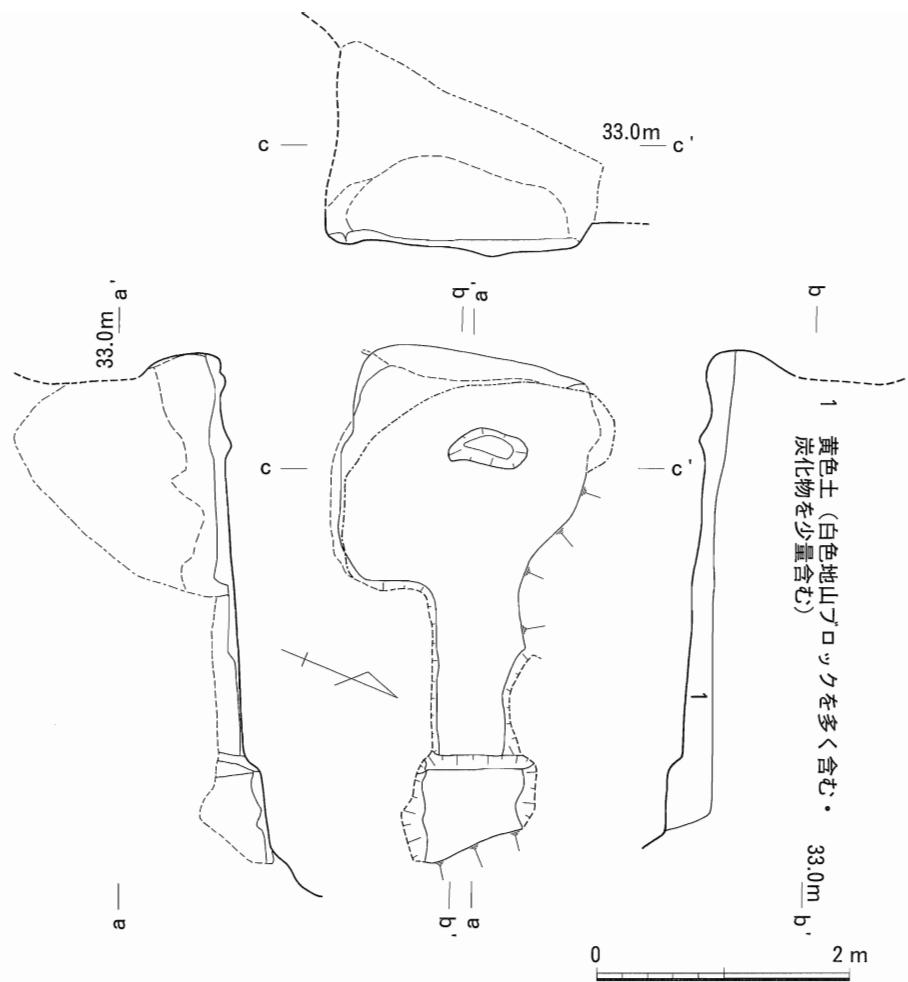
第83図は須恵器床に使われた大甕である。1個体に復元できたことから、この個体をその場で割って床に敷いた可能性も考えられる。口径37cm、頸部最小径28.5cm、胴部最大径61.5cm、器高83cmを測る。頸部は2条の沈線を2段に施すことによって3区に区切られ、その間に櫛描波状文を施している。胴部は内面同心円タタキ、外面平行タタキが観察され、器面は若干でこぼこしている。

横穴墓の時期 出土した蓋杯類のうち、主体となる古式のものの型式から、大谷編年出雲4期と考えられる。

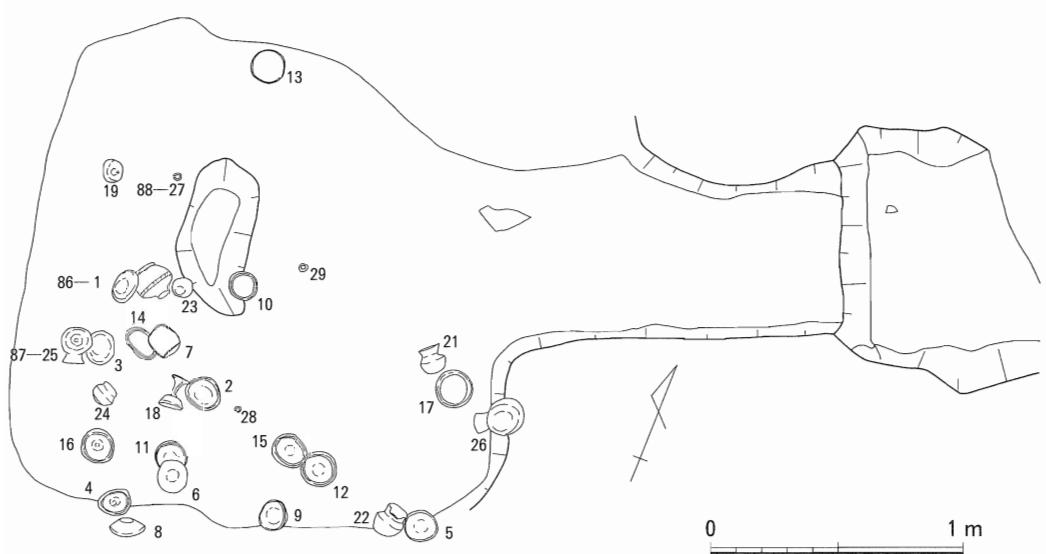
(丹羽野)



第83図 連行遺跡 8号横穴墓 出土遺物実測図(2) (S=1/6)



第84図 連行遺跡 11号横穴墓 実測図 ($S=1/60$)



第85図 連行遺跡 11号横穴墓 遺物出土状況 ($S=1/30$)

11号横穴墓 5号横穴墓の南側に隣接しており、5号横穴墓の玄室床面より2.3m高い位置に床面が作られている。玄室の右壁と前庭部は、5号横穴墓により削平を受けており残っていない。当初は横穴墓の存在しない場所と考えていたが、須恵器が多量に出土したことからその周辺を精査したところ、玄室の床面と壁の一部を検出し横穴墓であることが確認された。羨道の方向から東向きに開口する横穴墓である。

前庭部・羨道部 前庭部はその前側が殆ど削られ残っていない。わずかに残った羨門側の幅0.8m、残存する長さ0.7mである。羨道部の長さは1.5m、幅0.5mを測る。いずれも天井部は残っていないため高さは不明である。羨道部より前庭部が一段下がっており、高低差10cmを測る。

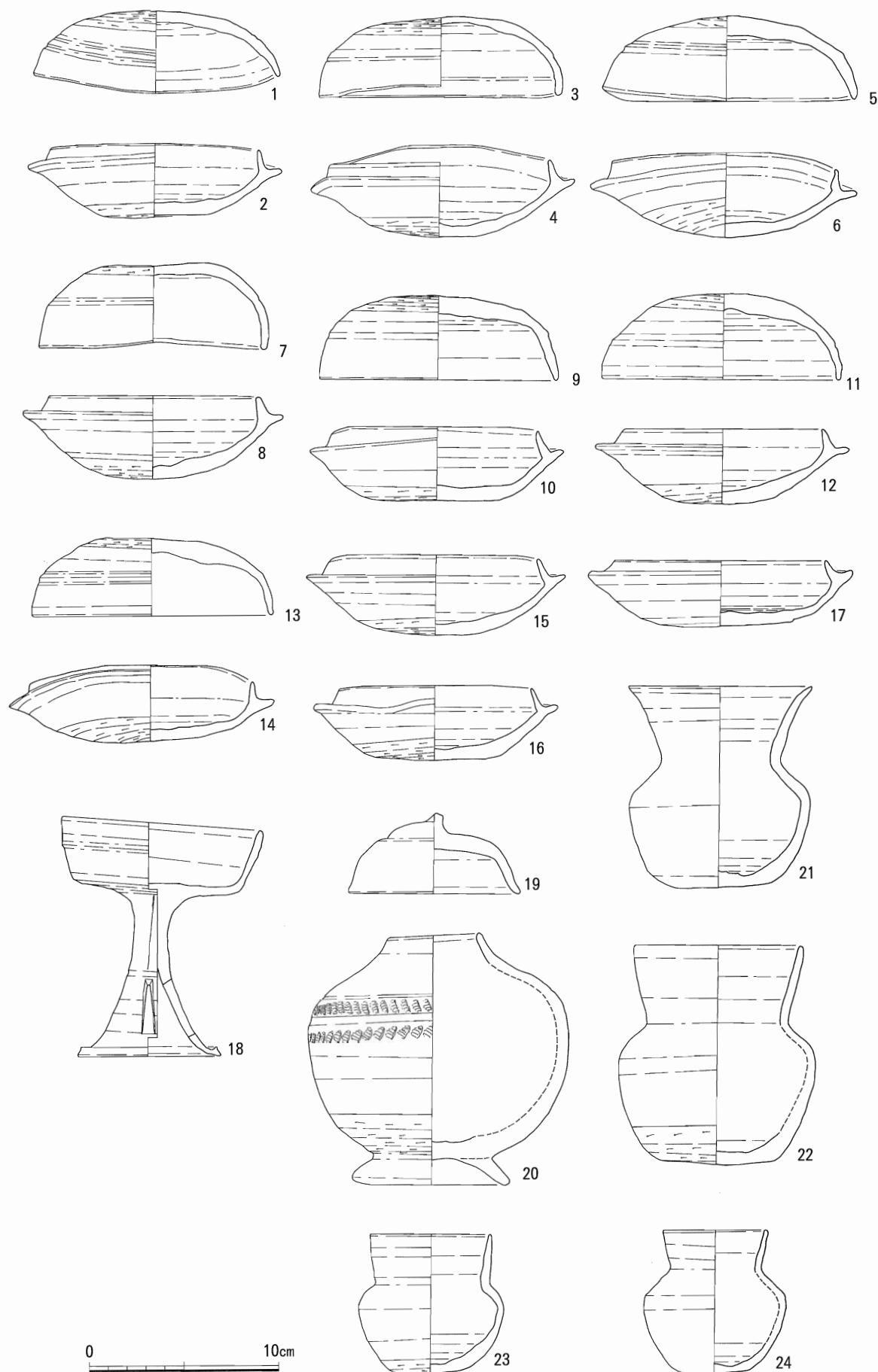
玄室 玄室の右壁が殆ど削られており残っていない。奥壁側が最も残りがよく壁が内湾するように立ち上っている。玄室の床面は奥壁から羨道に向けて傾斜して低くなっている。玄室の中央部に長さ64cm、幅30cmのピットが掘られている。玄室の規模は左側壁側で1.9mを測り、平面形は不明である。

遺物出土状況（第85図） 遺物は前庭部がかなりの部分を削平されており、全て玄室内の床面からやや浮いた状態で出土している。杯は、(13)を除いて残りの16個体が玄室左壁から出土している。高杯は1個体で左壁奥側から出土し、直口壺は手前と奥側に2個体ずつ出土している。提瓶も2か所に分かれて出土している。耳環3点は、玄室のほぼ中央部から出土しているが3点が等間隔に散在することから、埋葬後に移動されているようである。須恵器は、玄室の中央から左壁側に集中する状態である。羨道から出土した甕は、5号横穴墓の前庭部と接合している。

遺物（第86図、87図、88図） 1, 3, 5, 7, 9, 11, 13は杯・蓋で天井部外面にヘラケズリを施し、天井部と口縁部の境に2条の沈線を入れることで稜を表現している。口縁端部は丸味を呈している。口径は、12.4～13.2cmの間で、器高4.2～4.6を測る。10, 12, 14～17は杯・身で底部外面にヘラケズリを施し、受け部が斜め上方に向け立ち上がり、口縁部は内傾して立ち上がる。口縁部の内面が浅くくぼむものもある。口径は10.1～11.1cmを測り、器高4.0～4.3cmを測る。焼成は良好であるが、14のようにかなり焼け歪のあるものも含まれている。18は高杯で、長い脚部に上下2段の透かしを有しているが、上段は貫通していない。杯部は外面中央に稜があり、口縁部はやや外傾している。口径10.4cm、器高12.8cmを測る。20は、短頸壺で体部外面の上部に櫛状工具による上下2段の刺突文を施している。底部にかけて回転ヘラケズリが施され、長い高台が斜め外方に向き付けられる。口径4.7cm、器高13.4cmを測る。18は、その蓋であり、つまみを有しており、口径8.8cmである。壺、蓋の外面には自然釉がかかり、壺に蓋が乗った状態で焼かれた様子が判る。21～24は直口壺である。21はやや口縁部が外反気味である。22、23は小形の壺であり、口径6.3と8.9cm、器高7.5と11.8cmを測る。25は提瓶で体部の肩部に取っ手のなごりがあり、体部外面全体にカキメを施している。口径9.2cm、器高15.5cmを測る。26も提瓶で体部肩にボタン状の取っ手を有している。体部の外面にヘラケズリを施し、口縁部は直口気味に立ち上がる。27、28、29は青銅製の耳環であり、27は径が2.5cm、28、29は2.1cmである。

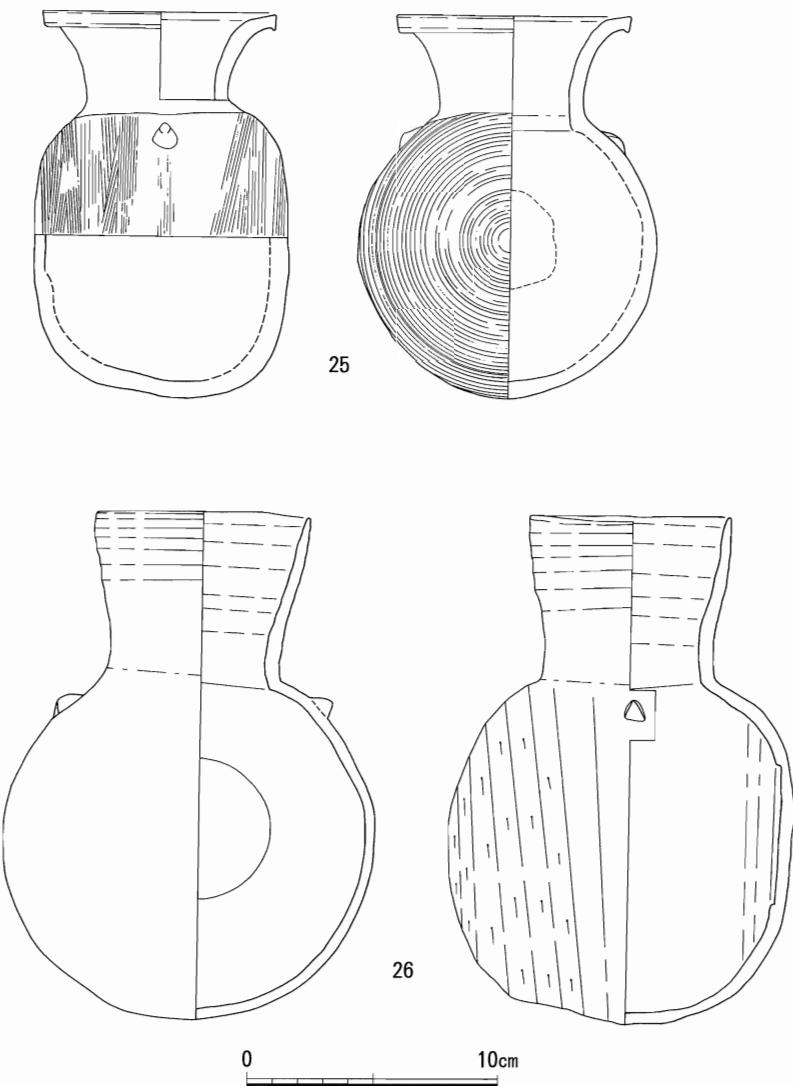
横穴墓の時期 須恵器の時期は、蓋杯、高杯の形態から大谷編年4期と考えられ、この横穴群の中でも古い時期のものである。

12号横穴墓 2号横穴墓と3号横穴墓の中間の、標高がやや低い場所に掘られた横穴墓である。調

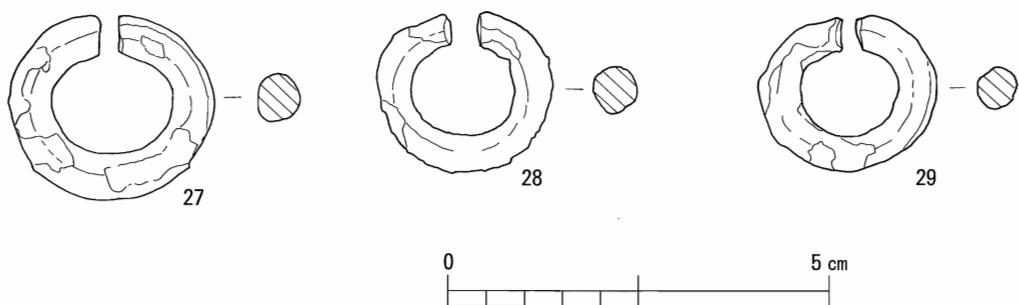


第86図 連行遺跡 11号横穴墓 出土遺物実測図 (1) (S = 1/3)

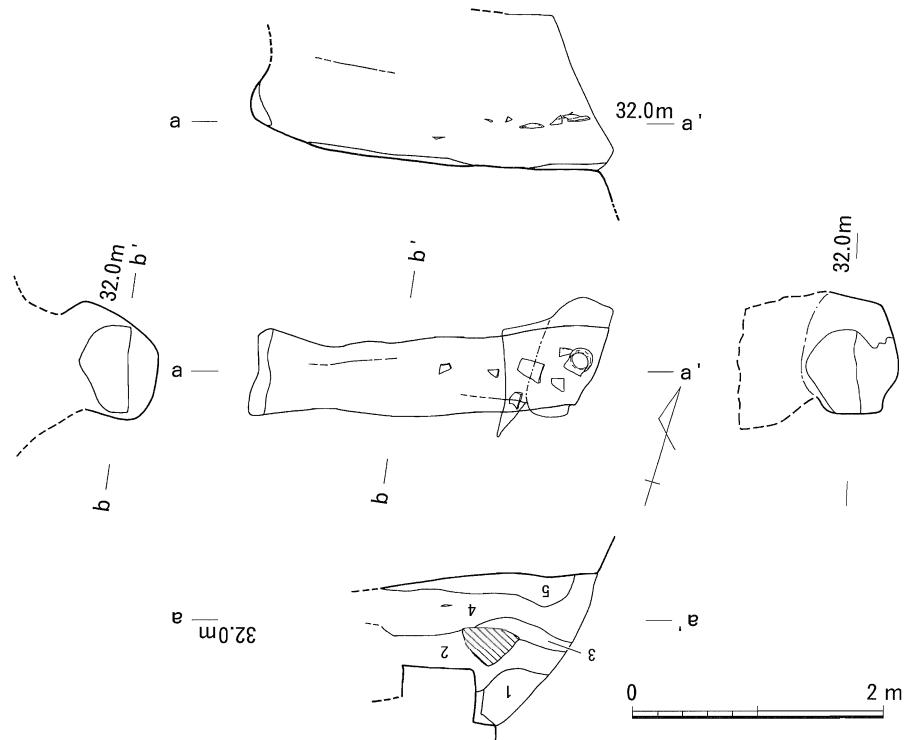
査時に羨道部から中を確認したところ、玄室の天井部が崩落したものと考えられ、作業上危険と判断し天井部のかなり上部から岩盤を除去するように掘り下げていった。調査を進めると岩盤が極めて固くツルハシでも掘れず、鑿を打ち込む状態であった。その結果、玄室の天井は崩落したものではなく、岩盤が固いため横穴の掘削を途中で断念した造りかけのものであることが判明した。羨道



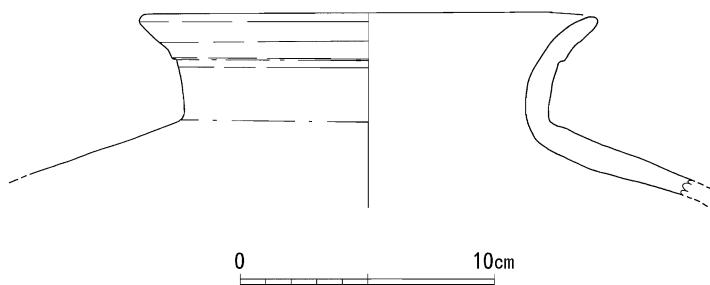
第87図 連行遺跡 11号横穴墓 出土遺物実測図 (2) (25、26は S = 1/3)



第88図 連行遺跡 11号横穴墓 出土遺物実測図 (3) (S = 1/1)



第89図 連行遺跡 12号横穴墓 実測図 ($S = 1/60$)



第90図 連行遺跡 12号横穴墓 出土遺物実測図 ($S = 1/3$)

の幅で掘り進めた後、玄室を広げる段階で断念したようである。

羨道部、前庭部 玄室の区別は不明瞭であり、平面形は長方形を呈している。入り口から奥壁までほぼ同じ幅で60cm、残存する長さ2.6mを測る。羨道部になる部分は一部天井が残っており、高さ75cmを測る。床面は奥壁付近がかなり傾斜して高くなっている。入り口近くから奥に1.3mの範囲で、床面から20cm程浮いた状態で須恵器・甕が出土している。

13号横穴墓 (第91図) 南支群で14号横穴墓と前庭部を接するように位置している。標高31m付近で、S 83° E の東向きに開口している。

前庭部 長さ6.0m、床面幅は最小となる場所で1.3m、最大となる端部で、4.5mと大きな前庭部である。羨道部とは高低差8cmで、境に幅20~28cm、深さ8cmの溝が掘られている。この場所からは55×60cmの板状の石が出土していることから、閉塞石を受けるための構造と考えられる。溝の両側

には、上端幅が45×35cm、40×20cmの穴が掘られており、これも閉塞のための施設と考えられる。閉塞用の溝から70cmのところに高低差8cmの段差があり、この場所で前庭部の幅が1.6mと広くなってしまっており複室状となっている。この様な構造の前庭部は横穴墓群の中で唯一である。

前庭部の土層堆積状況は、前側のセクションを記録していないので不明な点が多いが、横断の土層断面を観察すると、羨道、玄室に続く黄褐色土、黄色土が暗褐色土を掘り込む状態で堆積している。追葬段階の掘り返しによるものと思われ、その幅は1.5mを測る。

羨道 羨道は、前庭の床面と比較し一段高くなっている。幅は0.8mであり、長さは玄室の左右の壁の長さが異なることから、左0.7m、左0.55mである。天井部は羨門部は崩れており、玄門部が高さ0.9mである。床面の中央がややくぼみ、天井部に丸味を有している。

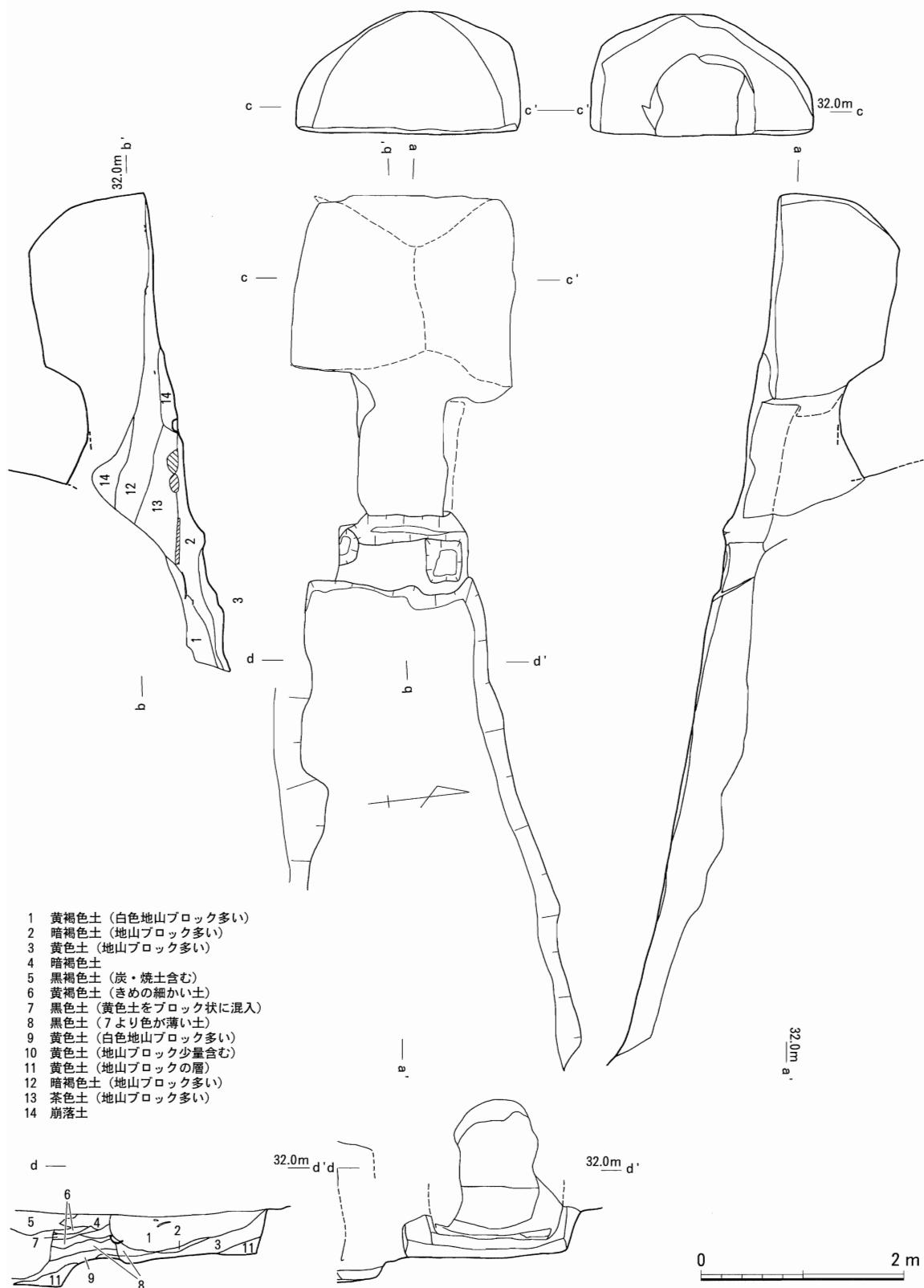
玄室 奥行きが右壁側で2.0m、左壁側で1.65m、奥壁側1.8m、玄門側2.15mを測り、左壁が短いため歪んだ正方形のプランを呈している。高さは1.2mと低く、断面はドーム形に近いが、天井は四柱式で妻入りになっている。四壁と天井を区切る軒線は設けられていない。床面の傾斜に平行するように天井部も傾斜している。

遺物出土状況（第92図） 前庭部からは、須恵器の杯蓋身（1, 2, 3）と高杯（26）、壺（27）が出土し、全体的に甕の破片が散在している。羨道部から杯（20, 22, 23）と刀子が、玄室の中軸から前に杯があり、奥側に高杯、壺があり床面上から出土している。調査時点に確認できなかったが、耳環2点も玄室内から出土している。

左壁側と奥壁側には遺物の存在しない空間があり、人骨が奥壁側に散乱した状態であり、遺体の置かれた場所と考えられた。人骨は部位の判明するものから見ると、本来の埋葬の位置から移動しており、骨に動物の歯形が残っていた。

遺物（第93図、96図）

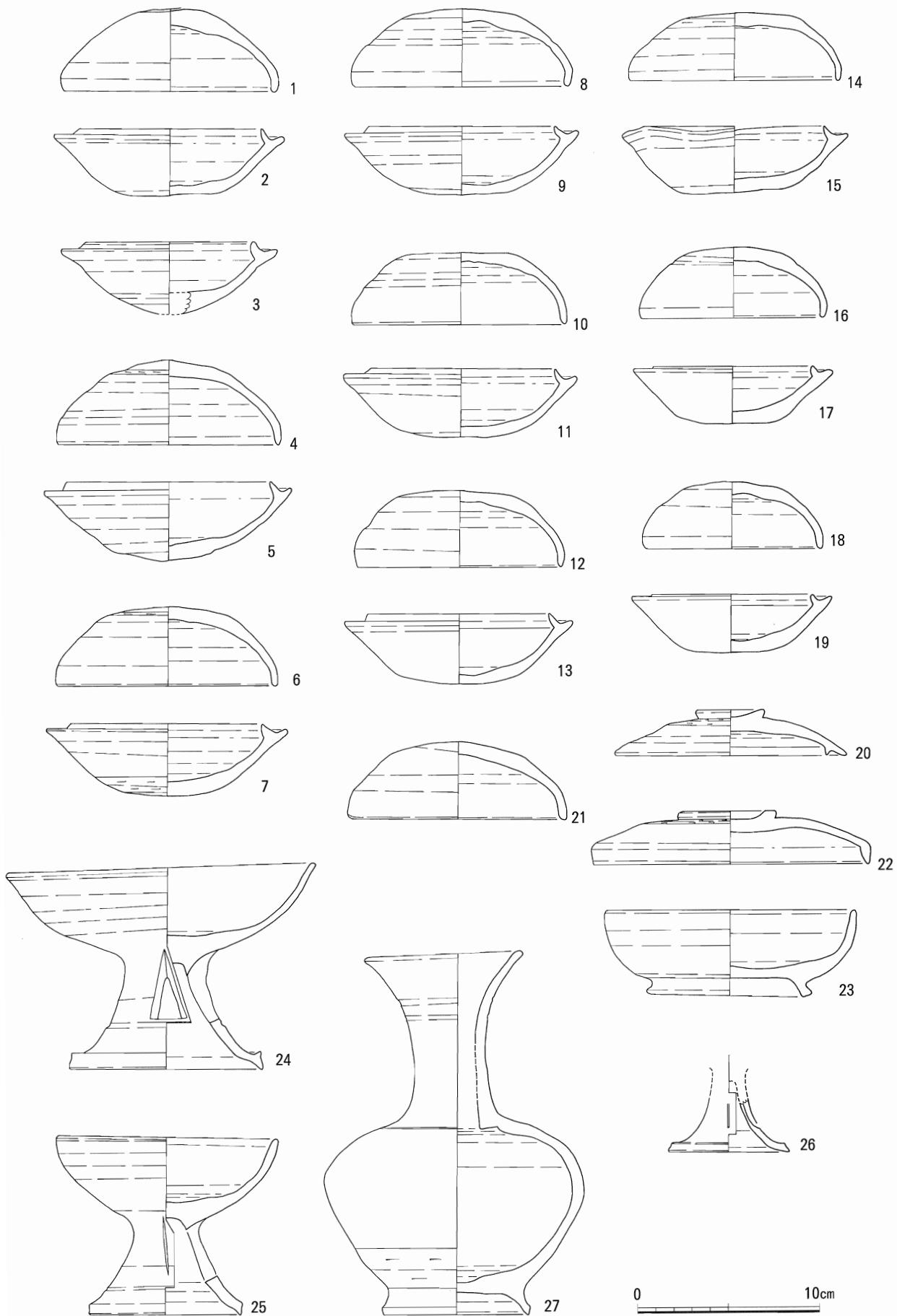
1～23は蓋杯であり、1～15, 21は蓋の天井部にヘラケズリを省略するもので、形態に丸味を有し、口径12cm前後で極少化する以前の段階のものである。杯身は底部のヘラケズリを省略し、受け部立ち上がりが太くて短いものである。16から19の4個体は、蓋の口径9.5cm、10cmと蓋杯の大きさが極少化する段階のものである。受け部の立ち上がりも極めて低くなり、杯の底部と蓋の天井のヘラケズリを省略している。4, 5の内面、16、18の外面には「-」のヘラ記号が記されている。20は杯蓋で天井部に輪状のつまみを持ち口縁部内面に低いかえりを有している。口径12.7cm、器高2.6cmと低いものである。22は杯蓋で天井部に輪状の低いつまみを有している。口縁端部が折り返され、直立する形となっている。口径15.2cmを測る。23は杯で底部に高台を有し、体部に丸味を有している。底部の外面は、回転糸切りにより切り離された後に高台を貼り付けている。口径13.8cm、器高4.8cmを測る。24は、一段透かしを有する高杯で、脚部に三角形の透かしを二方向に施している。脚端部は折り返されている。杯部はやや開き気味になっており、口径17cm、器高11.5cmを測る。25はやや小形の高杯で脚部に透かしを施している。脚端部の折り返しは緩く、透かしは4方向で直線状である。口径12.2cm、器高10cmを測る。26は小形の高杯の脚部で、貫通しない直線の透かしを施している。27は、高台の付く壺で頸部から底部外面にかすかに糸切りの痕跡がみられる。28は、直口壺で口径9cm、器高13.2cmで体部下半に回転ヘラケズリを施している。29は長頸壺で体部に丸味を有している。口径7.8cm、器高18.8cmを測る。頸部外面に「≠」のヘラ記号が浅く描かれている。30は平瓶で口縁部の中軸が1cmずらして作られ、外面にカキメが施され、1個だけ円形浮文が



第91図 連行遺跡 13号横穴墓 実測図 (S=1/60)

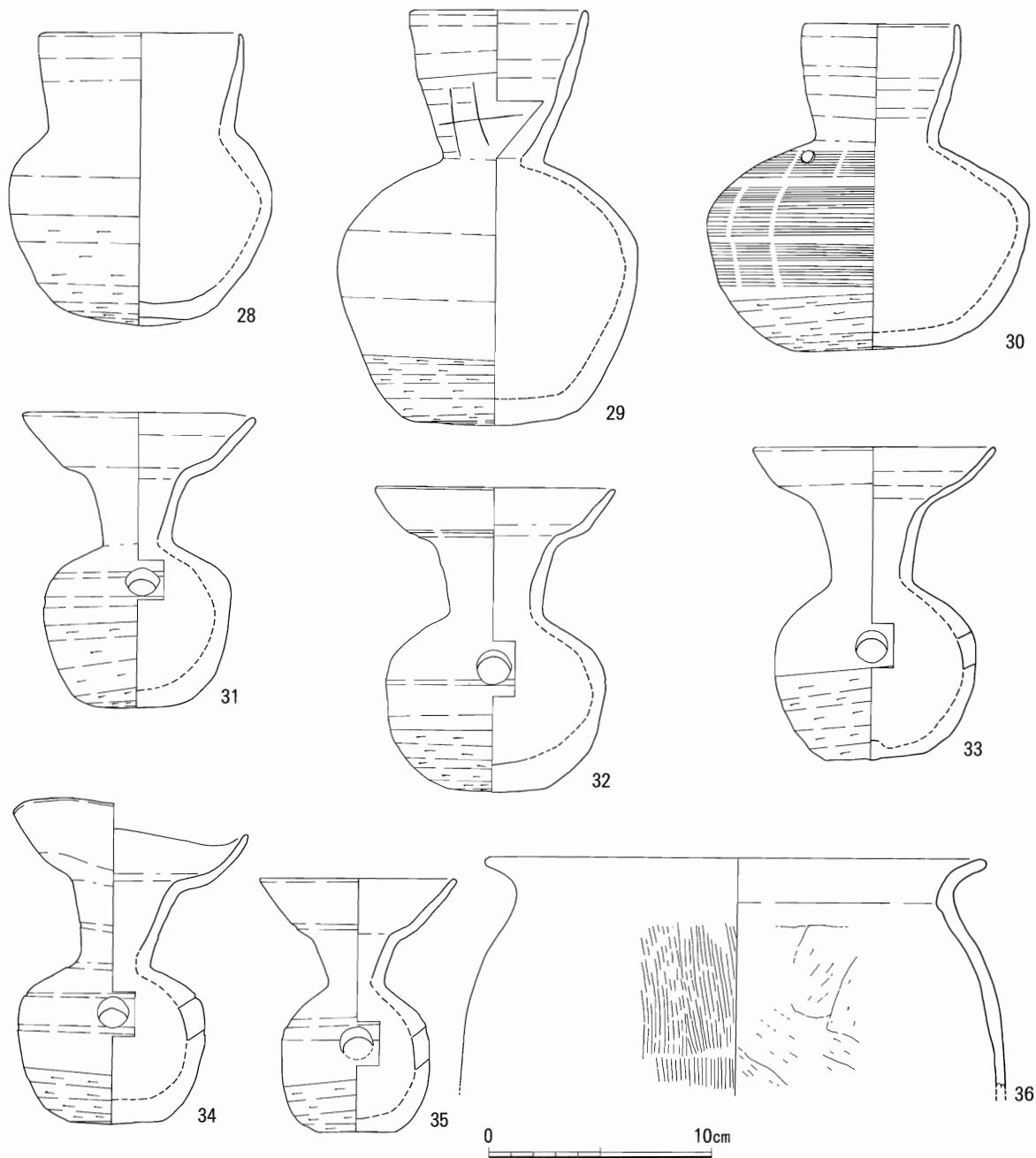


第92図 連行遺跡 13・14号横穴墓 遺物、閉塞石、人骨出土状況 (S=1/30)



第93図 連行遺跡 13号横穴墓 出土遺物実測図 (1) (S = 1/3)

付けられる。31は脇で、口径10.4cm、器高13.3cmで体部の円孔の上下に沈線を1条ずつ廻らす。32は、口径10.8cm、体部最大径10.8cmと口径に対して体部の大きくなるものである。体部の円孔の下に1条の浅い沈線を廻らす。33は、口径10.8cm、器高14.2cmを測る。体部外面下半にヘラケズリを施す。34は、口径11.2cm、器高14.8cmで頸部と体部の円孔の上下に各1条ずつの沈線を廻らす。35は口径8.8cm、器高11.6cmと小形のもので体部外面の円孔の上に1条の沈線を廻らす。36は土師器の甕で、口径22.4cmを測る。体部外面にハケメ、内面にヘラケズリを施している。第95図は、口縁部の欠けた大甕である。体部の肩が良く張り出している。残存する高さ50cmである。

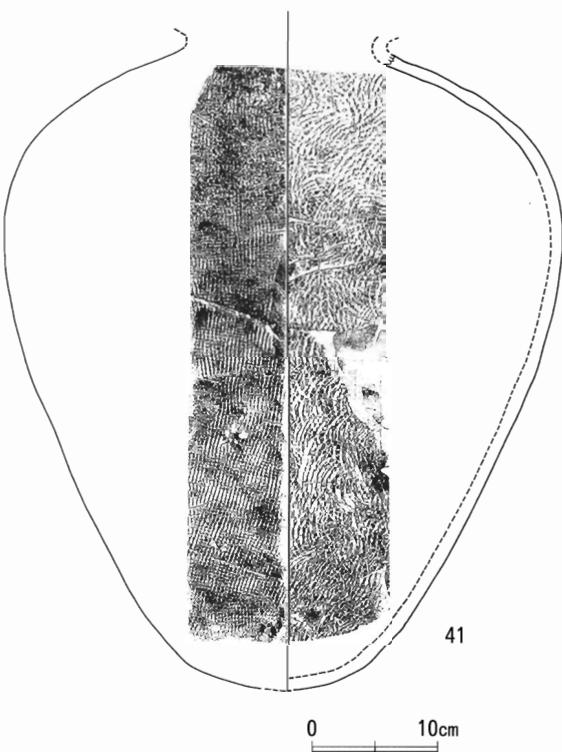


第94図 連行遺跡 13号横穴墓 出土遺物実測図 (2) (S=1/3)

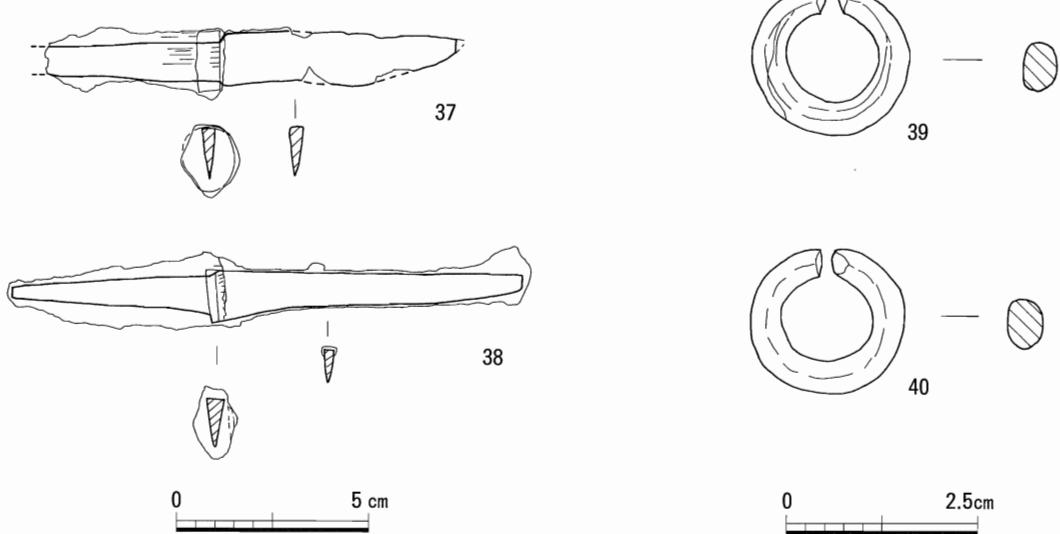
96図37、38は刀子である。37は茎の木質が残り、両闇である。38は茎に柄の木質が残り全長13.2cm、両闇で刃部の幅1.3cmである。39、40は金銅製の耳環であり、径2.0cmで断面が橢円形を呈している。

横穴墓の時期 横穴から出土した古い段階の須恵器杯（1～15）から大谷編年5期に横穴が作られたものと考えられる。その後に大谷編年6期杯（16～19）と8期の杯（22、23）の2時期に渡って追葬等が行われたと考えられる。

玄室内の全体と前庭部から2点のみ初葬段階の須恵器が出土し、2段階目の土器は玄室と1点が前庭から出土し、最終段階には羨道部と前庭部から壺（27）が出土している。この状態から追葬時に玄室内の土器を全てかたづけるのでは無く、そのまま埋葬し土器を供献しているようである。



第95図 連行遺跡 13・14号横穴墓前庭出土甕
実測図 (S=1/6)



第96図 連行遺跡 13号横穴墓 出土遺物実測図 (3) (37、38は S = 1/2 39、40は S = 1/1)

14号横穴墓（第97図） 南支群で13号横穴墓の南側に隣接し、高さ0.3m程14号横穴墓の前庭部の方が低くなっている。標高31m付近で、E 0.5° Sとほぼ東向きに開口している。

前庭部 長さ3.25m、床面幅は最小となる場所で2.5m、最大となる場所で3.6mを測る。羨道部とは高低差15cmで、境に幅8～15cm、深さ5cmの溝が掘られている。この溝の前側は一段高くなり、土手状になっている。その両側には、橢円形の35×20cmの大きさの穴が掘られており、溝と合わせて羨門部の閉塞のための施設と考えられる。羨道の左側において、閉塞に使用したと思われる石が

出土している。石材は玄室内の石棺と同様の石材であり、厚さ15cmに加工されたものである。

前庭部の土層堆積状況は、横断面をみると中央部に幅1mの溝状の落込みが確認され、地山ブロックを多く含む土である。周囲に堆積する土に地山ブロックが少ないとから対照的である。中央部の土層の上部には黒色土があり、前庭部全体からも確認される。13号横穴墓の前庭部においても確認されており、追葬時の玄室内への掘り返しによるものと考えられる。

羨道 羨道は、前庭部の床面と比べ一段高くなっている。幅は、羨門側が0.65m、玄門側が1.05mと玄室に向けて広がっている。長さは、1.4mである。床面の中央部には玄室から続く溝があり、前庭部まで伸びている。幅は、10~40cmで長さ2.25mである。溝の底面は、玄室内はほぼ平坦であるが、羨道部では前庭部に向けて傾斜している。天井部は、ほぼ平坦であるが、若干丸みを有している。高さは、中央部から玄門側が0.96mを測る。

玄室 奥行きが右壁側で1.8m、左壁側で1.85mを測り、幅が玄門側で2m、奥壁側で1.83mであり、平面形はほぼ正方形に近い形である。断面は、不整形な家形であり、天井は四柱式で妻入りとなっている。四壁と天井を区切る軒線は、奥壁を除いて設けられている。屋根には棟の線があり、天井部の傾斜は、縦断面に比較し横断面の方が緩くなっている。奥壁は、床面から屋根まで傾斜しながら一気に立ち上がる。玄室の左壁側には、組み合わせ式の家型石棺が壁の長さ一杯に置かれている。玄門付近に石棺と同様の石が2個置かれていた。

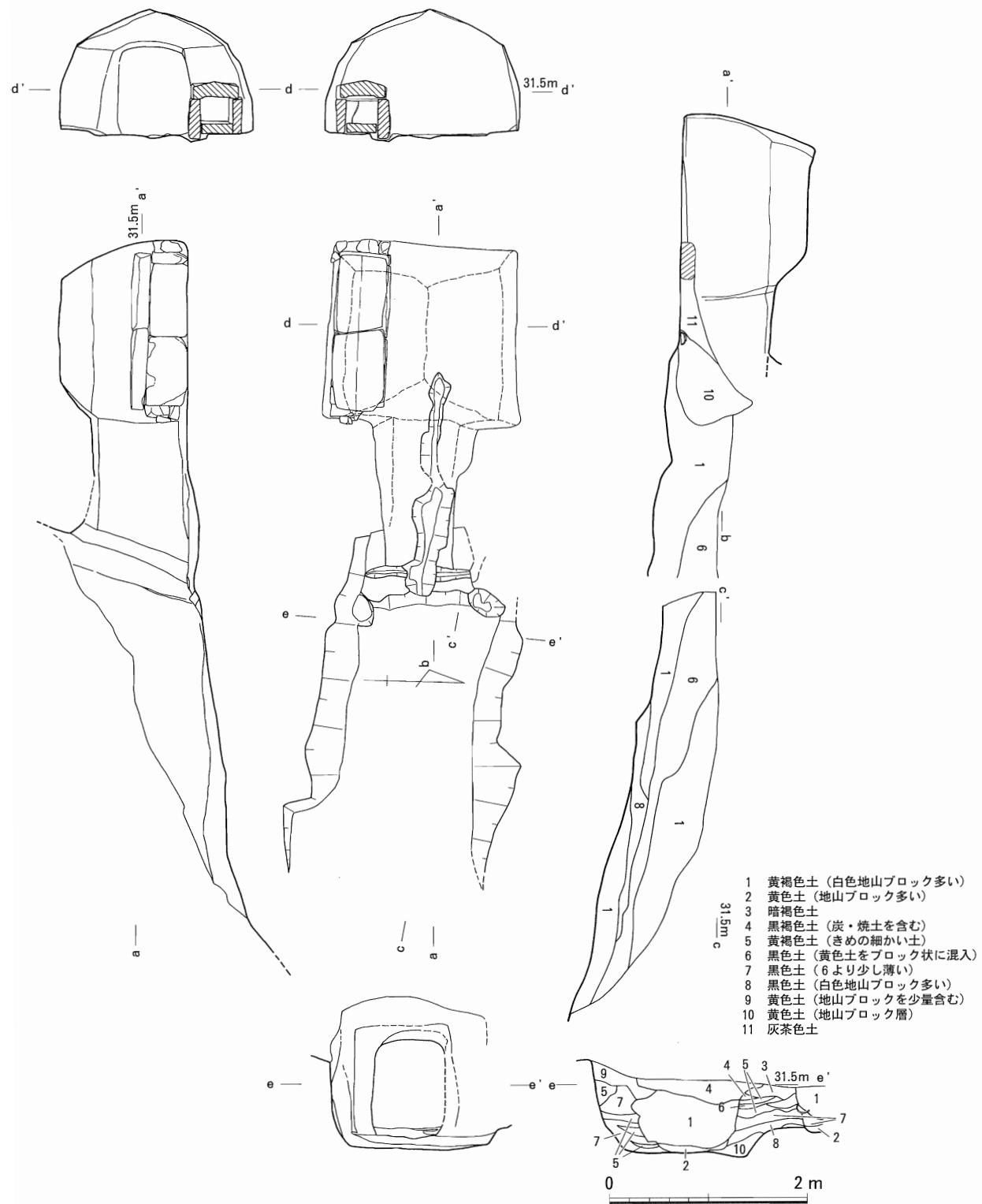
遺物出土状況（第92図） 前庭部からは、須恵器の蓋杯（1~9）、壺（10）、壷（11）、高杯（12）、土師器・甕（24）が出土している。須恵器は、前庭部の右壁側、横断土層の地山ブロックを含まない黒色土の中、床面からやや浮いた状態で出土しており、掘り返しが行われる以前の土層中からの出土である。推定される杯のセット関係からみると、1と2は隣接し、8と9は50cm離れて出土している。土師器・甕は、広い範囲に分散している。玄室内からは、杯（13~23）が出土している。いずれも床面上からの出土であり、推定されるセット関係からみると、15と16、17と18、19と20はかなり近い場所に位置し、13と14が1m、22と23が1.8m離れている。

石棺（第98図、99図） 石棺は、組み合わせ式の家形石棺で玄室の左壁側に沿わせる様にして置かれていた。石材は凝灰岩製の切石を使用している。石棺本体は、長手側に2枚ずつ、小口側に1枚ずつ、天井部に2枚、床面に3枚の石を使用している。奥側の長手の石と蓋石の組み合わせは、斜め方向の切り方により組み合わせるようになっており、左側の小口側は「L」字状に加工されるため、長手側に周り込む形となっている。右側の小口は、長手を挟む形であるが、左側長手は小口を押さえる形となり変則的な組み合わせである。

石棺の組み方は、床石3枚を敷き、奥側の長手石、両小口石を置き、手前の長手石を置く床面に溝状の掘り込みを入れ、そこに長手の石を置いた後に遺体を入れ、蓋石を置いている。長手石は奥側が高さ35cmに対し手前側40cmであり、石材が外側に倒れないように内傾するように置かれている。同様の意図として、両小口側には石棺材と同じ石を玄室との隙間に詰めており、両小口を押さえて転倒しないようにしている。基本的に3方向には玄室の壁が迫っており、手前側に倒壊することを防止すれば良い構造である。

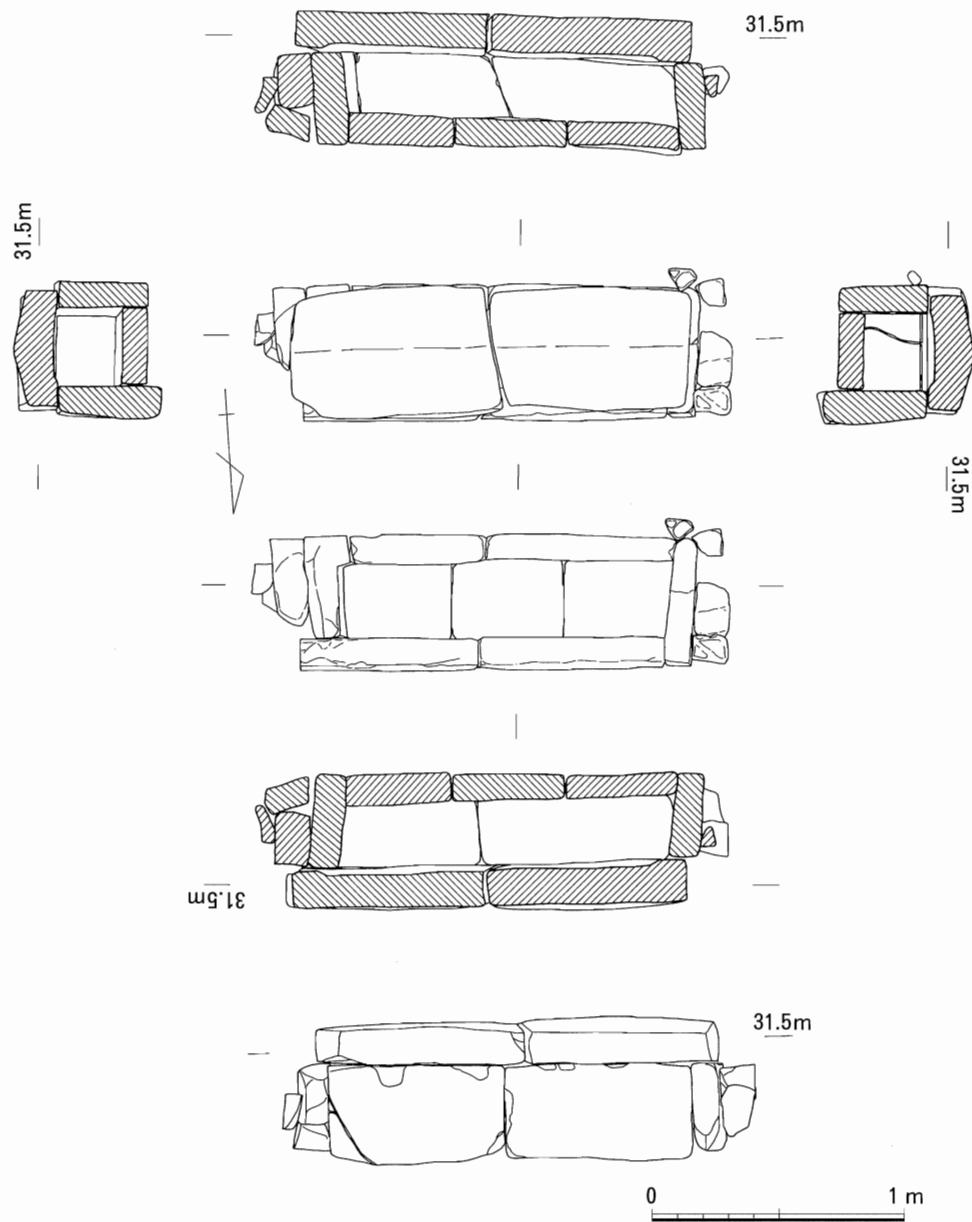
床石の大きさは、幅30cm、長さ42cm、厚さ10cmである。石棺の内法は、幅0.3m、長さ1.22m、高さ0.25mである。

蓋石の大きさは、右側が幅45~50cm、長さ70~80cm、左側が45~50cm、長さ75~85cm、厚さ12~17cmである。天井部は断面が屋根状に削られ、外面にかすかに家形の棟線が直線で表現されている。2枚の蓋石は、それぞれの接合する部分は極めて平坦に加工されている。内面は、小口、長手の側石と接する部分は幅20~30cm程平坦に加工され、その内側は2cm程の深さの割り込みがある。

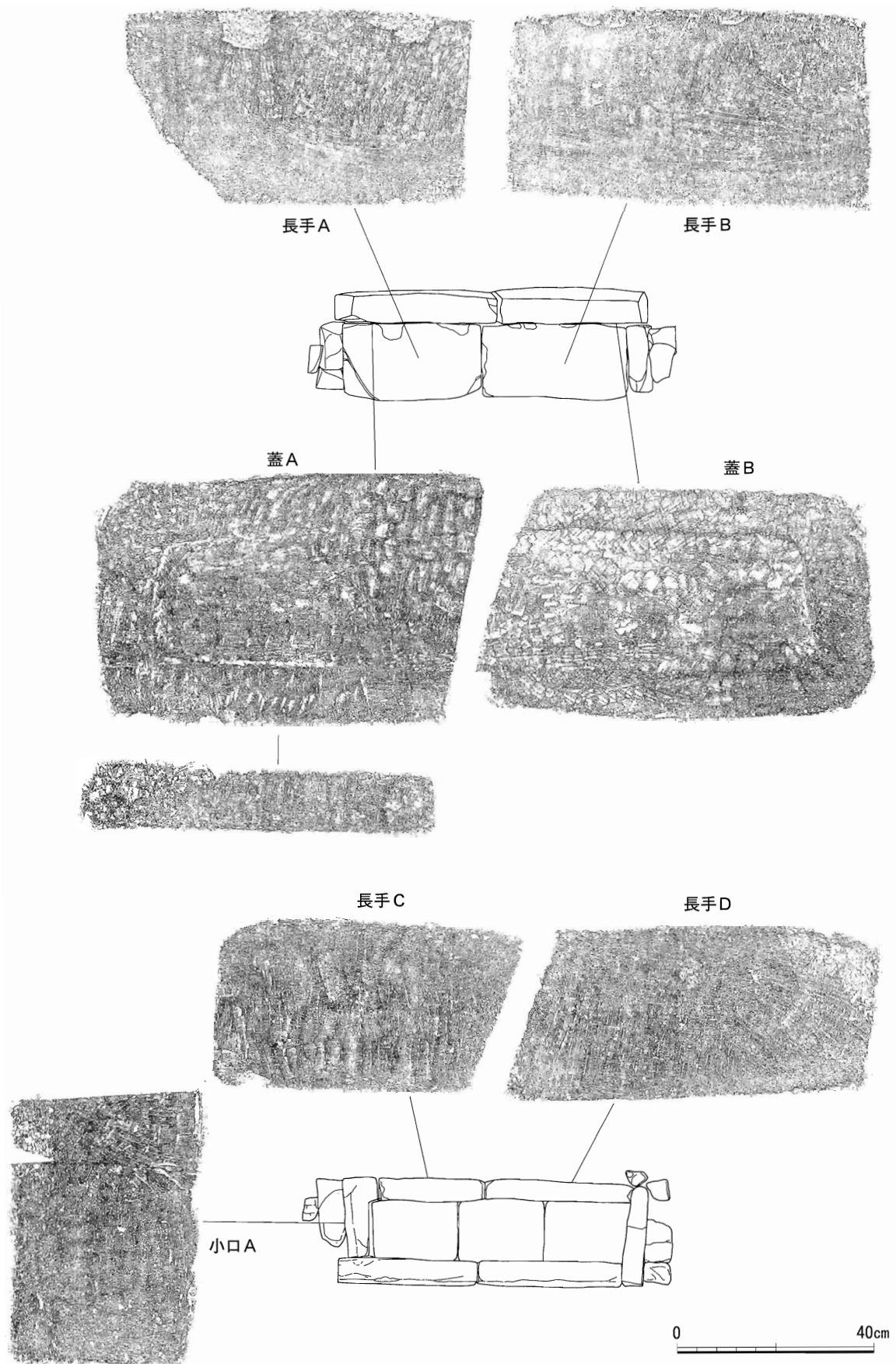


第97図 連行遺跡 14号横穴墓 実測図 (S=1/60)

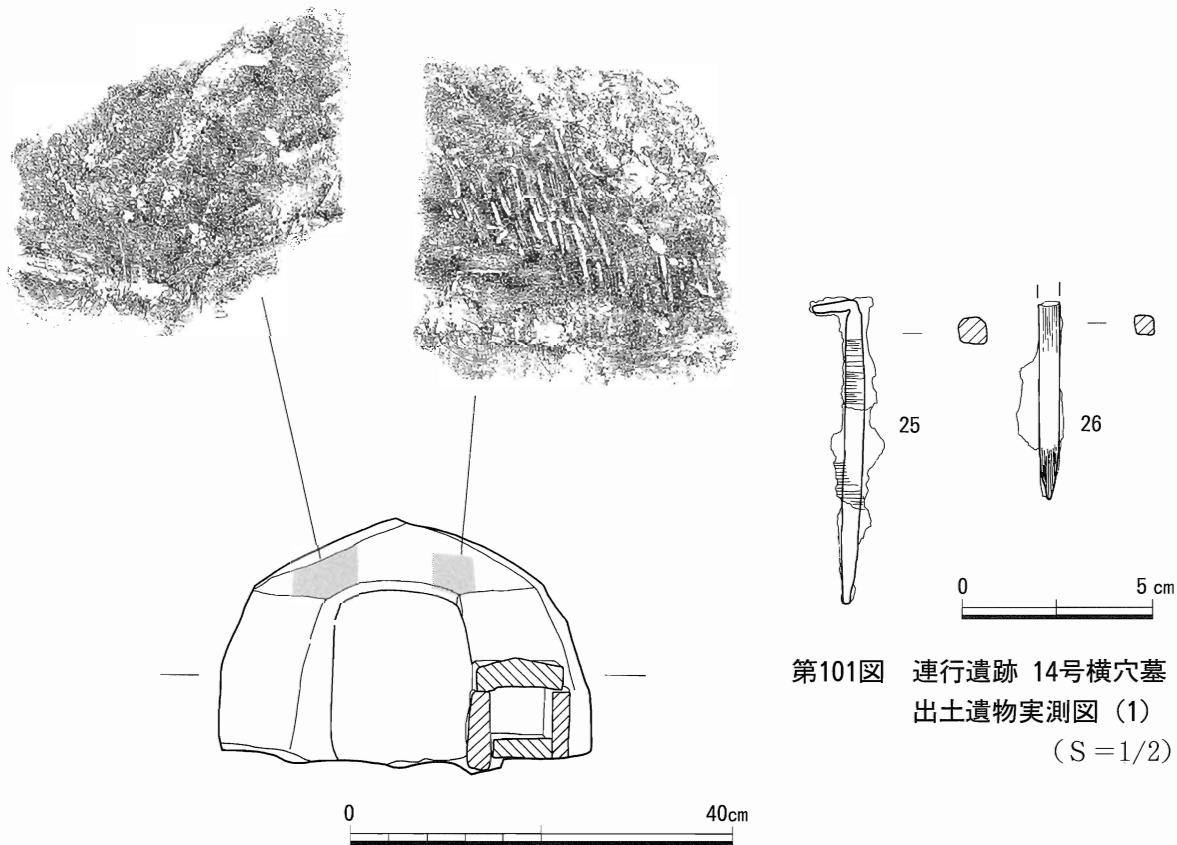
石棺の石材には、加工痕が良く残っている。蓋石A、Bの内面の加工を見ると、割り込み部分は外側と内側から斜め方向に深く小刻みに削りこみ、段差を作りだしている。側石と接する部分はノミ痕は残るもの平坦にするため凹凸が少なく、仕上げ状の加工となっている。蓋石の側面の加工は、横方向にノミ痕が残っている。長手石A、Bの外面の加工は、上半が横方向、下半が縦方向に削られる。横方向の加工痕は、一つの削りが長めに行われている。長手Cの外面の加工痕は、全面横方向に削られる。長手Dの外面の加工痕は、中央部にかけてが縦方向で、残りが斜め方向に削られる。小口Aの外面の加工は、上半分が横方向、下半分が縦方向に削られる。側石、小口石、底石の内面の加工は、平坦に仕上げられるため痕跡があまり残っていない。石棺の各石の加工は、全体的にみて内面が直線的に平坦になり、外面は加工が粗いため膨らみを持つような感じである。石材は凝灰岩で、石の中に黒色の粒子を含むことから、荒島石の可能性がある。



第98図 連行遺跡 14号横穴墓 石棺実測図 (S=1/30)



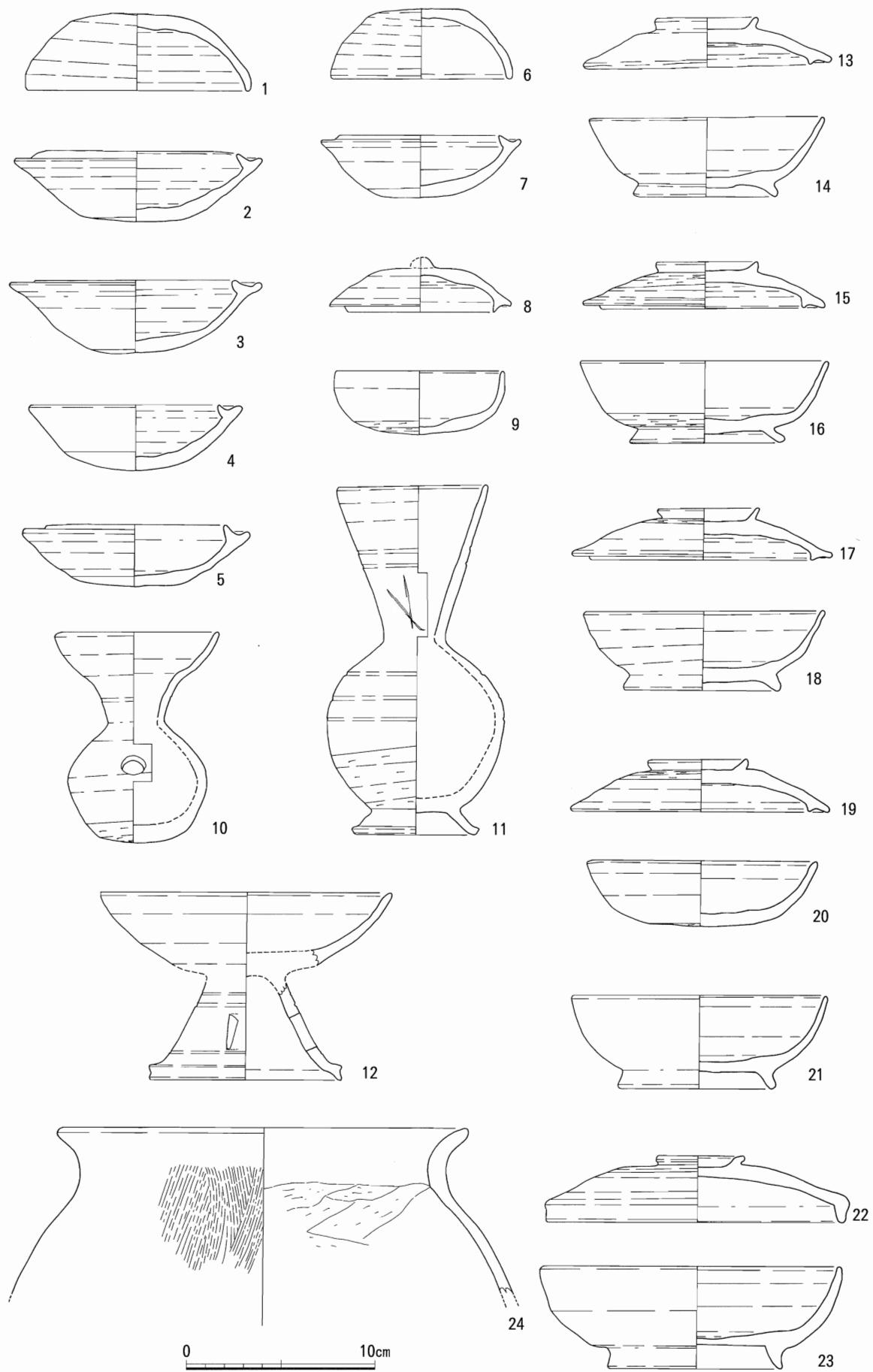
第99図 連行遺跡 14号横穴墓 石棺拓本 (S=1/12)



第100図 連行遺跡 14号横穴墓 玄室拓本 (S=1/8)

第101図 連行遺跡 14号横穴墓
出土遺物実測図 (1)
(S=1/2)

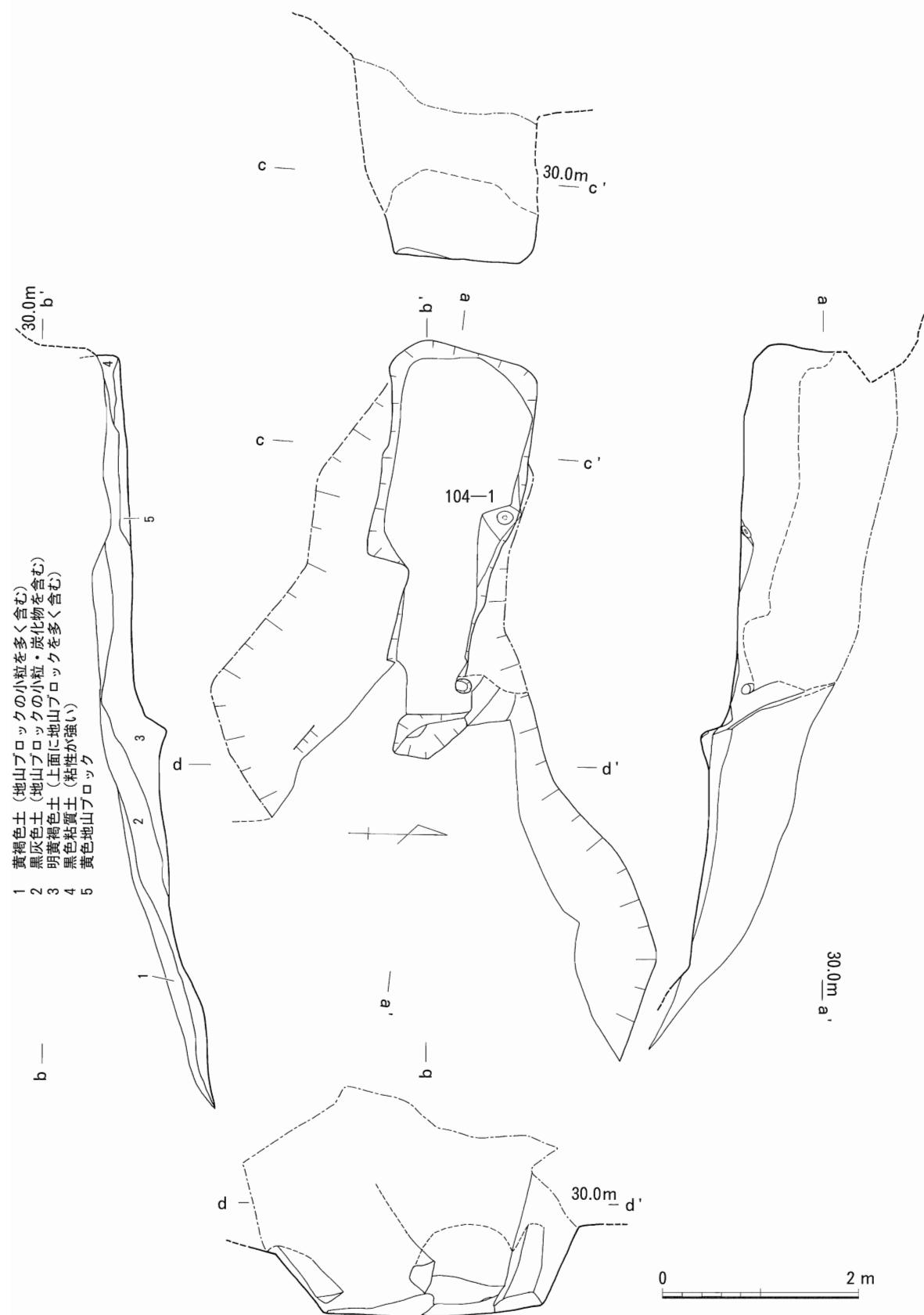
遺物 (第101図、102図) 1～12、24は前庭部から、13～23は玄室からの出土である。1～7は蓋杯のセットである。蓋1は、小形のもので口径12cmをはかる。この蓋の身は杯2、3、5で、口径9.4～10.5cmである。蓋6は口径9.4cmで身7とセットになり、極少化した段階のものである。身4も同様のもので口径8.9cmの小形のものである。蓋8は、乳頭状のつまみとかえりを有している。その身が9で、口径8.8cmと極めて小形の杯である。10は頸で体部の肩から頸部にかけて緩く傾斜し、口縁部の開きも緩いものである。底部外面にヘラケズリを施す。11は高台を有す長頸壺である。体部外面に三条の沈線を入れ、口縁端部に向け直線的に開く。口縁部の外面に「×」のヘラ記号を有している。12は、高杯で脚部に一段の透かしを入れる。杯部の口径は15.2cm、脚部には長方形の透かしを一段施している。24は、土師器の甕で口径21.8cmを測り、体部外面にハケメを施す。13～23は、玄室内から出土した杯である。13、15、17、19は杯・蓋で天井部に輪状のつまみを有している。口径は、12.9～13.8cm、器高2.5～2.8cmと低いものである。口縁部の内側にかえりをもつが、極めて低いものである。輪状つまみの径は、5.4～5.5cmである。14、16、18は、高台の付く杯である。高台が「ハ」の字状に開き、杯部は口縁端部に向けて緩やかに広がる。口径12.3～12.9cm、器高4.3cmである。20は高台が付かないが同様の形態の杯である。口径12.3cm、器高3.5cmを測る。21は高台の付く杯で杯部に丸味を有して深みのあるものである。22と同様の形態の蓋とセットになるものである。22は輪状つまみを有する蓋で天井外面に静止糸切りの後をナデ、口縁端部を折り返している。口径16.2cm、器高3.6cmを測る。23は高台を有する杯で口径16.1cmと大形の杯である。底部外面に静止糸切りの後にナデを施している。



第102図 連行遺跡 14号横穴墓 出土遺物実測図 (2) (S = 1/3)

25、26は角釘である。25は長さ8.1cmで頭部を折り返している。

横穴墓の時期 横穴から出土した須恵器は1～3、5が大谷編年5期、4，6～20が大谷編年6期、21～23が大谷編年8期である。出雲5期、6A期の段階のものは、前庭部から出土しており、出雲



第103図 連行遺跡 15号横穴墓 実測図 (S=1/60)

6 B期、8期のものは玄室、羨道からの出土である。

15号横穴墓（第103図） 南支群で13号横穴墓の北東部で、標高29mの高さに位置し、S89°Eとほぼ東向きに開口している。前庭部は、長さ3.5m、羨門部側の幅1.8mで前の部分がかなり扇状に開く形である。左側の壁が崩れており残りが悪く、全形が不明である。羨道部との境には、幅45cm、長さ70cm、深さ20cmの溝状の落ち込みが掘られている。羨道部は右壁で2.0m、左壁で1.5mを測る。玄室は長方形で幅1.2m、長さ右壁で1.5m、左壁で2.1mである。天井部は、崩落しており形態は不明である。この横穴の大部分が12号横穴と同じ硬い岩盤であり、節理が斜めに入っており、平面プランが歪んだものと思われる。遺物は玄室内から杯・蓋1、2が出土している。

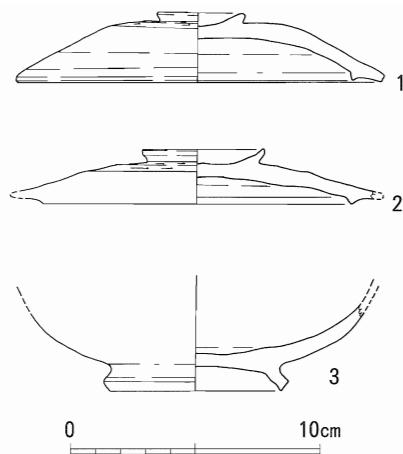
遺物（第104図） 1、2は杯・蓋で天井部に輪状のつまみを有し、口縁部内側にかえりをもつ。1の天井外面に「一」、2の内面に「×」のヘラ記号が残る。3は、高台の付く杯で底部外面に「×」のヘラ記号が残る。横穴墓の時期は、大谷編年6B期である。

(広江)

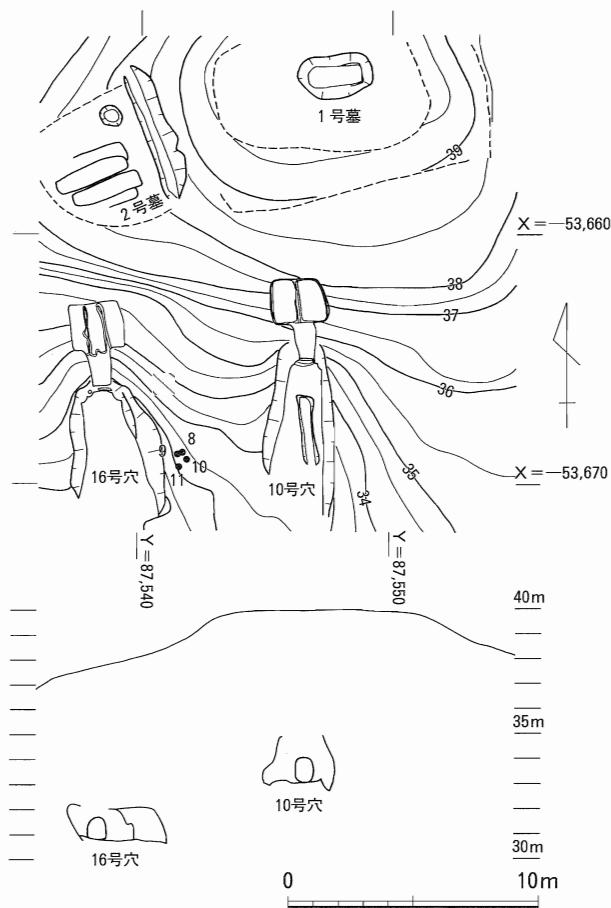
南斜面の横穴墓群（第105図）

客山墳墓群が存する尾根頂上部の南側斜面から、2基の横穴墓が検出された。これらは東側斜面の横穴墓とは、南北に伸びる尾根を挟んだ位置にある。東側から10号横穴墓、16号横穴墓と称している。ともに尾根頂部から6～7m下ったところに開口しており、結果的に16号横穴墓が2mばかり低い位置に作られている。現地形を観察すると、調査区外の西側にも横穴墓の前庭状の窪みが認められ、さらに横穴墓が続いている可能性が高い。

なお、この横穴墓が作られている丘陵は、南側が比較的均質でしっかりした岩盤となっている。北側に向かっては軟質で不均質な岩盤となっており、東斜面の横穴墓は大部分がブロック状に地山が崩落し、天井が失われているのはこのためである。これに比べて南側は横穴墓の残りが非常に多いのが特徴で、横穴墓の型式等も観察がしやすい。



第104図 連行遺跡 15号横穴墓
出土遺物実測図
(S=1/3)



第105図 連行遺跡 南斜面 横穴墓配置図
(S=1/300)

10号横穴墓（第106図）

南北に伸びる尾根が、頂上部から西に派生する部分の、斜面の付け根付近で検出された横穴墓である。南向き斜面と西向き斜面が交差してくびれた部分に、S 6° E とほぼ南向きに開口する。床面の高さは標高33m前後で、直上の客山1号墓墳頂との高低差は約7 mとなる。

前庭部 東斜面の横穴墓は、急峻な地形や後世の耕作のため、前庭部の残存状態が概して悪く、長さが短かったのに比べ、南斜面の10号横穴墓、16号横穴墓は前面に平坦面がよく残っており、前庭部の残存状態も良好である。特に東側側壁の切り込みは南に伸びる丘陵の斜面に沿っているために残りがよい。調査区外に至るため、前庭部の全容を検出できていないが、東側壁で7 m以上の長さを確認できる。

西側の側壁は、若干外方に開きながら前方に伸びており、幅は羨門側の床面で1.2m、斜面側の検出端部で約2 mを測る。全体の長さの割にはさほど幅は広くない感がある。床面の傾斜は緩やかである。羨門前の溝から約1 m前方から始まって、中軸線上に幅30cm（底面）ほどの溝が前方に向かって設けられている。

羨道 奥行1.25m、幅が羨門部分で0.55m、玄門部分で0.85mと奥に向かって広がる平面形を呈す。立面形を見ると、羨門はやや丸みを帯びてはいるもののほぼ長方形を呈している一方で、玄門付近では半円形を呈している。高さはほぼ一定で、0.8m前後である。

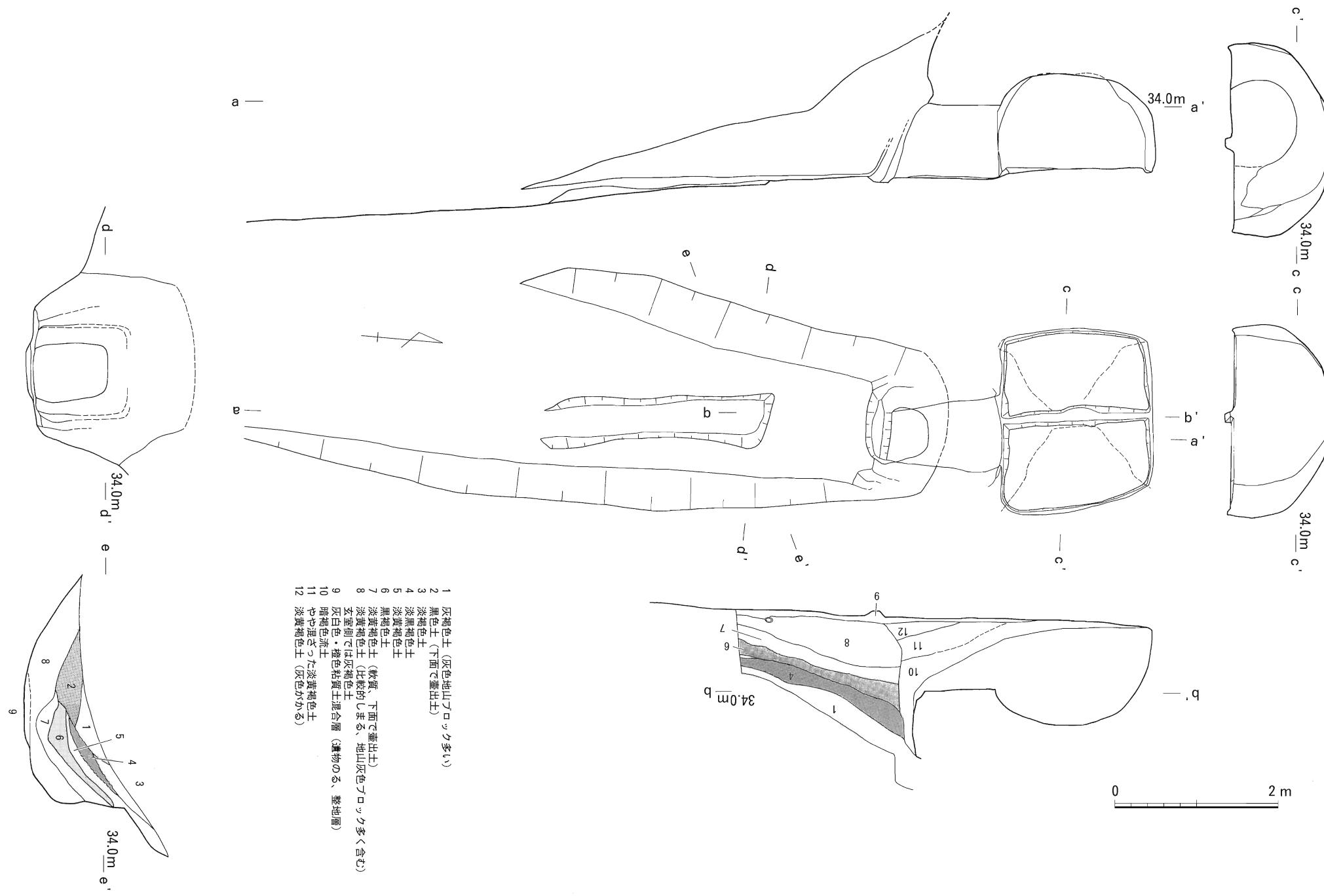
玄門の前面には、他の横穴墓と同様に不整な長方形の溝が設けられる。前庭から羨道にかけての土層を観察すると、明らかにこの溝付近を境にして土層の断絶が認められる。溝が閉塞位置にあたる可能性が高く、本来この溝にはめ込むように、何らかの閉塞が設けられていたと推測される（木の板等が想定される。）。なお、最下層の9層は、断絶することなく玄室まで続いている。9層上面は遺物が出土する面であり、追葬面である可能性が高いが、ラインの見落としてないとすれば、追葬時にはこの溝は生きておらず、羨門の周囲の壁面で板等を受けていたものと想定される。

玄室 玄室は奥行が1.7m、幅は玄門側で2.05m、奥壁側で1.7mと台形状を呈す。高さは1.1mと低く、断面形はドーム形に近いが、天井は四注式で、横長の平面形にもかかわらず、妻入りに加工されている。頂部のラインは不明瞭だが、周囲よりも一段低く作り出す（陽刻状に削り出す）ことによって45×20cm程度の面を設ける意識が見受けられた。四壁と天井を区切る軒線は設けられていない。

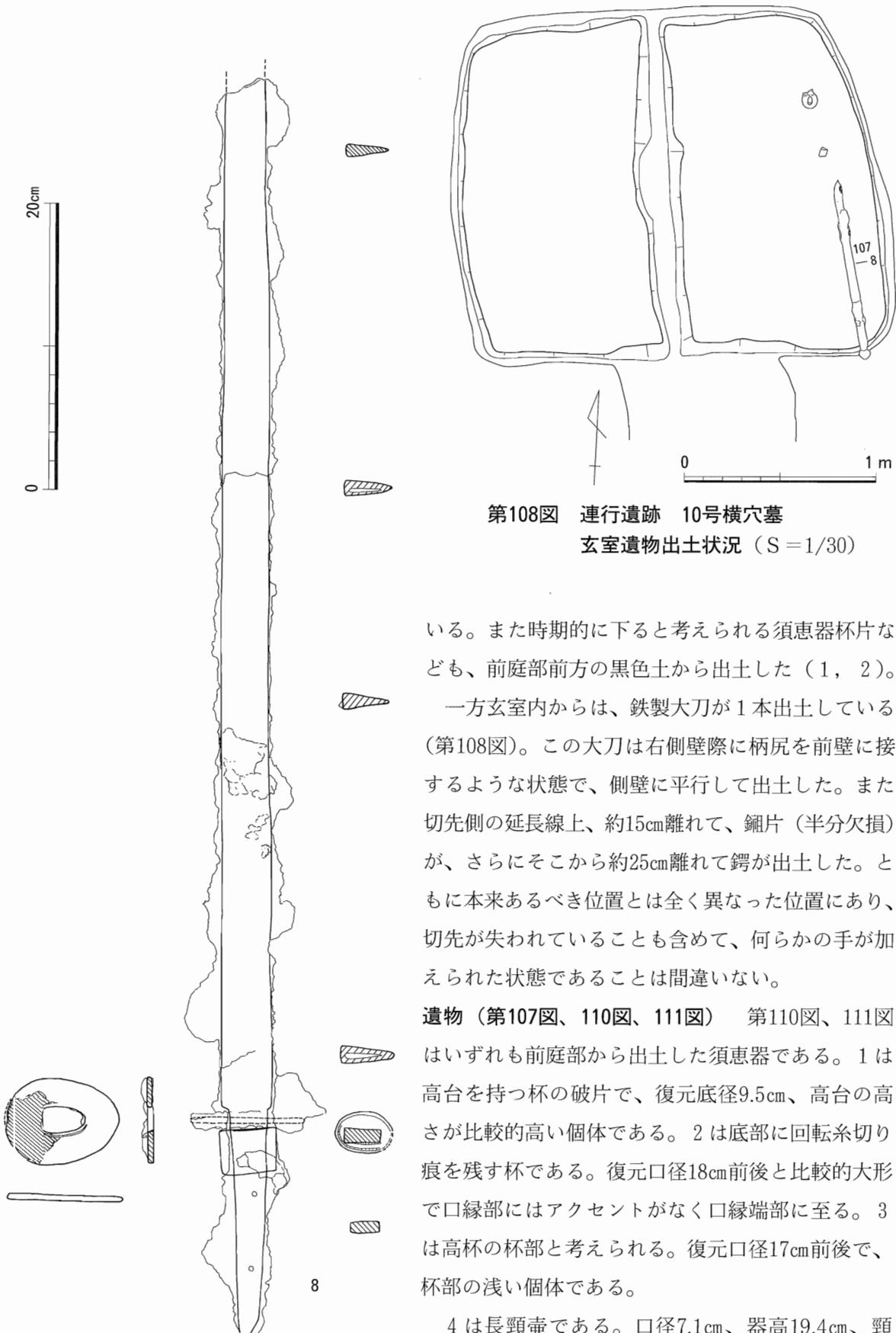
床面の四周と中軸ライン上には、幅の狭い溝が設けられており、2つの区画に区切られているよう見える。深さは四周の溝は5 cm前後と浅いが、中軸の溝はしっかりと掘り込まれ10cm前後の深さがある。溝の底の面は羨道床面と同一平面でつながっており、よって玄室床面は羨道よりも一段高くなっている。

遺物出土状況（第108図、第109図） 前庭部からは、中軸上に設けられた溝の近辺から須恵器や土師器が出土している。溝の起点の肩付近からは須恵器壇（6）が倒立した状態で出土している。またそれより若干前方に長頸壺が転倒して（5）、さらに前方の左肩付近から長頸壺がやはり転倒して出土している（4）。また壇の近くの溝肩付近からは、土師器壺がつぶれた状態で出土した（第109図網部分）が、残存状態が非常に悪く、復元ができなかったため図化も行っていない。これらの遺物は、床面からやや浮いた状態で出土している。

一方前庭部の前方、調査区際付近の黒色土からは、須恵器大甕片数点が散布して出土（7）して



第106図 連行遺跡 10号横穴墓 実測図 (S=1/60)



第107図 連行遺跡 10号横穴墓
出土遺物実測図 (S=1/4)

いる。また時期的に下ると考えられる須恵器杯片なども、前庭部前方の黒色土から出土した(1, 2)。

一方玄室内からは、鉄製大刀が1本出土している(第108図)。この大刀は右側壁際に柄尻を前壁に接するような状態で、側壁に平行して出土した。また切先側の延長線上、約15cm離れて、鋏片(半分欠損)が、さらにそこから約25cm離れて鐔が出土した。ともに本来あるべき位置とは全く異なった位置にあり、切先が失われていることも含めて、何らかの手が加えられた状態であることは間違いない。

遺物(第107図、110図、111図) 第110図、111図はいずれも前庭部から出土した須恵器である。1は高台を持つ杯の破片で、復元底径9.5cm、高台の高さが比較的高い個体である。2は底部に回転糸切り痕を残す杯である。復元口径18cm前後と比較的大形で口縁部にはアクセントがなく口縁端部に至る。3は高杯の杯部と考えられる。復元口径17cm前後で、杯部の浅い個体である。

4は長頸壺である。口径7.1cm、器高19.4cm、頸部最小径4.3cm、胴部径12.8cm、球形に近い胴部で胴部下半には回転ヘラケズリを施す。底部やや上方には「≠」状のヘラ記号が見られる。5は肩の張っ

た胴部に外反して延びる長い頸部がつく長頸壺である。底部には高台がつき、底面には「○」形のスタンプ状のヘラ記号が見られる。口径9.7cm、頸部最小径4.6cm、胴部最大径15.1cm、底径9.3cm、器高20.3cmを測る。6は鰯である。胴部は最大径10.6cm、高さ6.5cm前後と扁平で、底部には静止糸

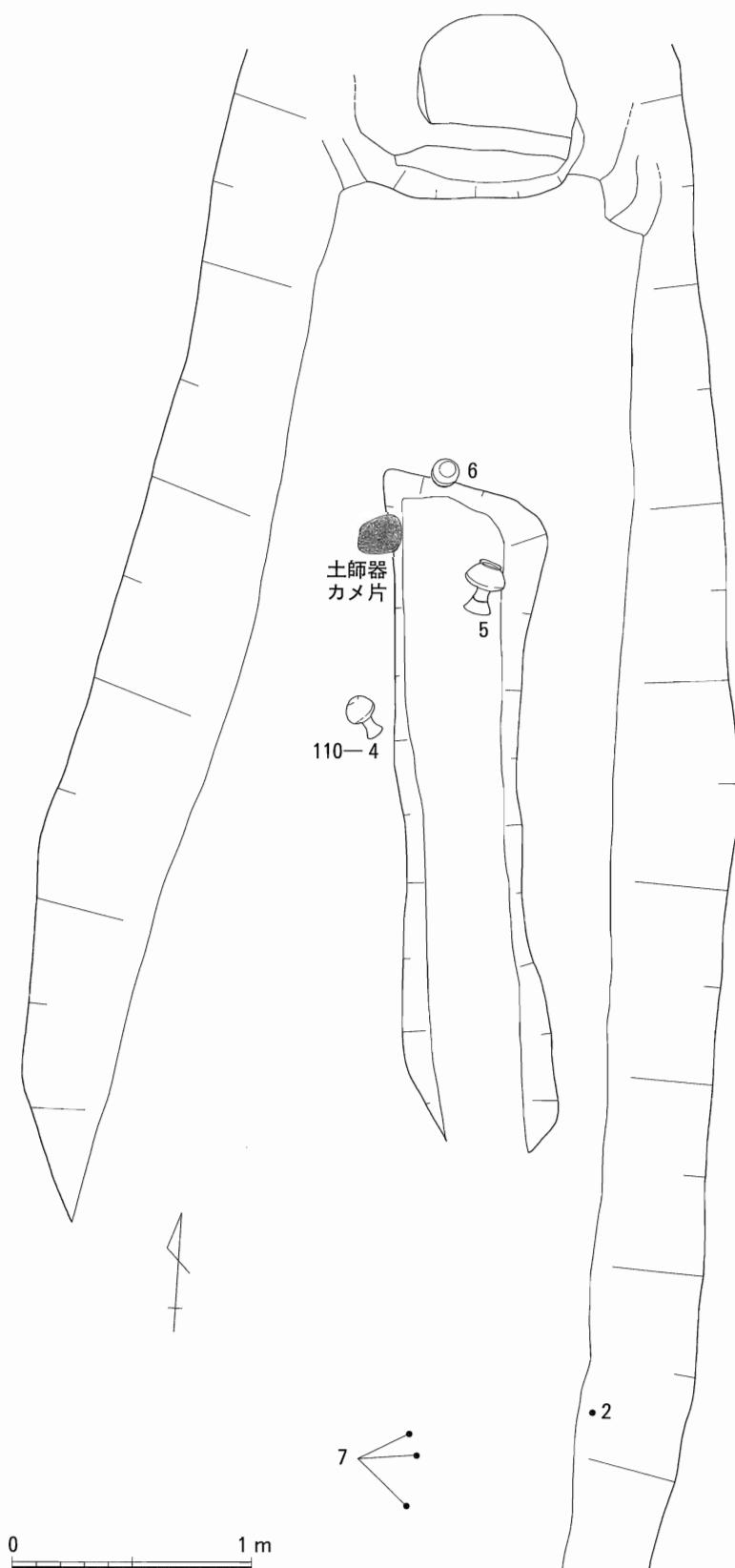
切り痕が残る。口頸部は高さ5cm前後と短く、頸部と口縁部との間にあいまいながら段を設けている。口径9.9cm、器高11.5cmを測る。

7は須恵器大甕の口頸部である。復元口径41cm前後、復元頸部最小径26cm前後で、上部3段には振幅の浅い櫛描波状文を施している。

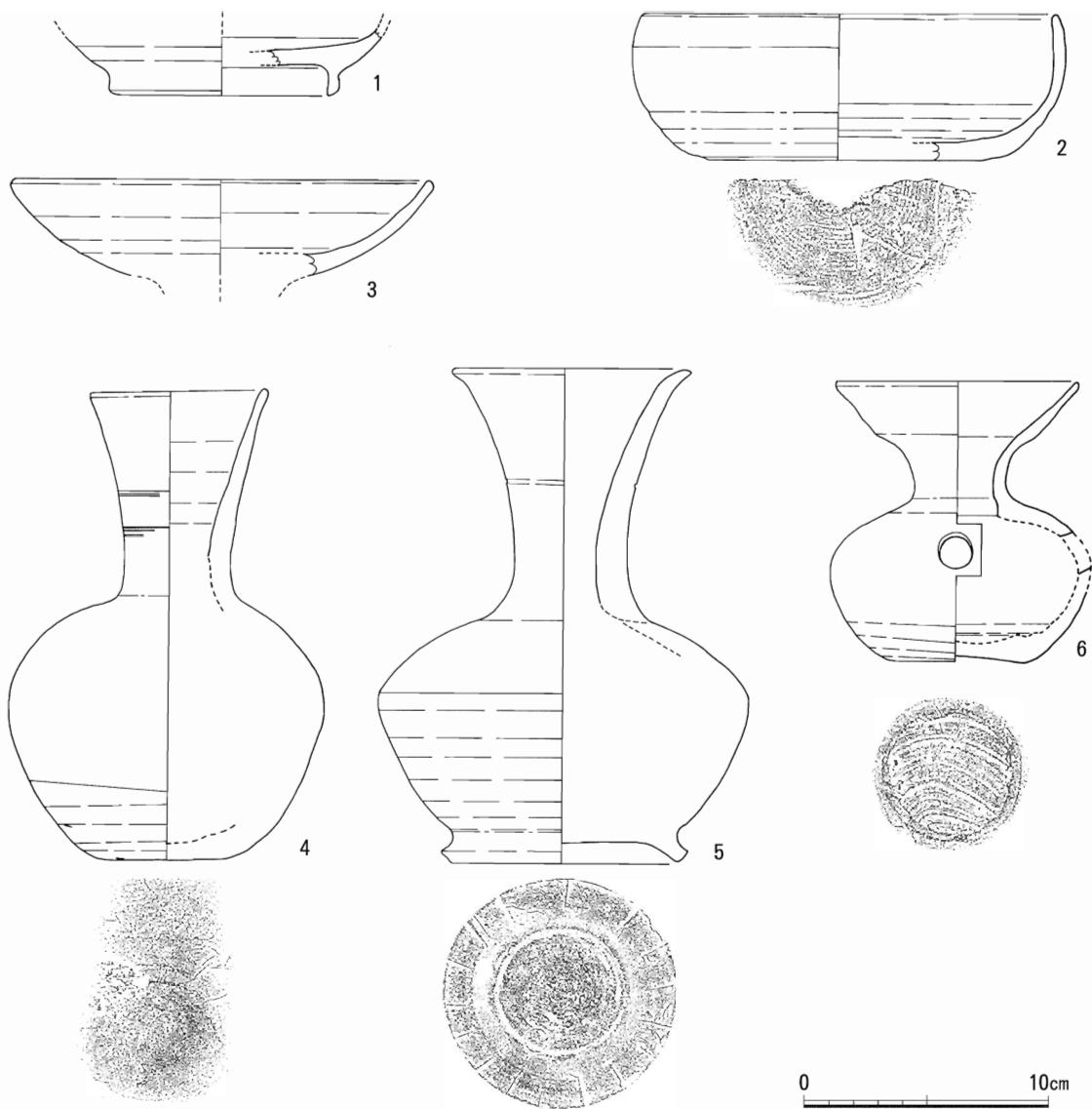
第107図は玄室で出土した大刀である。切先を欠損しているが、現状で全長87.7cm、刀身長71.7cm、茎長16.0cmを測る。刀身は若干膨らんでいるが、現状で厚さは1.2cmを測る。茎は茎尻に向かって次第に幅が細くなり、茎尻は刃部側をカットした形である。両関で、茎厚は基部付近の現状で1.0cm、2か所の目釘孔が見られる。

鍔は鉄製で、長径7.8cm、短径6.05cmの平面卵形を呈す。スカシ等は見られない。

鋲と考えられる金具は、一部は茎の関付近に付着し、大半は大刀から離れて出土している。図では付着場所に復元しているが、本来的には刀身の基部にあったものかもしれない。厚さ2mm前後の薄い鉄板製で破損している上、一部を欠損しているが断面橢円形を呈し、長さ3.1cm、長径4.0



第109図 連行遺跡 10号横穴墓前庭 遺物出土状況 (S=1/30)

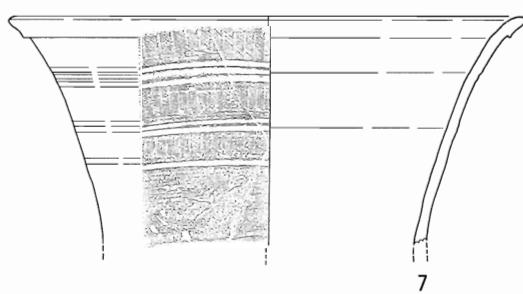


第110図 連行遺跡 10号横穴墓 出土遺物実測図 (2) (S = 1/3)

cm、短径2.3cmを測る。

横穴墓の時期 須恵器蓋杯類の出土がなく、時期の確定はしにくいが、最も古い特徴を持つ須恵器は4の長頸壺で、大谷編年出雲5～6期に併行するものと思われる。当該期1点のみで、さらに古い築造の可能性も捨てきれない。なお、1, 2は横穴墓築造とは直接関係ない遺物、5, 6は出雲7～8期で、追葬もしくは再利用時の遺物と考えられる。

(丹羽野)



第111図 連行遺跡 10号横穴墓
出土遺物実測図 (3) (S = 1/6)

16号横穴墓（第112図） 10号横穴墓の西側に平行するように掘られており、客山2号墓の南側に位置する。S 9°Eとほぼ南向きに開口する。

前庭部 10号横穴墓と同様に前庭部の残りが良好である。羨門側から入り口に向かって広がる形態のもので、羨門に近い場所から前の部分で折れ曲がりながら広がっている。地形の制約から、西側がやや短くなっている。規模は、長さ5.3m、幅は羨門側の床面で1.0m、前方の広い部分で3.0mである。

羨道 奥行き1.4m、幅が羨門部分で0.7m、玄門部分で0.9mと奥に向かって広がる平面形である。天井部も殆ど残っており、断面をみると羨門付近では長方形を呈し、玄門付近は半円形を呈している。高さは羨門部で0.9m、玄門部で0.96mとやや高くなっている。床面は、前庭部より10cm程高くなっている。

玄門の前面には、不整形な溝が設けられている。前庭から羨道にかけての土層を観察すると、この部分での土層の断絶は認められない。この溝は他の横穴においてもみられる施設であり、10号穴同様に閉塞のための施設と考えられる。溝は、長さ80cm、幅12~18cm、深さ15cmで断面がV字状を呈している。溝の横には径25cmの円形の穴が空けられており、閉塞のための施設の一部と考えられる。前庭部から玄門部にかけて黄褐色土が堆積し、前庭部ではその上に黒色土がみられる。この土層中から須恵器が出土している。

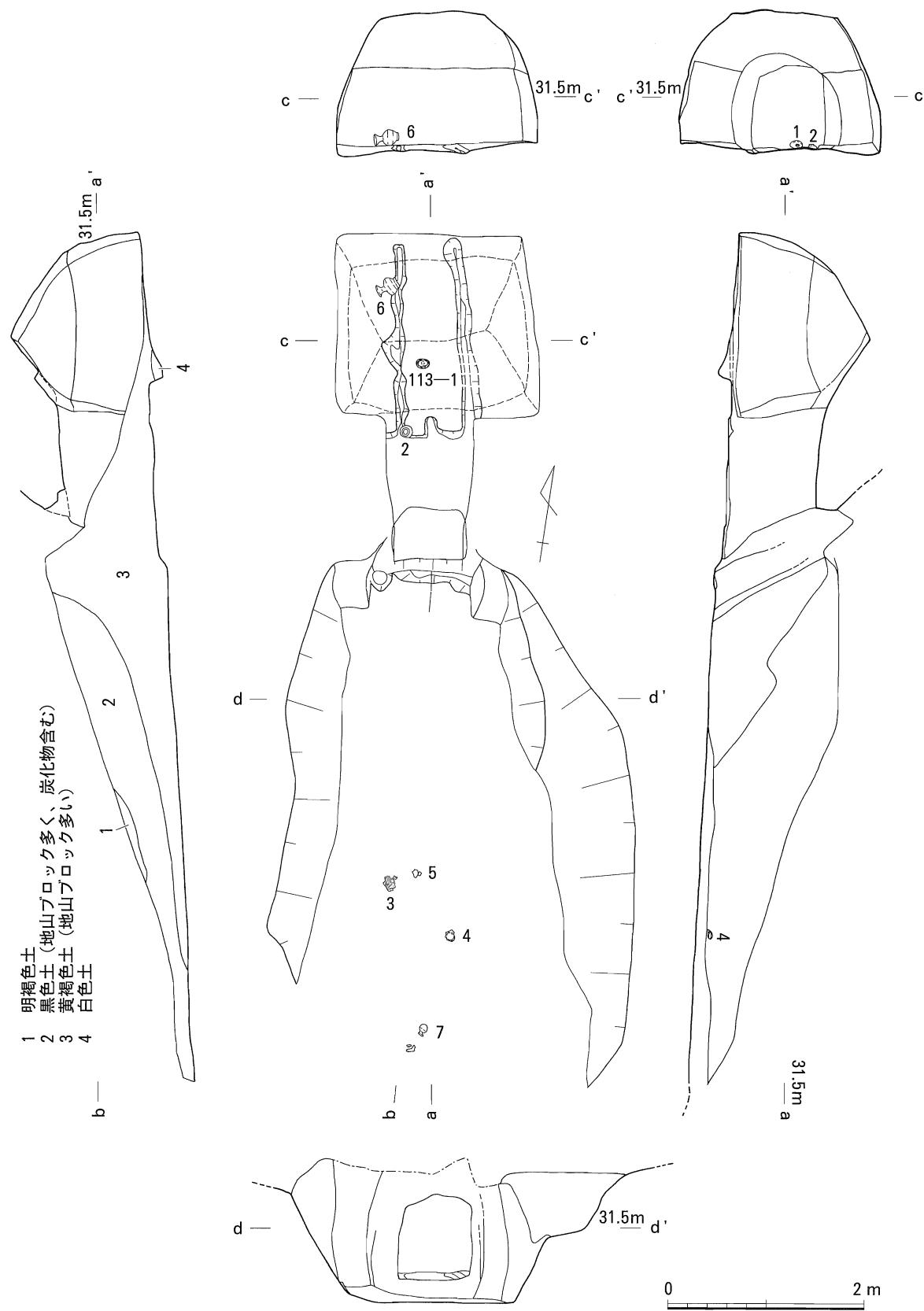
玄室 玄室は奥行きが1.83m、幅は玄門側で2.06m、奥壁側で1.9mとほぼ正方形を呈している。高さは1.4mで、断面形は不整形な家形で、天井部は四柱式で平入りに加工されている。頂部には長さ1.05mに渡り棟線が表現されており、四壁と天井を区切る界線が設けられている。四壁は、やや内側に傾斜しながら立ち上がり、天井につながる。横断面は全体に丸みを持ちながら天井部へと立ち上がり、縦断面の壁は膨らみがあるものの、天井は鋭角的に立ち上がる。

床面には中軸線に沿うように2本の溝が平行して堀り込まれており、床面を3分割する形となっている。床面は中央と左右は同一の高さである。2本の溝は奥壁近くから羨道部まで伸びており、玄室より羨道部が一段低くなっているため、溝の底面と羨道部の床面が同じ高さとなっている。

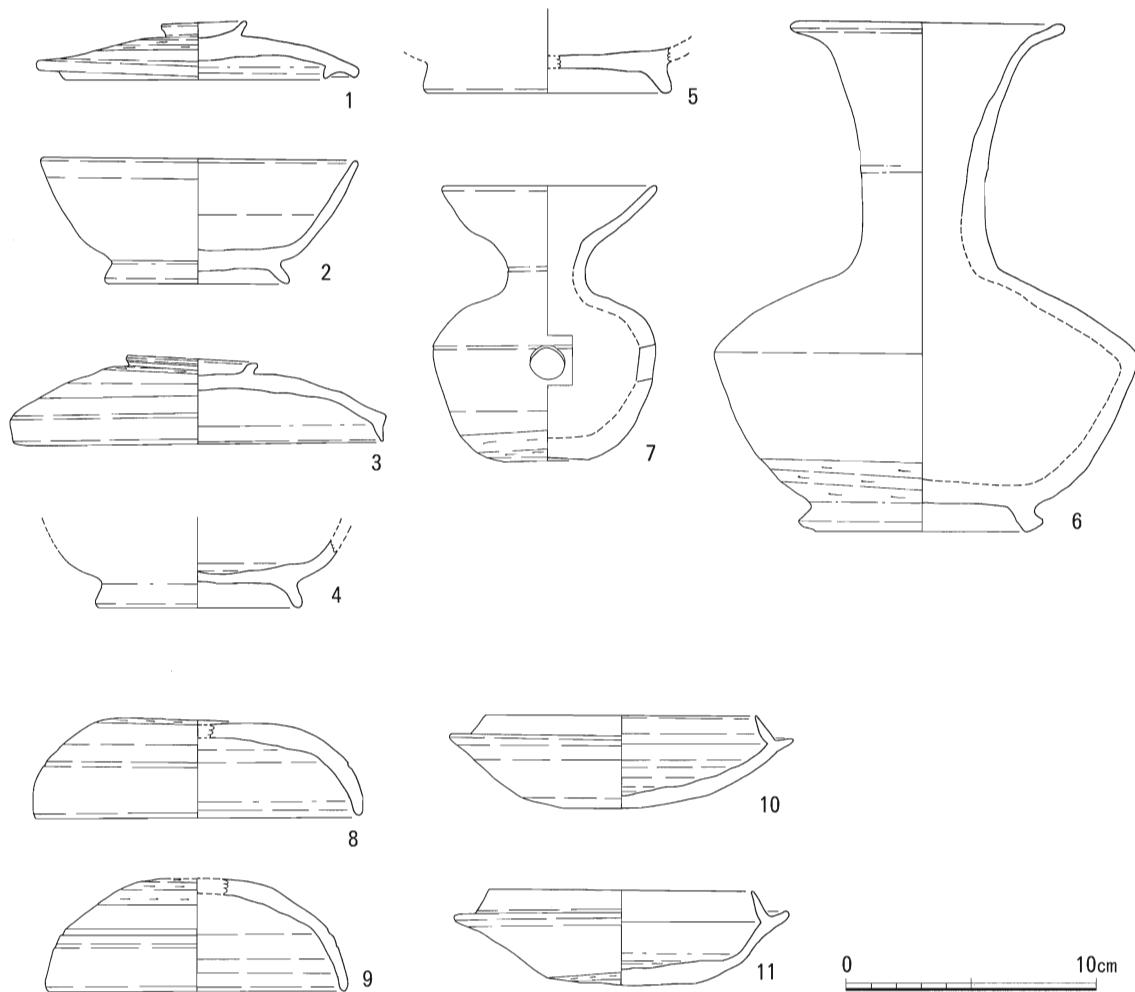
遺物出土状況（第112図） 羨道部の前側からは、杯（3~5）、壺（8）が床面からやや浮いた状態で出土している。遺物を含むこの土層は、黒色土で前庭部のみにみられ、玄室には堆積していない。玄室内からは、杯（1, 2）、壺（6）が床面上から出土している。杯（8~11）は前庭部の東側の上部から出土しており、10号穴か16号穴に伴うものは不明である。

遺物（第113図） 1, 2は杯蓋・身のセットで、1は輪状つまみの付く蓋で、口縁部の内側にかえりを有している。口径13cm、器高2.4cmである。2は、「ハ」の字状に開く高台の付く杯で体部は直線的に立ち上がる。口径12.5cm、器高5.1cmを測る。3, 4もセットになる杯である。3は輪状つまみが付き口縁端部を折り返しており、嘴状になっている。4は高台を有す杯である。底部外面に回転糸切り痕を残している。5も高台の付く杯で底部外面に静止糸切り痕が残る。8は、壺で口縁部より胴部の径が大きくなり、口縁部があまり開かない形となる。7は、高台を有す長頸壺で体部の肩が鋭く張り出す形である。頸部の途中に1条の沈線を入れる。8, 9は蓋杯の蓋で天井外面に回転ヘラケズリを施す。10, 11は杯身で口縁端部が内傾しており、器高も浅いものである。

横穴墓の時期 1, 2は大谷編年6B期で横穴墓の初葬段階のものと思われるが、3~7は、大谷編年8期でこの時期に追葬か墓前祭祀が行われた可能性がある。 (広江)



第112図 連行遺跡 16号横穴墓 実測図 (S=1/60)



第113図 連行遺跡 16号横穴墓 出土遺物実測図 (S = 1/3)



発掘作業風景

西斜面部の調査

客山墳墓群の尾根を挟んで西側の斜面からは古墳時代後期から奈良時代を中心とした集落関連遺構が検出された。遺構は中腹に広がる平坦面とそれ以下の斜面を中心に検出されているが、総体的に後世の耕作による削平が大きく、失われた遺構も多いものと推測される。遺構は、検出されたレベルによって大きく最上段（標高25m前後、SK01、SK02）、上段（標高18～20m前後、SD01、加工段1、2、3）、中段（標高14～15m前後、加工段4～7等）、下段（標高8～9m前後、加工段8～12）の遺構群に分けることができ、以下レベルの高い遺構群の順に記載していきたい。

西斜面最上段遺構群

調査区の北側、標高25m前後の斜面で検出された遺構で、SK01とSK02の2遺構のみである。これらの周辺も後世の削平により平坦面が形成されており、辛うじて残存していたものである。

SK01（第115図）

標高約25mの斜面に、等高線方向と長軸を直交させて設けられた土坑である。小口部分の斜面下方側は失われているため、全容は不明だが、検出時で長さ0.81m、底面での幅は東側で0.43m、西側（下方側の残存端部）で0.36mと小形長方形の土坑で、東側が広くまた底面レベルも高い。深さは検出面から15cm前後である。

底面の西端からは、完形の須恵器杯身が2点出土した。1点は底面に伏せて置かれ、もう1点はそれに一部重なるように上向きに置かれていた。SK01の性格については、その形状や遺物の出土状況から見て、土壙墓の可能性がある。

遺物（第116図） 1、2ともに口縁の立ちあがりはさほど高くない個体で、1は口径10.6cm、最大径13.0cm、器高3.8cmを測る。2は口径10.2cm、最大径13.0cm、器高3.8cmを測る。大谷編年出雲5期に併行すると考えられる。

SK02（第117図）

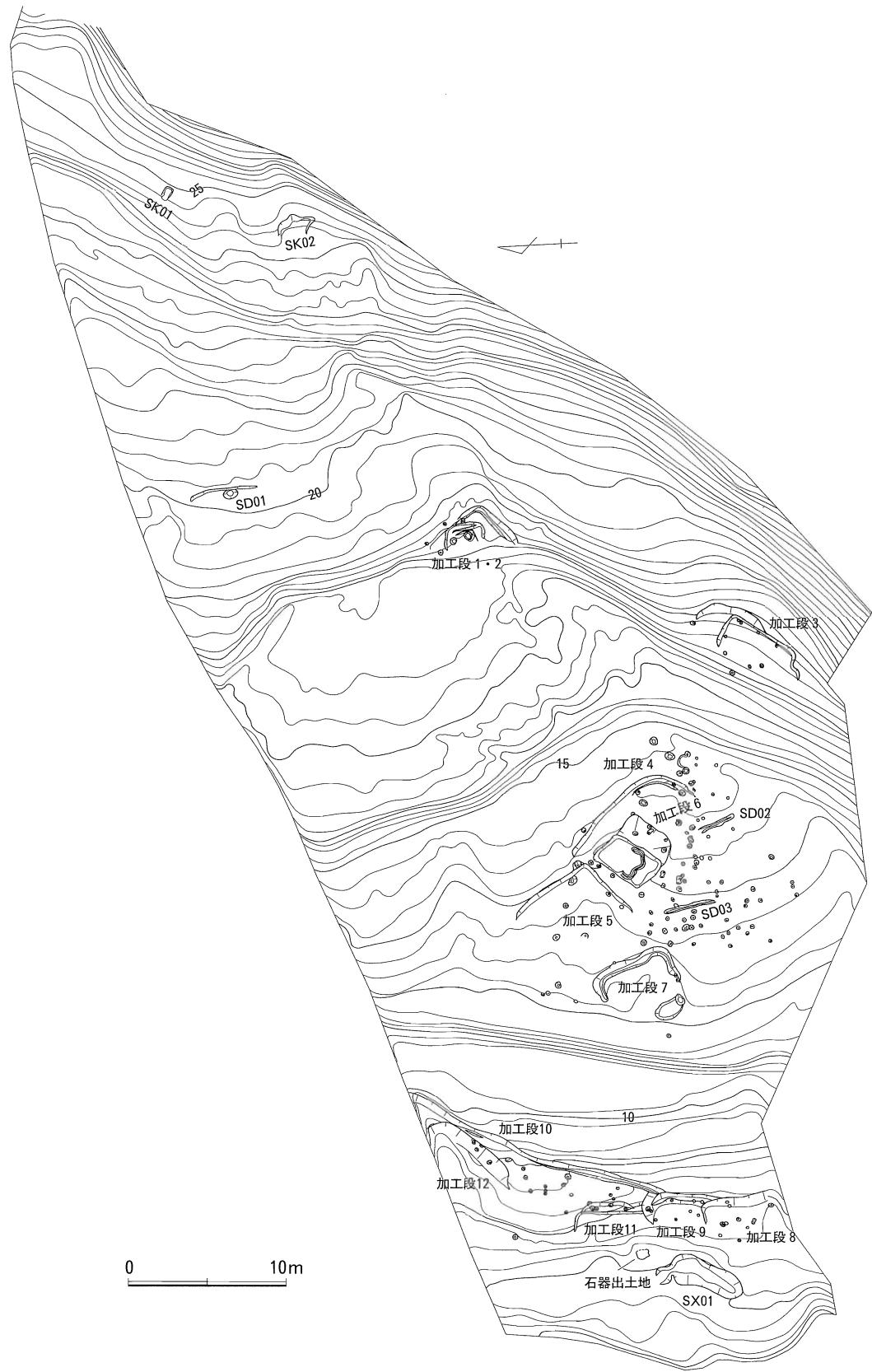
SK01の約8m南側で検出された落ち込み状遺構である。1.4×1.5m程度の不定形の落ち込みで、底面はほぼ平らに加工されている。遺物等は出土しておらず、時期、性格ともに不明である。

西斜面上段遺構群

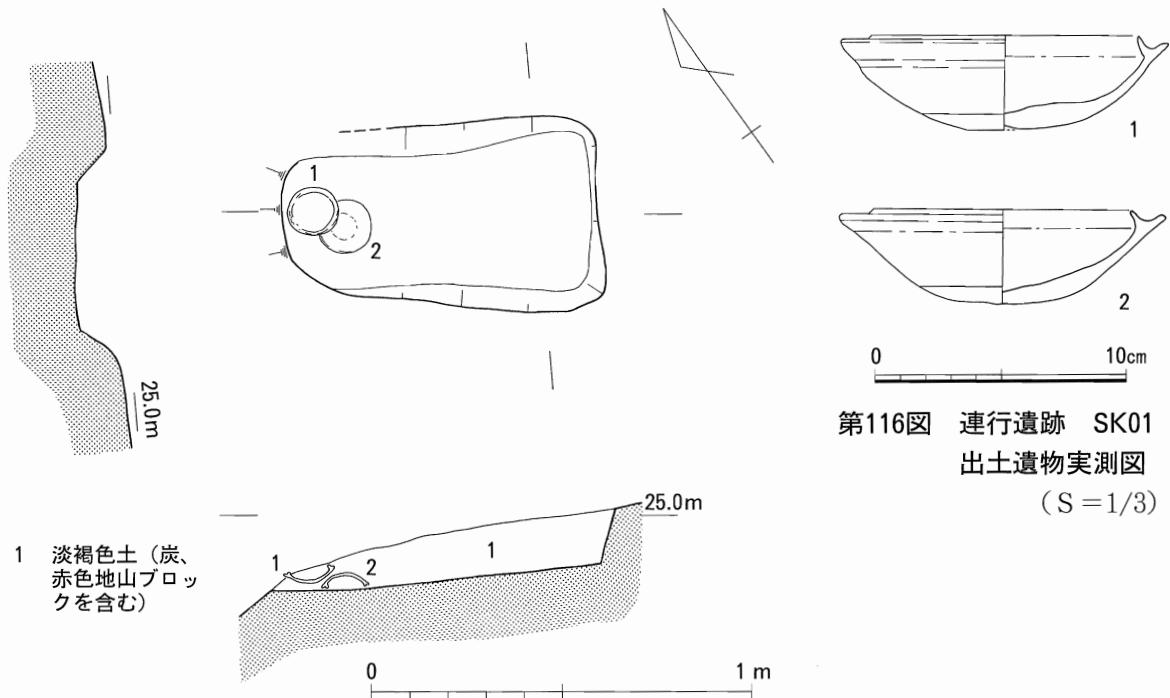
西斜面の中段、標高約17m付近の調査区北半に、広い平坦面が広がっている。この平坦面自体は後世の耕作のための削平により形作られたものであるが、この平坦面に切られる形で標高19m付近に加工段1・2が検出された。またこの加工段1・2の南西約16mの急な斜面を削り出して、加工段3が設けられている。一方、加工段1・2の北東側上方に広がる緩斜面からは、SD01が検出された。

SD01（第118図）

西斜面の中段、標高約20m前後の調査区北半に、畠等として利用されていた緩斜面が広がっている。この面で唯一検出された遺構がSD01である。およそ南北方向に伸びる細くて浅い溝に付属する形で深い土坑が検出され、遺物が出土している。溝は南側が自然に消滅しており、全形を保って



第114図 連行遺跡 西斜面 遺構配置図 ($S = 1/400$)



第115図 連行遺跡 SK01 実測図 (S=1/20)

第116図 連行遺跡 SK01
出土遺物実測図
(S=1/3)

いない可能性が高いが、検出時で長さ4.5mを測り、北端はおよそ90°西に曲がるのが確認できたが、斜面下方に向かってすぐ消滅している。溝の幅は北側では底面で15cm前後あるが、南側に行くにつれて狭くなり、端部では3cm前後にまでなる。

北端から約3mの部分には、2つの浅い皿状の土坑が設けられている。2つの土坑は東西に連接しており、東側は径30cm前後と小形、西側は60×80cm前後の楕円形である。西側の土坑内からは、土師器高杯が3個体、まとまって出土した。うち1個体(3)は正立して、残り2個体は横倒しの状態で出土している。また土坑内からは炭化物も多く出土している。またこの土坑から西側にかけて焼土が広がっており、その範囲は65~130cmに及ぶ。

遺物 (第119図) 土師器高杯が3点出土している。1は外方に大きく開く杯部を持つ高杯で、外面にわずかながら段の痕跡的なアクセントが認められる。形態的にはややゆがんでおり、脚部は差し込み式である。2は低い位置に痕跡的な段のアクセントを持つ深い杯部に、分厚で比較的低い脚部を接合した高杯である。復元口径15cm前後、器高11.1cm、軸部径4.0cm、脚端径9.2cmを測る。口縁はややゆがんで波打っており、脚部は縦方向のナデを施している。3は深めのボール状の杯部に小形で低い脚が接合している。脚端の径は6.0cm、脚の接合部付近の最小径4.15cm、脚部の高さ2.3cm程度である。1は茶褐色、2、3は赤褐色を呈す。

これらの時期については、決め手にかけるが、古墳時代中期の土師器高杯の特徴を一定程度残しながらも、全体的に退化していることから判断して、6世紀頃と考えておきたい。遺構の性格については不明といわざるを得ないが、高杯のまとった出土状況や土坑に付随した焼土の広がりなどから、祭祀的色彩が濃いとの印象が強い。

加工段1、加工段2（第120図）

標高20m前後に広がる緩斜面の南西際で検出された。少なくとも2つの遺構が重なっているが、西側（斜面下方側）が後世の削平により削り取られてしまっており、ともに全容は不明である。加工段1の覆土を切って加工段2が形作られているので、明らかに加工段1が古い。

加工段1はほぼ直線的に伸びる壁がほぼ直角に交わっている。床面の壁際の一部には幅6～15cmほどの浅い溝が認められる。遺構の明瞭なコーナーは1か所しかないが、北西端付近にわずかながら曲がる様相が認められ、この部分をコーナーに近い部分とすれば長さ4.3m以上となる。壁や床に数穴のピットが検出されてはいるがいずれも浅く、明瞭にこの遺構に伴うと判断できる柱穴は検出されなかった。その形状や壁体溝に類似した溝の状況から、古墳時代の堅穴住居の可能性がある。

加工段2は加工段1の内側に重なって検出された落ち込みである。西側は後世に削り取られているが、残存する部分では一辺2.3mの方形を呈す。壁からやや離れて浅い溝も検出されている。柱穴状のピットも検出されているが、ともに20cm前後と浅い。

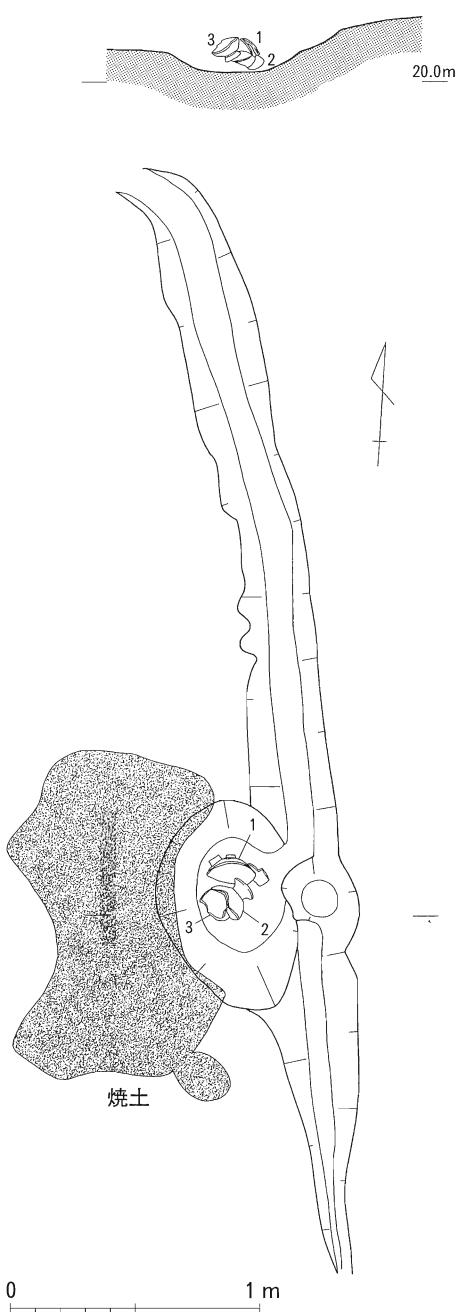
遺物（第121図） 加工段1と加工段2は、ともに覆土に黒色土が堆積しており、土層断面におい



第117図 連行遺跡 SK02 実測図 (S=1/20)

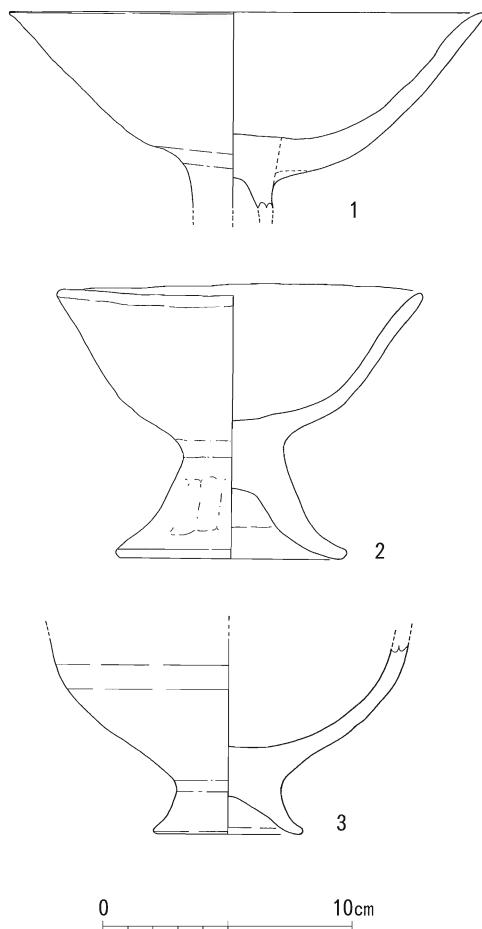
では加工段2がやや薄い色を呈していることが確認できたものの、平面的に掘り進めていく過程では両者を区別することができなかった。よって、時期が違う両遺構の覆土出土遺物を分離して取り上げることはできなかった。ただし、掘り進む過程や残った土層断面ベルトの掘削の過程で、遺物の量は加工段2の覆土が多いという印象は持っている。また加工段2からは、以下に述べる新旧いずれの遺物も出土している。いずれも覆土から出土した遺物である。

第121図1～9は須恵器である。1、2はそのうちで古い特徴を持つものである。1は蓋の破片である。天井と口縁の間には変曲点があり、口縁端の内面には段が見られる。2は杯身で復元口径12.5cm前後、復元最大径14cm前後とやや大形である。口縁は垂直に近い角度で立ちあがり、口縁端には面を持つ。



第118図 連行遺跡 SD01 実測図
(S = 1/30)

3～9は新しい特徴を持つ一群の須恵器である。3、4は輪状つまみを持ち、端部を垂下させるタイプの蓋である。3は復元口径16cm前後、つまみ径5cm前後、器高2.7cm、4は口径16cm、つまみ径4.1cm、器高3.2cmを測る。5は丸みのある杯部の底に高台が付くタイプの杯身で、口径13.4cm、底径8.2cm、器高4.3cmを測る。6は底部を欠損しているが、5と同様の高台が付く杯身であろう。復元口径13cm前後を測る。7、8は口縁



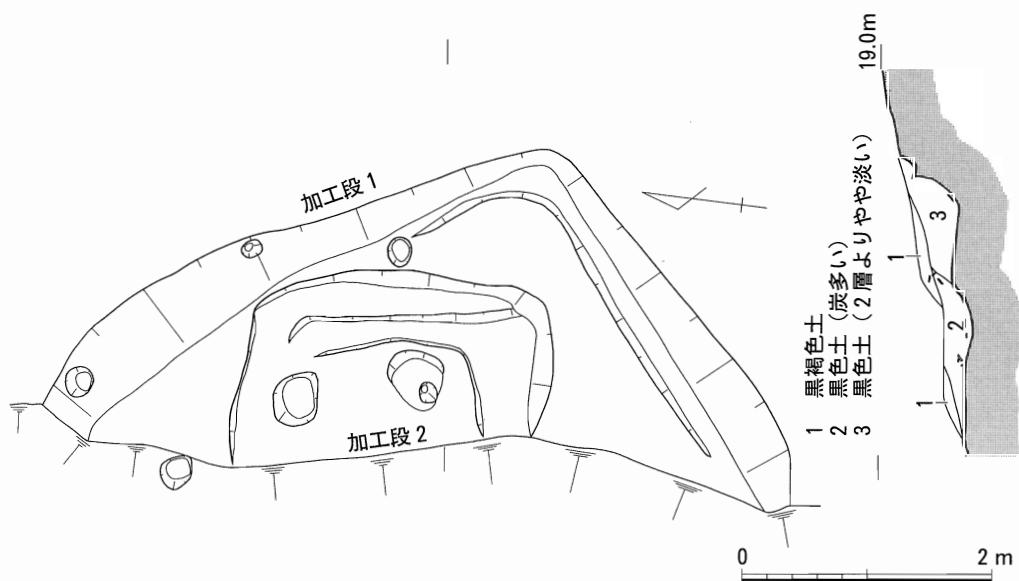
第119図 連行遺跡 SD01 出土遺物実測図
(S = 1/3)

端部に「S」字状のアクセントがつき、高台が付かないタイプと考えられる杯身である。底部は失われているが、底から口縁にかけて傾斜を持って立ちあがるようである。7は復元口径17cm前後とやや大形、8は復元口径13.5cm前後を測る。9は口縁端部にアクセントがなく、あまり内傾もしていないため、高台を持つタイプの杯身であろうか。復元口径15cm前後とやや大形である。

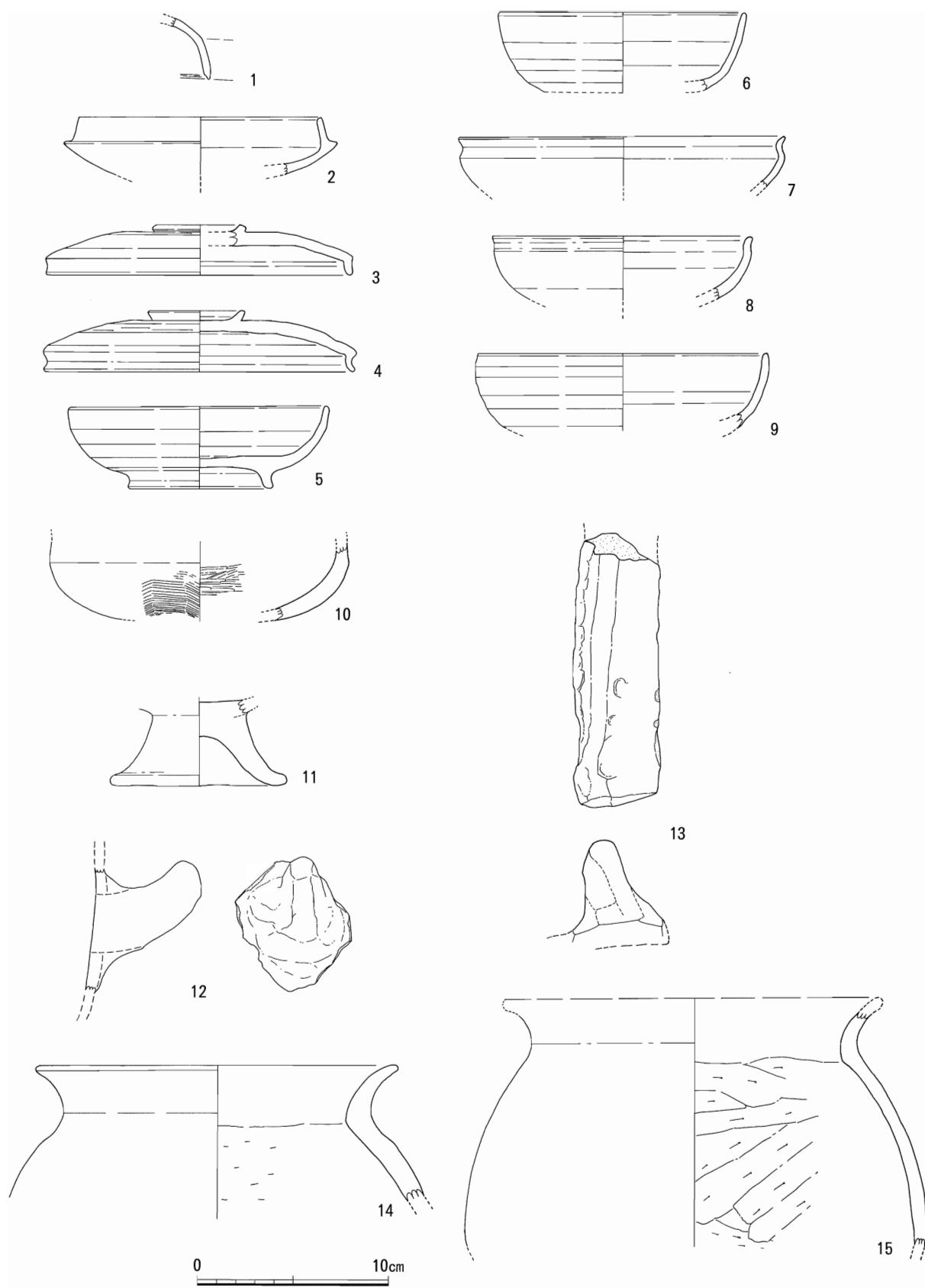
10～15は土師器である。10は土師器杯身である。復元径15.5cm前後底部から口縁にかけて、変曲点を持って立ちあがっており、内外面丹塗りである。外面にはクモの巣状にハケメを施し、内面は細かいヘラミガキを施している。11は高杯の脚部で、底径9.1cm、脚高3.7cmと低い脚である。12は甌の把手部分で、器面を貫通して把手を接合している。13はカマド形土器の焚き口部分に付く「ひさし」部と考えられ、本体から剥がれている。14、15は土師器甌である。ともに頸部外面は丸みを持っており、口縁は外反する特徴を持つ。14は復元口径19cm前後、15は口縁端を欠いているが20cm程度の口径になるものと考えられる。

遺構の時期 須恵器を見ると、遺構の重なりと同様におおよそ2時期に分かれそうである。1、2はその特徴から大谷編年出雲2期と考えられ、およそ6世紀前半代と考えられる。3～6は大谷編年出雲7～8期、高広編年III B期に併行し、おおよそ7世紀後半～8世紀前半代と考えられる。7、8についても、底から口縁にかけてかなり傾斜を持って立ちあがるなど同種の杯身の中では古相と考えられ、同様の時期と考えて大過ないものと思われる。土師器については、10、11は古い前者の時期、12、13は新しい後者の時期に併行すると考えられるが、14、15については判断できない。

さて新旧二つの遺物と遺構の関係であるが、遺構の前後関係とそのまま対応させれば、加工段1が6世紀前半となる。加工段1が古墳時代の竪穴住居跡とすれば矛盾はない。加工段2については後者の遺物群の時期、7世紀後半～8世紀前半代となる可能性が高い。



第120図 連行遺跡 加工段1・2 実測図 (S=1/60)



第121図 連行遺跡 加工段1・2 出土遺物実測図 (S=1/3)

加工段1、加工段2周辺出土の遺物（第122図） 第122図は加工段1、2の下方、削平された平坦面に堆積した層から出土した遺物である。加工段1、2やその他の削平された遺構に伴うものと推測される。1～6は須恵器蓋である。1は輪状つまみを持つ蓋で、口縁部は垂下して肥厚する。口径14.6cm、つまみ径4.8cm、器高2.7cmを測る。2も輪状つまみを持つが、天井と体部の境が明瞭な稜となっており、天井部には回転糸切り痕が見られる。つまみ径は4.7cmである。4～6も1と同様のタイプの蓋だが、5はつまみの剥離痕から見て、宝珠状のつまみがついていたものと考えられる。4は復元口径16.5cm前後、口縁部は内湾している。5は復元口径18.5cm前後、垂下する端部の長さは短くまた端部に向かって薄くなっている。6は復元口径13.5cm前後と小形である。3は宝珠状のつまみの部分である。

7～14は須恵器杯類である。7～9は高台のつかない無蓋の杯身である。7は復元口径16.5cm前後、底径12.5cm前後、底部には糸切り痕が残る。口縁部は特に内湾することもなく、端部に向かって次第に薄くなって円くおさめている。8は復元口径14.5cm前後、復元底径11cm前後、器高4.0cm前後で底部には回転糸切り痕が残る。口縁はやや内湾し、端部は内側に肥厚している。9は復元口径16.5cm前後で、口縁部はやや内湾し、端部はやや内側に膨らむ。

10～14は高台のつく杯身である。復元口径16.5cm程度、復元高台径10cm前後、器高6cm前後で、底部には回転糸切り痕が見られる。体部から口縁部にかけては外方に開いてほぼ直線的に立ちあがっている。11は高台径9.2cmで、底部には回転糸切り痕が見られる。12は高台径9.4cmで、底部には静止糸切り痕が残る。13は壺の底部となる可能性もある。復元高台径12.5cm程度、底部には回転糸切り痕が見られる。15は皿であろうか。復元高台径13.5cm程度で細くて高い高台を持つ。

16は須恵器壺の口頸部である。復元口径13cm前後、頸部から口縁部にかけては丸みを持った段を設け、口縁端部は外方に突出させて上面に平面を設けている。17、18は小形の須恵器壺である。17は復元底径が6.5cm程度、頸部が軽くくびれており底部には回転糸切り痕が残る。18は復元底径7.5cm程度、底部から直線的に垂直に近い角度で立ちあがっている。底部には回転糸切り痕が残る。

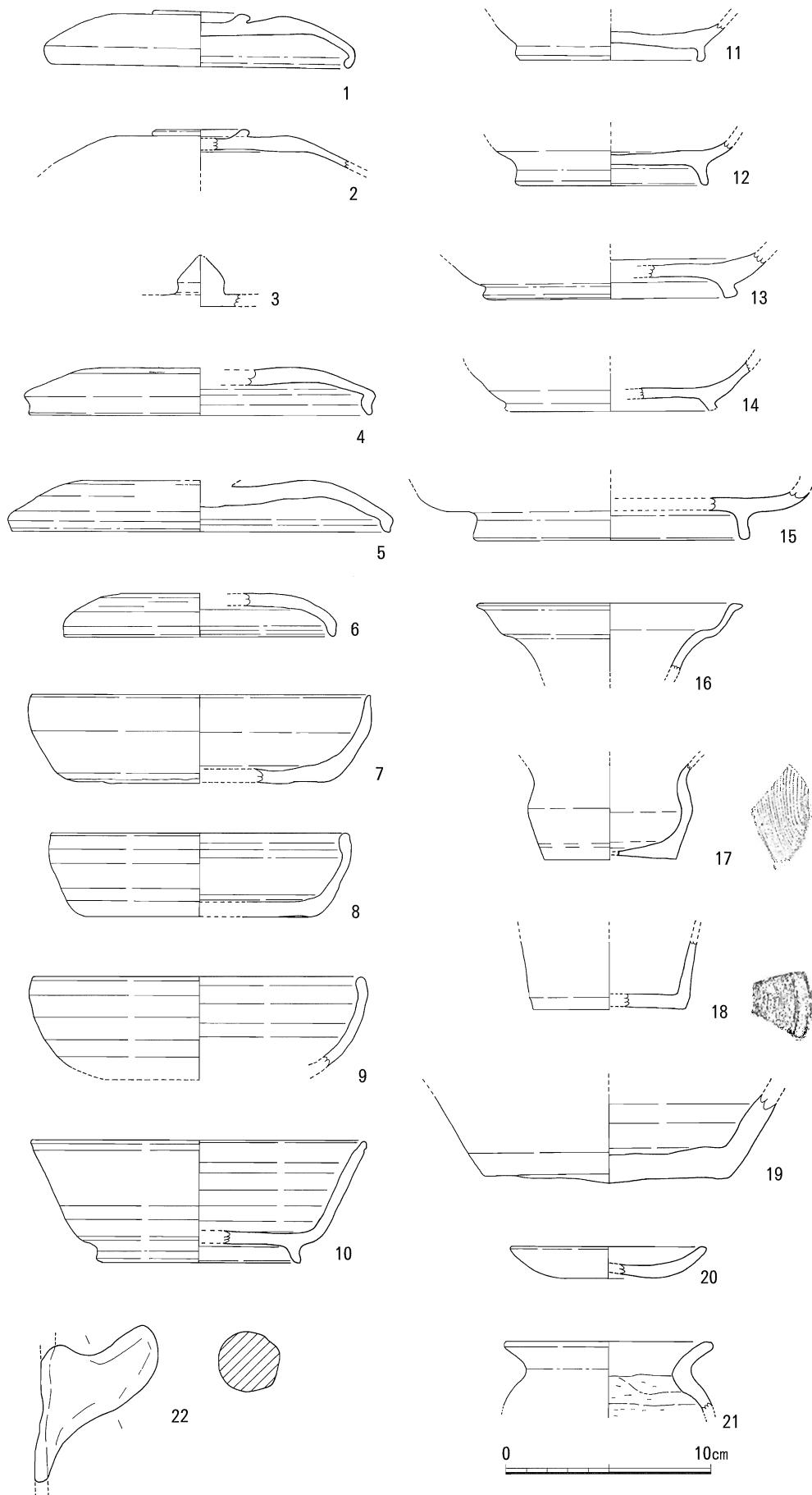
20は土師質土器の小皿である。全体に丸みを持って作られており、口径9.6cmを測る。21は土師器の甕である。復元口径10.2cmと小形で、頸部が大きくくびれ、端部は丸く収める。22は土師器甕の把手片である。

これらの遺物の時期については、加工段1、2の時期のものに加えてより新しい時期のものが加わっている。加工段1の時期に近いものとしては16の壺、加工段2の時期に近いものとしては輪状つまみを持つ蓋類と杯身の一部があたるだろう。一方で7～10の杯身や15の皿などは8世紀後半代まで下る可能性が高く、17～19はさらに下って平安期になる可能性がある。

加工段3（第123図）

加工段1から約16m南側の比較的急な斜面の背後をカットし、平坦面を作り出した遺構である。全体として長さ約7.5mほどの平坦面だが、2つの遺構が重なっている可能性が高い。ひとつは一段低く床面が作り出されているように見える比較的コーナーが明瞭な平坦面で、これを加工段3-1とする。一方加工段3-1の北側にはコーナーが不明瞭で丸みを帯びた平坦面が広がっており、これを加工段3-2とする。

加工段3-1は長さ約4.7m、幅は斜面側が流出しているため不明だが、検出時で2.2mほどの長



第122図 連行遺跡 加工段1・2周辺遺構外 出土遺物実測図 (S=1/3)

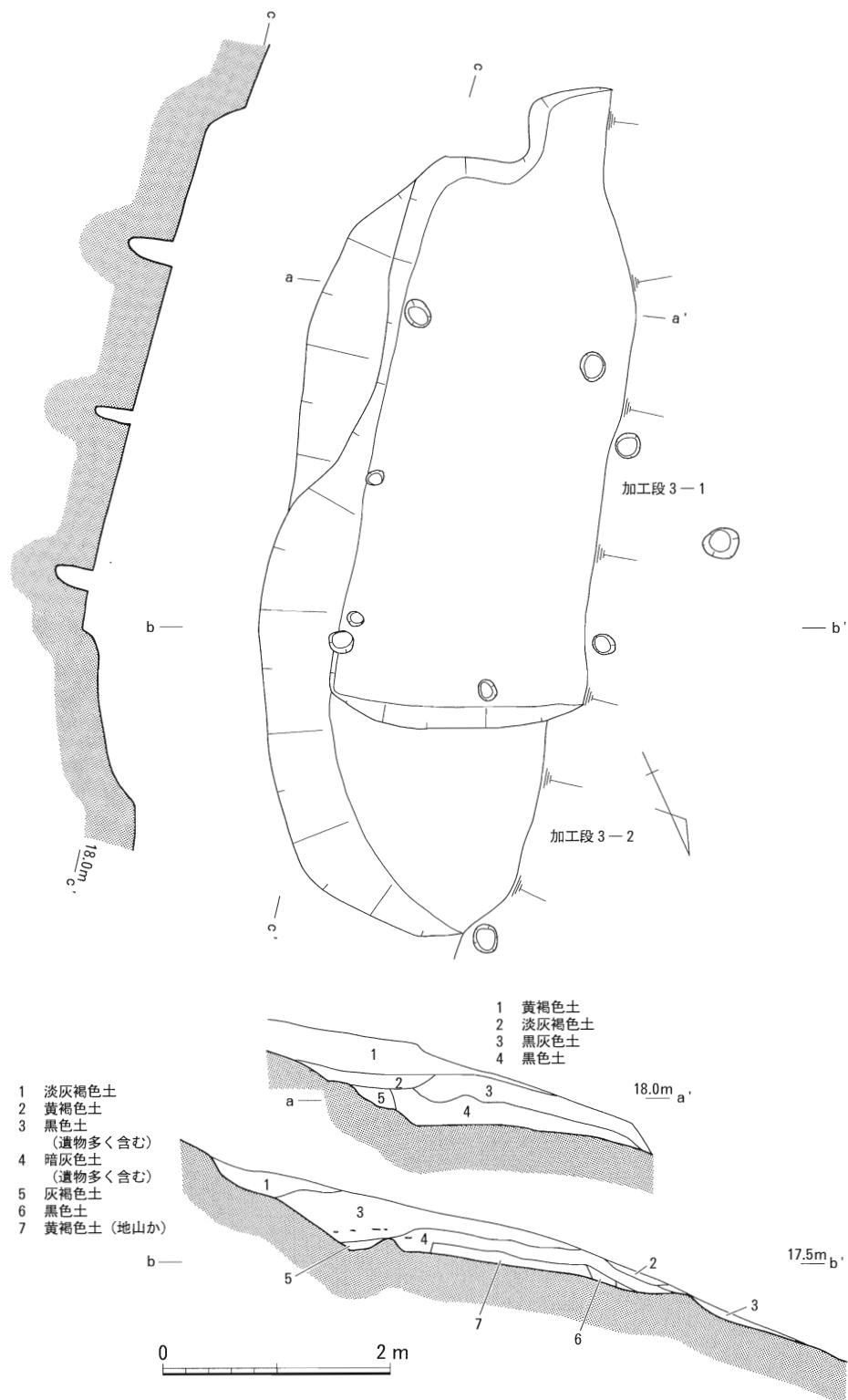
方形の平坦面を作り出している。南端はさらに1段広がっているが、これが加工段3-1に伴う平坦面かどうかは不明である。加工段3-2よりも一段深く掘りこんでいるように見えるが、土層断面（北側）を見るとわかるように、この部分の地山が非常に不明瞭で壁下の溝底面のレベルで床を掘りすぎている可能性がある。また平面では確認できなかったが2つの溝が認められ、この遺構中でも重なりがあることがわかる。ただ南側の土層断面では溝は確認できておらず、全体をめぐるものであったかは不確定である。床面には小形の柱穴状のピットがいくつか見とめられ、壁際の3穴は並んでいるようにも見える。何らかの建物があったものと思われるが、全体像は不明である。

加工段3-2は全体形は不明である。ただ壁面の方から、南端で一段広がる平坦面につながる可能性もある。加工段3-1に切られる形となっているが、前述したように実態としては床面のレベル差はほとんどないと考えられる。加工段3-1と3-2の新旧について、調査中には平面的に2つの遺構の重なりを把握することができなかつたため、不明である。

遺物（第124図）

いずれも加工段3の覆土から出土した遺物である。

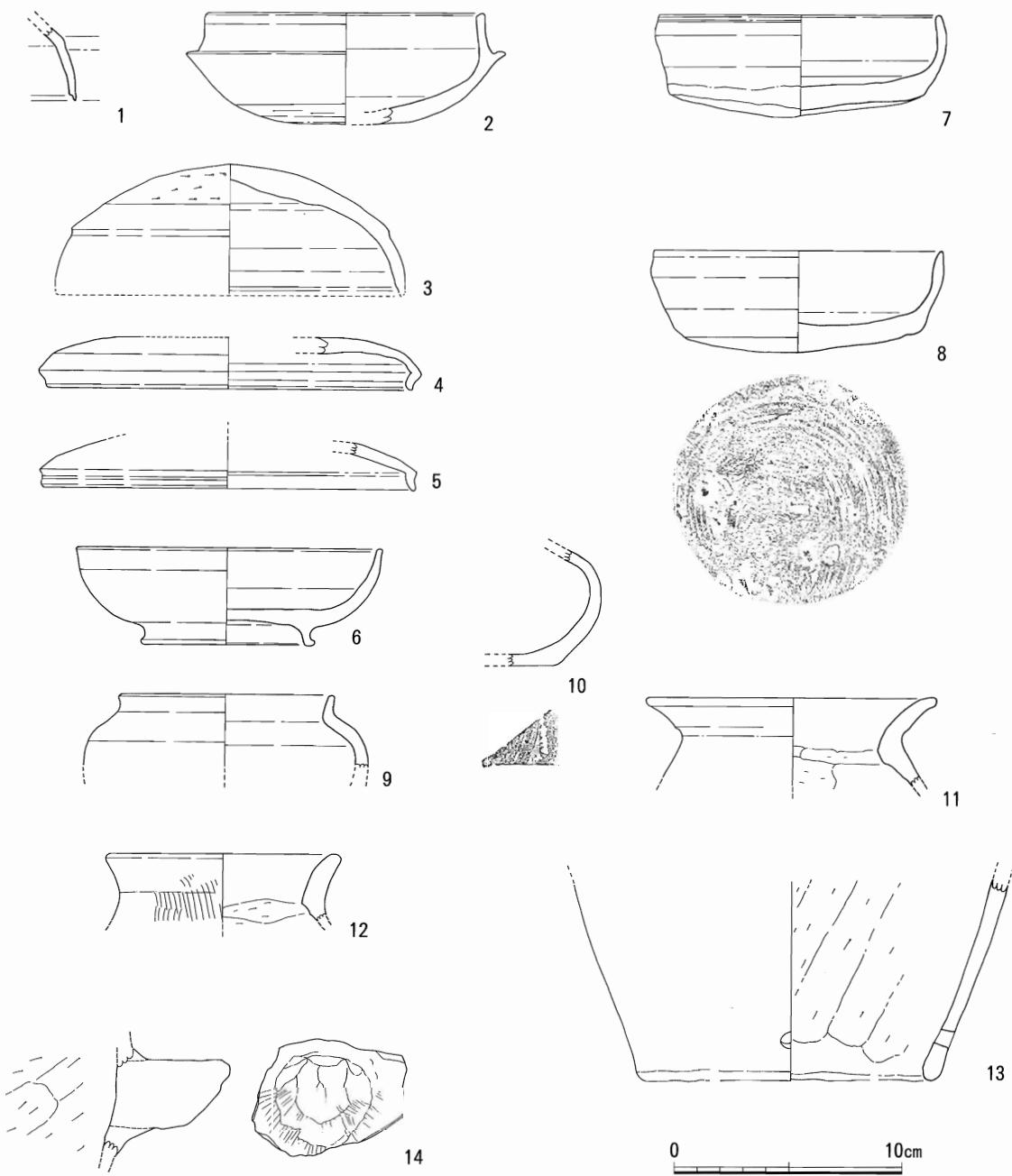
1~10は須恵器



第123図 連行遺跡 加工段3 実測図 (S=1/60)

である。うち1～3は古い時期の特徴を持つ。1は蓋で、径は不明だが口縁と天井の境には段を設け、口縁端部内側にも明瞭な段を設けている。焼成はあまく、灰白色を呈す。2は口径12.2cm、最大径14.0cmと大形の杯身である。口縁は垂直に近い角度で高く立ちあがり、端部には面を設けている。底部には回転ヘラケズリを施す。焼成はあまく、灰白色を呈す。3は復元口径が15.5cm前後と大形の蓋である。天井は高く丸みを帯び、回転ヘラケズリを施す。天井と口縁の境には段を設け、口縁端部は失われているが、内面に段が認められる。1、2と同様焼成はあまく、灰白色を呈す。

4、5はともに端部が垂下する蓋で、口縁部はやや内湾し丸く収める端部に至る。復元口径は4、5とも16.5cm前後である。6は高台をもつ杯身である。体部は丸みを持ち、口縁端の外面はわずかながら内に反らせている。高台は端部を外方につまみ出している。口径13.5cm、高台径7.6cm、器高4.3cmを測る。8、9は高台を持たない杯で、よく似た個体である。ともに底部が分厚で回転系



第124図 連行遺跡 加工段3 出土遺物実測図 (S=1/3)

切痕を残し、焼き歪みのためか底面の凹凸が目立つ。底部から体部にかけてはさほど角度を持たず立ちあがり、口縁近くから若干内傾する。口縁端の外面は、8はわずかに内湾させる程度、9は細い沈線を施している。8は口径12.6cm、底径10.4cm、器高4.5cmを、9は口径12.4cm、底径11.2cm、器高4.5cmを測る。

9は須恵器短頸壺である。復元口径9cm前後、復元胴部径12.5cm前後を測る。10は腹もしくは小形壺と考えられる。底部は平坦で回転糸切り痕が残る。

11～13は土師器である。11は復元口径12.5cm前後の甕で、頸部は「く」字状に大きくくびれ、口縁端は丸く収める。12は復元口径10.5cm前後の小形の甕である。頸部のくびれは小さく、口縁は厚さ9mm程度と分厚い。頸部以下には粗いハケメを施す。13は甕の底部である。復元底径13.5cm前後、そこから1.5cmほど上部に径7～8mmの孔を開けている。孔の数は不明。内面は縦方向のヘラケズリ、外面は不明だが、ヘラケズリを施している可能性もある。14は甕の把手部分である。器面を貫通して接合しており、外面にはハケメが見られる。

遺物の時期は1～3がほぼ同様の時期と考えられ、大谷編年出雲2期、およそ6世紀前半代と考えられる。その他の須恵器は時期幅があるが、およそ7世紀後半～8世紀代と考えられる。遺構と遺物との対応関係は不明であるが、違う2時期以上にわたって営まれた可能性がある。

西側斜面中段の遺構群（第125図）

西側斜面の中腹、標高およそ13～15m付近に大きく広がる平坦面で検出された遺構群である。特に調査区の南側は、自然の小さな谷地形になっていることもあって、現状で20m四方程度の平坦面が広がっている。ただし、この面が後世の耕作においても利用され、改変を受けているため、この平坦面の東端は削り込まれている可能性が強く、現状の平坦面の東端から4m程度からは遺構はほとんど検出されていない。

平坦面を削り出したり、一定程度掘りこんで作り出した遺構は4か所で検出され、最も東側の遺構を加工段4、その北西に隣接した平坦面を加工段5、加工段4の内側の掘り込みを加工段6、最も西側の平坦面を加工段7と呼んでいる。なお、これらの遺構の南側には、2条の細い溝（SD02、SD03）と多くの小形のピットが検出されているが、溝の方向に平行する柱穴列などは検出されず、建物等を復元することはできなかった。

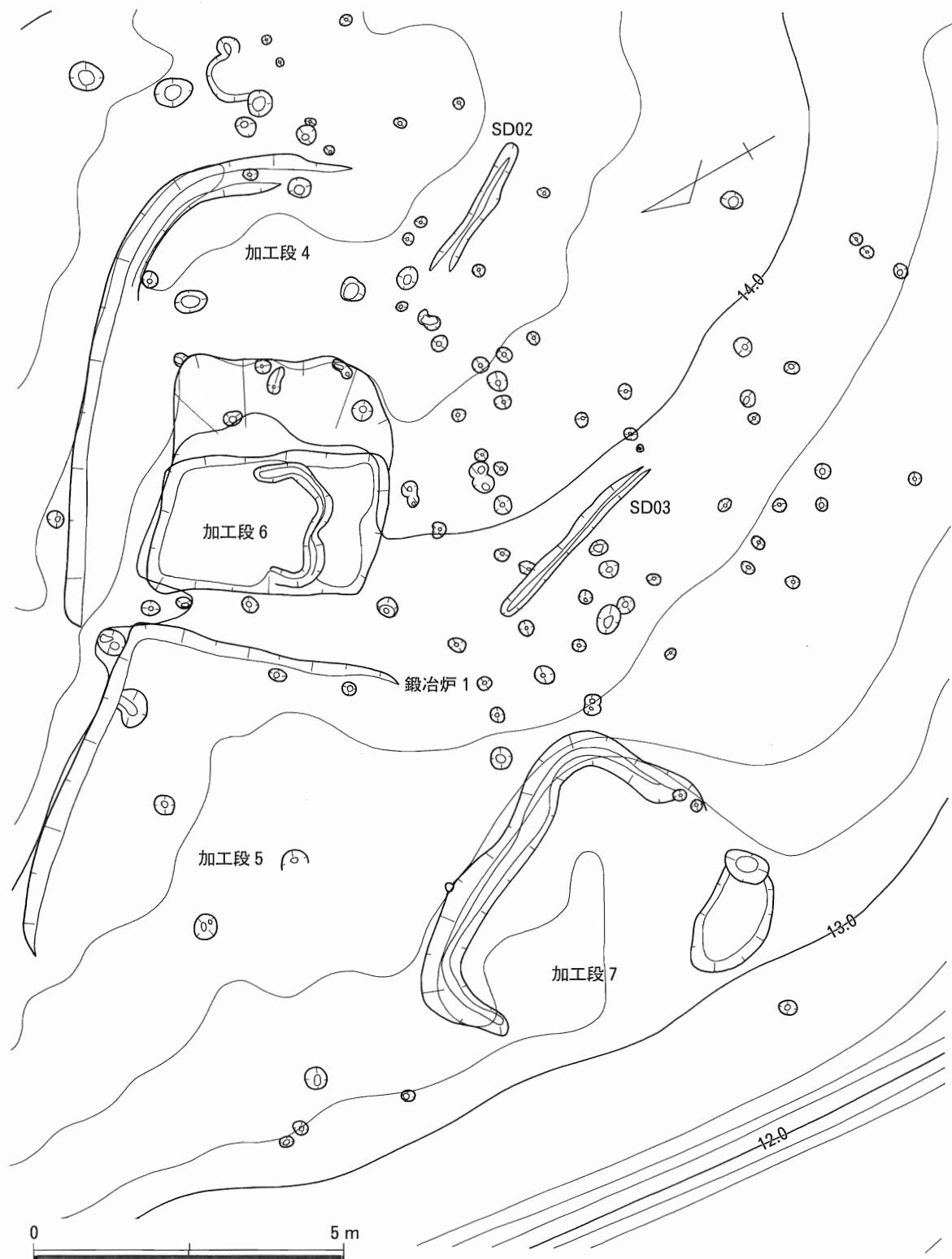
加工段4（第126図）

斜面上方側をカットして平坦面を作り出したもので、東側の壁はほぼ直線状に伸び、南側は緩やかな弧を描きながら西に折れていく。北側は壁が消滅しているため全形は不明だが、調査時で7.8mほどの長さがある。壁の高さは高いところでも20cm程度だが、前述したように東側は後世に削られている可能性が高く、本来はもっと高い壁であった可能性もある。北側のコーナー付近には、壁際に幅10～30cmの浅い溝が検出されている。本来は壁際に廻っていたものかもしれない。

この遺構の内側や周囲には多くのピットが検出されている。しかし壁に平行する柱列は見とめられず、また方向を定めなくとも明瞭な建物跡は復元できていない。ただ、壁の南東側に径40cm前後の柱穴が3穴並んでいるが確認できたが、それに直交する柱穴は検出されていない。この柱穴は深さが10cm内外しかないが、東側が削平された可能性が高いことを考えれば、もう少し深さがあった

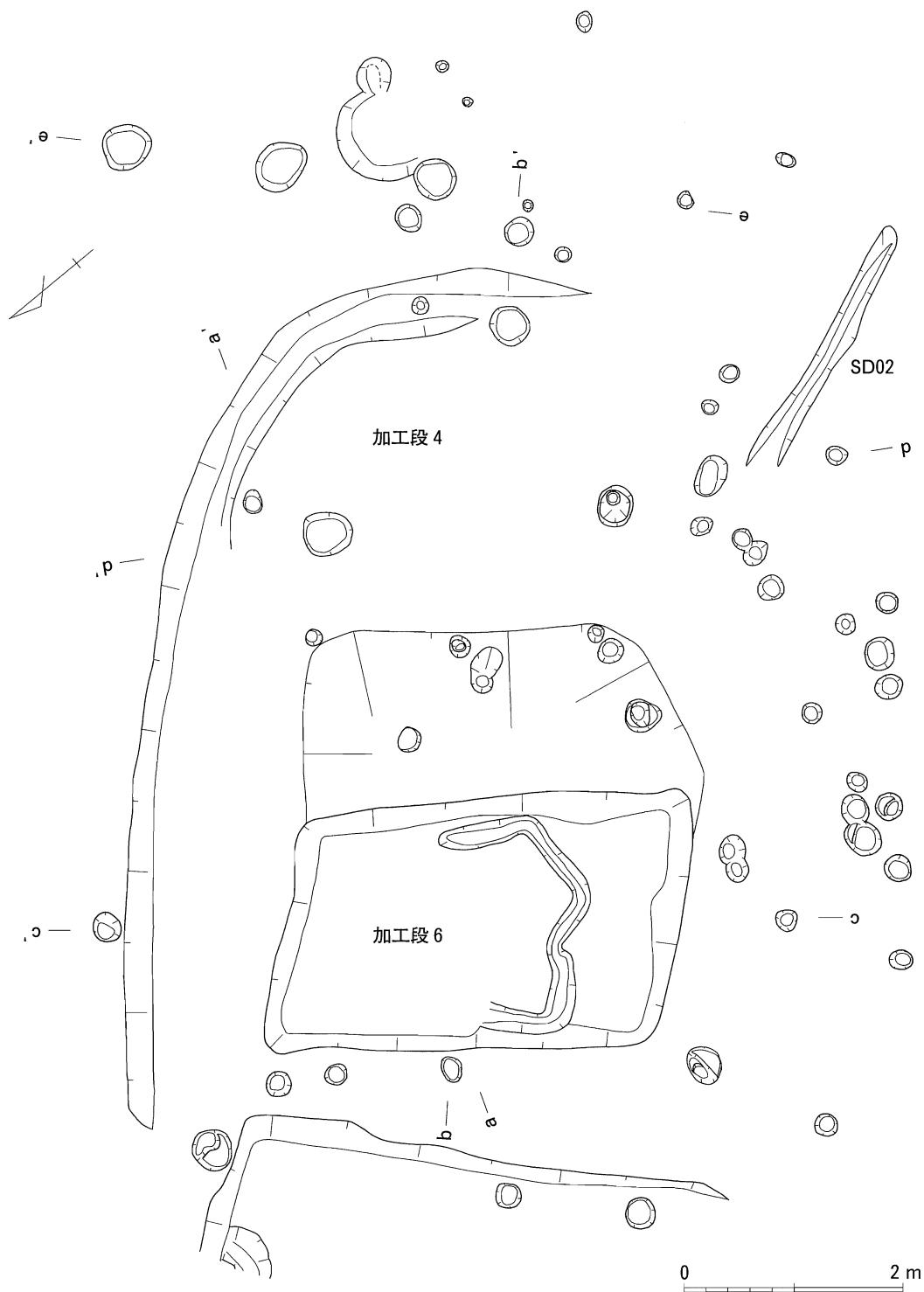
可能性が高い。

遺物（第128図） いずれも加工段4の覆土から出土した遺物である。1～15が須恵器である。1～6は古墳時代の須恵器と考えられる。1、2は杯蓋とともに天井から口縁部にかけては2条の沈線によって境を設けている。1は天井には回転ヘラケズリを施し、口縁端部にはかすかに面を持っている。復元口径13.5cm前後、器高3.9cm程度である。2は口縁端内面には段を設けており、復元



第125図 連行遺跡 加工段4～7・SD02・03（西斜面中段遺構群） 全体図（S=1/100）

口径13cm前後となる。3は復元口径9.5cm程度、壺等の蓋と考えられる。口縁端の内面には段を設けている。4は口縁部が垂直に近い角度で立ちあがる杯身で、立ち上がり高が1.9cmと高い。口縁端部内面にはわずかながら段が認められる。底部には回転ヘラケズリが見られ、焼成は良好、淡青灰色を呈す。復元口径13cm前後、復元最大径15cm前後、器高5cm程度でかなり大形である。5は復元口径14.5cm前後、復元最大径17cm前後の大型の杯身である。口縁はやや傾き、高さは1.5cm程度、全体に薄いつくりである。底部には回転ヘラケズリを施す。焼成は良好である。6は復元口径11cm前後、復元最大径14cm前後の杯身である。口縁の立ち上がりは45°程度傾き、高さは1cm程度とさ



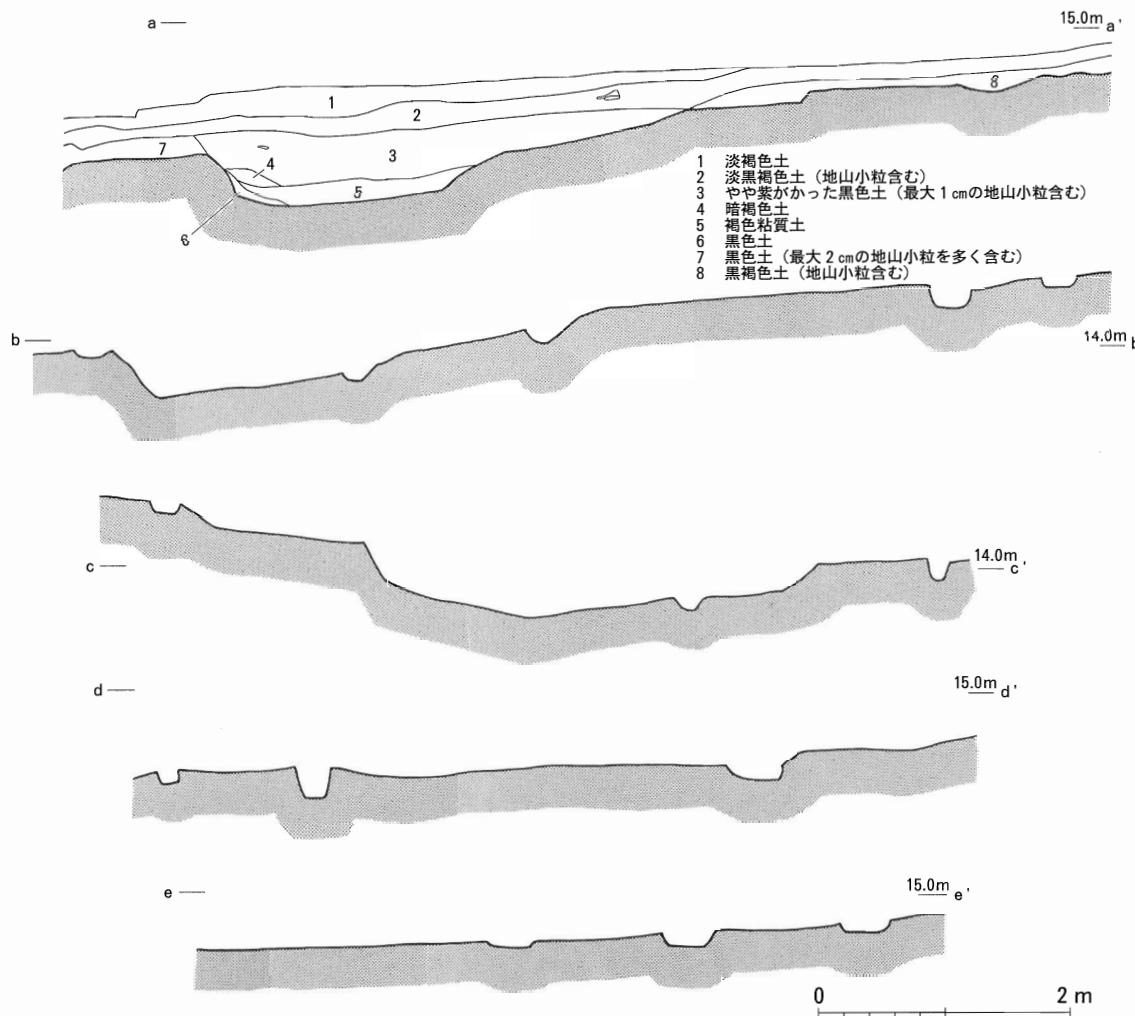
第126図 連行遺跡 加工段4・6 実測図(1) (S=1/60)

ほど高くない。以上の古墳時代の須恵器にもさらに時期差が認められ、4、5は大谷編年出雲2期でおよそ6世紀前半、1、2、6は出雲3～4期で6世紀後半～7世紀初と考えられる。

7～10は高台を持たない杯である。7は平坦な底から角度を持って体部に立ちあがる杯で、復元底径8.5cm程度、底部は不明瞭で糸切りかどうかは不明である。8は体部に丸みのある杯で、底部には回転糸切り痕が残る。復元底径8cm前後である。9もほぼ同様の特徴を持ち、復元底径10cm前後である。10は復元口径15cm前後、器高3cm程度のやや大型の杯身で、底面には回転糸切り痕が残る。口縁付近はわずかながら内湾させており、端部は薄くなっている。11は底部の外縁付近に高台が付く杯身、もしくは壺等の底部である。底部は回転糸切りの後なでている。復元高台径11cm程度である。

12は口径13.6cm、底径9.2cm、器高2.5cmを測る皿である。口縁部はわずかながら内湾しながら外に開いており、端部は丸く収める。底部はナデがみられる。13、14は高台がつく大形の皿で、同様の特徴を有している。ともに底部には回転糸切り痕が残り、底の外縁よりもかなり内側に高台がつけられている。13は復元口径20cm前後、復元底径16cm前後、復元高台径13.5cm前後、器高43.1cm程度である。14は復元口径21cm前後、復元底径17cm前後、復元高台径13cm前後、器高3cm程度である。

15は須恵器甕の口頸部である。頸部は大きくくびれ、口縁部は丸く収めている。胴部は外面平行タタキ、内面同心円タタキ、復元口径は22.5cm前後である。16は備前系陶器の擂鉢と考えられる。



第127図 連行遺跡 加工段4・6 実測図(2) (S=1/60)

口縁は上下に拡張し、端部は薄くなっている。

17は土師器の台付き鉢である。厚い底部に低い脚が付いたもので、体部の外面はヘラケズリ、脚部外面はヘラで押さえつけたような痕が認められる。底径7.2cmを測る。18は土製支脚である。脚台部分は失われているが、2本の太い突起と、その反対方向に伸びる短い突起が認められる。

これらの遺物の時期は古墳時代（この中でも時期差があるのは前述のとおり）と奈良時代を中心で、わずかながら中世の遺物を含む。遺構の時期としては、遺物の多い古墳時代か奈良時代と考えられるが、限定はできない。

加工段5（第129図）

加工段4の北側に隣接して検出された平坦面である。検出状態での形態は、斜面を「L」字形にカットして平坦面を作っている。ただ北側、西側はレベルが下がるにつれて消滅しており、全体の規模等は不明である。調査時に確認できた規模は、南北が5.5m、東西が4.5m程度で、加工段4と異なってコーナーは明瞭な角を持っている。床面にはいくつかのピットが検出されたが、いずれも浅い上、建物を構成するような並びは復元できていない。

遺物（第131図） いずれも覆土から出土した。1～3は須恵器杯である。1は高台のない杯で、復元底径8cm前後、底部には回転糸切り痕が残る。2は高台がつく杯身である。復元高台径は10cm前後、底部の外縁に高台が付いており、高台の端から体部の立ち上がりが始まる。底部には回転糸切り痕が残る。3は高台を持たない杯である。復元口径14cm前後、体部と口縁部の境には稜を持ち、口縁の端部下方は内湾してくびれている。体部は角度を持って底部に向かっており、ボール状を呈すかもしれない。

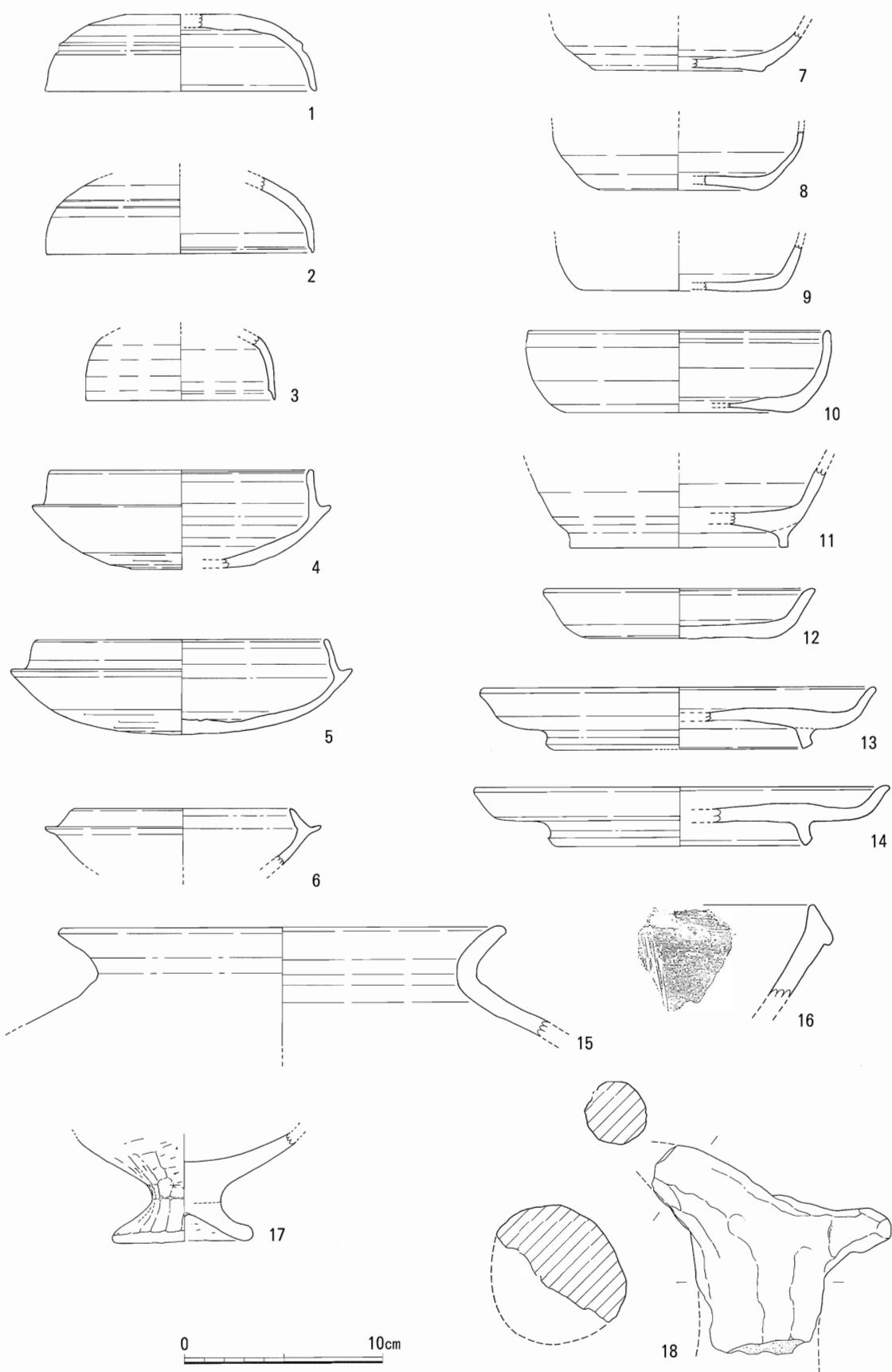
4～7は土師器である。4は高杯もしくは台付き鉢と考えられる。底部の厚さ2cm前後と厚く、脚部の接合部付近の径は3.4cmを測る。5は台付き鉢等の脚部と考えられる。脚の高さ3.2cm、底径9.1cmを測り、スカート状に開く形である。6は復元口径17cm前後の甕である。頸部は「く」字状に折れ、口縁端は丸みを帯びながらも面を持つ。7は甕の把手部分である。器面を貫通させて接合しており、外面には粗いハケメが、内面にはヘラケズリが見られる。

遺物の時期であるが、須恵器で見ると、1、2は奈良時代、8世紀後半とされるが、3は体部の形態から見て若干さかのぼる可能性もある。

加工段6（第126図）

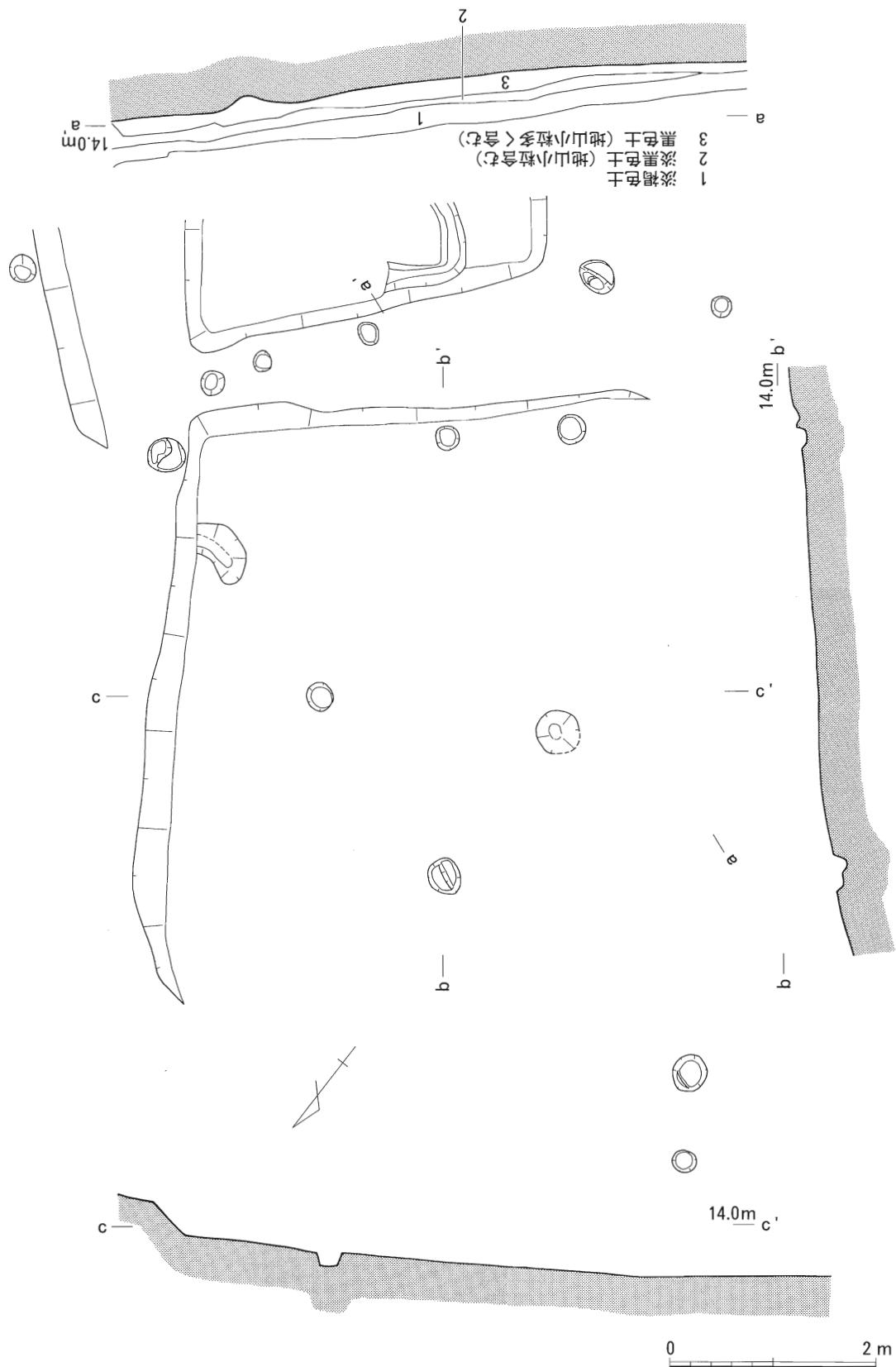
加工段4の内側、加工段5の南側に隣接して検出された遺構である。床面規模が3.1m×2m程度の平行四辺形を呈す竪穴状の遺構で、南側にはスロープ状の斜面が附設している。床面は水平ではなく、傾斜を持ち、東西方向では中央付近を最深部として屈折している。深さは最も深い部分で50cm以上ある。また南壁際から北壁際にかけて、ジグザグに折れ曲がった溝が検出されている。溝は幅が5～10cm程度（底面）、深さが10cm程度で、片側は完結し、片側は自然に消滅している。床面には柱穴等は全く見とめられなかった。

遺物（第132図） いずれも覆土から出土している。1～6は須恵器である。1は復元口径15cm前後、天井が低平な蓋である。口縁部と天井の境には明瞭な段を設け、天井には回転ヘラケズリを施す。口縁端部内面には微かな段を設けている。焼成は良好で青灰色を呈す。2は丸みを持った蓋の

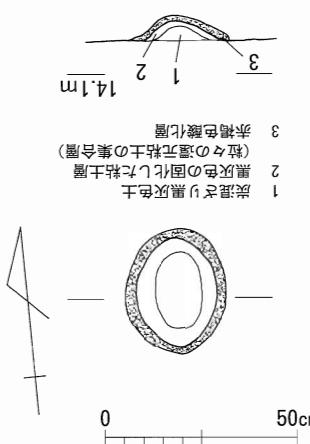


第128図 連行遺跡 加工段4 出土遺物実測図 (S=1/3)

天井部で、大半に回転ヘラケズリを施している。口縁は失われているが、口径が15cm前後になるものと思われる。焼成はやや甘く、灰色を呈す。3は体部が深くてボール状を呈す杯身である。復元口径11.5cm前後、復元最大径13.5cm前後、器高5.7cm程度で、口縁部の高さは1.5cm程度だが垂直に



第129図 連行遺跡 加工段5 実測図 ($S = 1/60$)

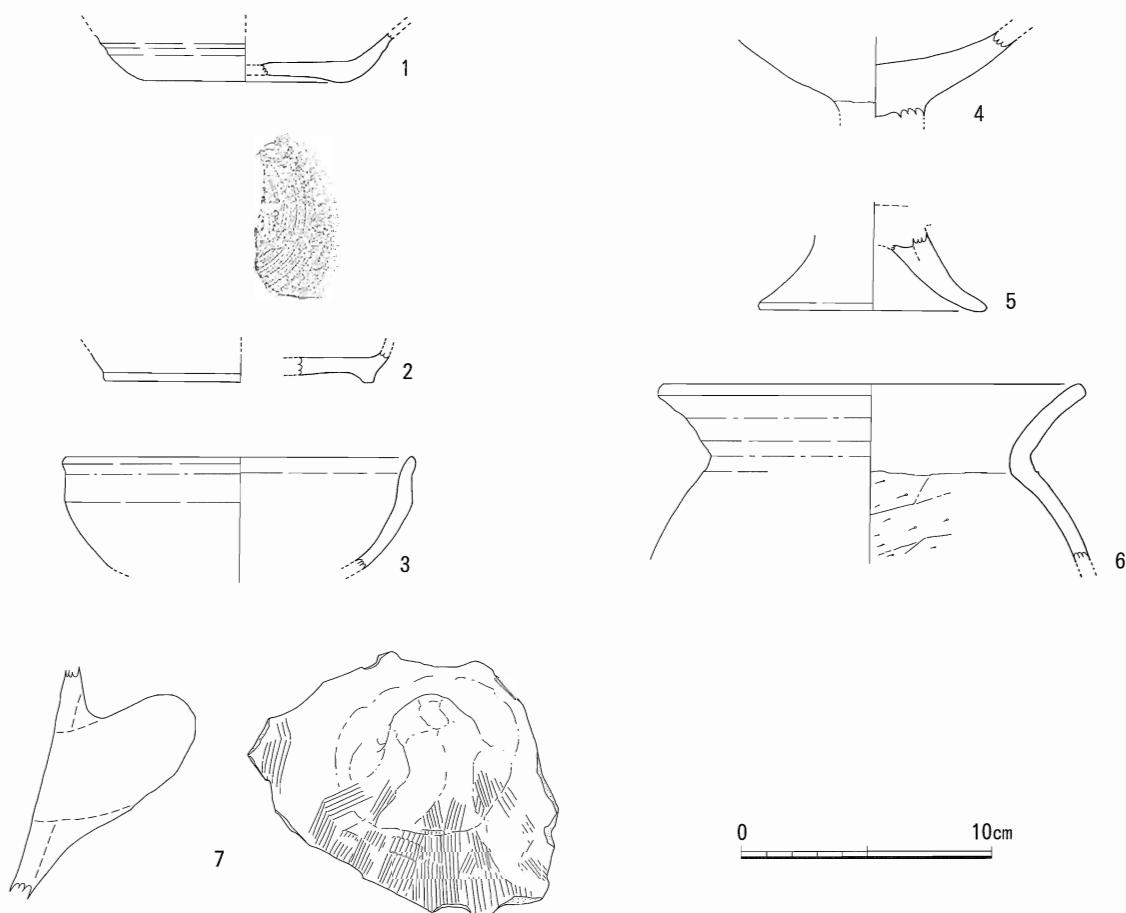


第130図 連行遺跡 煉冶炉 1
実測図 ($S = 1/20$)

近い角度で立ちあがる。口縁端には面を設けており、底部下半には回転ヘラケズリを施す。焼成はややあまく、灰色を呈す。

4は復元口径15cm前後、口縁部にアクセントがなく、そのまま丸く収める蓋である。器高が1.7cm程度と低平で、天井部には回転ヘラケズリが見られる。5は復元口径18.5cm前後、復元高台径10cm前後、器高4cm程度の皿である。底部は厚さが1cm前後と厚く、底部が口縁に比べて小さいもので体部は丸みを持って立ちあがる。6は壺であろうか。緩やかに内湾する短い頸部を持ち、口縁部は外面に長さ1.1cmほどの面を作り、端部は内側に向けてつまみ出している。胴部外面は平行タタキ、内面は同心円タタキが見られる。復元口径11.5cm前後である。

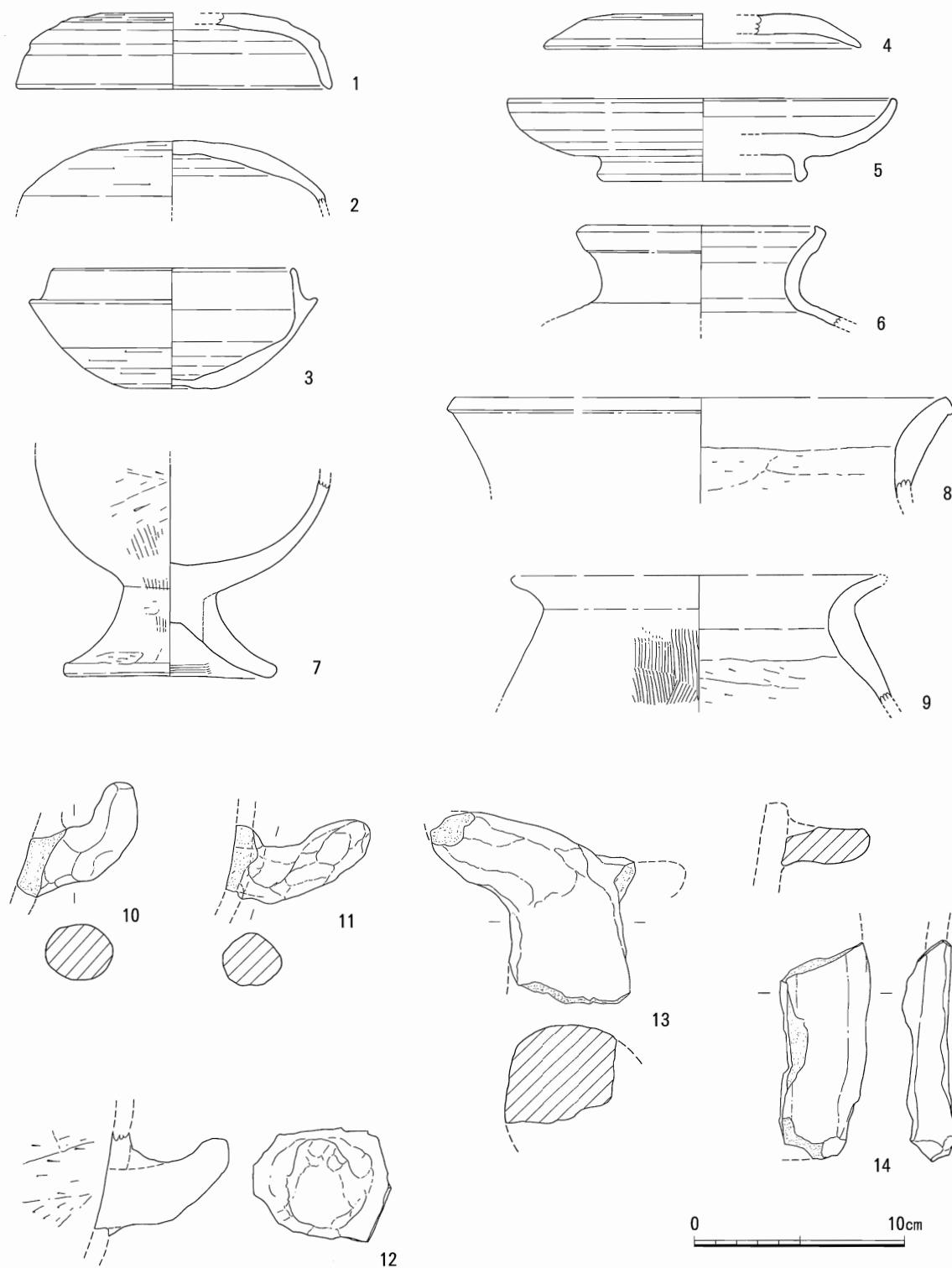
7～14は土師器である。7は高杯、もしくは台付鉢で、ボール状の杯部に低めの脚台がつく。杯部は内面は丁寧にナデ、外面はヘラケズリの後、一部ハケメやナデを施している。底部は脚台の接合部分も含めて厚さ2.8cmと非常に厚い。脚台は底径10.0cm、接合部分の径4.4cm、高さ4.0～4.5cmでスカート状に開く形である。外面はヘラケズリの後、ナデやハケメを施し、内面の外縁には横方向のハケメが見られる。橙色を呈す。8は復元口径24cm前後の甕である。口縁端部には面を持ち、下端を若干つまみ出す。頸部のくびれはほとんど見られない。9は口縁端は失われているが、復元口径が17.5cm程度になると思われる甕



第131図 連行遺跡 加工段 5 出土遺物実測図 ($S = 1/3$)

である。頸部は厚く、大きくくびれている。

10～12は甌の把手部分である。いずれも径が2.5cm前後と比較的薄手の把手で、器面を貫通させて接合している。13は土製支脚である。欠損部が多く全形は不明だが、長い突起側の面が全体的に赤黄色に変色しており、火を受けたものと考えられる。14は移動式カマドの破片と考えられる。焚き口につく「庇」部分の基部と考えられる。



第132図 連行遺跡 加工段6 出土遺物実測図 (S=1/3)

遺物の時期は、須恵器1～3は大谷編年出雲2期で6世紀前半代、4、5は奈良時代と考えられる。周辺で最も窪んだ部分であり、大部分が周囲から流れ込んだ遺物の可能性が高く、遺構の年代を反映しているかどうかは不明である。

鍛冶炉1（第130図）

西側斜面中段遺構群の加工段5の壁の南西側、加工段7の北側から検出された炉の遺構である。長径20cm、短径12cmの楕円形で、検出面からの深さは4cm程度と浅く、覆土には炭が多く含まれていた。底面は厚さ2cm程度の粘土が貼られているよう、還元して黒灰色を呈している。その周囲はさらに2cm程度の厚さで酸化した赤褐色層が見られた。覆土内から、少量ながら鍛造薄片が出土したため、鍛冶炉と判断した。遺構に伴う遺物はなく、時期は不明である。

西側斜面中段出土の遺構に伴わない遺物（第133図～第135図）

中段遺構群周辺は、西側斜面で最も広い平坦面をなし、遺構も集中している部分で、遺物も数多く出土している。そのうちの代表的な遺物を掲載している。

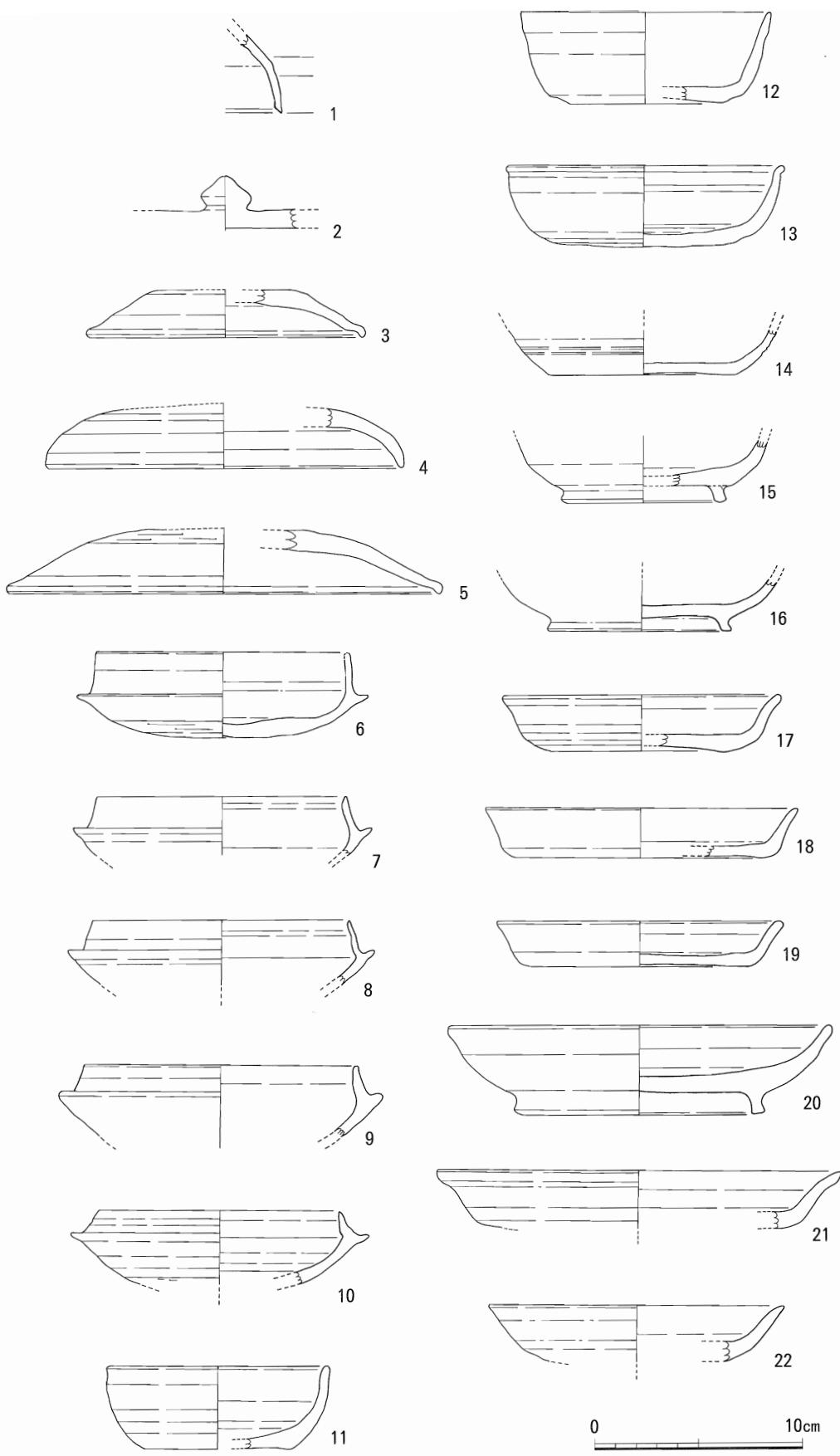
1～5は須恵器蓋と分類したものである。1は古墳時代の蓋で口縁と天井の境には段を持ち、口縁端部内面には浅いながらも段を設けている。2は平坦な天井に宝珠つまみがついた蓋である。3は復元口径13cm前後、器高2.3cm程度（つまみ除く）の蓋で平坦な天井部から、稜を持って体部にいたり、口縁部に至るまでに一度くびれて平坦面を作っている。口縁部は下方につまみ出すように垂下させている。天井は糸切りの後なでている。4は緩やかな丸みを持って口縁に至る個体で、皿の可能性もある。復元口径17cm前後だが、破片が小さく不確かである。5は復元口径20.5cm前後の大形の蓋で、口縁に至る部分を若干アクセントをつけてわずかに平坦面を設けている。口縁端はわずかに下方につまみ出すように垂下させている。

6～16は須恵器杯と分類したものである。6～10はかえりのある古墳時代の杯身である。6は口径12.1cm、最大径14.0cm、器高4.1cmで底面は比較的平らである。口縁は高さが約2cmと高く、垂直に近い角度で立ちあがる。焼成は良好である。7は復元口径12cm前後、復元最大径14.5cm前後で、口縁はやや角度を持って立ちあがり、端部内側には面を設けている。8は復元口径12.5cm前後、復元最大径14.5cm前後で、口縁は薄く、やや角度を持って立ちあがる。9は復元口径13cm前後の杯で全体的に厚手のつくりである。10は復元口径11.5cm前後、復元最大径14cm前後の杯身で、口縁はおよそ45°の角度で立ちあがり、端部に向けては次第に細くなっていく。底部にはヘラケズリが見られる。

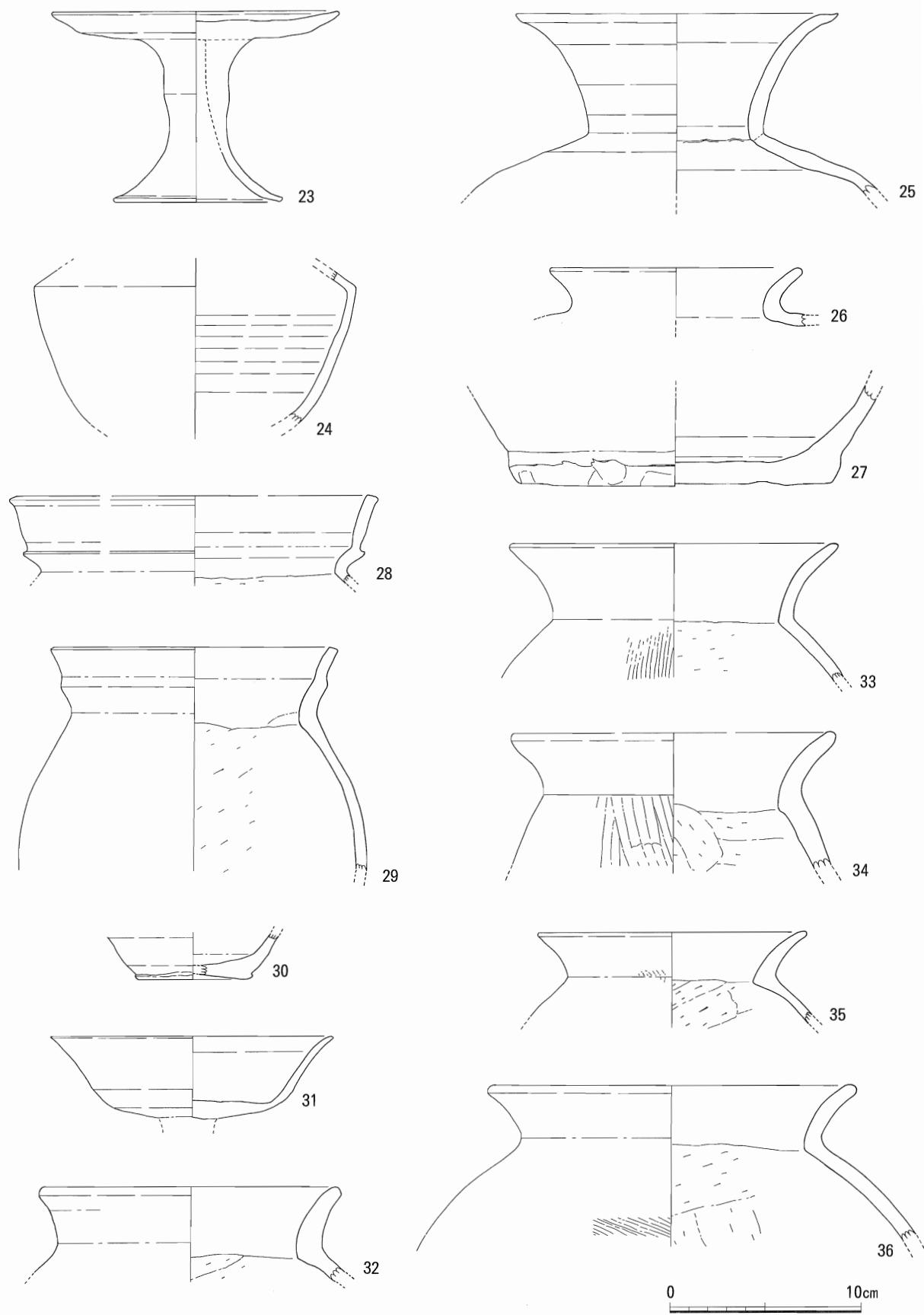
11～14は高台の付かず、底に回転糸切り痕が残る杯である。11は復元口径11cm前後、復元底径7cm前後、器高4cm程度で、口縁付近の外面はわずかに内湾している。12は復元口径12cm前後、復元底径7.5cm前後、器高4.4cm程度で、体部は直線的に立ちあがる。13は口径13.3cm、底径8.8cm、器高3.9cmで、体部は丸みを持ち、口縁付近の外面には沈線を入れるように内湾させ、さらに端部は外方につまみ出している。14は復元底径9cm前後で、体部は丸みを持って立ちあがっている。

15、16は高台のつく杯身である。ともに体部はやや丸みを持ち、底部には回転糸切り痕を残している。15は復元高台径8cm前後、16は9cm前後である。

17～22は皿と分類した須恵器である。17は復元口径13.5cm前後、復元底径8.5cm前後、器高2.8cm



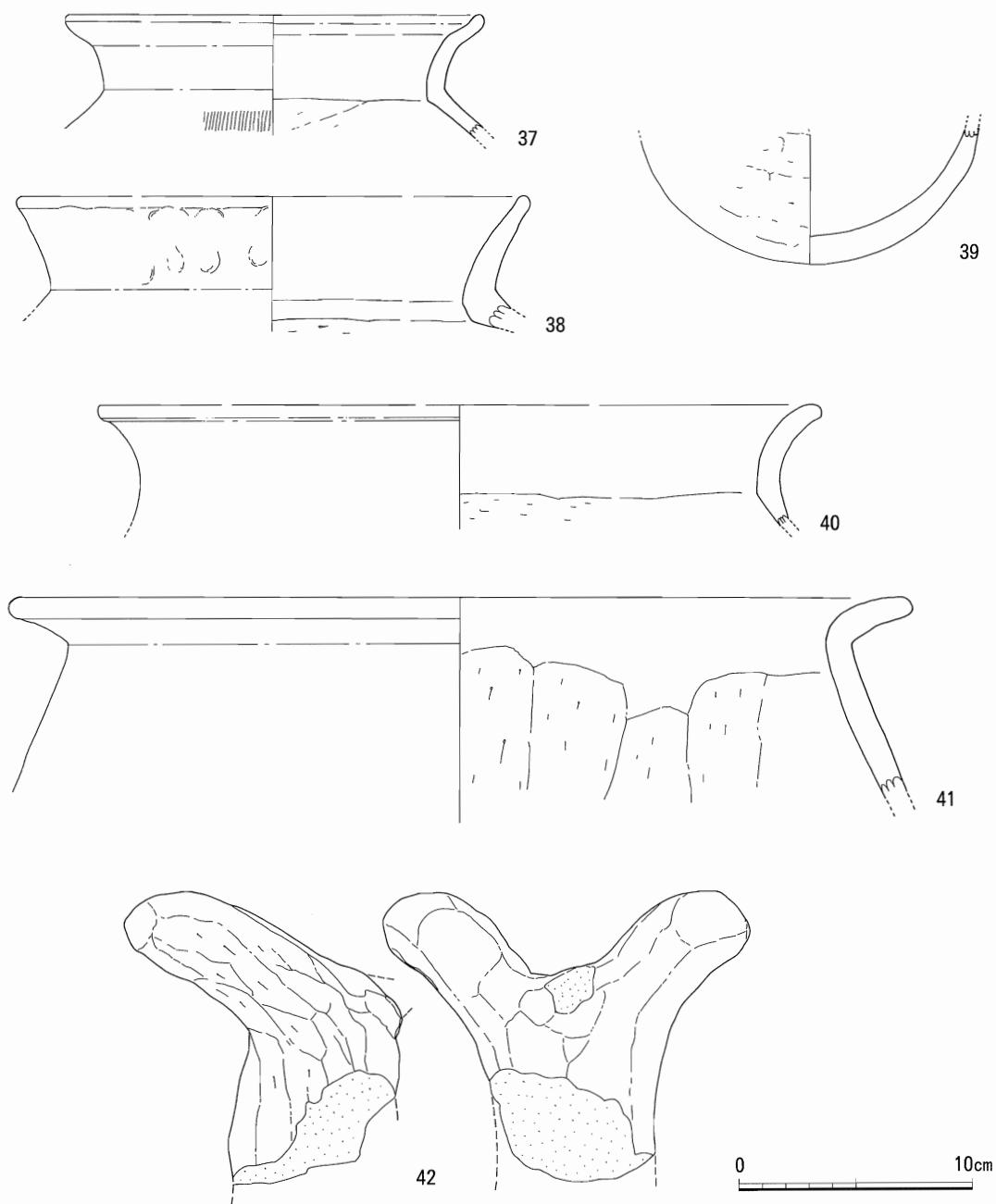
第133図 連行遺跡 西側斜面中段 遺構外出土遺物実測図 (1) (S = 1/3)



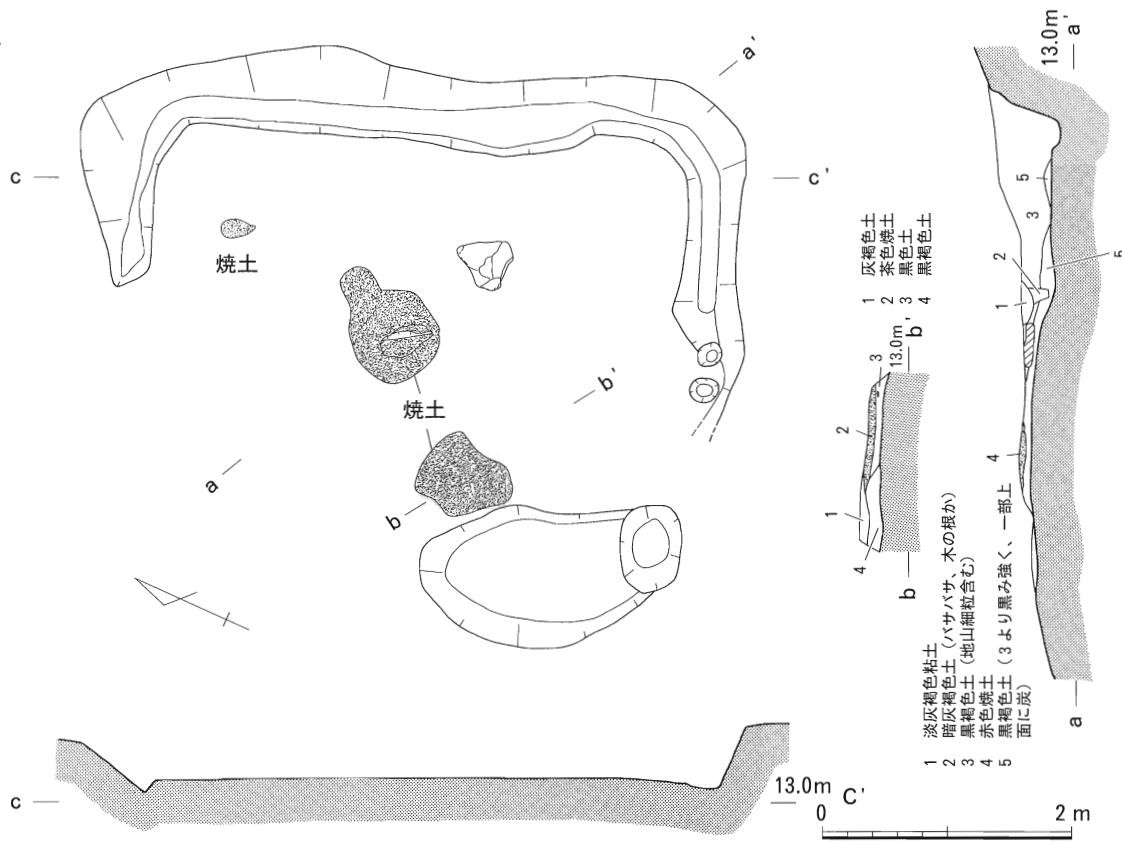
第134図 連行遺跡西側斜面中段 遺構外出土遺物実測図 (2) (S = 1/3)

前後で、底部には回転糸切り痕が残る。体部は丸みを持って立ちあがり、口縁部には内湾しながら至る。18は復元口径15cm前後、復元底径12cm前後、器高2.4cm程度で体部はやや外反して立ちあがり、口縁部は丸く収める。底部には回転糸切り痕が残る。19は形態的には18とよく似た個体で、復元口径13.5cm前後、復元底径10.5cm前後、器高2.2cm程度である。20は丸みを帯びた体部に高台がつくもので、浅い杯身と分類したほうがよい個体かもしれない。口径18.4cm、高台径12cm前後、器高4.3cmで、底部には回転糸切り痕が残る。21は体部が外反して開くもので、復元口径19.5cm前後である。22は体部がほぼ直線的に斜め上方に立ちあがるもので、復元口径14cm前後である。

23は須恵器高杯である。非常に浅い杯部に細長い脚部がつくもので、口径17.8cm、器高10.1cm、底径8.8cm、杯部高さ1.3cm、脚部高さ8.8cmを測る。24は肩に稜を持つ壺で、復元胴部径は17cm前後である。25は壺の口頸部で、頸部から口縁部にかけてはラッパ状に開いていき、口縁はやや外方に



第135図 連行遺跡 西側斜面中段 遺構外出土遺物実測図 (3) (S=1/3)



第136図 連行遺跡 加工段7 実測図 ($S=1/60$)

引き出した後、端部をわずかに上方につまみあげている。復元口径17cm前後、復元頸部最小径9cm前後である。26は壺もしくは横瓶等の瓶類の口縁部である。復元口径13cm前後である。27は備前系の壺の底部である。青灰色を呈し、外面に板状工具によるナデを施している。室町時代のものと考えられる。

28~42は土師器である。28は古墳時代前期の複合口縁の甕で、復元口径19cm前後である。口縁端はわずかに外方につまみ出し、上部には面を設けている。29は複合口縁がやや退化した甕である。頸部のくびれ具合が小さく、口縁部の稜もシャープさを欠いている。復元口径15cm前後である。30は復元底径6cm前後、赤桃色を呈し、底部に回転糸切り痕が残る椀である。古代末~中世のものであろうか。31は高杯の杯部である。杯部の底は比較的平らで、体部は外反しながら開く。復元口径15cm前後、杯部高4.5cm程度である。

32~36は口頸部が単純に開き、端部を丸く収める甕である。32は口頸部がやや分厚で、復元口径16cm前後である。33は頸部が胴部から「く」字状に折れ曲がり、外方に開いて立ちあがる。胴部外面にはハケメが見られる。復元口径は17cm前後である。34は復元口径17cm前後、頸部のくびれが比較的少ない個体で、胴部外面には粗いハケメを施す。35は頸部が急角度でくびれて立ちあがる甕で、口縁は外方に開きながら薄くなり、端部は丸く収める。復元口径14cm前後である。36は胴部がよく張る甕で頸部はくびれて、外方に開きながら立ちあがる。復元口径19cm前後である。

37は頸部から口縁部にかけて、アクセントのある個体である。頸部は胴部からゆるい角度でくびれてやや外方に立ちあがり、口縁にかけては外方に一度折れて内面に面を持つ形になり、端部はさらに上方に持ち上げている。復元口径18cm前後、胴部外面にはハケメを施す。38は頸部が「く」字

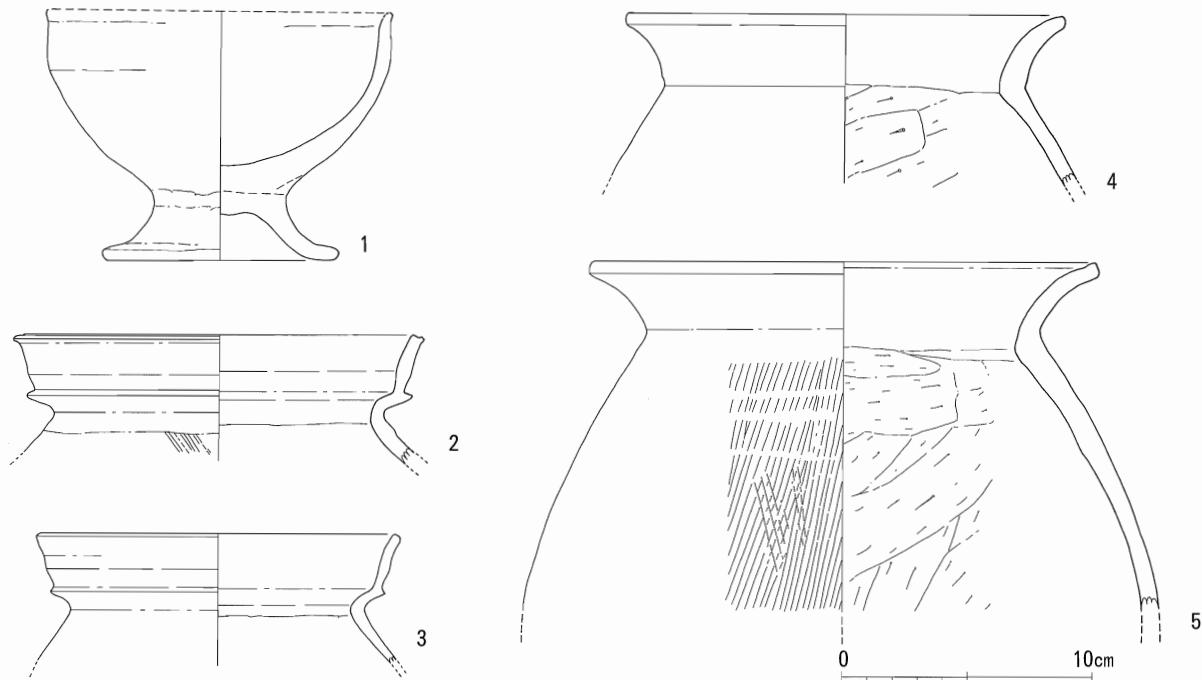
に折れ、ほぼ直線的に立ちあがるもので、頸部外面には縦方向の指頭圧痕が残る。復元口径22cm前後である。39は丸底の壺の胴部下半である。外面はヘラケズリの後、ナデを施しており、内面はなでている。胴部の径は14.4cmを測る。40は復元口径31cm前後の大形の甕で、頸部のくびれは少ない。41は復元口径39cm前後の大形の甕である。頸部は「く」字状に折れ、横方向に開いている。42は土製支脚である。全体的にヘラ状工具で削るようにして成形している。

さて、遺構内出土遺物も含めて中段遺構群周辺から出土した遺物を、先に述べた上段遺構群出土の遺物と大略的に比べると若干の様相の違いが見とめられる。古墳時代でも6世紀前半代の遺物が目立つのは同様であるが、中段では6世紀末～7世紀初の遺物も見られる。一方上段では7世紀後半～8世紀前半代（輪状つまみの蓋を代表とする）の遺物が目立つが、中段では少量で、かえって8世紀後半以降の遺物が目立つ傾向にある。この傾向は、遺構が形成された時期をある程度反映しているものと思われる。

加工段7（第136図）

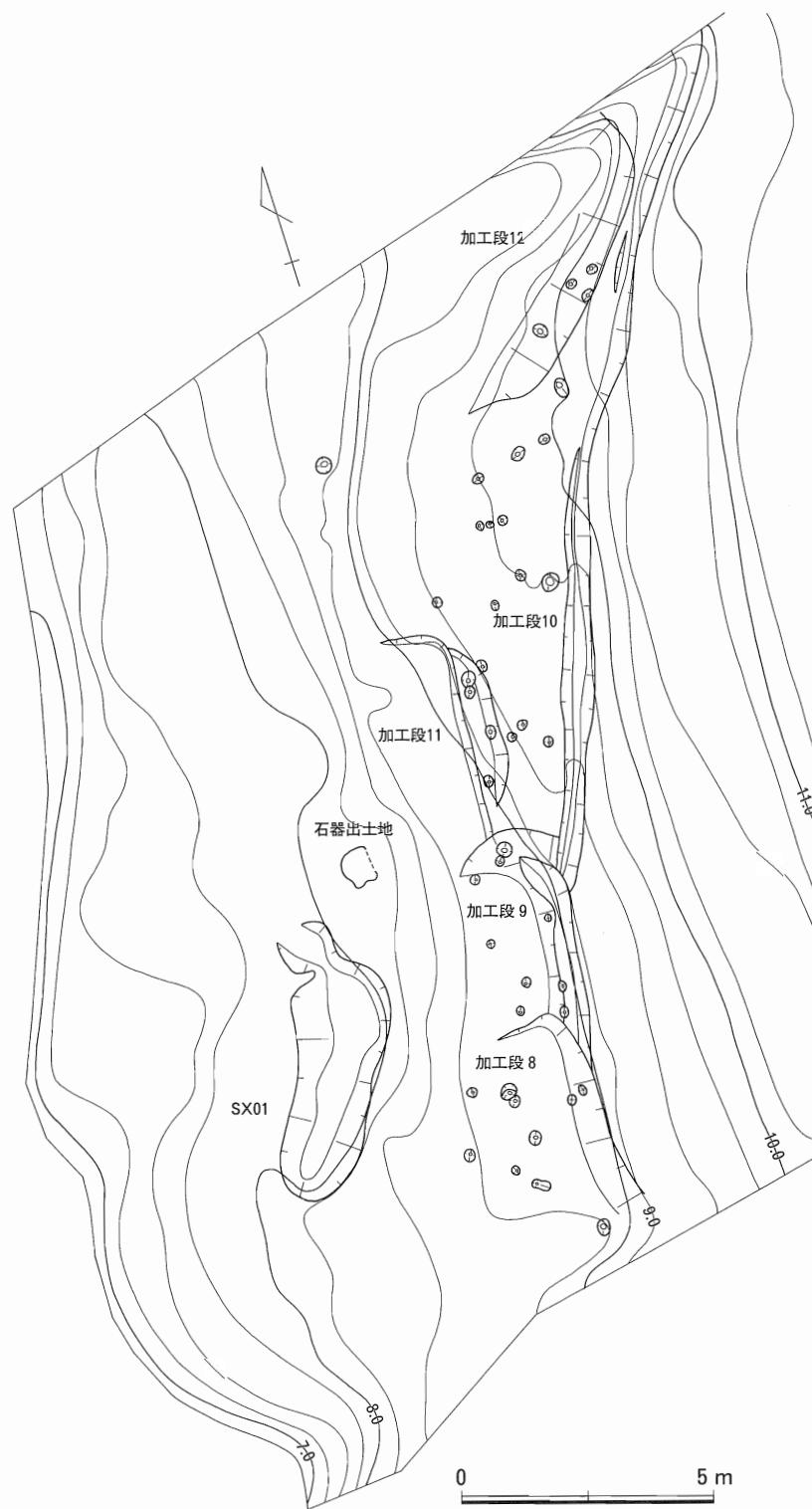
西側斜面中断移行群の西端付近、加工段5の西側で検出された遺構である。斜面の高い側を「コ」字形に掘り込んで平坦面を作り出しており、長さは下端で4.7mである。壁際には幅10～20cm、深さ10cm前後の溝が廻っているが、両側は壁から1.5m程度で完結しており、下方に排水するような構造にはなっていない。床面は東側（斜面上方側）に向って下るように削られているが、その上に置き土をして床面を整えているようである（第136図5層）。ただこの置き土（5層）上面も同様に東側に向って傾斜している。

置き土の上面には、3か所、焼土が認められた。うち2か所の焼土は60～70cm前後と広い範囲で火を受けており、また焼土厚も厚い。ほぼ中央の焼土は、ほぼ円形の広がりの北側が突出する形で焼土が広がっており、その範囲は100～65cmにわたる。厚みは5～10cmあり、一部表面が壁状に立



第137図 連行遺跡 加工段7 出土遺物実測図 (S=1/3)

ち上がっている部分も認められ、何らかの構造があった可能性もある。ただ、全体が酸化して赤化しており、閉鎖的な構造ではなかったと推測される。この焼土の東側40cmのところには、40cm程度の表面が平らな石が検出されており、焼土に関連する可能性もある。中央の焼土の南西側50cmの部分にも焼土の広がりが認められる。70×60cmほどの不定形な広がりで、厚さは10cmと強く火を受けている様子がうかがえる。明らかにこの遺構に伴うと判断される柱穴等の遺構は全く検出されなかつた。



第138図 連行遺跡 加工段 8～12 全体図 (S=1/150)

遺物（第137図） いすれも覆土から出土した土師器である。1は低い脚台の付く高杯もしくは台付き鉢である。杯部は深いボール形を呈し、口縁付近はわずかに内湾していくびれている。口径14cm前後、杯部高さ7.5cm程度である。底部は脚台部分も含めて厚さが2cmと厚い。脚台は端部に向かって内湾していく形状で、底径9.4cm前後、脚台高さ2.3cm程度である。2、3は古墳時代前期の複合口縁の甕である。2は口縁部の稜が横によく突出し、口縁端部上面には段を設けている。口縁端は横に引き出しておらず、復元口径16cm前後である。3は2に比べて稜の突出が弱く、口縁端の張り出しも明確ではない個体で、復元口径14.5cm前後である。2よりもやや遡るものかもしれない。

4、5は、頸部が「く」字状に折れ曲がる単純口縁の甕である。4は復元

口径17.5cm前後、口縁端は丸く収める。5は復元口径20cm前後で、口縁端部はわずかにつまみあげている。胴部外面にはハケメを施している。

遺構の時期については、出土遺物に時期差があるため不明だが、古墳時代よりも新しいと確実に判断できる資料はない。

西側斜面下段の遺構群（第138図）

西側斜面の裾近く、標高8～10m付近の斜面に、連なるように遺構が検出された。おおよそ南側から順に加工段8～12と呼んでいる。

加工段8（第139図）

標高9m付近で検出された、斜面上方をカットして平坦面を作り出した遺構である。壁は地形に沿ってわずかに湾曲するものの、ほぼ直線状に削りだしており、北側はほぼ直角に折れ曲がって収束させている。南側は調査区外に伸びており、検出できた部分で長さ約4.5mである。床面には径15～30cmほどのピットがいくらか検出されたが、建物を構成するような柱の並びは認められない。

削りだされた地山面の床面よりも約20cmほど上方にも、床面が認められ、炉状の遺構が確認された。この面は遺構の検出面とほぼ同様の高さであり、遺構の範囲を平面的におさえることはできなかった。炉状の遺構は検出面で計15cm前後の不正円形で、浅く皿状に窪んでいた。底面には灰色の粘土層が認められ、その下部は黒色の粘土層が見られる。還元状態と考えられる灰色、黒色の粘土層は3cmほどの厚さで、その下部はさらに2cm前後の厚さで酸化して赤化した層が見られる。周囲の土から少量の鍛造薄片が採集できたため、鍛冶炉の可能性が高い。

図化できる遺物は出土しておらず、遺構の時期等も不明である。

加工段9（第139図）

加工段8の北側に隣接して検出された、斜面上方を削りだして平坦面を作り出した遺構である。壁はほぼ直線状に削りだされており、北側はほぼ直角に折れて収束しているが、南側は加工段8に切られる形で消滅しており、全形は不明である。長さは検出時で約3m、床面は加工段8よりもやや高い位置にあり、ピットが4穴検出されているが、規則的な並びは認められない。

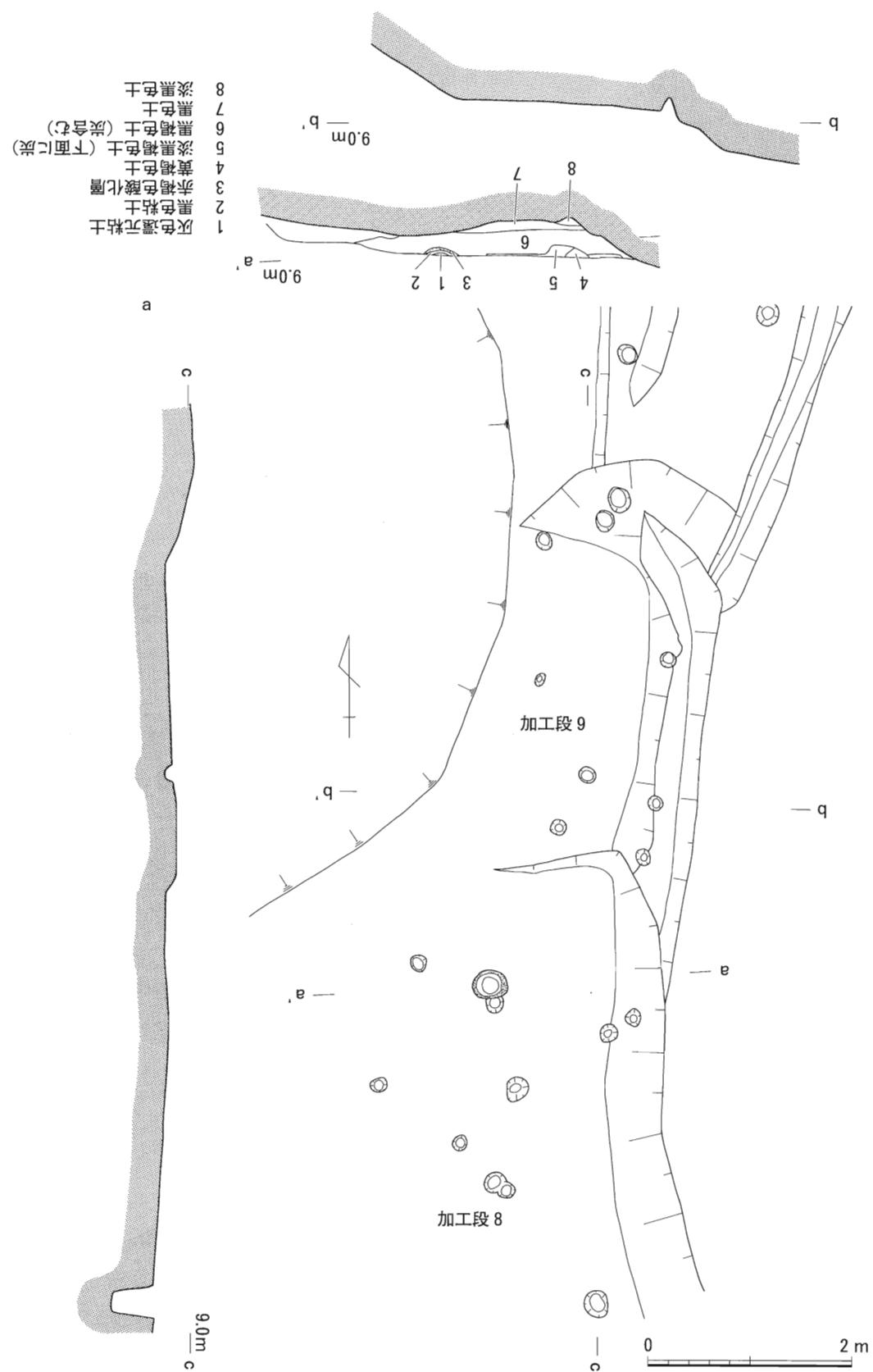
また壁に重なって、幅20cm前後の狭い平坦面が認められる。床より約10～20cm高いレベルで、時期の違う遺構が重なっているものと考えられる。

遺物（第144図1） 覆土内から須恵器杯の小片が出土している。高台が付く杯と考えられ、底部には回転糸切り痕が残る。体部はわずかしか残らないが、丸みを持っている。時期は小片で確定は難しいが、7世紀後半～8世紀頃の範囲で考えておきたい。

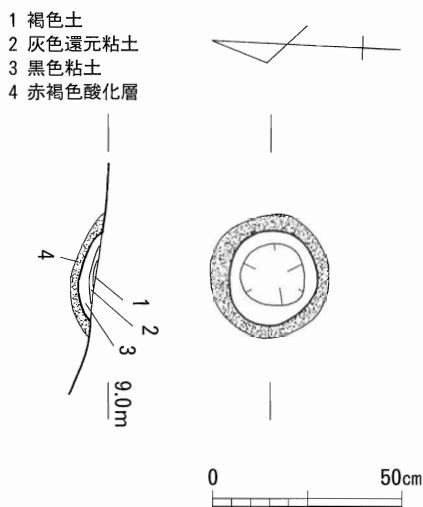
加工段10（第141図）

加工段9の北側から、調査区の北の端まで延長およそ14mにわたって検出された、斜面上方をカットし平坦面を作り出した遺構である。南側の加工段9付近では、壁の上端がわずかながら折れる様子が見られ、収束する気配であるが、北側はさらに調査区外に続き、規模の大きな平坦面である。壁際には、一部途切れている部分があるものの、溝が設けられている。

床面には柱穴状のピットが多く検出されている。壁に平行して三穴並んでいるピットもあるが、柱穴間が北から3.9m、3.3mと広いえ不揃いであり、建物となるかどうかは判断が難しい。



第139図 連行遺跡 加工段8・9 実測図 ($S=1/60$)



遺物（第144図2～4） 土師質土器の碗もしくは杯3点を図化している。2は壁際の溝から出土したもので底径3.6cmと小型で突出した底である。焼成は悪く調整等は不明である。3は底部に回転糸切り痕を残すもので、底径7.3cm、体部はやや外反しながら開く。内面は丁寧な螺旋状のナデを施している。4は壁際の溝から出土した土器である。復元底径7.5cm前後、3と類似した形態で、風化により調整等は不明である。これらの土器の時期は中世と考えられ、2点は溝から出土していることから考えて、およそ遺構の時期を反映しているものと考えられる。

第140図 連行遺跡 加工段8

上面炉実測図 (S=1/20)

加工段11（第141図）

加工段9の北側、加工段10の南端に重なって検出された

遺構である。斜面の上方側をカットして平坦面を形作った遺構だが、上下2段に2つの遺構が重なって検出されている。上段の遺構はやや丸みを帯びて壁が形成されており、遺構の全形は知ることができないが、検出時で長さ3.2mである。土層堆積状況を見ると（第142図d-d'断面）下段の覆土の上に床面が続いているため、この上段の遺構が新しいものと考えられる。床面には3穴のピットが検出されており、壁に平行していて建物が建っていた可能性もある。

下段の遺構は壁が直線的に形成され、北側はやや丸み帯びながらもほぼ直角に折れて収束している。南側は加工段9に切られる形で、端を確認できていないが、現状で長さ4.2mほどである。床面に柱穴等は検出されなかった。

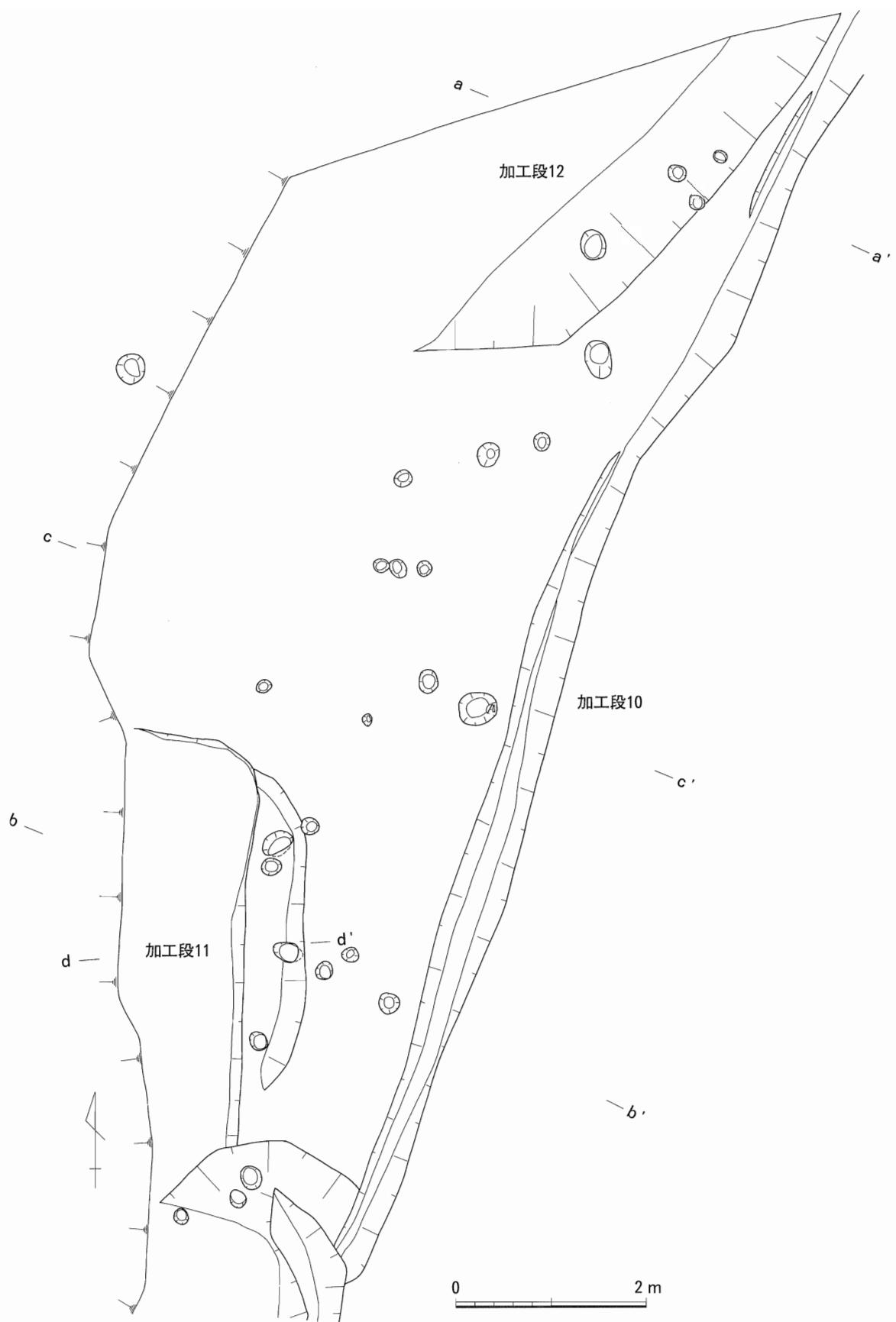
遺物（第144図5～6） 覆土内より、須恵器、土師質土器が出土している。5は須恵器の杯の底部と考えられる破片で、底部の外縁に断面三角形に近い形の高台がついている。奈良時代以降のものと考えられる。6は土師質土器の皿である。口径8.8cm、器高1.4cmと小型で、底部外面はやや窪んでいる。中世以降と考えられる。

加工段12（第141図）

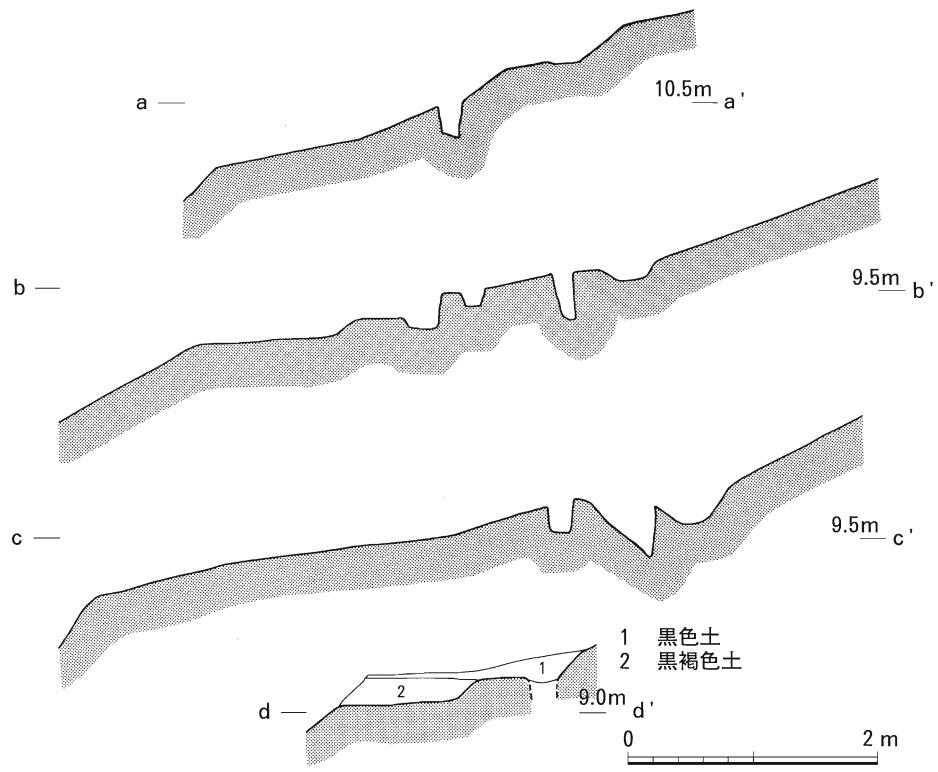
調査区の北端、加工段10の床面を切るような形で検出された遺構である。斜面の上方をカットして平坦面を作り出した遺構で、北側は調査区外に伸びているため全形は不明だが、調査時で長さ4.6mである。柱穴等は検出されなかった。遺物も図示できるものは出土していない。

SX01（第143図）

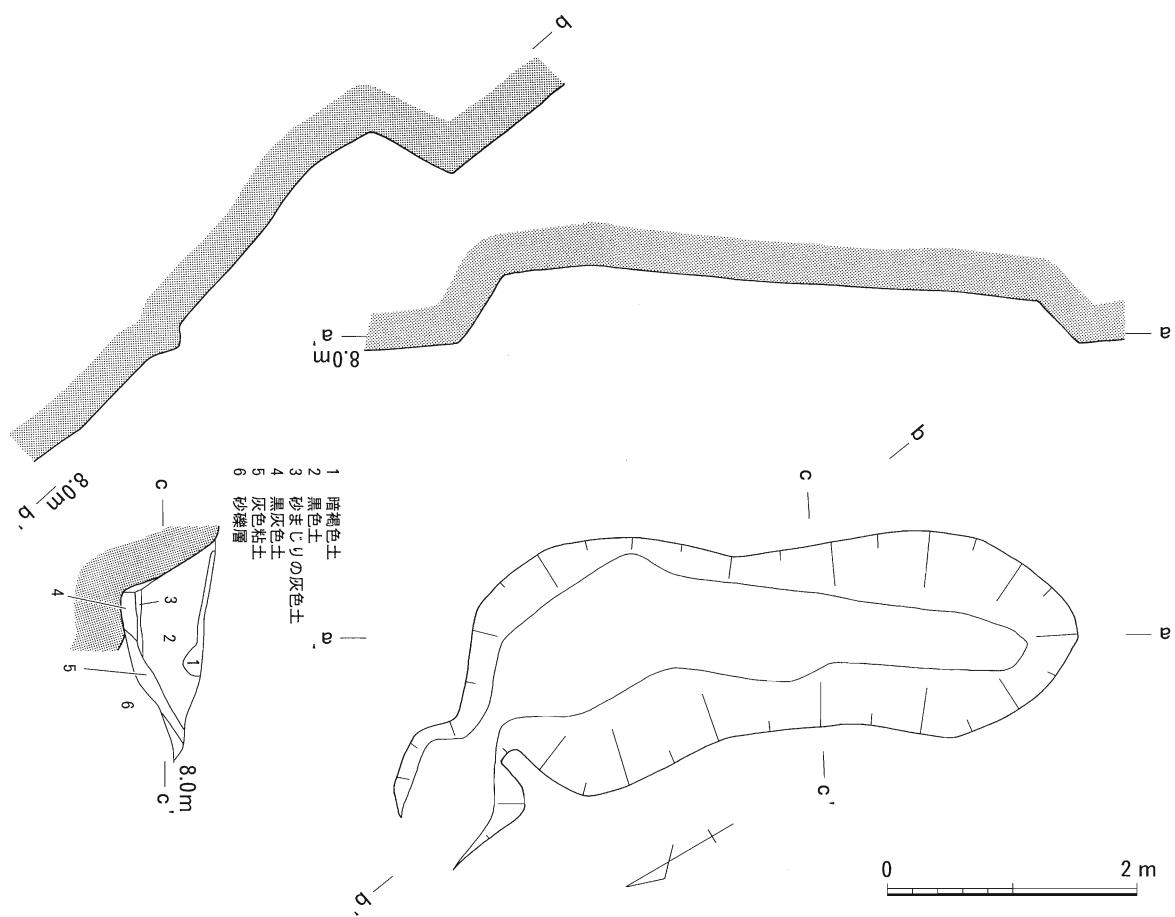
西側斜面の最下方、加工段8、10の下方で検出された遺構である。現況でいうと丘陵のほぼ裾、河川に隣接する水田面のレベルに相当する部分である。上端での長さ4.8m、幅1.5～2m程度の土坑状の落ち込みの北側に、土壙の長軸と方向をやや変えて斜面下方側に向う溝が取り付く形態である。土坑部分は、東側（斜面上方側）は地山を削りこんでおり、西側（斜面下方側）は堆積土を掘り込んで形成している。深さは残りの良い部分で0.6m程度、土坑内の堆積を見ると、底近くに砂まじりの薄い層が見られ、その上下は粘土質の黒色、灰色系統の土が堆積している。



第141図 連行遺跡 加工段10・11・12 実測図(1) ($S=1/60$)



第142図 連行遺跡 加工段10・11・12 実測図 (2) (S = 1/60)



第143図 連行遺跡 SX01 実測図 (S = 1/60)

取り付く溝の幅は0.9m前後、土坑と溝との接続部分はくびれて幅が狭くなっており、上端で0.5m下端で0.15mを測る。このくびれた部分の底は、若干土手状に盛り上がっており、この部分が堰状の構造になっていた可能性もある。遺構の性格は、その構造や土層の状況から、水を溜めるためのものである可能性が高い。

遺物（第144図7） 覆土内より弥生土器が出土している。復元口径17cm前後（小片で不正確）の複合口縁の壺で、口縁はやや外に開いて上下に拡張し、外面には4条程度の凹線を施している。弥生時代後期前半～中葉のものと考えられる。この遺物が遺構の時期を示しているかどうかは不明である。

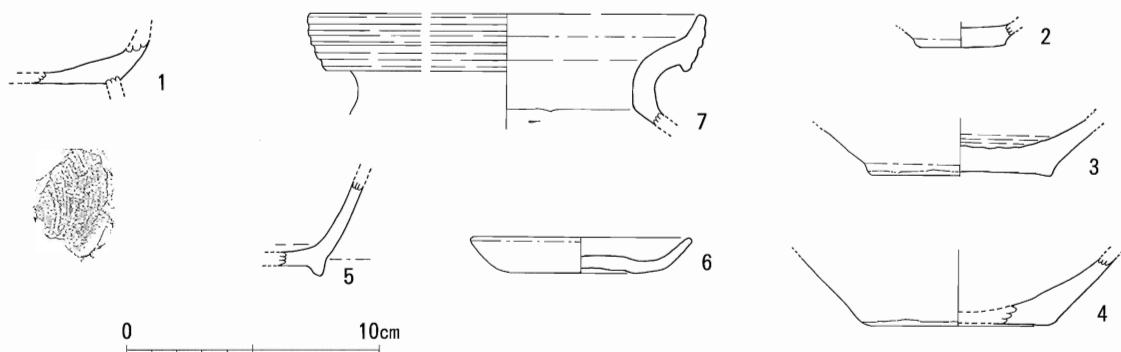
石斧未製品等出土地（第145図）

西側斜面の最下方、SX01の北側、現況でいうと丘陵のほぼ裾、河川に隣接する水田面のレベルに相当する部分で、石斧未製品、原材、黒曜石原石がまとめて出土した（第145図）。これらの石器は、調査当初のトレンチ調査の段階で、トレンチのコーナー付近から出土したもので、出土状況作成前に作業員により取り上げられてしまった経緯がある。よって、これらがどのような状態で出土したのか、人為的に埋められていたものか、土坑等の遺構があったのか、といった点は不明である。第145図は、担当作業員からの聞き取りで復元した出土状況で、それぞれが若干隙間を空けて置かれていたらしい。いずれにしても近接した出土であり、まとめて置かれたか、埋められた状況が想定されよう。

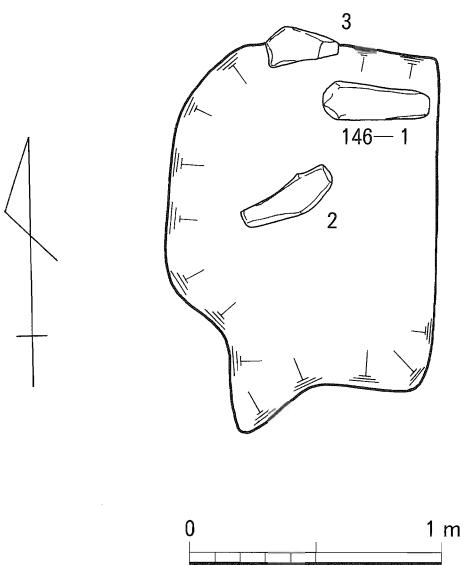
遺物（第146図） 1は黒灰色の緻密な石材の石斧未製品と考えられる。表面、裏面、側面には自然面が大きく広がり、端部には粗い剥離を両面から施して、ジグザグで平面形が弧を描く刃部状に加工している。また表面（a面）は片側側縁に、側面から連続的な調整剥離を施している。裏面（b面）も刃縁部に近い側の側縁に、側面からの調整剥離を施す。基部も自然面が残るが、基部から表裏に若干の剥離が施されている。長さ22.3cm、最大幅6.0cm、厚さ3.7cmを測る。

2は黒灰色の緻密な堆積岩製の石斧原材と考えられる石器である。薄手のやや角張った自然礫を節理に沿って薄く分割し、さらにそれを短冊形に分割したもので、表面と両側面、両端面は自然面、他の2面は分割面である。長さ17.7cm、最大幅6.4cm、厚さ2.55cmを測る。

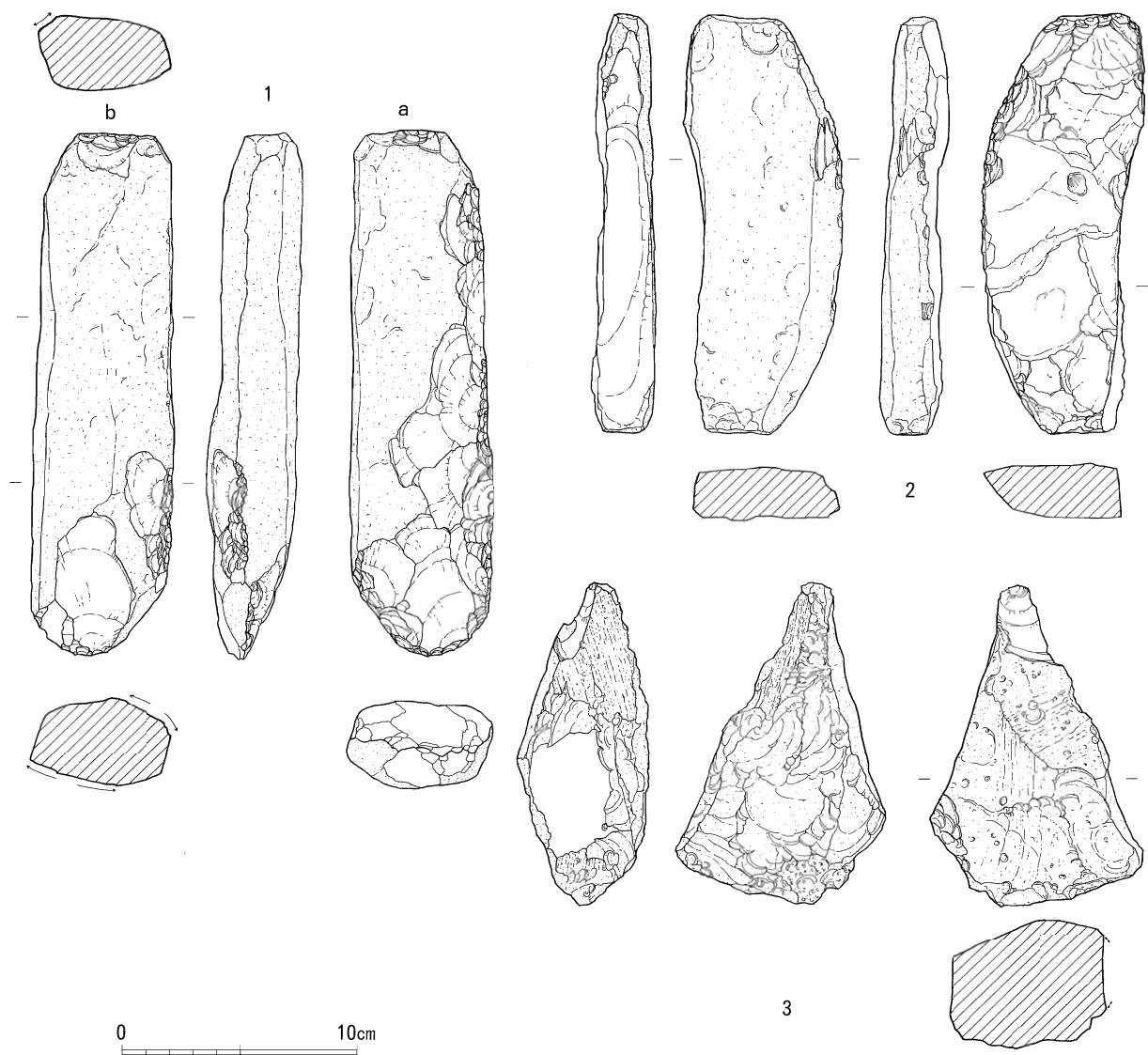
3は黒曜石の原石である。長さ13.7cm、最大幅8.8cm、厚さ4.5cmの平面が三角形で、角礫状を呈する。剥離面は図上面（三角形の頂点部分）に見られるのみである。これらの石器の時期については、直接的に判断する根拠はないが、縄文時代のものであろうか。
（丹羽野）



第144図 連行遺跡 加工段9・10・11・SX01 出土遺物実測図 (S=1/3)



第145図 連行遺跡 トレンチ内石器等出土状況復元図 (S = 1/30)



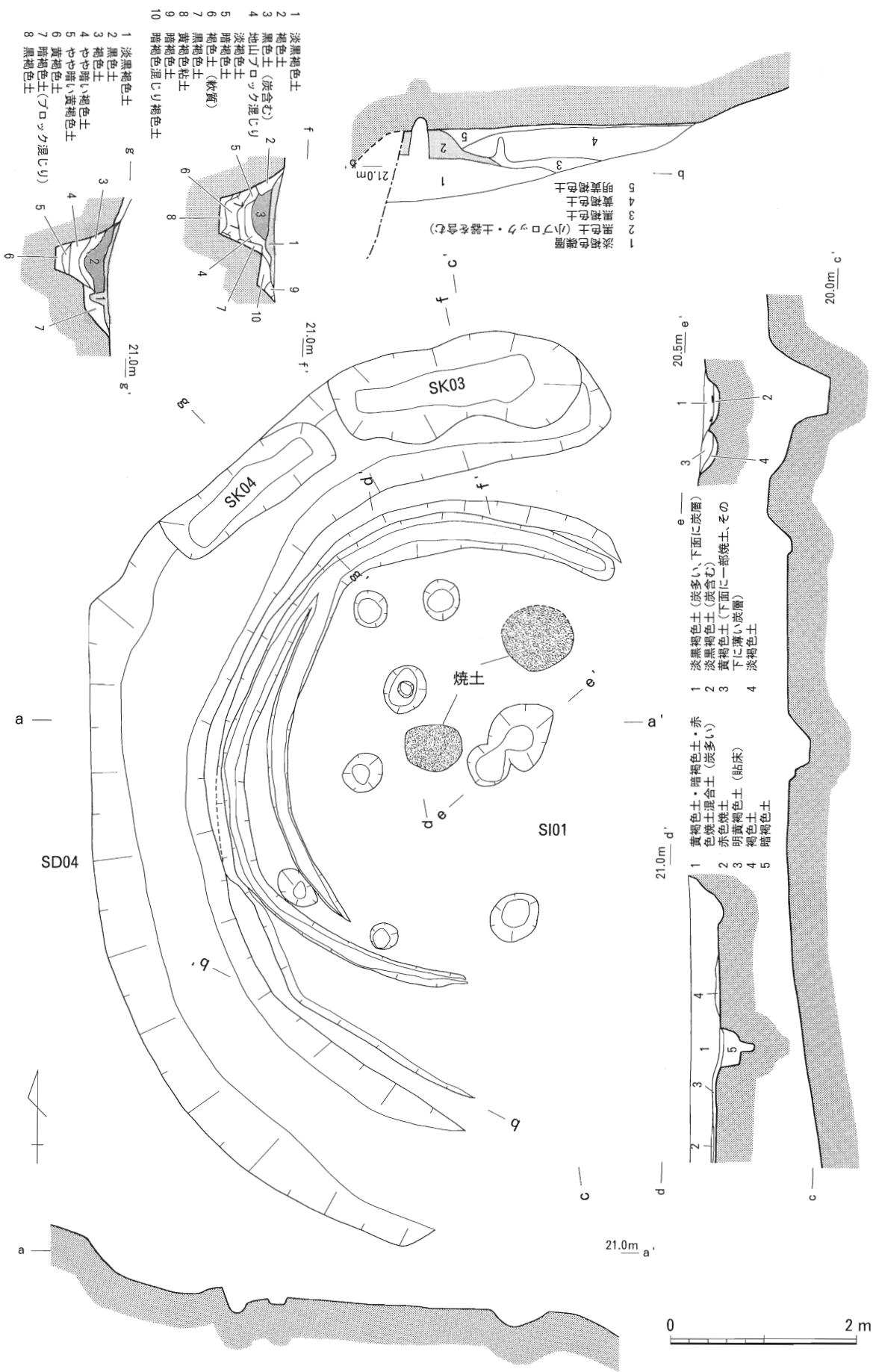
第146図 連行遺跡 トレンチ内一括 出土石器実測図 (S = 1/3)

東側斜面、南側斜面部の調査

客山墳墓群のある丘陵の東側斜面及び、東側に伸びる尾根の南側斜面からも遺構が検出されている。東側斜面は、横穴墓群の下方約20mの傾斜がゆるくなった部分から弥生時代の堅穴住居跡(SI 01)や溝(SD04、SD04は古墳の溝の可能性が高い)が検出された。南側斜面からは斜面の上方をカットした加工段が1(加工段13)、建物跡が2(SB01、02)、溝が4、土坑が5(SK05~08)、



第147図 連行遺跡 東南側斜面 遺構配置図 (S=1/400)



第148図 連行遺跡 SI01・SD04・SK03・SK04 実測図 (S = 1/60)

石棺1が検出された。溝のうち2つ(SD06、SD09)は古墳の周溝の可能性が高い。

SI 01 (第148図)

東側斜面の横穴墓の下方約20m、標高およそ20~21m前後の部分から下方は傾斜が緩やかになる。SI 01はこの傾斜が変換する部分の緩斜面から検出された。東側(斜面下方側)半分は流出により検出されなかったため、全形は不明だが、隅丸方形もしくは隅丸多角形の堅穴住居跡と考えられる。壁体溝と考えられる溝が、西側(斜面上方側)で2本に分かれているため、建替えがあったものと推測される。規模は外側の壁体溝の内側で、4.6m(南北方向)を測る。柱穴状のピットは7穴検出されているが、主柱穴の並びは不明確である。

床面の中央付近で検出された瓢形のピットがいわゆる中央ピットと考えられる。同様の規模の2つのピットが重なっており、建替えに対応した作り替えと考えられる。深さはともに20cm前後、覆土には炭が多く含まれており、一部焼土も認められる。土層の切り合い関係から、北東側のピットが新しいことが確認される。ピットも規模は下面で25cm~30cmとほぼ同規模であるが、上端の規模は北東側が65cm前後、南西側が45cm前後である。床面には2か所、焼土の広がりが認められる。

遺物 (第149図) 1は弥生土器甕片である。複合口縁部はやや外に開いて立ち上がり、外面は内湾して細かな擬凹線を施している。2は複合口縁の甕片で、口縁部はやや外方に立ち上がり、外面には間隔が比較的広く、直線的ではない擬凹線を施している。3は甕または壺の底部である。復元底径5cm前後の平底で、底は厚い。4は甕もしくは壺の口頸部である。復元口径15.5cm前後、口縁は外方に開いて立ち上がり、下方にもつまみ出すようにわずかに突出している。外面には比較的広い間隔で擬凹線を施しており、わずかに内湾している。5は甕の口頸部である。復元口径15cm前後、口縁は外方に開いて立ち上がり、外面には若干波を打った擬凹線が見られる。内面頸部は「く」字状に折れ曲がり、その上はヘラミガキを施している。6は復元推定口径が24~25cm前後となるやや大型の甕である。外方に開いて立ち上がる甕の口縁外面には擬凹線が見られる。

これらの遺物は大きな時期差は認められず、弥生時代後期中葉~後葉、草田2期~3期のものと考えられる。遺構の時期も、床面や壁体溝出土遺物ものあることから、ほぼこの時期と考えて大過ないと思われる。

SD04 (第148図)

東側斜面の急傾斜部分と緩斜面部分の境付近、SI 01に接してそれを取り巻くように検出された溝である。一見SI 01の周囲を巡る溝にも見えるが、溝はSI 01の覆土を切って形成されており、SI 01廃絶後に作られた遺構であることは明らかである。現状で弧状を呈しているが、さらに下方に続いている可能性が高い。溝の幅は現状で上端で1.5m前後、底面で0.6~0.7m程度を測り、底面は必ずしも水平ではない。現状での差し渡しの幅は、底面の内側で7.8mを測る。覆土内の上層には黒色土が堆積している。溝の北側外縁に沿うように、2つの土壙(SK03、SK04)が検出されている。個々の土壙については後に述べるが、溝と土壙の関係を土層で見ると、土壙が一定程度埋まった上に溝の覆土である黒色土が堆積している。ただ溝の底にたまつた初期の堆積土を切って土壙が掘られており、遺構の順序としてはSD04が古いが、SD04が本格的に埋没しはじめる前に2つの土壙は埋まっている関係となる。両者の位置的な関係(溝の輪郭方向と沿った並び)も考慮すれば、SD0

4とSK03、SK04はきわめて近い時期に深い関わりの中で作られた遺構である可能性が高い。

遺物（第150図） 1～4は覆土の底面に近い部分から出土している。1～3は土師器の高杯である。いずれも橙色系の色調を呈し、風化が著しい。1は復元口径14cm前後の杯部片である。内湾する体部から口縁付近で外反し、端部は細くなって丸く収める。2はボール状の体部に脚部が差し込まれたもので、脚部の軸径が2.4cmを測る。3はやや薄手の高杯で、脚との接合部から体部にかけては横方向に開いており、体部に稜のつくタイプかもしない。軸部の径は2.4cmを測る。

4は須恵器杯身である。復元口径12cm前後、復元最大径14cm前後で口縁部はわずかに傾いて立ちあがり、端部外面はわずかながら外方に折れるようにアクセント付け、上面には面を設けている。5は須恵器円面硯と考えられる。復元径22cm前後の大形の体部にスカシのある脚が付いている。

遺物の時期であるが、1～4はほぼ同時期のものと見て大過ないものと考えられる。1～3の土師器高杯は、古墳時代中期以降のものと考えられる。4は形態的には大谷編年出雲1期の特徴を持つが、径がやや大きく若干下る可能性がある。おおよそこれらの遺物は5世紀末～6世紀前半のものと考えられよう。5は明らかに時期が異なるもので、細かな年代は不明だが奈良時代以降と考えられる。

遺構の性格 前述したように、SD04は一見竪穴住居を取り巻く溝のように見えるが、明らかに時期は異なり、SI 01とは独立した遺構である。性格は、溝内から土師器高杯、須恵器が出土しており、時期的に古墳時代中期～後期と考えられること、溝から土師器高杯が複数出土する方が周辺の古墳のあり方と同様であること、土壙が伴う可能性が高いこと、などから古墳の周溝と考えるのが合理的であろう。古墳であるとすれば、直径8m程度の円墳と考えられる。

SK03（第148図）

溝の北側外縁に沿うように、2つの土壙（SK03、SK04）が隣り合って検出された。SK03はその東側（斜面下方側）で検出された土壙である。長軸方向はN80°Eと東西方向に近い。やや丸みを帯びた長方形を呈し、規模は上端で長さ2.7m、幅1m前後、底面で長さ1.9m、幅が東側で0.36m、西側で0.25mとなる。壁は120°前後とやや斜めに掘り込まれ横断面は逆台形を呈し、深さは北側の検出面から約0.7mとかなり深い。覆土の堆積土層を見ると、側壁に沿って板状の立ちあがりが見られることや、上面が落ち込んだ形跡が見られることから、木棺等が入れられていた可能性もある。溝と土壙の関係を土層で見ると、前述したように土壙が一定程度埋まった上に溝の覆土である黒色土が堆積している。ただ溝の底にたまたま初期の堆積土を切って土壙が掘られており、遺構の順序としてはSD04が古いが、SD04が本格的に埋没しこじめる前に土壙は埋まっている関係となる。直接土壙内から遺物は出土していないが、遺構の関係からSD04に伴う土壙と考えられる。

SK04（第148図）

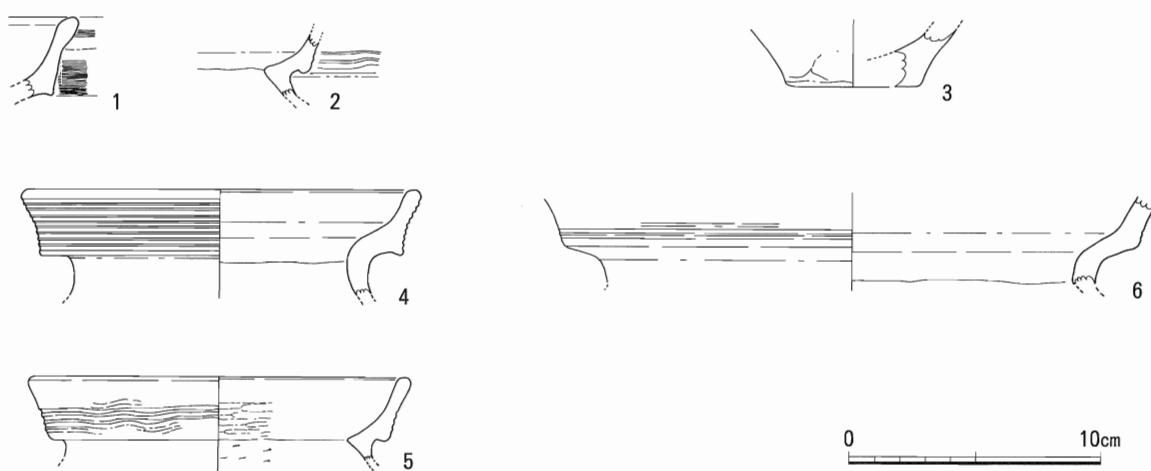
溝の北側外縁に沿うように検出された2つの土壙のうち、南西側で検出された土壙である。長軸方向はN47°Eと北東～南西方向である。平面形は長方形を呈し、規模は上端で長さ1.98m、幅0.65m前後、底面で長さ1.6m、幅が北東側で0.24m、南西側で0.32mとなる。壁は115°前後とやや斜めに掘り込まれ横断面は逆台形を呈し、深さは北側の検出面から約0.65mとかなり深い。覆土を見ると、SK03のような板状の立ちあがりは認められないが、覆土内への土砂の落ち込みは認められる

ことから、木棺の存在は不確定だが木蓋等があった可能性はある。SD04との関係はSK03と同様である。直接土壌内から遺物は出土していないが、遺構の関係からSD04に伴う土壌と考えられる。

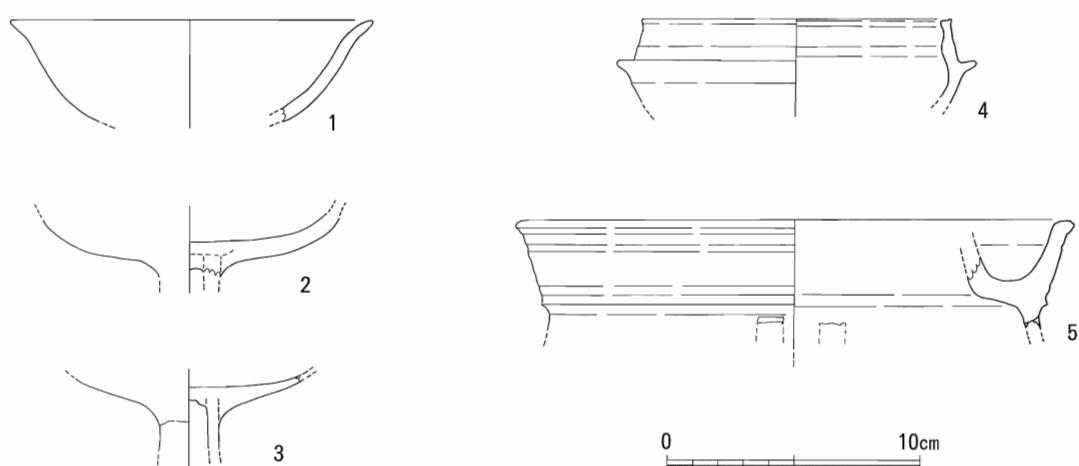
SD05（第152図）

SI 01の北東側緩斜面で検出された溝状の遺構である。斜面の等高線方向と平行に、幅0.3～0.5m（底面）の溝が設けられている。南側は斜面下方方向にゆるい角度で曲がって行き、消滅しているが、北側は調査区の外側に続いている。全形は不明である。検出された部分で長さ4.8m程度で、深さは深い部分で斜面上方から50cm前後ある。この溝の上方には柱穴状のピットが10穴余り検出されている（第147図）が、建物の並びは復元できなかった。

遺物（第153図） 溝の中から直接遺物は出土しなかったが、溝の直下付近から弥生土器が出土している。1は弥生土器の甕もしくは壺の底部である。底径3.8cmと小さな平底で、底面はわずかながら曲面を呈している。2は弥生土器甕の口頸部片で、復元口径19.5cm前後である。口縁は内湾しながらやや外方に向かって立ちあがり、口縁端は膨らんで端部を丸く收める。口縁外面には不明瞭ながら擬凹線が見られ、頸部にも擬凹線を施している。3は復元口径19.5cm前後の甕である。口縁

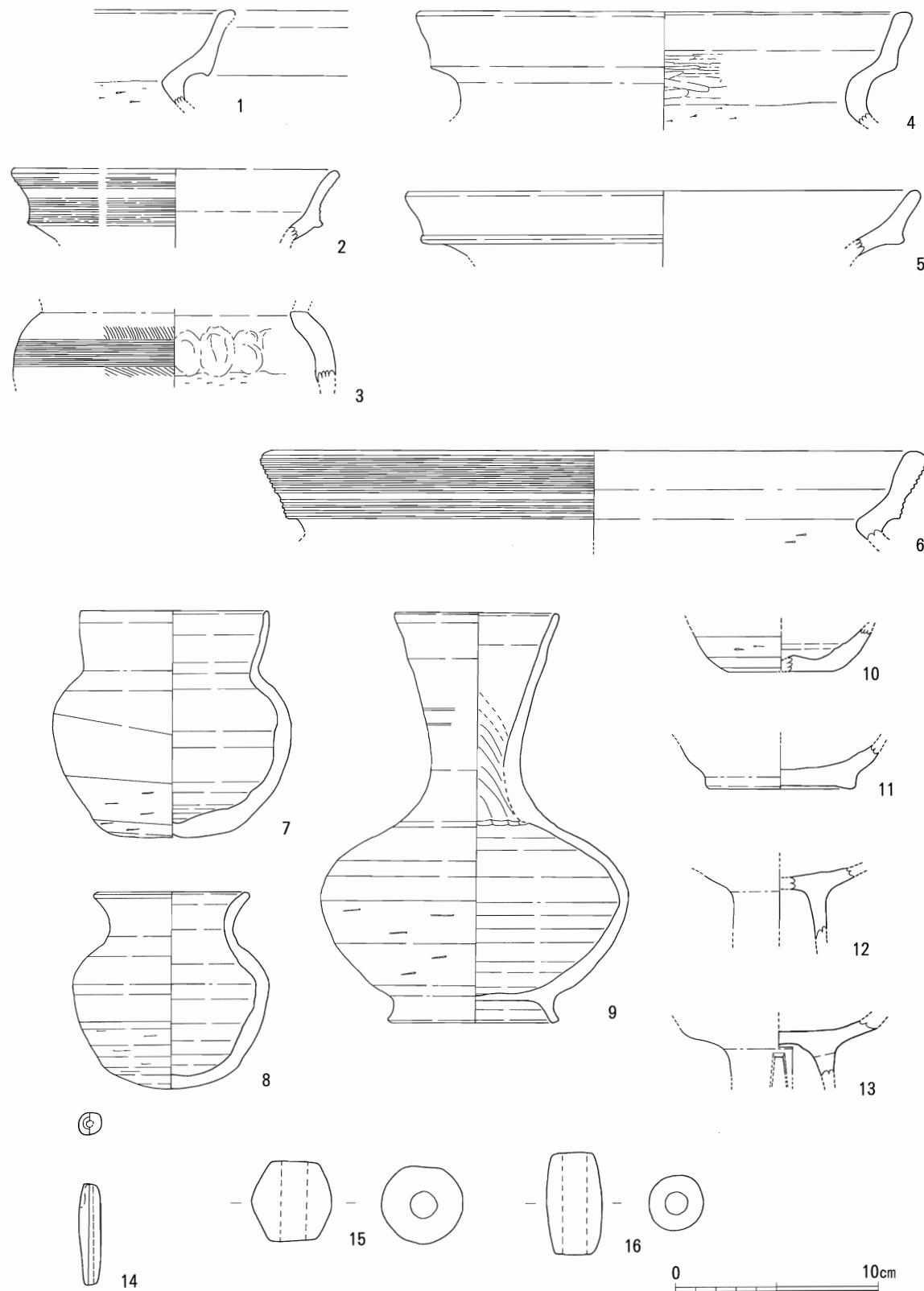


第149図 連行遺跡 SI 01 出土遺物実測図 (S = 1/3)



第150図 連行遺跡 SD04 出土遺物実測図 (S = 1/3)

は外方に開いて立ちあがり、下方にもつまむように垂下している。口縁外面には擬凹線を施し、端部は丸く收めている。これらの遺物の時期は弥生時代後期後半、草田編年3期を前後する時期と考えられる。



第151図 連行遺跡 SI 01・SD04 周辺遺構外出土遺物実測図 (S=1/3)

SI 01、SD04、SD05周辺出土
の遺構に伴わない遺物（第15
1図）

東斜面、横穴墓群の下方約
20メートルの傾斜がゆるく
なった部分のSI 01、SD04、
05周辺で出土した遺物である。
すぐ上方が横穴墓が存在する
急斜面にあたるため、この地
区周辺の遺構に関わる遺物の
ほか、上方から転落してきた遺物も含まれているもの
と推測される。

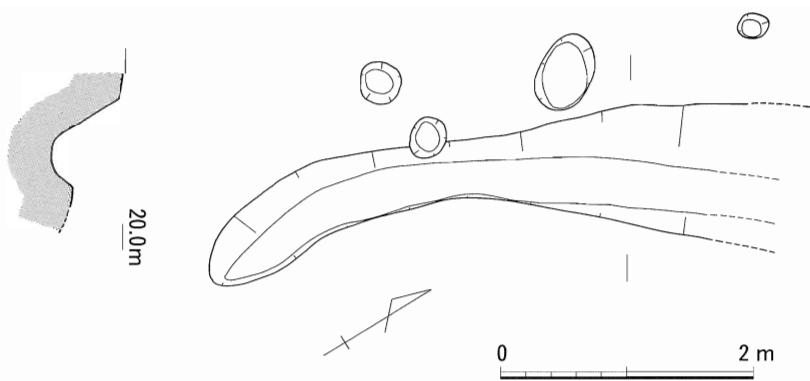
1～6は弥生時代後期の土器である。1は複合口縁
の甕で、口縁外面はわずかに内湾し、端部は肥厚する。
外面擬凹線の有無は風化のため不明瞭である。2は口
縁外面に擬凹線の見られる甕である。復元口径16cm前
後、複合口縁の稜はわずかながら横方向につまみ出し、
口縁は湾曲しながら外に開く。3は甕もしくは壺の胴
部肩付近の破片である。肩の張りが少なく、内面上半
にはヘラケズリが見られないこともあって、厚さが1
cm内外と分厚い。外面には擬凹線が見られる。復元胴
部径は16cm前後である。

4は復元口径24cm前後の甕もしくは壺である。口縁
部の幅は3cm前後とやや短く、外面に擬凹線は見られ
ない。内面の頸部付近から口縁付近にかけてはヘラミガキが見られる。5は復元口径25cm前後の甕
もしくは壺と考えられるが、頸部と口縁部の間の内面の平坦面が不明瞭で、器台の可能性もある。
6は復元口径33cm前後の大型の甕である。口縁外面には擬凹線を施す。

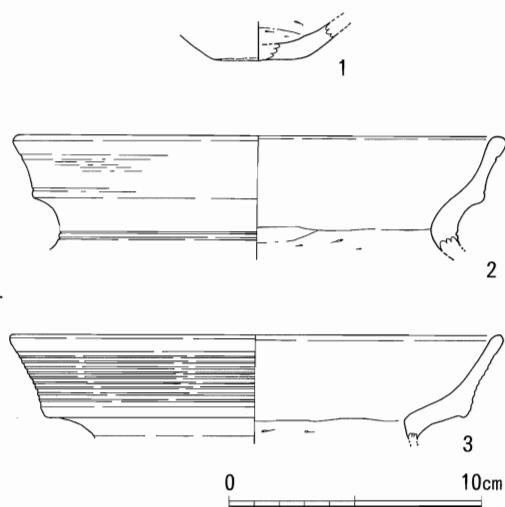
7～10、12、13は須恵器である。7はほぼ完形の直口壺である。口径9.3cm、器高11.2cm、底部
には回転ヘラケズリを施す。8はほぼ完形の小形壺である。くびれた頸部から外反して口縁部が立
ち上がる。口径7.7cm、器高9.8cm、底部には回転ヘラケズリを施す。9は高台の付いた長頸壺である。
よく張った胴部に細くて外開きの口頸部がつく、底部には静止糸切り痕が残る。口径8.1cm、
胴径15.1cm、器高20.5cm、高台径8.3cmを測る。10は壺類の底部で、外面に回転ヘラケズリが見られ
る。11は土師質土器の碗である。

14～16は土錘である。14は細長い土師質のものである。15は紡錘形で須恵質である。16は円筒形
で瓦質である。時期は不明である。

これらの遺物のうち、弥生土器は時期的にまとまっており、草田編年でいう2期～3期併行と考
えられる。この特徴はSI 01、SD05周辺出土の土器と同様で、これらの遺構に関連する遺物の可能
性が高い。一方7～9の須恵器は、遺構と直接関係しないにもかかわらずほぼ完形であること、時



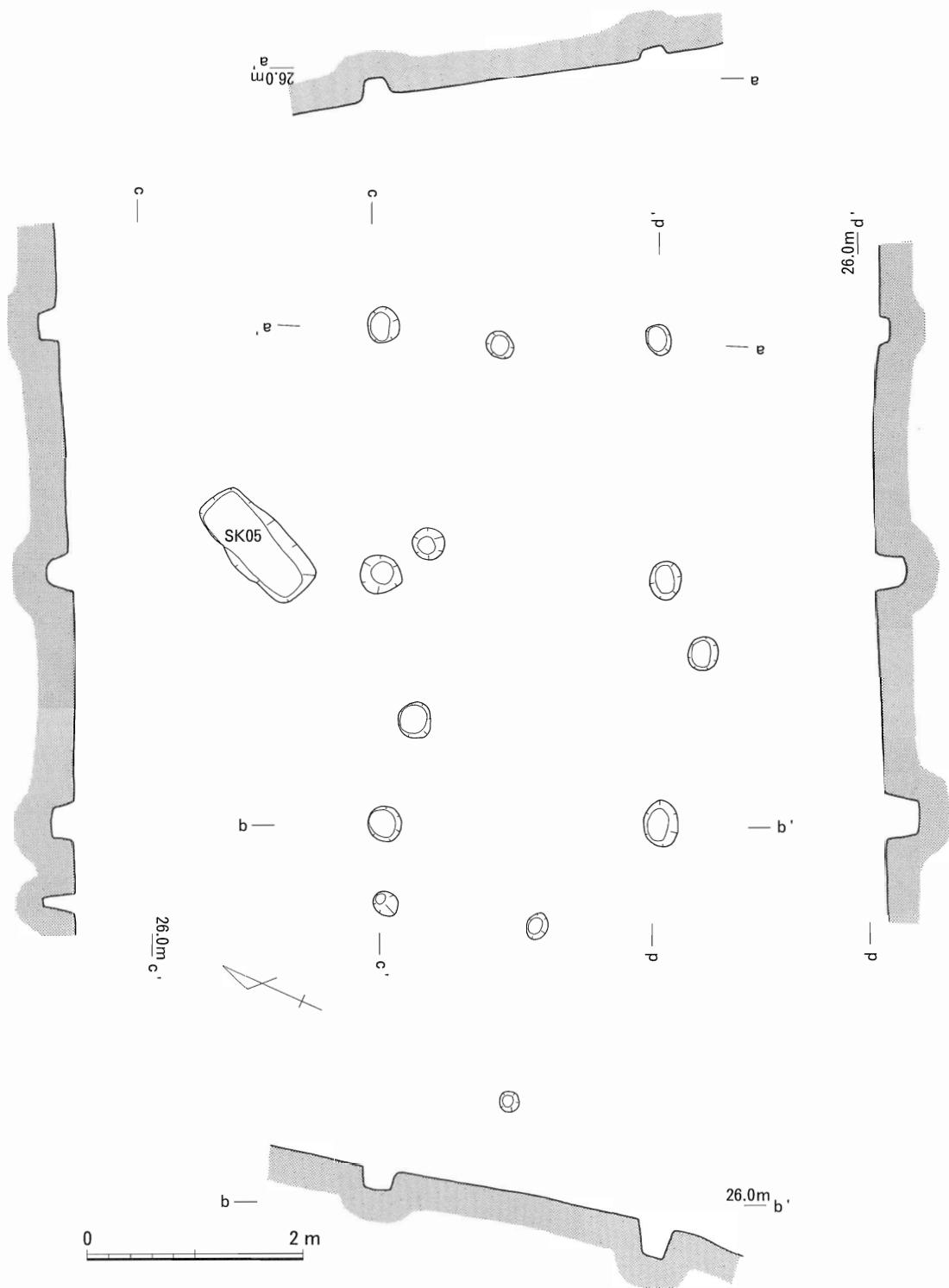
第152図 連行遺跡 SD05 実測図 (S=1/60)



第153図 連行遺跡 SD05下方
出土遺物実測図 (S=1/3)

期的にも矛盾がないことなどから、直上の横穴墓群から転落した遺物である可能性が高い。横穴墓群は後世の耕作による地形改変によっても、かなり前庭部前方が失われている可能性が高く、これらの遺物は前庭部や前庭部前方に本来あった遺物と考えられる。

(丹羽野)



第154図 連行遺跡 SB01 実測図 (S = 1/60)

SB-01（第154図） 東斜面の尾根からやや下がった緩斜面に位置している。桁行2間4.6m、梁行1間2.6mとやや規模は小さい建物である。桁行の方位は、ピット間の距離は、桁行で北2.3m、2.35m、南で2.3m、2.3mである。梁行の2つの柱穴は、底面にかなりの高低差が見られる。東側では35cm、西側で60cmの高低差が見られる。桁行の柱穴は同じ高さに掘り込まれている。ピットの大きさは、上端で35～45cm、深さ10～30cmを測る。

ピット内、上面において遺構に伴う遺物を確認していないため、時期を確定することが出来ない。

SB-02（第155図） SD-04とSD-06の中間の南斜面、南東に続く谷の最深部に位置している。斜面の上側に「コ」の字状の溝が位置しており、その溝に囲まれるように平坦面が削り出されている。平坦面の規模は、長辺8.0m、短辺4.5mで溝を含めた長辺9.5m以上、短辺6.0mで斜面の傾斜によりやや傾斜している。溝の規模は、幅0.5～1.5m、深さ0.15～0.5mを測る。溝内の覆土は上半に明褐色土、下半に暗褐色土が堆積している。この溝の北側中央と東側から須恵器、弥生土器が出土している。破片の点数からみると、須恵器・甕（10、12）が最も多く集中して出土している。平坦面からはピット24を検出している。この内P-1、2、5とP-3、4、6の並びが確認された。P-1、2、P-3、4の間隔は、3.0mであり、P-2、5、P-4、6の間隔は3.7mである。この柱穴を建物とすると1間×1間で、北東の隅は溝の中となり未確認でもあり建物と断定は出来なかった。溝内の遺物は、主に上層から出土しており、平坦面が廃絶された後に堆積したものと思われる。北西部において検出したピットは、規模が1.1×0.6mで覆土が黒色土である。

出土遺物状況（第155図） 須恵器杯1、2は、溝の南西部から出土している。碗（3）は、溝の南東部から、東側においては（5、7、9、10、11）、溝の北側では（6、12）が出土している。

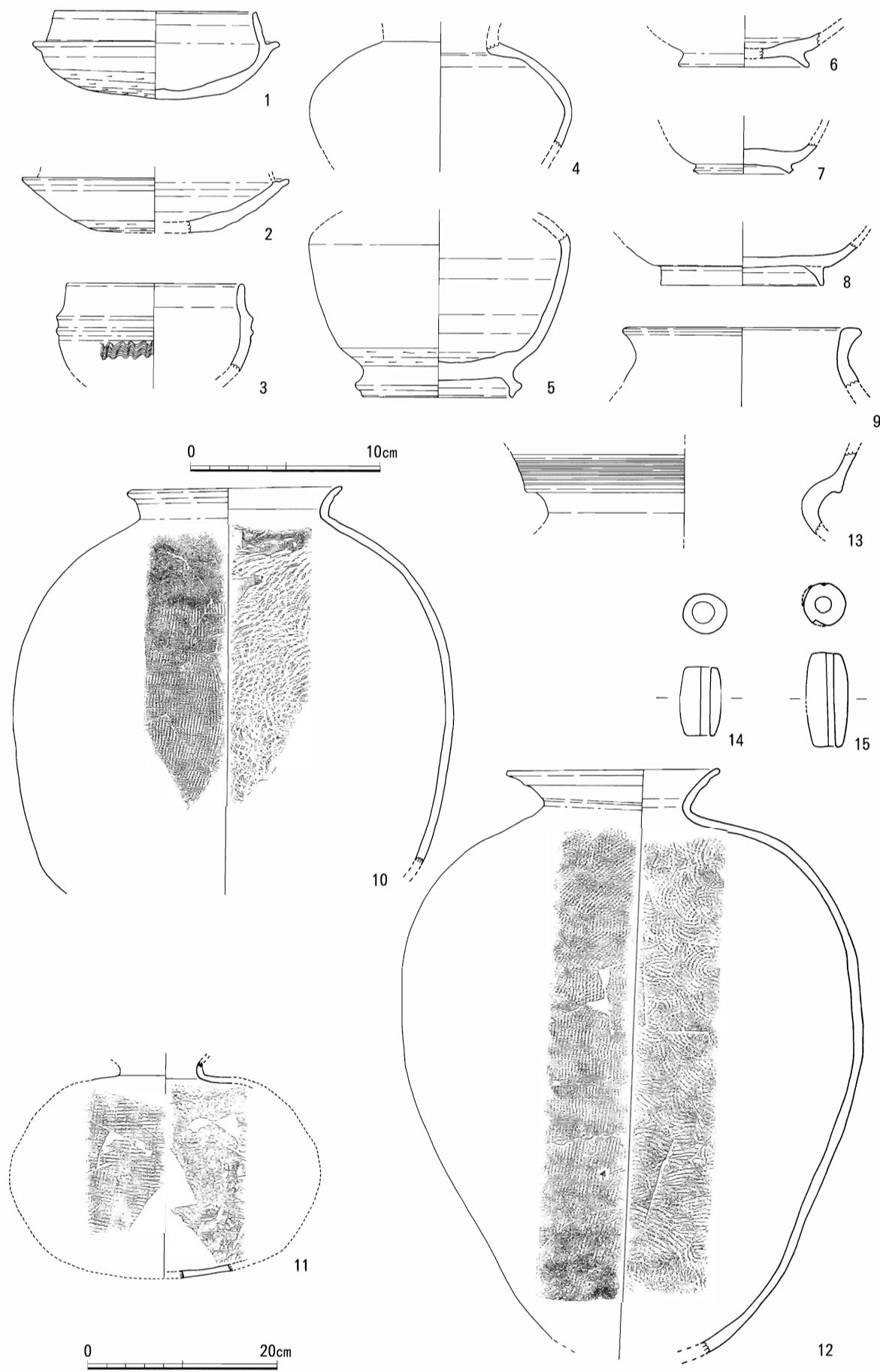
遺物（第156図） 1、2は須恵器杯・身である。1は、身に深みがあり丸みを有している。口縁部の立ち上がりがやや内傾して立ち上がり、底部外面に回転ヘラケズリを施している。口唇端部に平坦面を有している。口径10.7cm、受け部径13cmを測る。2は口縁部を欠いており、底部外面に回転ヘラケズリを施している。受け部径14.2cmを測る。3は、本来は取っ手の付く須恵器・碗である。口縁部の下に2条の突帯をめぐらし、その下に櫛描波状文を施す。推定口径9.8cmである。4は須恵器・壺の体部の破片である。体部の肩に丸味を有している。5は、高台の付く須恵器の壺である。底部外面に回転糸切り痕を残し、高台を貼り付けている。高台の端部は鳥の嘴状になっている。底部外面に「×」のヘラ記号が残る。6は高台の付く杯で、やや細い高台が「ハ」の字状に開いている。底部外面に「=」のヘラ記号が残る。7は細かな高台の付く杯で底径4.8cmと小形のものである。8はやや高い高台の付く杯で、底径8.6cmを測る。内面は丁寧にナデが施される。9は、甕で端部の肥厚する口縁部である。推定口径10.5cmを測る。全面に黒色の自然釉がかかる。

10は、須恵器・大甕で口径22.5cm、胴部径46cm、残存高40cmを測る。12は頸部の細い須恵器・大甕で口径22.5cm、頸部径15.5cm、残存高62cmを測る。11は横瓶の破片で体部の殆どが推定復元である。13は弥生土器の甕である。口縁外面に8条以上の沈線を入れた後、ナデしている。頸部の内面にヘラミガキを施している。14、15は土錘である。

SB-02の時期 この溝に囲まれた遺構の時期は、1～3の須恵器の時期、大谷編年3期と考えられる。他の土器は溝内の上層からの出土であり、遺構の使用されていた時期と隔たりがあると思われる。



第155図 連行遺跡 SB02 実測図 (S = 1/60)



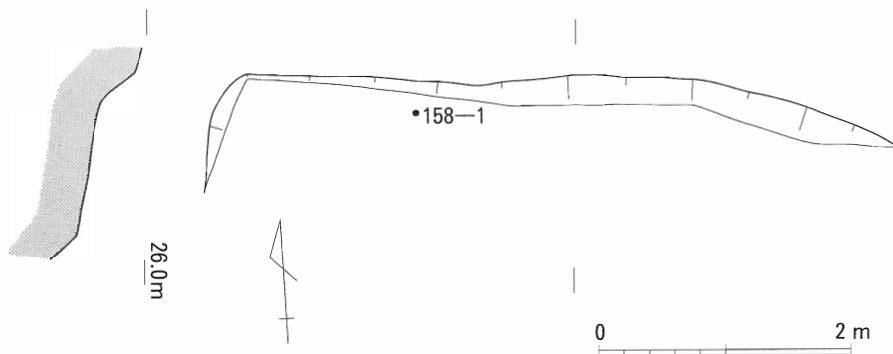
第156図 連行遺跡 SB02 出土遺物実測図 (10~12はS=1/6、その他はS=1/3)

加工段13（第157図）

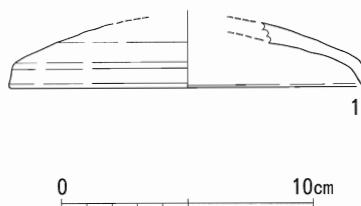
SB-02の北側の斜面上部の地山を平坦に削り出した遺構である。標高26mの高さで、長さ5.5m、幅1.0mを測る。この平坦面にはピットが確認されず須恵器・杯蓋の破片が1点出土している。

遺物（第158図）

この杯は、形態から輪状のつまみが付くものと思われ、口径14.2cmを測る。口縁端は緩く屈曲している。（広江）



第157図 連行遺跡 加工段13 実測図 (S=1/60)



第158図 連行遺跡 加工段13

出土遺物実測図 (S=1/3)

SD06（第159図）

東西に伸びる丘陵の東側斜面、尾根頂上部からおよそ4～5m下った標高24～25m程度の比較的緩やかな斜面で検出された溝である。斜面上方側を大きく削り込み、両サイドはほぼ直角に折れて、斜面下方側（東側）に向かって伸びる「コ」字形を呈する。後に述べる遺物の出土状況等から、古墳の周溝の可能性が高いと考えている。溝の底、内側の下端で一辺を測ると、10.8m程度の方墳になるものと考えられる。

溝の方向はほぼ東西南北と一致している。溝の幅は残りのよい部分の検出面で4.1m、底面では0.4～0.8mである。残存状況の良好な部分では、溝の斜面は緩やかな角度で掘り込んだ後に中途で角度を変えて、急角度に掘りこみ、底に近い部分では逆台形を基本の断面形としている。溝に囲まれた内側には盛土等は認められず、主体部等も認められなかった。ただ、基盤層の直上に黒味を帯びた層（14層）が見られ、あるいは旧表土の可能性もある。そうだとすれば、本来存在した盛土が流出、もしくは削平されたことも想定され得る。

覆土の堆積状況を見ると、2層の黒色系の堆積土が認められる。後述するが、それぞれの黒色土から遺物が出土している。下層の黒色土は底面に5～20cmの土砂堆積の上に認められる。上層の黒色土は下層黒色土との間に1枚の間層を挟んでおり、一定の時期差があることをうかがわせる。

遺物出土状況（第161図） 上層黒色土からは、北辺を中心にして須恵器、土師器、鉄滓など多くの遺物が出土した。出土状況の傾向として、さほど広くない範囲から接合する同一個体破片が集中して出土する様子が認められる。例外は19、21で1点が離れた地点で出土しているが、そのほかの破片は近い範囲に集中している。通常の遺構覆土出土遺物（原位置ではない遺物）ではあまり認め

られない状況で、破片が流入してきたというよりは、一定程度の大きさの遺物がその場所で割れた状況が想定される。また鉄滓が北東コーナー付近を中心に出土している。

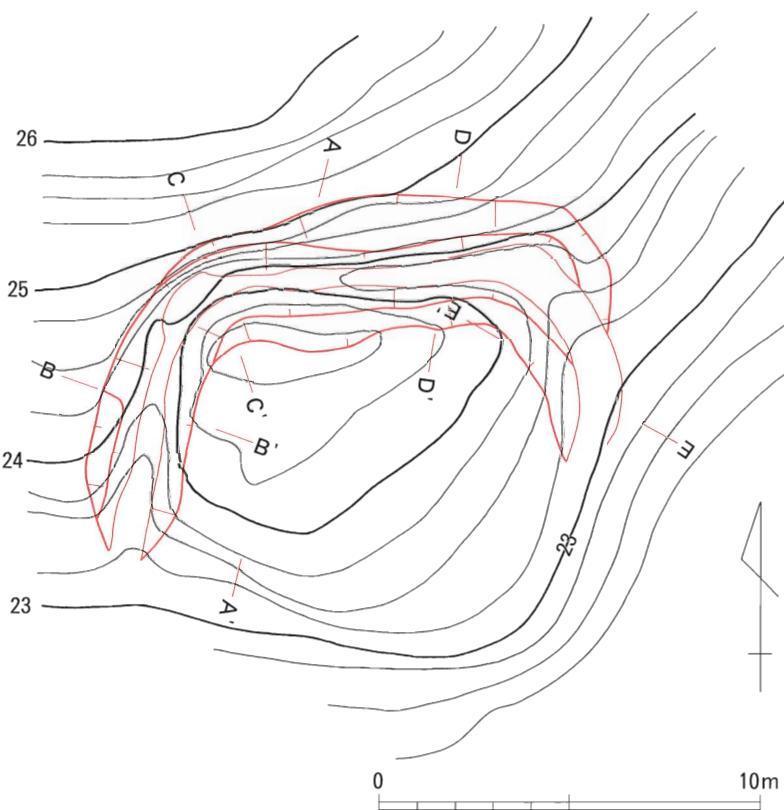
下層黒色土およびその下層からも土師器が出土している(第161図朱書遺物)。西辺の溝底部付近を中心に高杯がまとまって出土、また北辺中央西寄りの溝底部付近から甕が出土した。高杯は上向きで出土している。

上層出土遺物(第162図、第163図) 1~15、19~20は須恵器である。1~3はいずれも輪状つまみを持つ蓋である。

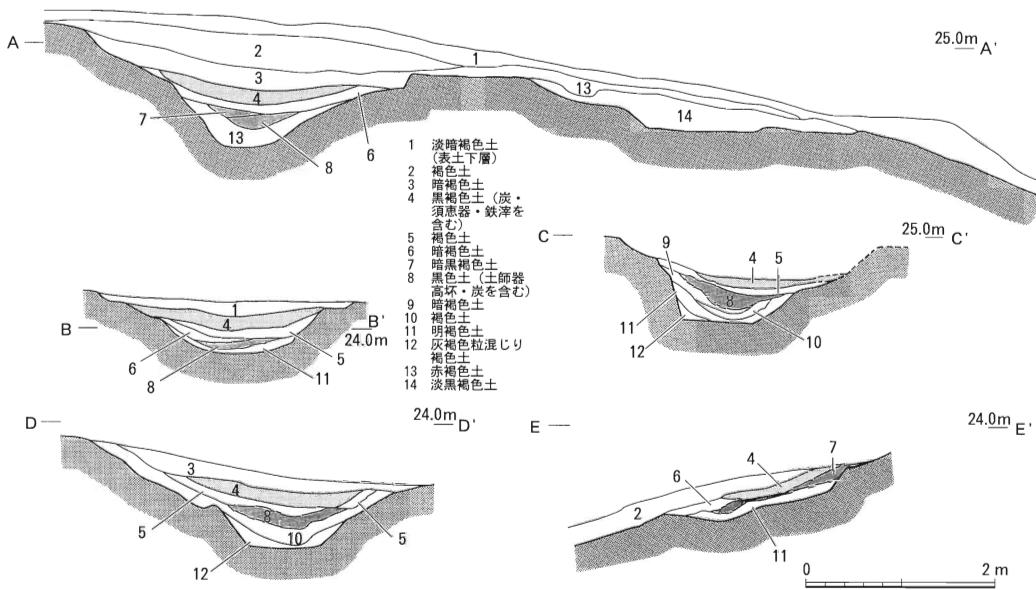
1はかえりを持つ蓋で、復元口径12cm前後、復元最大径13.5cm前後、器高2.7cm程度である。2は口縁の端部が垂下する蓋である。ほぼ完形で口径15.0cm、つまみ径4.3cm、器高2.8cmを測る。

4~8は高台の付かない杯である。うち4~7は体部に丸みを持つもので、いずれも底部に糸切り痕を残している。4は口径12.1cm、底径8.0cm、器高4.2cmで、口縁直下は外面を内湾させてくびれさせている。5は口径12.7cm、底径10.2cm、器高4.7cm、口縁部は特にアクセントなく端部に至っている。底部は静止糸切り痕が残る。6は口径11.8cm、底径7.8cm、器高3.8cmで、口縁部は内面を膨らますようにしてアクセントをつけている。7は復元口径13cm前後、底径9.2cm前後、器高4cm程度で、口縁付近はわずかに内面を膨らますようにしてアクセントをつけている。8は薄手で体部が直線的に立ち上がる杯である。復元口径11cm前後、復元底径8cm前後、器高4cm程度で、底面には糸切り痕が残っている。

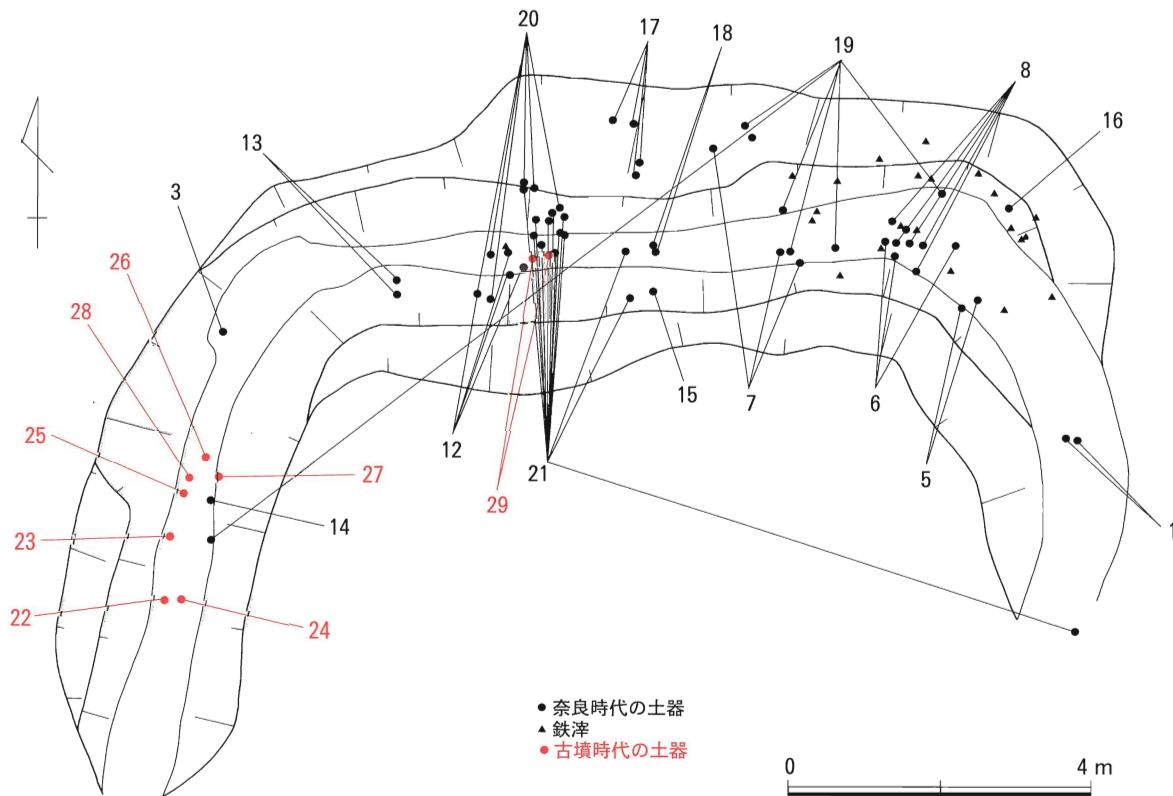
9は天井が平坦な蓋で、体部から口縁にかけては一度折れて平坦面を設け、口縁端は若干下方につまむように垂下させている。復元口径12.5cm前後、復元底径6.4cm前後、天井部には回転糸切り痕が残る。10は復元口径7cm前後の短頸壺である。11は浅くて低平な杯部に、幅広の脚部が付く高杯である。口径23.4cm、杯部高2.8cm、深さ1.4cm、脚部の底径12.8cm、接合部付近の径7.2cm、脚部高6.6cm、器高9.4cmを測る。脚部には台形の透かしが1か所見られる。12は高台の付く皿の底部と考えられる。高台は底部外縁より内側につけられ、高台径は11cm前後である。13は高台の付く杯身と考えられ、復元高台径11cm前後である。14は壺類の底部で底径7.4cm、底面には回転糸切り痕が残る。15は壺と考えられ、復元高台径8.5cm前後である。



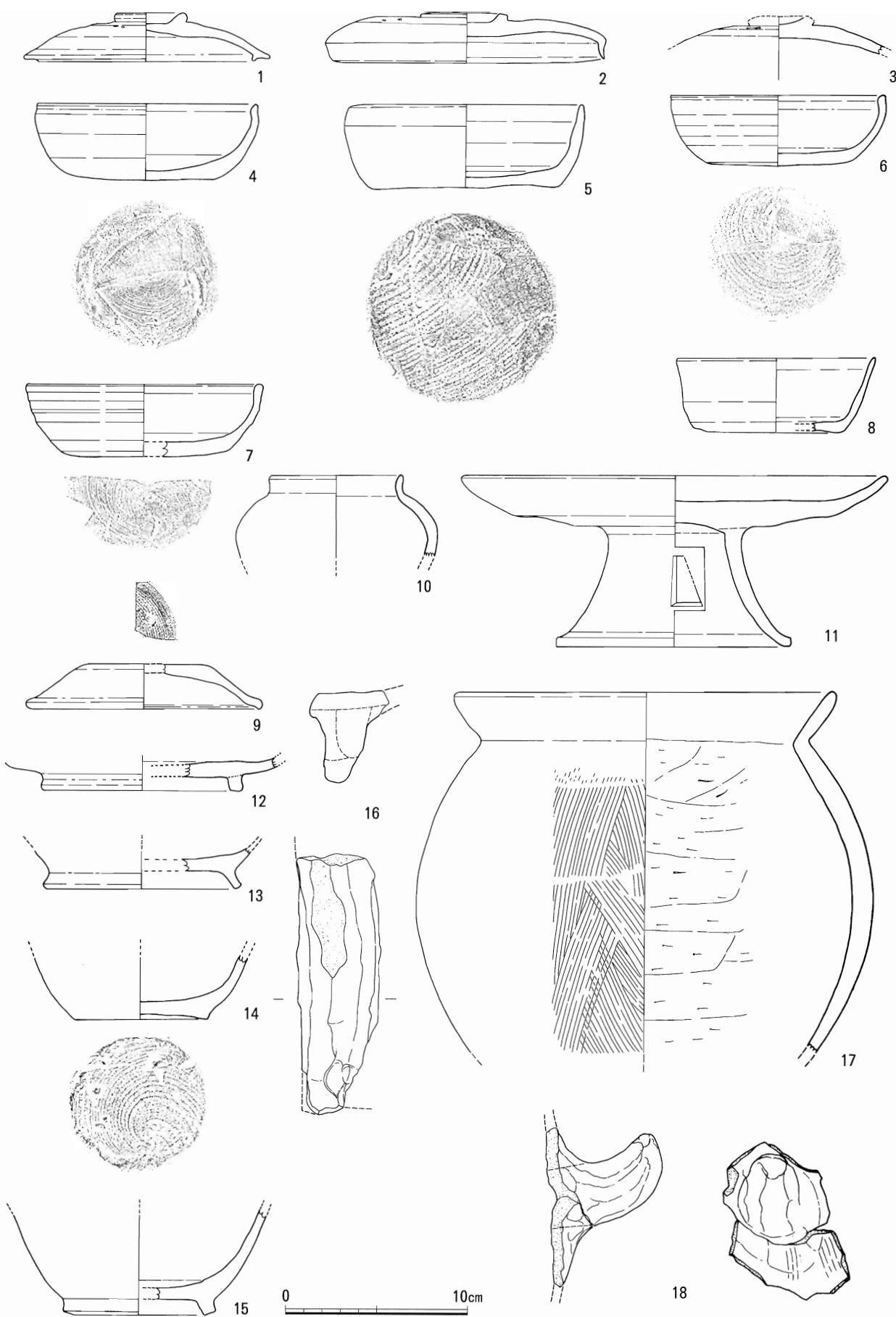
第159図 連行遺跡 SD06 調査後測量図 (S=1/200)



第160図 連行遺跡 SD06 土層実測図 ($S=1/80$)



第161図 連行遺跡 SD06 遺物出土状況 ($S=1/100$)



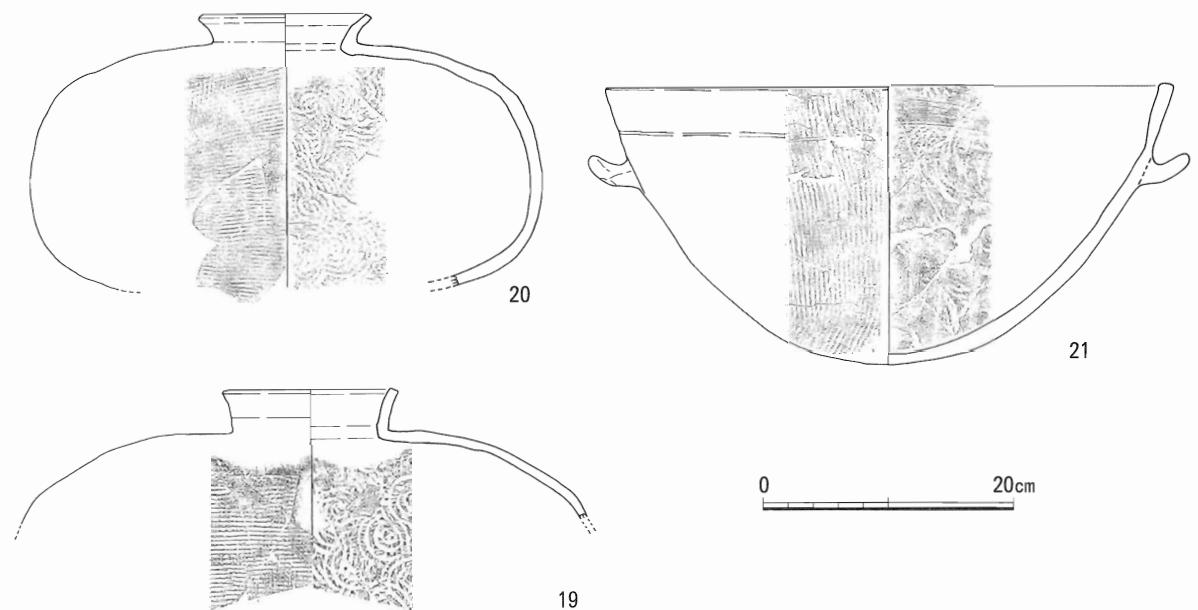
第162図 連行遺跡 SD06 出土遺物実測図 (1) (S = 1/3)

16～18は土師器である。16はカマド形土器焚口部の、いわゆる庇の部分と考えられる。17は土師器甕である。頸部が「く」字形に折れ、口縁は単純な形で端部は丸く収める。胴部はよく張り、外面には粗いハケメを施す。外面にスス等は付着していない。復元口径21cm前後、復元胴部径25cm前後である。18はコシキの把手部分と考えられる。外面には一部ハケメが見られる。

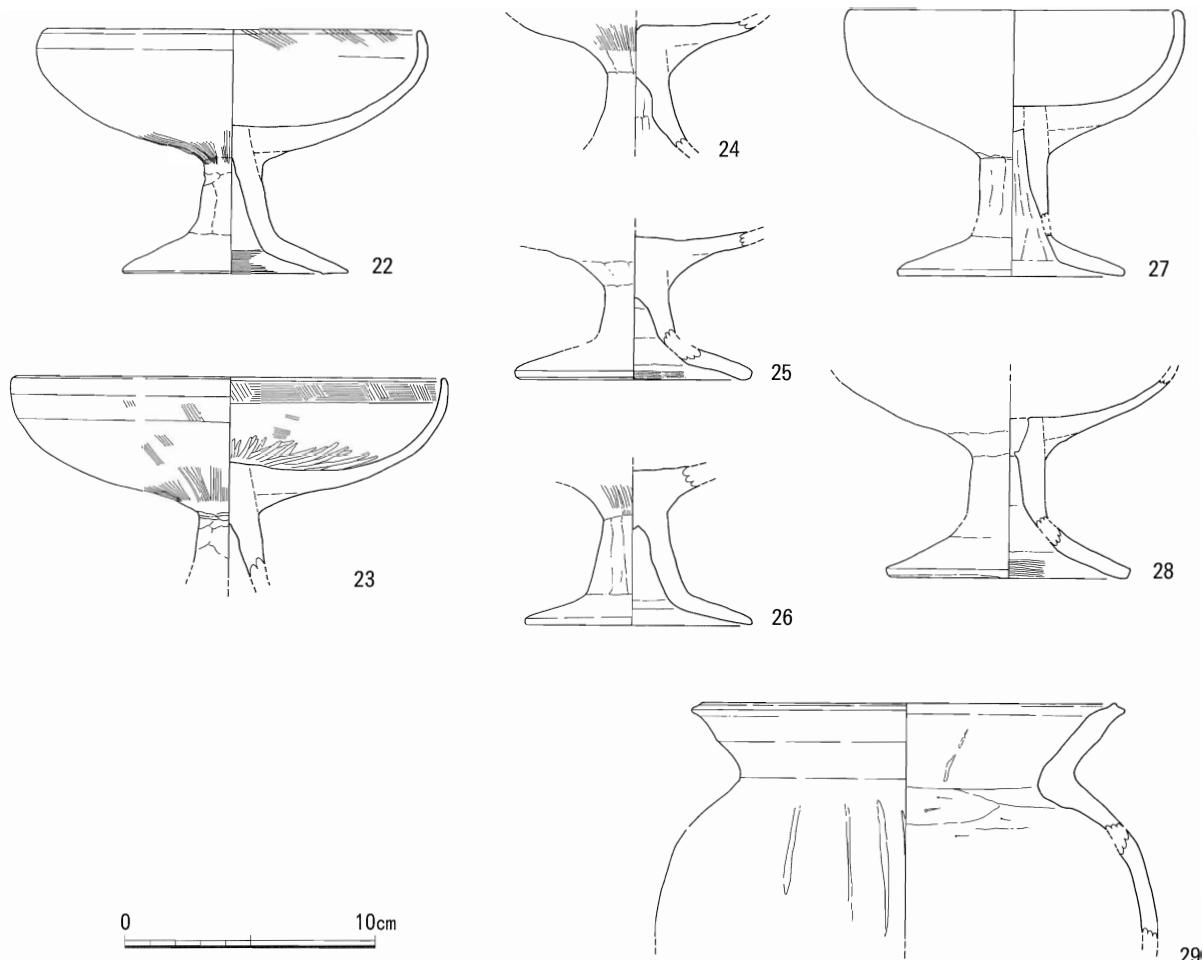
第163図19、20は須恵器横瓶である。19は復元口径13.5cm前後、口頸部はほぼ上方に立ち上がり、そのまま口縁部に至る。20は復元口径13.5cm、胴部長径は40cm前後で、口頸部は外方に開いて立ち上がり端部には面を設ける。21は大型の鉢である。胴部は丸底半円形で、単純な口縁である。口縁の下部外面には1条の浅い沈線が見られる。復元口径45cm前後、器高22cm前後で、口縁の下方6cmほどのところに、把手を設けている。

下層出土遺物（第164図） 22～28は土師器高杯で、おおよそ同様の形態を呈している。杯部は形態が分かるものは浅いボール状を呈す。脚部は杯の底に差し込んで接合しており、軸部は細めで中途で折れ、脚裾は「ハ」字状に開いて脚端にいたる。いずれも赤ないし橙色系統の色調を呈し、白色の筋がマーブル状に入っているものもある。

22は口径14.8cm、器高9.7cm、軸径2.4cm、脚部底径9.7cm、脚高4.6cmを測る。軸部から杯部底にかけては放射状にハケメを施し、口縁内面には斜め方向の、脚裾部の内面には横方向のハケメを施している。23は口径17.1cm、軸径2.4cm、杯部底部内面には放射状にヘラミガキを施し、口縁内面は横方向と斜め方向のハケメを施している。軸部接合部付近から杯部底部にかけては放射状のハケメが見られる。24は軸部付近の破片で、軸径2.45cmである。接合部から杯部底にかけて放射状のハケメを施している。25は軸部から脚裾部の破片で、軸部径2.5cm、復元脚端径9.5cm前後で、脚裾部内面にはクモの巣状にハケメを施す。26は高杯脚部で、軸径2.6cm、復元脚端径9cm前後である。接合部から杯部外面にかけて、放射状にハケメを施している。27はやや深めの杯部を持つ高杯で、復元口径14.5cm前後、軸径2.6cm、底径9.2cmである。杯部底、軸部中心には粘土を充填している。28は軸径2.65cm、復元脚端径10cm前後で、杯部底、軸部中心には粘土が剥落した痕跡が見られる。



第163図 連行遺跡 SD06 出土遺物実測図 (2) (S = 1/6)



第164図 連行遺跡 SD06 出土遺物実測図 (3) (S=1/3)

29は土師器甕である。復元口径17cm前後、口縁部は内外面から押さえるようにして薄くし、あたかも複合口縁の退化形態のような稜を設けている。口縁端部には面を持ち、先端はわずかにつまみあげるように仕上げている。頸部は大きくくびれており、胴部には縦方向に沈線状の条線が不等間隔で見られる。外面にはススが付着している。

遺物の時期であるが、上層出土遺物は少なくとも7世紀後半以降のもので占められている。ただある程度時期差は認められ、8世紀後半代まで下る可能性のある遺物も認められる。下層出土遺物は同時期のものと見て大過ないと考えられ、高杯の型式から古墳時代中期を中心とする時期であろう。

この下層遺物が、この溝が作られた時期と考えられ、古墳の周溝内の遺物の可能性が高い。上層の遺物は通常の覆土堆積遺物のあり方とは異なり、単なる流入遺物と理解するには不合理な点がいくつかある。列挙すると①完形に近い遺物が少なからずある。②多くの破片が接合する。③比較的珍しい遺物が目立つ（脚部の太い高杯、横瓶、把手付き鉢など）。④周辺ではまったく出土していない鉄滓が多く出土する。などがあげられる。何らかの意志を持って、この溝上層に遺物が置かれた（投げ込まれた）状況も考え得るが、同一時期のみの遺物ではない点は否定的因素であり、結論は出せない。あえて性格を考えるならば、後世になっての古墳への何らかの祭祀行為があった可能性も考えておきたい。

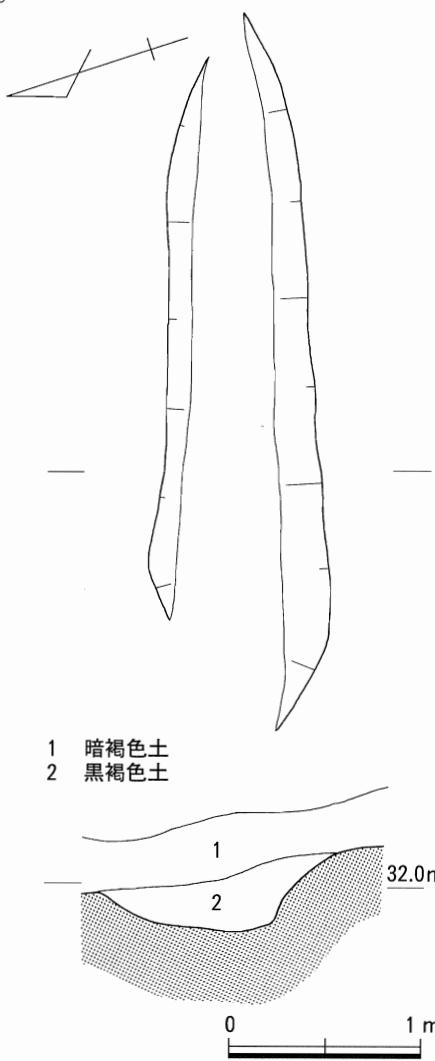
(丹羽野)

SD-07 (第165図) 客山墳墓群から北に伸びる尾根の標高32m付近を東西方向に切る形で掘られている。長さ3.8m、幅0.9mである。溝内の覆土は黒褐色である。

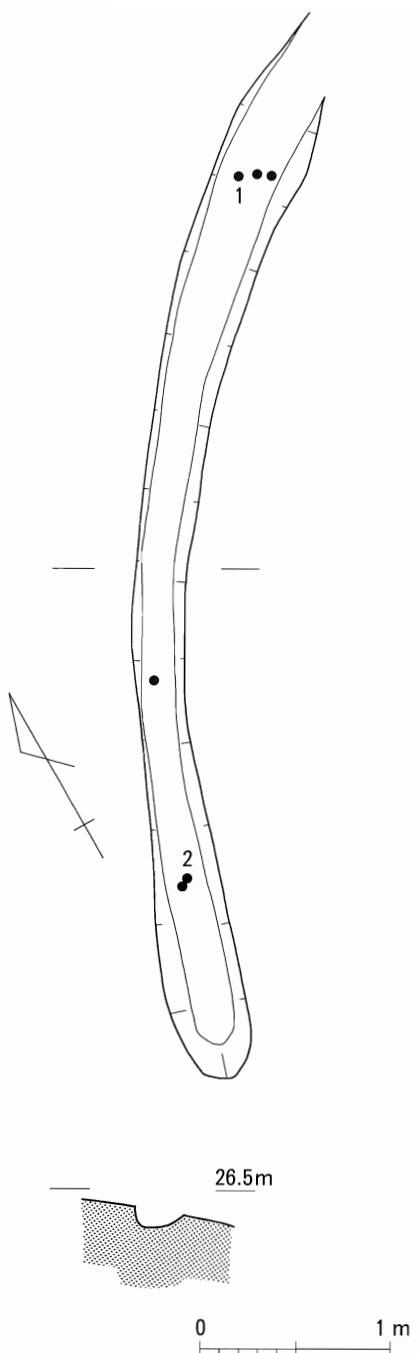
SD-08 (第166図) SD-06の北側の斜面に位置し、東に伸びる尾根に直行するように掘られている。弧状に湾曲しており長さ5.7m、幅0.24～0.45m、深さ0.1mである。南側は畑の耕作により削平を受けている可能性があり、北側は調査区域外に伸びる可能性がある。溝の覆土は黄褐色の粘質土である。

遺物出土状況 溝内の両端から弥生土器・甕の口縁部と器台の受け部が出土している。

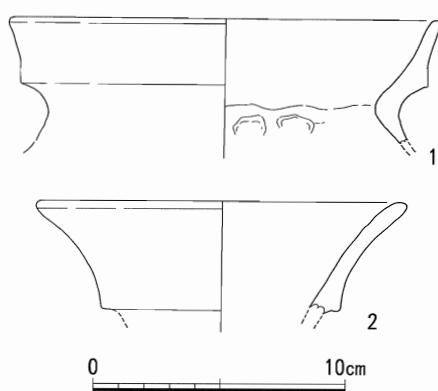
遺物 (第167図) 1は、弥生土器・甕の口縁部である。表面が風化しており調整の残りが悪い。口縁部の下端が弱干突出し、内面はヘラミガキが施されていると思われる。頸部以下はヘラケズリを施す。推定される口径17.2cmを測る。



第165図 連行遺跡 SD07 実測図 (S = 1/40)



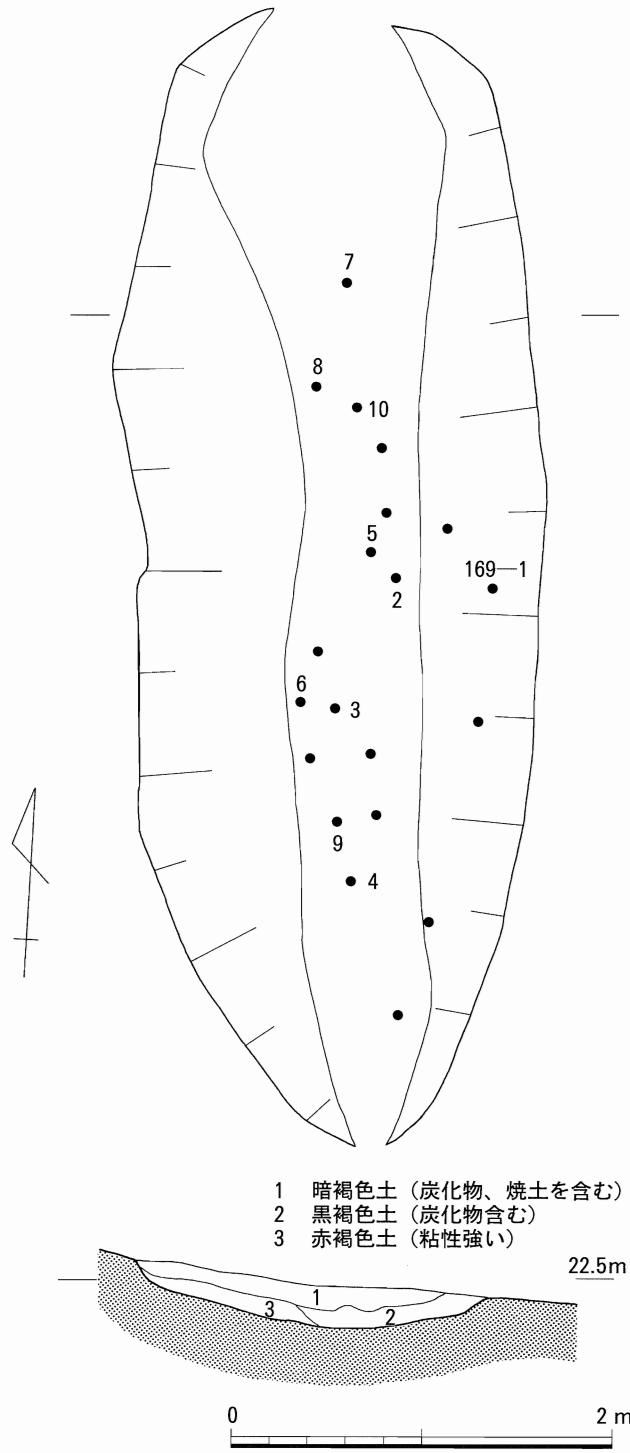
第166図 連行遺跡 SD08 実測図 (S = 1/40)



第167図 連行遺跡 SD08
出土遺物実測図 (S = 1/3)

2は鼓形器台の受部の破片で口縁部下端の突出の弱いものである。外面に沈線、内面にヘラミガキが施されているようだが、風化が激しいため詳細は不明である。推定口径14.6cmである。この2点の土器の時期は、調整が不明な点があるが、形態から松本編年V-3期と考えられる。

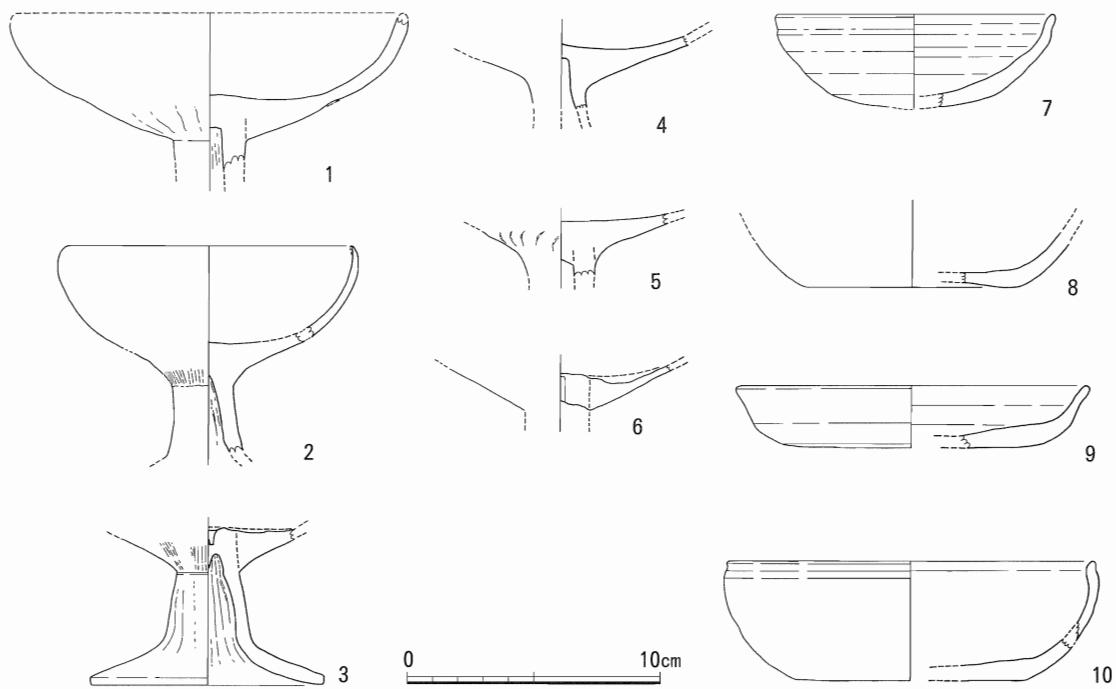
SD-09（第168図） 調査区の東端の尾根上に位置する、SD-08から斜面を下った場所で尾根に直行するように掘られている。規模は、長さ6.0m、幅2.2m、深さ0.2mである。溝内の覆土は、上層が暗褐色土、下層が黒褐色土、赤褐色土である。遺物は、須恵器が上層から出土し、下層中と溝の底から土師器・高杯が出土している。



第168図 連行遺跡 SD09 実測図 (S=1/40)

遺物（第169図） 1～6は土師器の高杯である。1は、杯部で体部が内湾気味に立ち上がり口縁部に至る。調整は、風化のため不明である。推定口径は、15.8cmである。2は、小形の高杯で、杯部がかなり内湾しており、器壁が薄手の作りである。脚端部がかけているが筒部はやや開く形となっている。脚部との接合部に縦方向のハケメが一部残るのみで調整は不明である。口径は、11.4cmである。3は、脚部の破片である。筒部の途中から屈曲して開き、端部に至る。杯部は開き気味に立ち上がり、外面にハケメが残る。筒部の外面にはタテ方向のヘラミガキ、脚端部はヨコナデが施されている。底径は、9.2cmを測る。4、5、6は、高杯の杯部と脚部の接合部分の破片である。5の杯部外面には、接合の際に付いたと思われる爪の指突痕が残る。6は杯の底部に脚部が差し込まれた状態が確認できる。7、8、10は、須恵器・杯で底部に丸みがあり、口縁部が外方に折り曲げられる。8は底部の破片である。10は体部が内湾し、口縁端部が折曲している。底部外面に回転糸切り痕が残る。9は皿で底部外面に回転糸切り痕が残る。

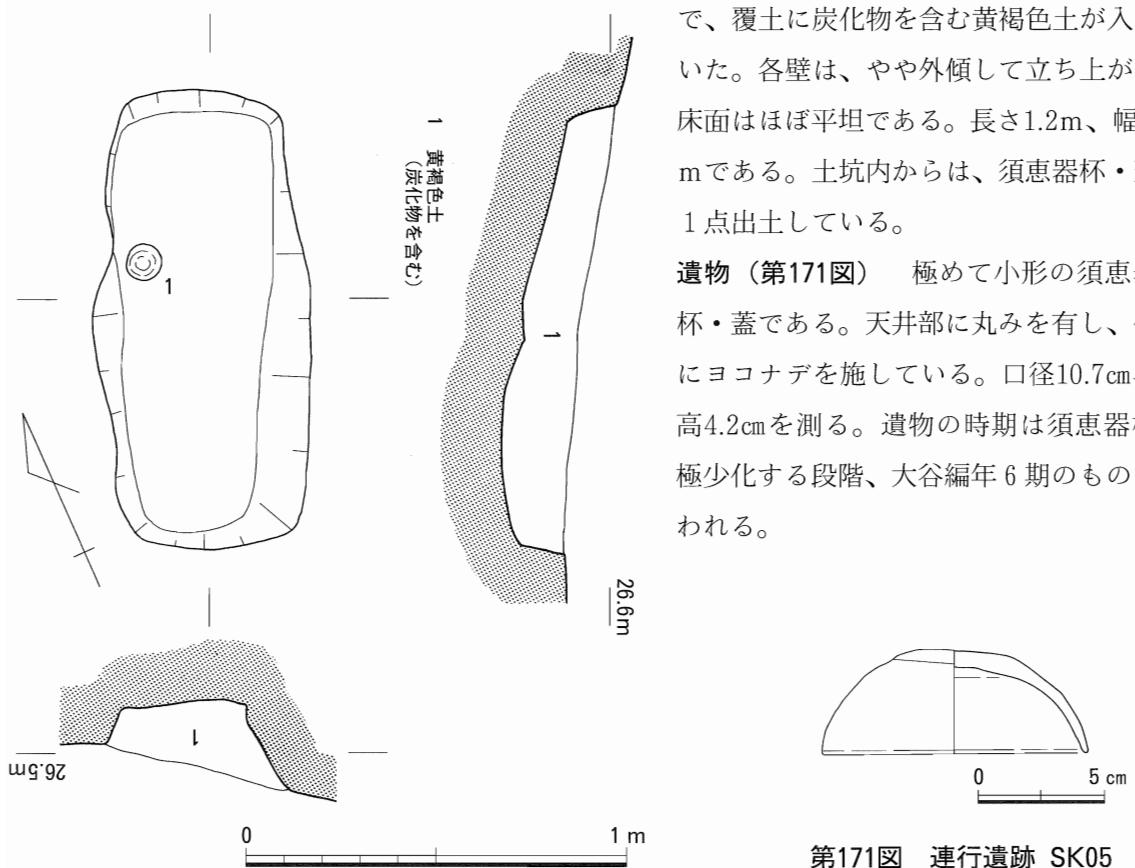
土師器の時期は、5世紀後半と考えられる。須恵器は、底部に未調整の回転糸切り痕を残すことから奈良時代のものである。



第169図 連行遺跡 SD09 出土遺物実測図 (S=1/3)

SK-05 (第170図) SB-01の北側に位置する。地山に掘り込まれた長方形の土坑で、覆土に炭化物を含む黄褐色土が入っていた。各壁は、やや外傾して立ち上がり、床面はほぼ平坦である。長さ1.2m、幅0.55mである。土坑内からは、須恵器杯・蓋が1点出土している。

遺物 (第171図) 極めて小形の須恵器の杯・蓋である。天井部に丸みを有し、体部にヨコナデを施している。口径10.7cm、器高4.2cmを測る。遺物の時期は須恵器杯の極少化する段階、大谷編年6期のものと思われる。



第170図 連行遺跡 SK05 実測図 (S=1/20)

第171図 連行遺跡 SK05
出土遺物実測図
(S=1/3)

SK-06 (第172図) SD-06の北東部に位置する。赤褐色土の地山に掘り込まれ、覆土が黄色土である。規模は、長さ2.2m、幅0.55m、深さ0.2mで、横断面は中央部が窪む形である。主軸方向は、ほぼ南北に沿っている。土坑内からは、遺物は出土していない。

SK-07 (第173図) SB-02の北側、標高25mの斜面に主軸方向N60°Eと東西方向に向いている。遺物が出土した段階に土坑を確認しており一部検出できない場所があった。土坑の覆土は、上層が暗赤色土、下層が暗褐色土である。規模は、現存する長さ3.7m、幅1.1~1.3m、深さ0.7mを測る。

土坑西側の上層において須恵器・甕が出土し、その下から須恵器・杯・蓋が出土している。土坑の東側においては土師器・甕の破片が出土している。

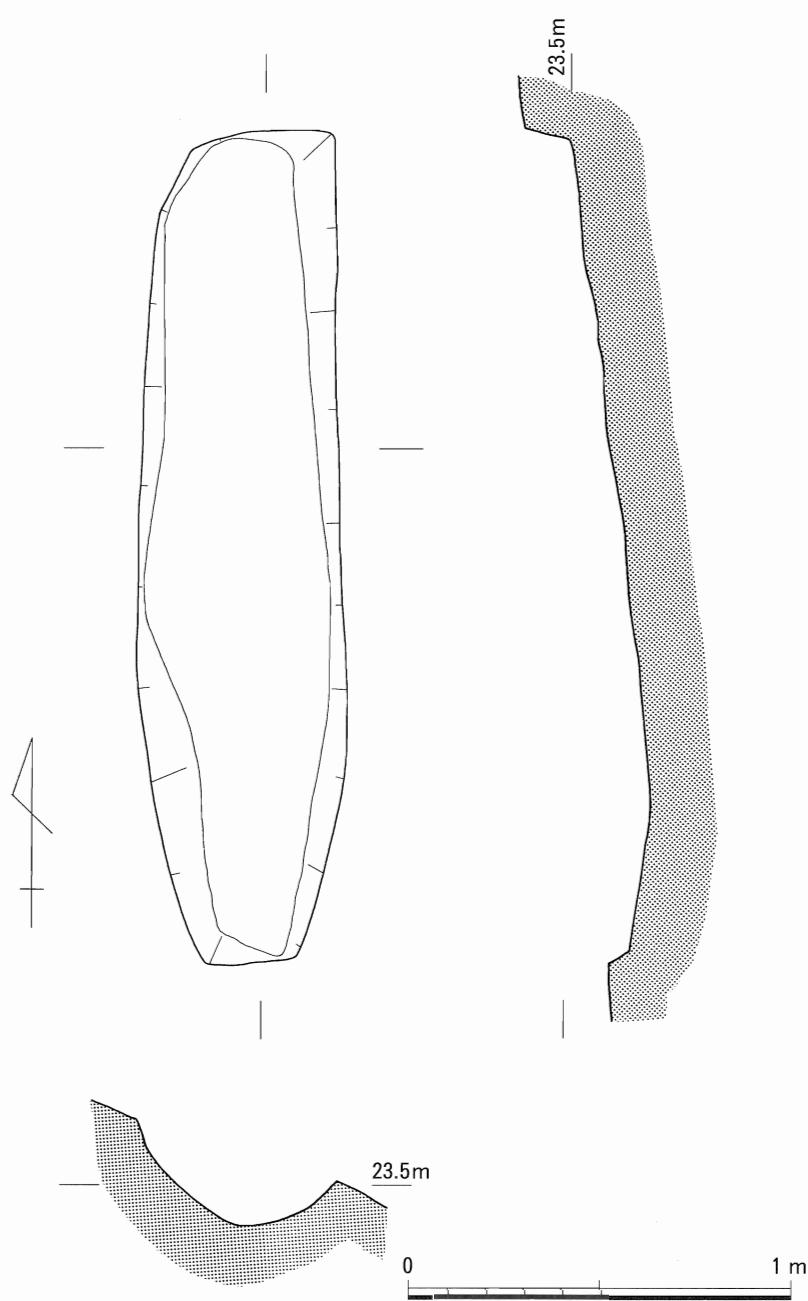
遺物 (第174図) 1は、須恵器・甕で頸部から口縁部にかけて緩やかに広がり、段を有して開き口縁端部に至る。頸部の途中に沈線を入れ、その上に櫛描の波状文を施す。体部に丸みを有し、2条の沈線とその間に櫛描波状文を入れる。口径12.3cm、器高15.3cmを測る。2は、杯・蓋で口縁

部と天井部の境に2条の沈線を入れ、稜を作りだしている。口縁端部に丸みを持ち、内面がやや窪んでいる。天井部はやや平坦で回転ヘラケズリが施されている。口径12.7cm、器高4.2cmを測る。

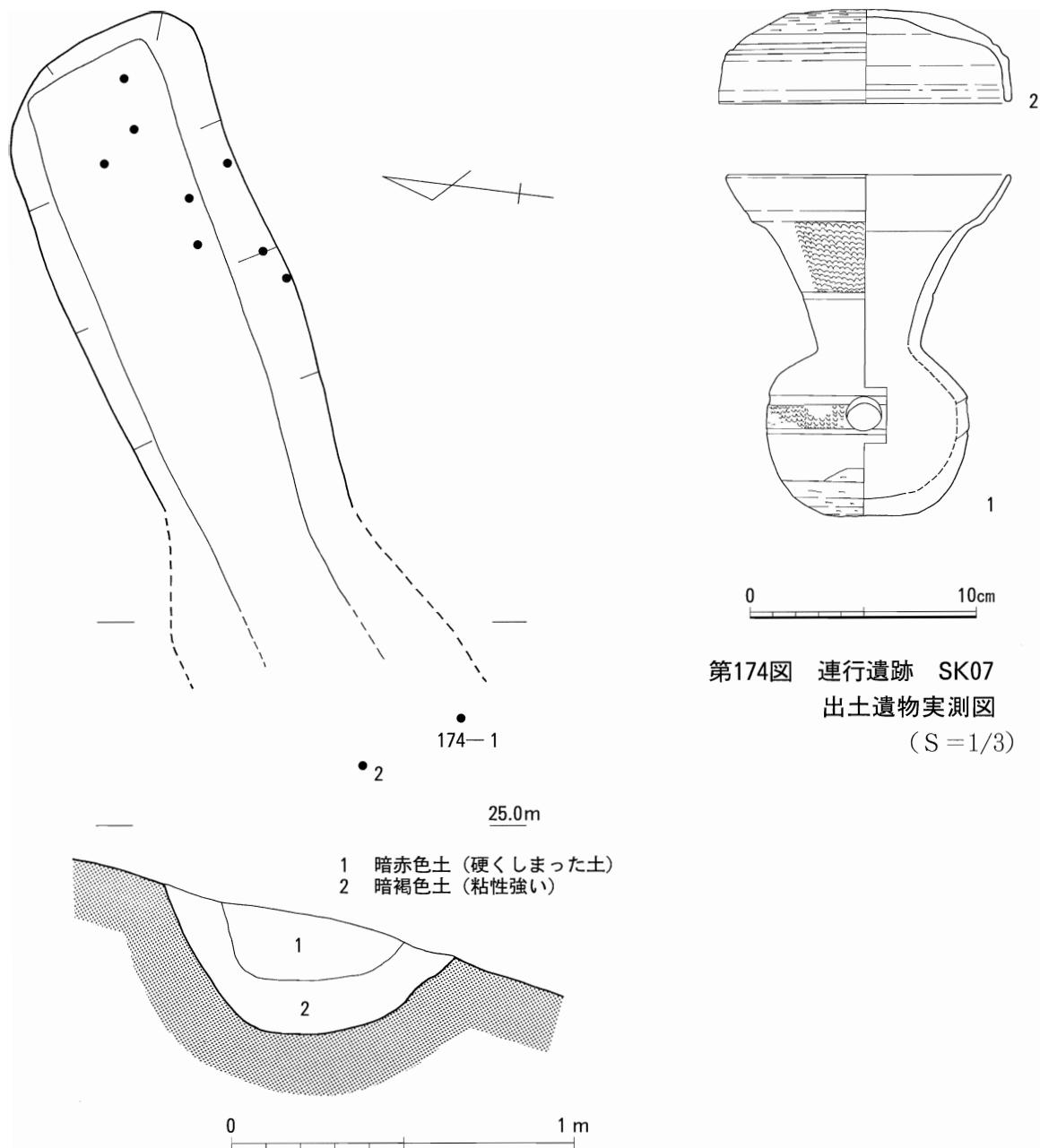
この須恵器の時期は、大谷編年4期と考えられる。

SK-08 (第176図) SB-02と03の中間の斜面に位置している。主軸は、ほぼ南北方向に向いている。長方形で、南側がやや湾曲している。長さ2.25m、幅0.7m、深さ0.25mを測る。底面は北が高く、南に向けて傾斜している。坑内から、土師器・甕の口縁部が出土している。

土師器・甕は体部から口縁部にかけて緩やかに広がり、体部外面にハケメ、内面にヘラケズリを施している。口径23.6cmを測る。

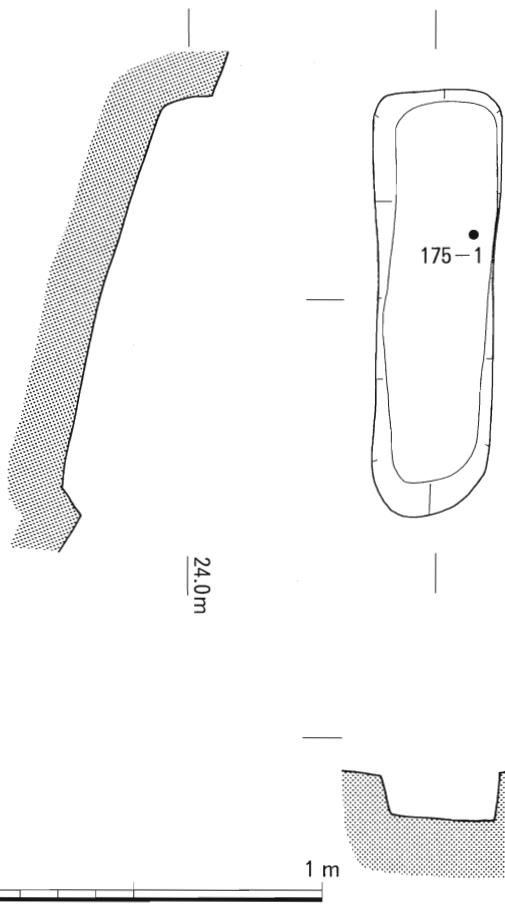


第172図 連行遺跡 SK06 実測図 (S=1/20)



第174図 連行遺跡 SK07
出土遺物実測図
(S = 1/3)

第175図 連行遺跡 SK08 出土遺物実測図 (S = 1/3)

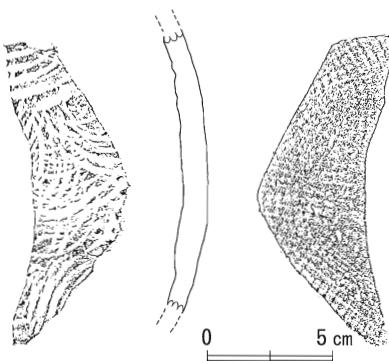


第176図 連行遺跡 SK08 実測図 ($S = 1/20$)

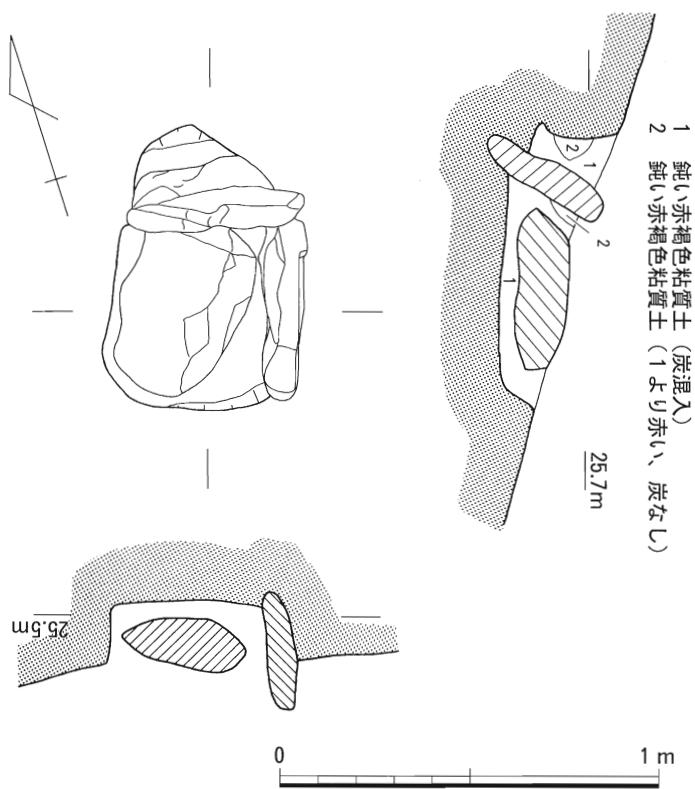
1号石棺墓（第178図）

SB-03の東側の標高25mの斜面に位置している。土坑の掘り方は、長辺1.5m、短辺1.05m、深さ0.6mである。北側の小口と両側石の計3枚の石が残っていた。小口の石と西側の側石は、内側に倒れた状態であった。南側小口の石は畠の開墾により抜き取られたものと思われる。北側の小口石の下から須恵器・甕の破片が1点出土している。時期は、不明である。

(広江)



第177図 連行遺跡 1号石棺内出土
遺物実測図 ($S = 1/3$)

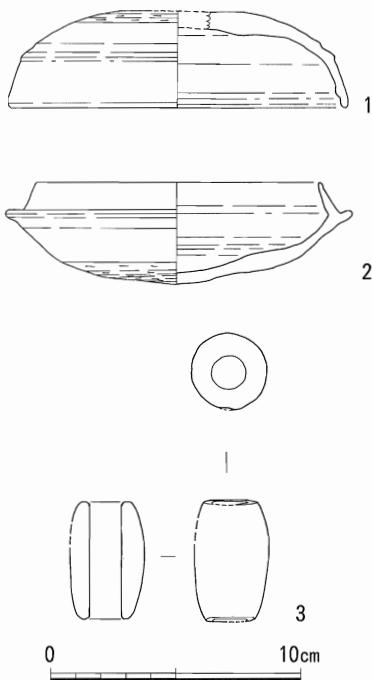


第178図 連行遺跡 1号石棺 実測図 ($S = 1/20$)

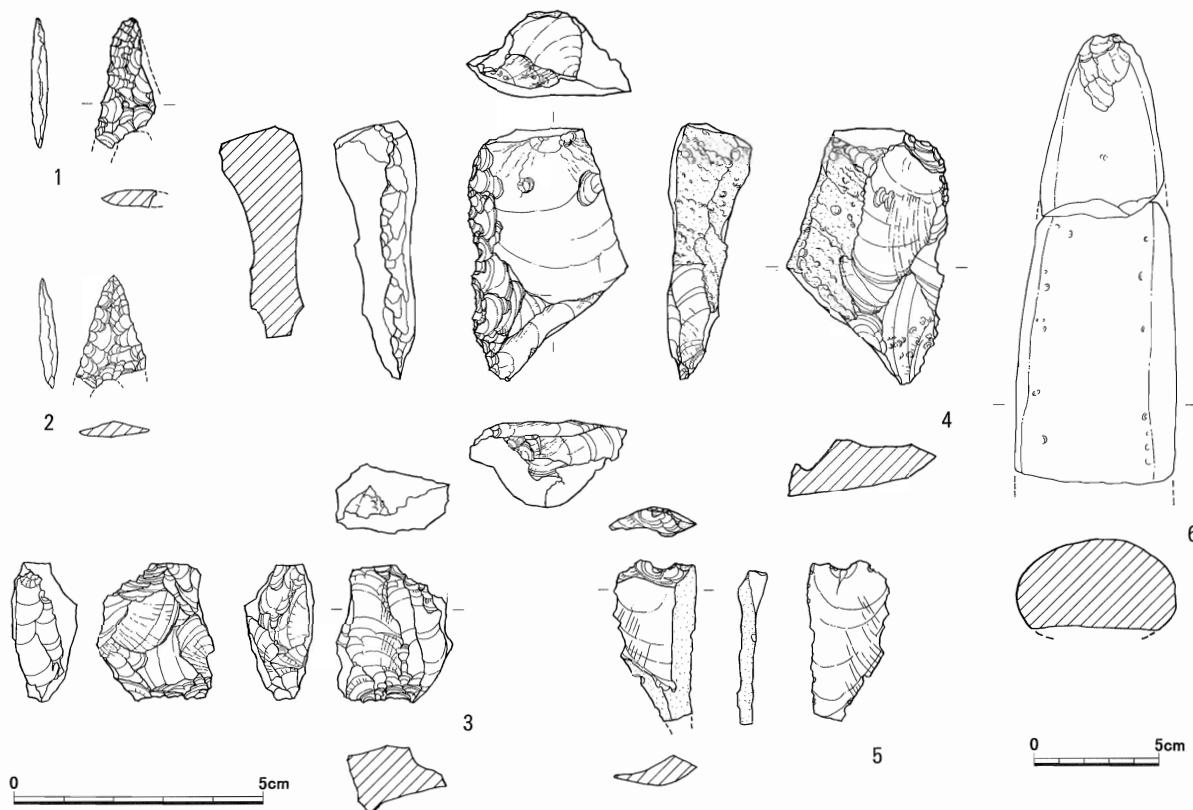
南斜面遺構外出土遺物（第179図）

遺構に伴わない石器（第180図）

1、2は西側斜面で出土した黒曜石製石鏃である。1は両脚を欠損しているが、現状で長さ2.61cm、幅1.32cm、厚さ0.34cmを測る。2も両脚を欠損しており、現状で長さ2.19cm、幅1.37cm、厚さ0.30cmを測る。3は黒曜石製の楔形石器である。上下両端からの剥離痕が多く見られ、上端は稜をなすが、下端には面があり打痕が見られる。両極打法による石核の可能性もある。長さ2.80cm、幅2.43cm、厚さ1.39cmを測る。4は東側斜面から出土した黒曜石製の削器である。背面に自然面が残る縦長剥片を素材としており、打面は平坦である。腹面の一側縁には、連続的に二次加工を施しており、剥片の下端には2条のファシット状の剥離が認められる。長さ6.7cm、幅4.1cm、厚さ2.05cmを測る。5は南側斜面SD06付近で出土した黒曜石製の二次加工のある剥片である。縦長剥片の打面部分を腹面からの加工で取り去っており、縁辺には細かな剥離が見られる。長さ3.17cm、幅1.65cm、厚さ0.89cmを測る。6は客山墳墓群のある頂上部付近で出土した石器で、磨製石斧と考えられる。基部からは剥離痕が見られ、表面には敲打痕らしき小凹が見られる。（丹羽野）



第179図 連行遺跡 南斜面
遺構外出土遺物実測図
(S = 1/3)



第180図 連行遺跡 遺構外出土石器実測図 (1~5は S = 2/3、6は S = 1/3)

第6章 まとめ

1. 客山墳墓群について

客山墳墓群は丘陵頂上部に築かれた墳墓群で、近接して築かれた2基の墳墓からなる。2基の墳墓は近接しているながら異なった様相を見せており、前述したように2基の間に時期的差異がある可能性が高いことから見ると、両者の時期の間に墓制上大きな変化があった可能性もある。すなわち、客山墳墓群は弥生時代終わりから古墳時代はじめにかけての微妙な位置に築造されたと考えられる。本項では、2つの墳墓の様相を整理し、時期的な検討を加えて、当地方での位置付けも含めて簡単にまとめてみたい。

客山1号墓の様相と時期 まずは先行して築かれた可能性の高い1号墓について、その様相と築造時期について検討してみたい。客山1号墓の特徴としては、おおむね以下のような点が挙げられるよう。

- ① 明確な高まりを持つ長方形の墳丘で、貼石・葺石等の外表施設は持たない。
- ② 主体部は長方形で素掘りの深い土壙で、組み合わせ木棺を収めた可能性が高い。
- ③ 主体部上には、「標石」とそれを取り巻くように「供献土器」が置かれている。
- ④ 副葬品等は全く出土していない。

まず①の墳丘であるが、最近の研究で出雲地方では外表施設を持たない小形の方墳が、古墳時代の初期に出現し、古墳時代前期を通じて築かれていることが指摘されている（松山2000、大庭編2001）。客山1号墓の墳丘は、それらの古墳と同様の特徴といえる。その一方で、②～④の特徴はより弥生時代的な特徴といえる。墓壙と棺については、古墳成立以降に認められる狭長な墓壙（棺）や削り抜きの棺とは全く異なるもので、弥生時代に通有のものといえる。また墳丘に1つの墓壙のみで、かつ比較的大形の墓壙であるにもかかわらず副葬品が全くない点は、定型化した古墳の影響を受ける以前という印象を強く受ける。「標石」と「供献土器」も同様に弥生時代後期に通有のあり方であるが、これは古墳時代以降も一定程度見られる現象で時期を特定する決め手にはならないだろう。

次に出土した土器の特徴について検討してみたい。「供献土器」はかなりの個体数があったものと考えられる（第46図）が、編年の基準となる甕類が胴部の小片しか確認されず、編年的検討が非常に難しい状況である。ただ、円筒形の軸部で円盤充填式の高杯が一定量存在することから、草田編年5期（赤沢1992）以降となる可能性が高いといえる。この種の高杯は草田編年7期までは一般的に存在するのでこれ以上の限定は難しいが、全形が推測できる第46図6はやや浅めで口縁付近が外反して広がる傾向が見られ、どちらかというと古い傾向ではないかと考えられる。また第46図1の口縁が内傾する壺は、やはり弥生時代末～古墳時代初頭に少ないながらも一定程度見られる器種であるが、口縁の稜が鋭角に折れて強く内傾する点や、口縁外面に凹線が見られる点、胴部肩上方に横方向のハケメと櫛描波状文が見られる点などから同種のなかでは古い特徴を持つものと考えられる。

一方注目される土器として第46図16の器台がある。これは、吉備地方の弥生時代後期の墳墓遺跡でしばしば出土する小形の器台で、搬入品の可能性が高い⁽¹⁾。県内でも安来市の鍵尾土壙墓群や松江市の的場墳墓で出土例があるものである。この種の土器は、吉備地方では上東遺跡編年で鬼川市Ⅲ式を中心に出土し、下っても才の町I式（柳瀬ほか1977）までだという⁽²⁾。併行関係から見れば、仮に才ノ町I式併行期と見ても他の土器から考えられる時期の上限（草田5期）よりさかのぼる可

能性も出てくる。他地域の土器だけに、その時期をそのまま墳墓の築造時期と考えるのは危険性が高いが、考え得る時期幅のなかで、より古い方向に考える大きな根拠となる資料だろう。

以上のようなことから、客山1号墓の「供献土器群」は、草田編年の5期に併行する可能性が高いものと考えられる。前に述べたこの墳墓の特徴も大きく矛盾するものではなく、よって、弥生時代末頃の墳墓と評価すべきと考えたい。

客山2号墓の様相と時期 客山2号墓は1号墓の下方に隣接して検出された墳墓で、区画する溝が1号墓の墳丘を切っている様子がうかがえるので、1号墓よりも新しいものと推測している。2号墓の特徴を整理すると以下のような点があげられる。

- ① 墳丘は不明瞭だが、一定程度の高まりがあった可能性が高い。1号墓より小規模である。
- ② 主体部は狭長な墓壙で、少なくとも2基認められる。
- ③ 鼓形器台を枕としている。
- ④ 鉄製品を副葬品として持つ。

墳丘については不明瞭で評価が難しいが、②～④は明らかに1号墓よりも新しい様相である。狭長な墓壙は定型化した古墳の影響を受けたものと考えられるし、1号墓よりも小形で複数の埋葬主体を持つにも関わらず、副葬品を持つ点もやはり新しい様相といってよいだろう。土器枕については、出雲地方においては珍しいものだが、やはり弥生時代には見られないあり方といえる。

土器は、枕とされた小形の鼓形器台のみであるが、筒部がより短く、端部を屈曲させて外方に広げる収め方などから見て、やはり1号墓出土の鼓形器台より新しい特徴といえる。古墳出現以降、草田6期以降の築造と見られる。

以上、1号墓は弥生時代末期の墳丘墓、2号墓は古墳時代前期のものと位置付けた。弥生時代の後期の墳丘墓は出雲地方においては四隅突出型墳丘墓（以下「四隅」と呼ぶ。）が中心で、四隅の中で40mを超える大形のものから10m前後の小形のものまで知られている。四隅の内部でも一定の階層的な序列があったことがうかがえると同時に、鍵尾土壙墓群のように四隅ではない貼石墓も知られ、基本的に墳丘に石を貼った墳墓を中心に展開している。そのような状況の中で、客山1号墓が弥生時代にさかのぼるものとすれば、明確な高まりを持つ墳墓としては珍しい例となるだろう。小久白墳墓群や長曾土壙墓群、神原正面北墳墓群のように、溝等で区画した墳墓との関わりの中で生じてきたあり方なのか^③、あるいは古墳時代初期に一般的となる外表施設を持たない長方形墳の先駆け的に導入されたあり方なのか、今後の課題となろう。

2. 馬場遺跡、杉ヶ撓遺跡、連行遺跡で検出された古墳について

今回報告した、本庄平野の東側丘陵上の3遺跡では、古墳及び古墳の周溝と思しき遺構が7基（一覧表参照）、検出された。墳丘が削平され、主体部等も検出できていないものが多いが、古墳の要素を取りまとめ、簡単に検討してみたい。

7基の古墳は、その様相から大きく2分される。ひとつは、丘陵の斜面に築かれ、周溝内から土師器高杯を中心とした遺物が出土する一群（馬場遺跡、連行遺跡の各古墳）、もうひとつは丘陵尾根の頂上に築かれ、周囲から遺物が全く出土しない一群（杉ヶ撓遺跡の古墳群）である。前者は、遺物からおよそ5世紀後半～6世紀前半を中心に築造されたものと考えられ、後者は積極的に時期

を限定する材料はないものの、前者よりはさかのぼる時期に築造されたものと推測している。

さて前者の5世紀後半～6世紀前半代の古墳であるが、馬場遺跡の西側に隣接する的場遺跡でも同じ様相の方墳が11基と古墳の溝が1か所検出されており、狭い範囲内で合わせて17基の古墳が検出されていることになる。もちろんこれらの中で一定の時期幅があることは予測されるが、この時期が本庄地区において古墳の築造が増える一つの画期であった可能性は高いと考えられよう。全国的に見ても、古墳の築造が増加する動きと軌を一にする可能性もあり、また県内において当該期の古墳群のあり方を考える上でも重要な類例となるだろう。今回詳細な検討はできなかったが、今後の課題である。

この時期の古墳に特徴的なのは、周溝内から多くの遺物が出土することである。8基のうち須恵器が出土しているのが連行遺跡の1基と的場遺跡の7基の計6基、土師器の高杯が出土しているのは馬場遺跡1基、連行遺跡3基、的場遺跡3基の計7基、埴輪が出土しているのが馬場遺跡1基、的場遺跡3基の計4基である。これらの遺物のあり方の違いが時期差なのか、古墳の個体差なのかは、土師器高杯で細かな時期差が追えないことから明らかにはできない。ただ土師器の型式には違いも見られ、類例を精査も含めて今後検討していく必要があるだろう。

(丹羽野)

馬場遺跡、杉ヶ撓遺跡、連行遺跡で検出された墳墓一覧表

遺構名	形態	規模(m)	主体部	主体部規模	周溝内出土遺物	時期	備考
馬場1号墳	方墳	10.8×12	不明	不明	土師器高杯11以上、 土師器甕3以上	5世紀後半 以降	溝内と周辺に土壙群
馬場2号墳	方墳	12×?	不明	不明	円筒埴輪、朝顔形埴輪、土師器子形壺	5世紀後半 以降	
杉ヶ撓1号墳	方墳	10.4×?	土壙(木棺?)	3.1×1.0	なし	不明	
杉ヶ撓2号墳	方墳?	7～8四方?	土壙	2.8×1.0?	なし	不明	
連行SD04	円墳?	7.8以上	不明	不明	土師器高杯3以上、 須恵器壺身	5世紀末～ 6世紀初	溝内に土壙2
連行SD06	方墳	10.8×?	不明	不明	土師器高杯7以上、 土師器甕1以上	5世紀後半 以降	溝上層に奈良時代の 遺物多数
連行SD09	方墳?	不明	不明	不明	土師器高杯6以上	5世紀後半 以降	溝上層に奈良時代の 遺物多数
客山1号墓	方形墓	13×10	土壙(組み合 わせ木棺?)	3.1×1.7		弥生終末期	土壙上に「標石」 「供献土器」
客山2号墓	方墳?	5.5×4.9?	土壙2以上	2.88×0.73 3.03×0.65		古墳前期	器台枕、鉄製品1

3. 横穴墓

本庄地区における横穴墓の分布は、従来は梅廻横穴墓、坂山横穴墓等の平野南側において確認されていた。今回、連行遺跡において横穴墓が調査され、平野の北側においても横穴墓が作られていてることが確認された。

横穴墓の時期 連行横穴墓中で古い段階のものとして、3号、8号、11号横穴墓があり、共に大谷編年4期と考えられる。横穴墓の配置状況は、2号穴から7号穴にかけては築造時期によるものか、概ね上下2段に分かれているようである。15号穴については、かなり下った場所に位置している。新しい時期のものとして追葬を除けば古墳時代後期（大谷編年6B期）になると思われる。

玄室の形態 玄室の平面プランは6、15号穴以外は正方形のプランであり、床面の周囲と中心に溝を掘るものとして1、5、10号穴がある。横穴墓で天井部が残り玄室の形態のわかるものは、10、13、14、16号穴である。10、13号横穴墓は、ドーム型で天井部に四柱式の屋根の棟線を表現し、14、

16号穴は、家形で壁と天井の境も界線で表現している。16号穴のみ平入りである。玄室は、四壁がやや内傾気味であり、当初から家形を意識していたというより、ドーム形の形態のものに屋根を家形に削り出しそうな加工である。

閉塞施設 閉塞石の確認されたものは、1穴のみである。基本的には羨門部に溝を堀り閉塞石かそれに替わるもので塞いでいたようである。特に溝の側に、ピットが掘られ閉塞用の構造と考えられた。

石棺 石棺は、組み合わせ式の家形石棺で時期は出雲5期で石材は荒島石である。出雲地方において、横穴墓の中に家形石棺を入れ埋葬する例は安来市から松江市、出雲市にかけての平野部において顕著である。特に、安来市、松江市においては、組み合わせ式の横口の構造を持つものが通例である。横口を持たない組み合わせ式のものは、宍道湖南岸にかけて分布するという特徴があるものの天井石が扁平な造りである。同形態で天井石が屋根形に加工されたものとして、加茂町湯後2号横穴の石棺がある。連行14号横穴墓の石棺の石材、天井石の形態、石棺の加工等、中海南岸地域との関係をうかがわせるが、横口の形態を採らないこと最終段階の時期のものであるなど地域的な特徴と考えられる。この地域において初めての調査例であり今後の検討としたい。

横穴墓の分布 今回の調査では、初期の導入段階の横穴墓は確認されなかった。この地域では、後期古墳とされるものに横穴式石室を有すためとも考えられるが、基本的に横穴墓が群集する状況は他に確認されていない。本庄地区の周辺部に眼を転じると、野原町ガンダ1号墳の横穴墓、島根町野波の宮尾横穴墓群が存在しているが、15基以上の横穴墓群が確認されたのは本地区において初めてとなった。後期古墳の分布のあり方をみると、この場所は、後の奈良時代に編纂された『出雲国風土記』の行政区分によると島根郡に含まれている。この地域では、現在の朝酌、東持田に切石作りの横穴式石室（石棺式石室）が見られるが、本庄地区においては確認されていない。横穴式石室を持つ古墳との関係を含め検討を要すと思われる。

（広江）

注

- (1) 岡山県古代吉備文化財センターの宇垣匡雅氏に御教示いただいた。
- (2) (1)と同じ。
- (3) 隣接する伯耆では類例が認められ、その関わりについても検討が必要だろう。

参考文献

- 赤沢秀則 『南講武草田遺跡』 1992 鹿島町教育委員会
大庭俊二編 『社日古墳』 2000 島根県教育委員会
松山智弘 「小谷式再検討－出雲平野における新資料から－」『島根考古学会誌』第17集 2000
柳瀬昭彦ほか 『川入・上東』 1977 岡山県教育委員会
金山正樹編 『本庄地区県営圃場整備事業に伴う松江北東部遺跡発掘調査報告書』 1999 松江市教育委員会
出雲考古学研究会 『石棺式石室の研究』 古代の出雲を考える6 1987
第23回山陰考古学研究集会 『古墳時代後期の棺』 1995年
山陰横穴墓研究会 『出雲の横穴墓』 第7回横穴墓調査検討会 1997年
田原淳史 『湯後遺跡』 中国縦貫自動車道尾道松江線建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書12 島根県教育委員会 2001年

第7章 理化学的分析

連行横穴墓から検出された人骨について

鳥取大学医学部解剖学第2教室 井上貴央

1. はじめに

連行横穴墓群は島根県松江市本庄町に位置する横穴墓群であるが、このたびの発掘調査により、そのうち2基の横穴墓（13号穴、14号穴）から人骨が検出された。人骨発見の報を受け、現地に赴き、検出状況を確認するとともに、取り上げを行った。人骨の残りは良好とはいえないが、本稿ではその概略を紹介する。

2. 第13号横穴墓

玄室の手前から中央付近にかけては須恵器が無秩序に散布しており、玄室の奥方には人骨が散布した状態で検出された。大まかに見て、右奥方には頭蓋骨が大きく割れてバラバラに散布しており、中奥方には2個の大腿骨片が認められた。

骨表面は灰色の粘土様物質で被われていたが、床面にもこの粘土様物質が均一に広がっていることから、ある時期、玄室内に水が流入し、粘土分を含む水が骨表面を被ったことがあるものと思われる。

頭蓋骨を接合すると、途中が不連続でつながらない部分もあるが、ほぼ1体の頭蓋骨と考えてよいようである。破損が大きく計測には耐えないと、頭形は中頭と考えてよさそうである。前頭部の膨隆は著明で、接合し得た頭蓋骨は人字縫合まで存在する。三主縫合は外板は未閉鎖であるが、内板は一部で癒合をきたしかけている。眼窩上縁は薄く、眉弓は平坦である。接合できない側頭骨の乳様突起は欠損していて全貌は不明であるが、それほど大きくない。

顔面頭蓋は右眼窩と鼻部の一部が残存している。眼窩は小さくて丸い。眼窩間幅は大きい。また、鼻根部は平坦である。上顎歯および下顎歯は検出されていない。

四肢骨は右上腕骨の骨体部が1点、骨端部を欠く大腿骨が2点、その他の大腿骨片が1点検出されている。2点の大腿骨は離れた場所から検出されているが、接合可能である。しかし、不思議なことにその断端には粘土質の付着が認められず、断面はやや風化しているものの比較的新しい。調査中に人為的に骨が動いた可能性も否定できないので、本横穴墓の骨検出図面は掲載を割愛した。この大腿骨は華奢で最大長は計測できないが、女性骨と考えられ、頭蓋骨と同一人物のものではないかと思われる。

以上の人骨の所見から、被埋葬者の数は1体で、壮年女性が埋葬されていたものと考えられる。

3. 第14号横穴墓

玄門から見て左手に石棺が置かれており、その中から人骨が検出された。玄室から見て右手には須恵器が散見されるが人骨は検出されていない。

石棺内の人骨は脆弱で、取り上げ時にかなりの破損を伴ったものもある。骨表面は淡黄褐色の粘土様物質で被われていたが、床面にもこの粘土様物質が均一に広がっていることから、13号横穴墓と同様、ある時期に石棺内に水の流入が起こり、粘土分を含む水が骨表面を被ったことがあるものと思われる。骨の脆弱化や長骨の骨頭の保存がきわめて悪いこともこの傍証であろう。

骨の検出状況から見ると、下肢を玄室奥方に伸ばして伸展位で埋葬されていたようであるが、頭

骨は石棺の中央付近から検出されており奇異である。もともと、この石棺内に遺体が安置されたとするならば、骨化後、頭骨を移動したと考えられる。なお、下顎骨は石棺内の玄門側から咬合面を下に、オトガイ部を玄門側に向けて検出されている。大腿骨の位置から見ると、下顎骨も若干動かされていると考えられるが、下肢骨の近位端、遠位端の関係、および左右の関係から考えると、被埋葬者は玄門側に頭部を置き、下肢を奥壁に伸ばした伸展葬で埋葬されていたと考えて矛盾はない。

頭蓋骨は大きく6個に割れていたが、接合すると前頭部から後頭部に至る頭蓋骨が得られた。しかし、頭蓋骨の一部しか残存しておらず、頭形はうかがい知る事はできなかった。また、顔面頭蓋は下顎骨以外の骨は検出されていない。

前頭部はなだらかに立ち上がり、頭頂部に移行している。眉弓の突出は著明ではない。項部の筋付着部はやや粗造な感じを受ける。三主縫合は内板、外板ともにまだ癒合閉鎖をきたしておらず、若年者であることがうかがえる。

下顎骨は比較的小さく華奢で、左右の第1～3大臼歯と右犬歯が釘植しているが、その他の歯は破損、脱落してしまっている。左右の第3大臼歯は歯冠部分が崩出しかけたばかりで、若年者であることをうかがわせる。残存歯を見るかぎり、咬耗はまったく進んでおらず、Martinの0度である。また、下顎には抜歯の痕跡や歯疾患は認められない。

椎骨はまったく検出されていない。

四肢骨では、上肢帶および上肢骨はまったく検出されていない。下肢帶では右寛骨の寛骨臼の一部が残存しているのみで、骨盤から性別の判定は困難である。下肢骨では左右の大腿骨、左右と思われる脛骨、腓骨の一部が残存していた。残存下肢骨はいずれも骨端部を欠き、骨端が癒合をきたしていたのかどうかは定かではない。

本人骨の性別の判定はきわめて困難である。骨は全体的に小さく、下顎骨も華奢で女性をうかがわせるが、項部に見られたレリーフは比較的強く、頭蓋骨の形態も男性骨をうかがわせる要素を持っている。若年者であることにかんがみ、男性骨としておくが確言できない。

骨端が完全に保存されている骨はないので、正確な身長推定はできないが、骨の取り上げ時に計測し得た推定骨最大長は右大腿骨が40.3cm、左大腿骨が41.5cmであった。被埋葬者の性別が男性としてPearson式で身長を求めると、158cm程度と推定される。

4. おわりに

本横穴墓から検出された人骨は保存状況が良好とはいえず、得られた所見も少ない。14号横穴墓の中の石棺に埋葬されていた人骨は、頭部が被埋葬者の腹部付近から検出されており、再埋葬の可能性が指摘される。どういう意識でもって頭骨を腹部に置いたのかは興味深い点があり、今後類例を検討したい。

稿を終わるにあたり、本人骨の検討の機会を与えていただいた島根県埋蔵文化財センターの各位、とりわけ人骨の取り上げでお世話になった広江耕史氏に深謝申し上げる。

表1 第13号横穴墓の人骨リスト

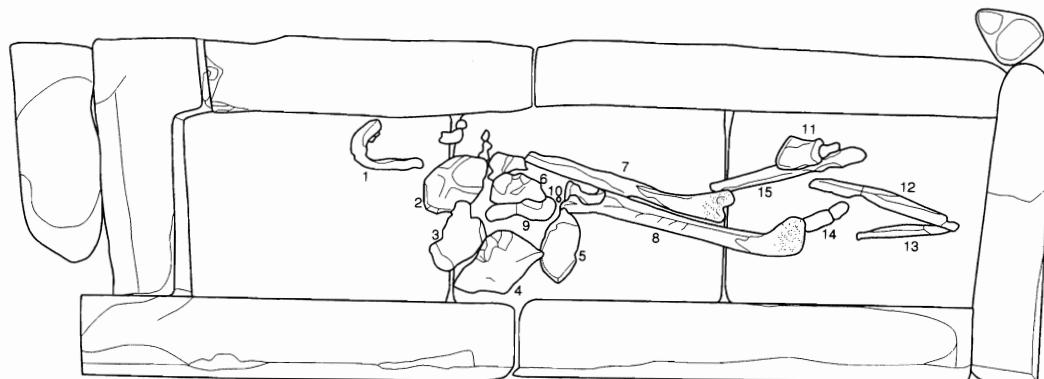
取上番号	部位	左右	残存部位	備考	取上番号	部位	左右	残存部位	備考
1	前頭骨				12	頭頂骨	左		矢状縫合近く
2	上顎骨	右			13	長骨片		C	
3	後頭骨			左半分	14	頭蓋骨片			蝶形骨
4	頭頂骨	右			15	大腿骨	左	P欠-C	10と接合
5	頭頂骨片	左		前方正中部	16	長骨		C	
6	側頭骨片	左			17	骨片			
7	側頭骨片	左		錐体部分	18	上腕骨	右	C	
8	頭頂骨	左			19	長骨片		C	
9	長骨片				20	石			
10	大腿骨	左	C-D欠	15と接合		玄室		大腿骨片	
11	頭頂骨片	右		前下方の部分					

P : 近位端 C : 骨体 D : 遠位端

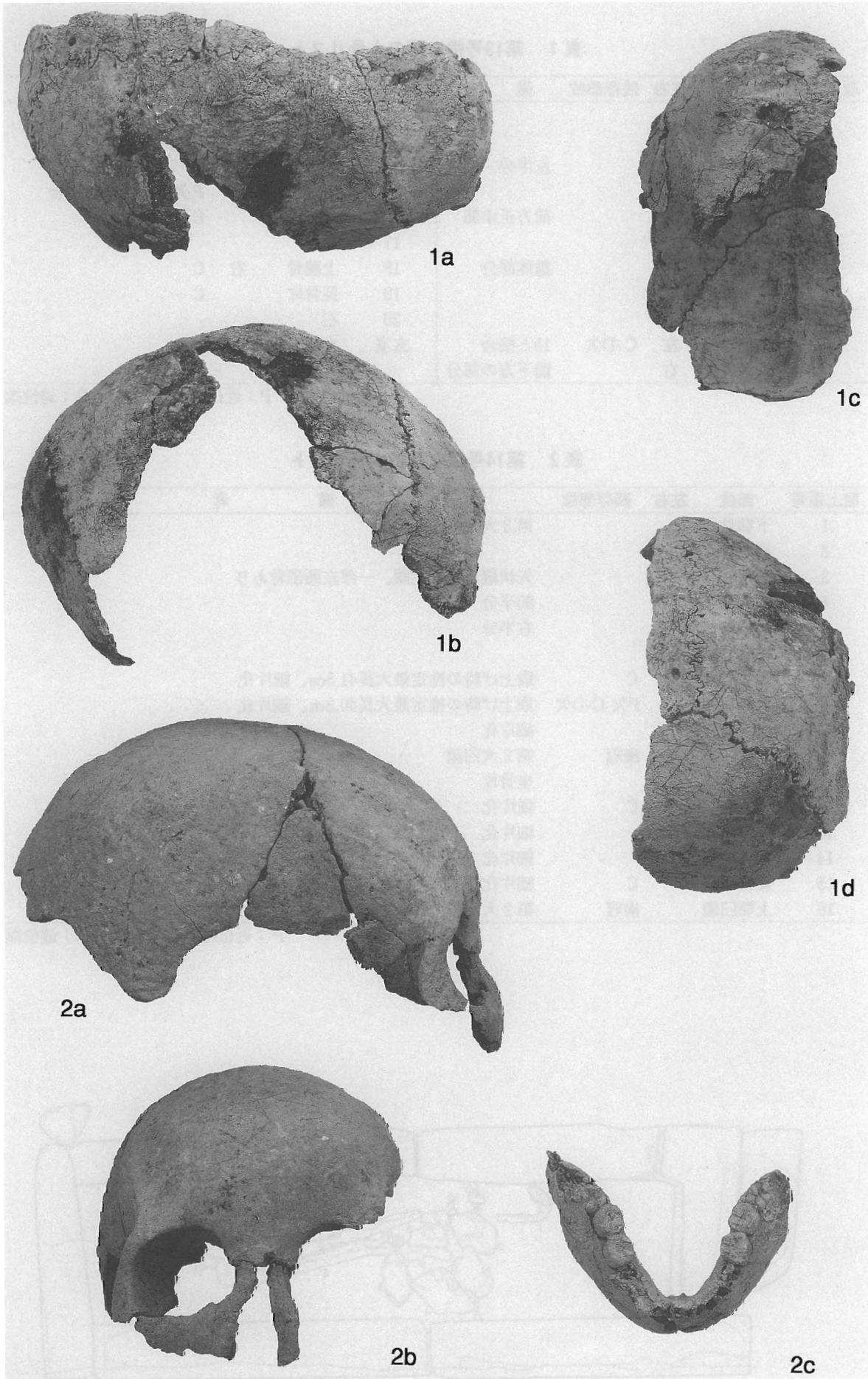
表2 第14号横穴墓の人骨リスト

取上番号	部位	左右	残存部位	備考
1	下顎骨			第3大臼歯未萌出
2	後頭骨			
3	頭頂骨	右		矢状縫合は未閉鎖、一部左頭頂骨あり
4	側頭骨	右		前半分
5	前頭骨	右		右半分
6	側頭骨	右		
7	大腿骨片	左	C	取上げ時の推定最大長41.5cm、細片化
8	大腿骨片	右	P欠-C-D欠	取上げ時の推定最大長40.3cm、細片化
9	側頭骨片			細片化
10	上顎臼歯		歯冠	第2大臼歯
11	寛骨片	右		坐骨片
12	脛骨片		C	細片化
13	長骨片			細片化
14	長骨片			細片化
15	脛骨片		C	細片化
16	上顎臼歯		歯冠	第2大臼歯

P : 近位端 C : 骨体 D : 遠位端



連行14号横穴墓石棺内人骨出土状況



図版説明 1 第13号横穴墓の人骨 a : 上面観、b : 右側面観、c : 前面観、d : 後面観
2 第14号横穴墓の人骨 a : 右側面観、b : 前面観、c : 下顎骨

図 版



馬場遺跡 全景 (東上空から)



馬場 1号墳・2号墳・SD02

図版 2



馬場 1 号墳



馬場 1 号墳 周溝内土層堆積状況

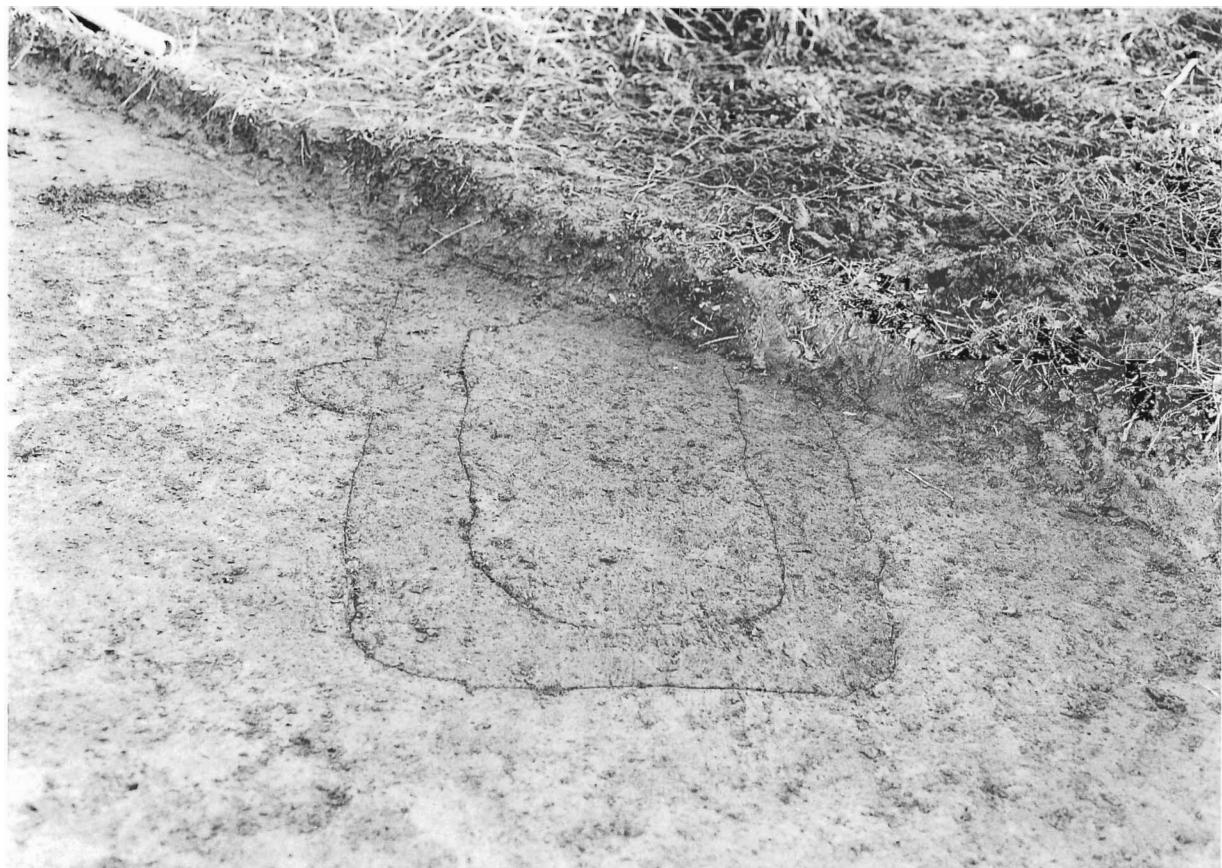


馬場 1 号墳 周溝内遺物出土状況

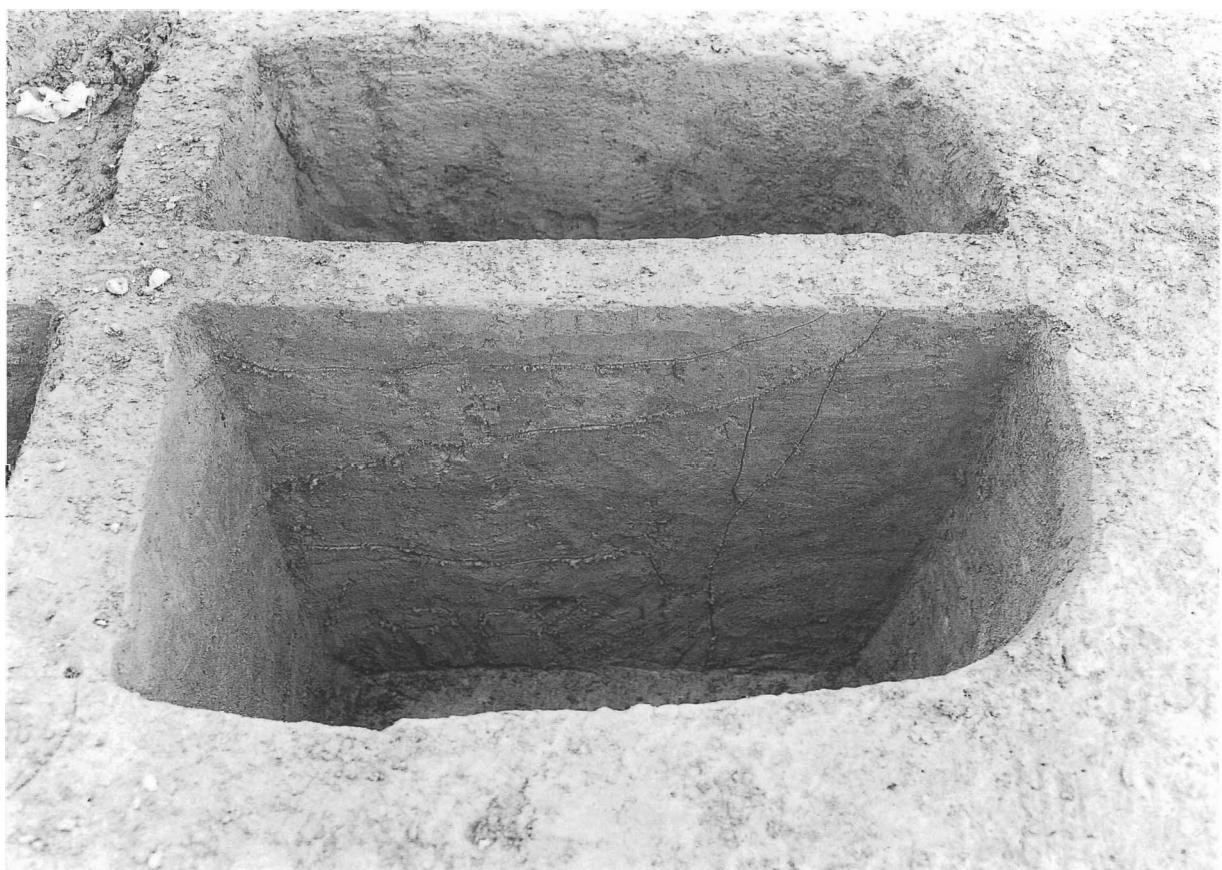


馬場 1 号墳 周溝内遺物出土状況

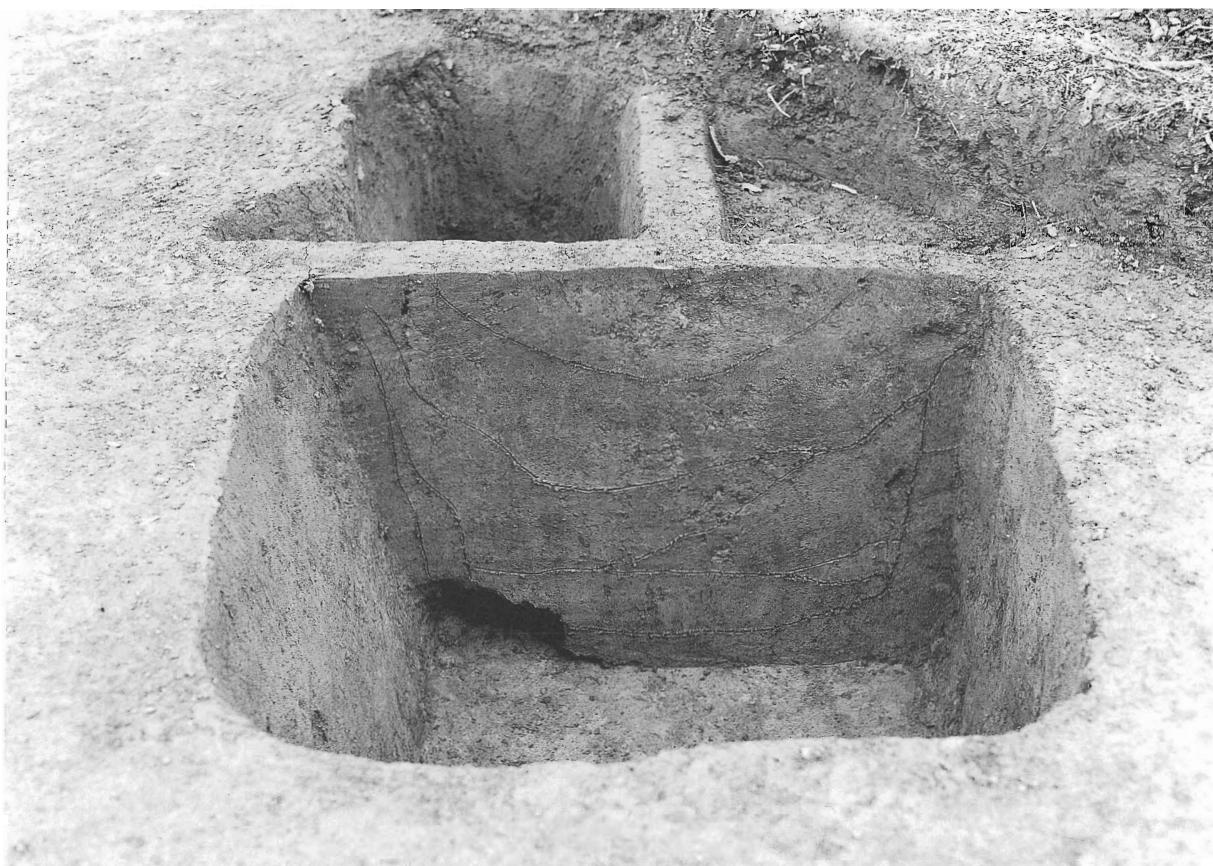
図版 4



馬場遺跡 SK01 検出状況



馬場遺跡 SK01 縦断土層



馬場遺跡 SK01 橫断土層



馬場遺跡 SK01 完掘後

図版 6



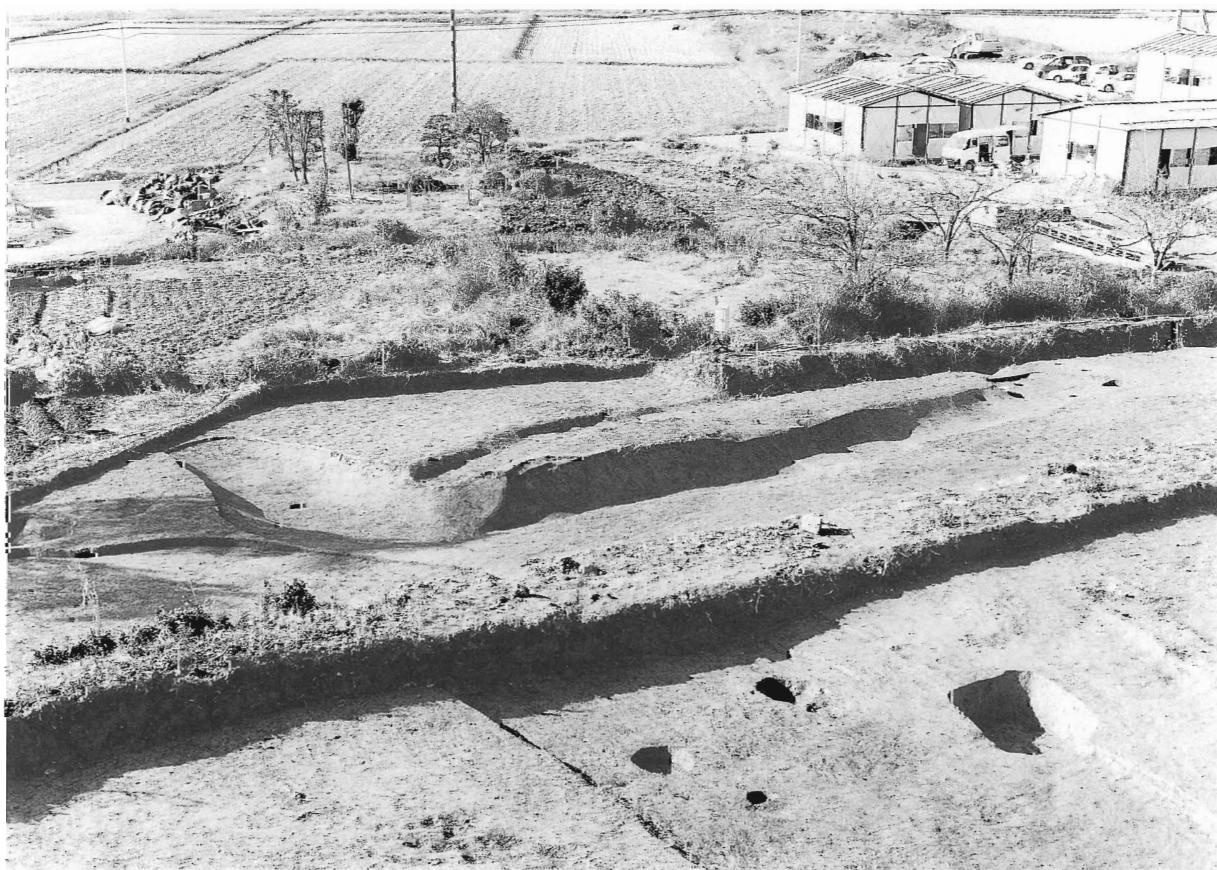
馬場遺跡 SK02 縦断土層



馬場遺跡 SK02 完掘後



馬場遺跡 SK03・04

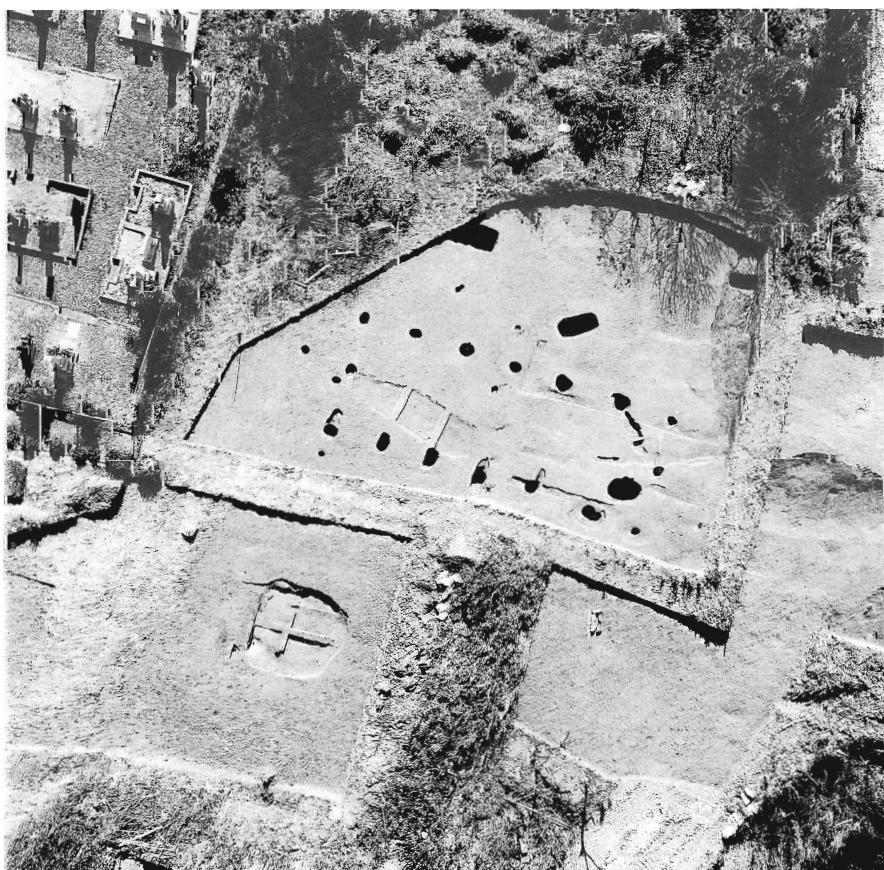


馬場 2 号墳

図版 8



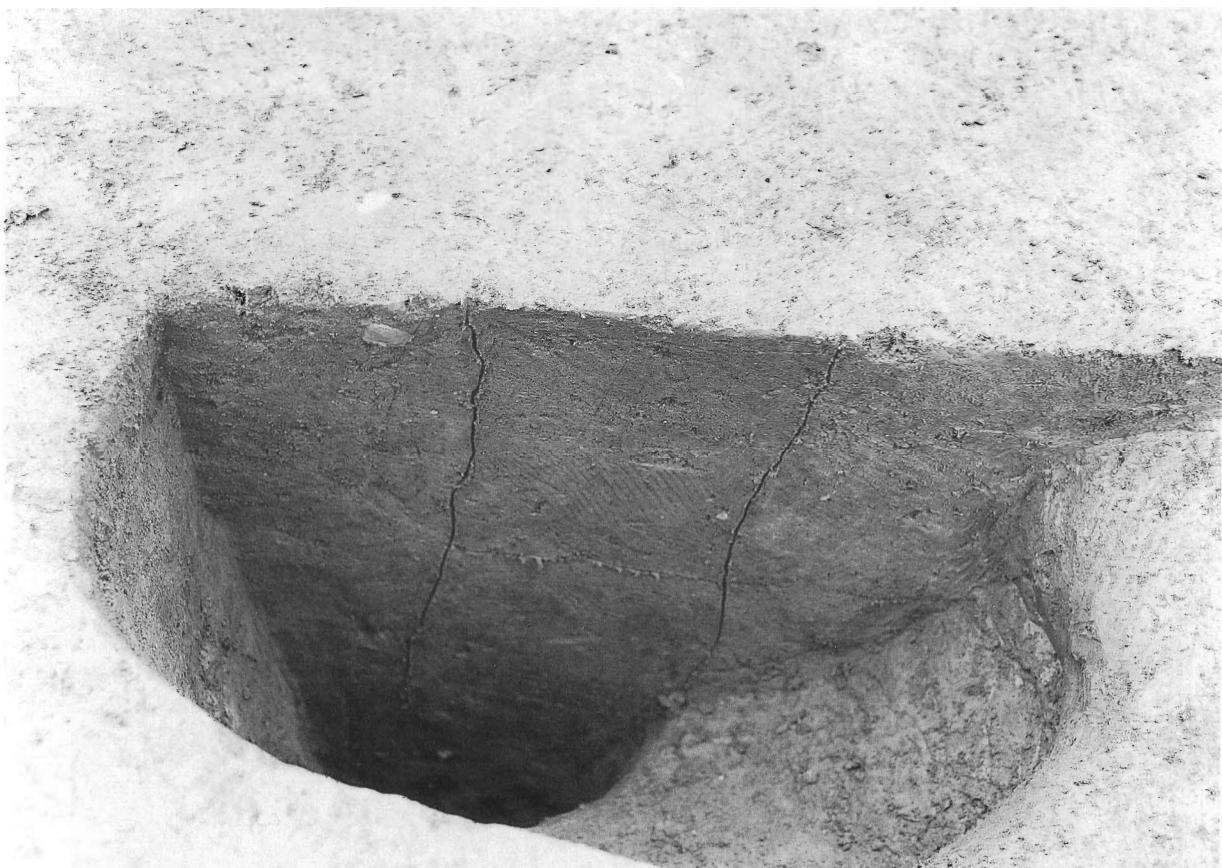
馬場 2 号墳 周溝内土層堆積状況



馬場遺跡 SB01・SX01・SK01・02・03・07・SD01

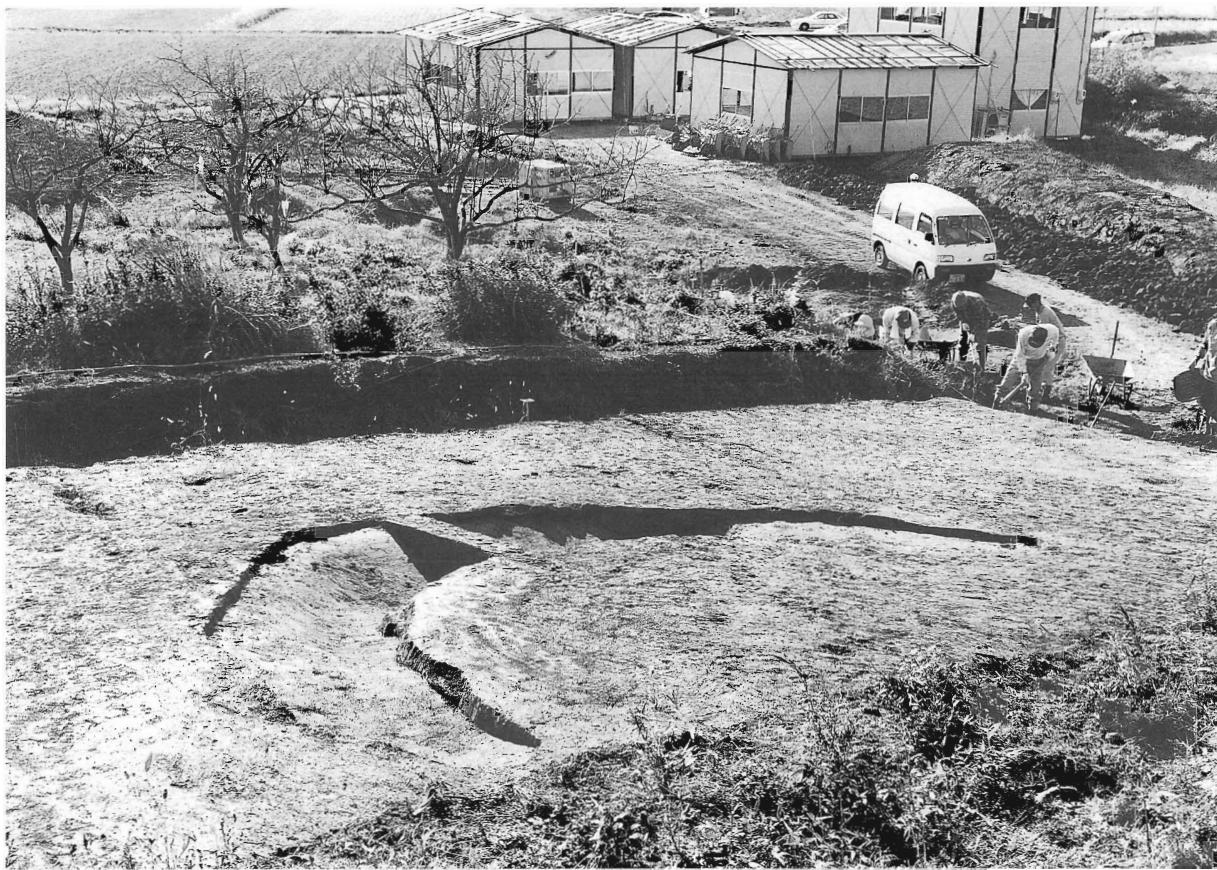


馬場遺跡 SB01・SK07



馬場遺跡 SB01・柱穴土層堆積状況

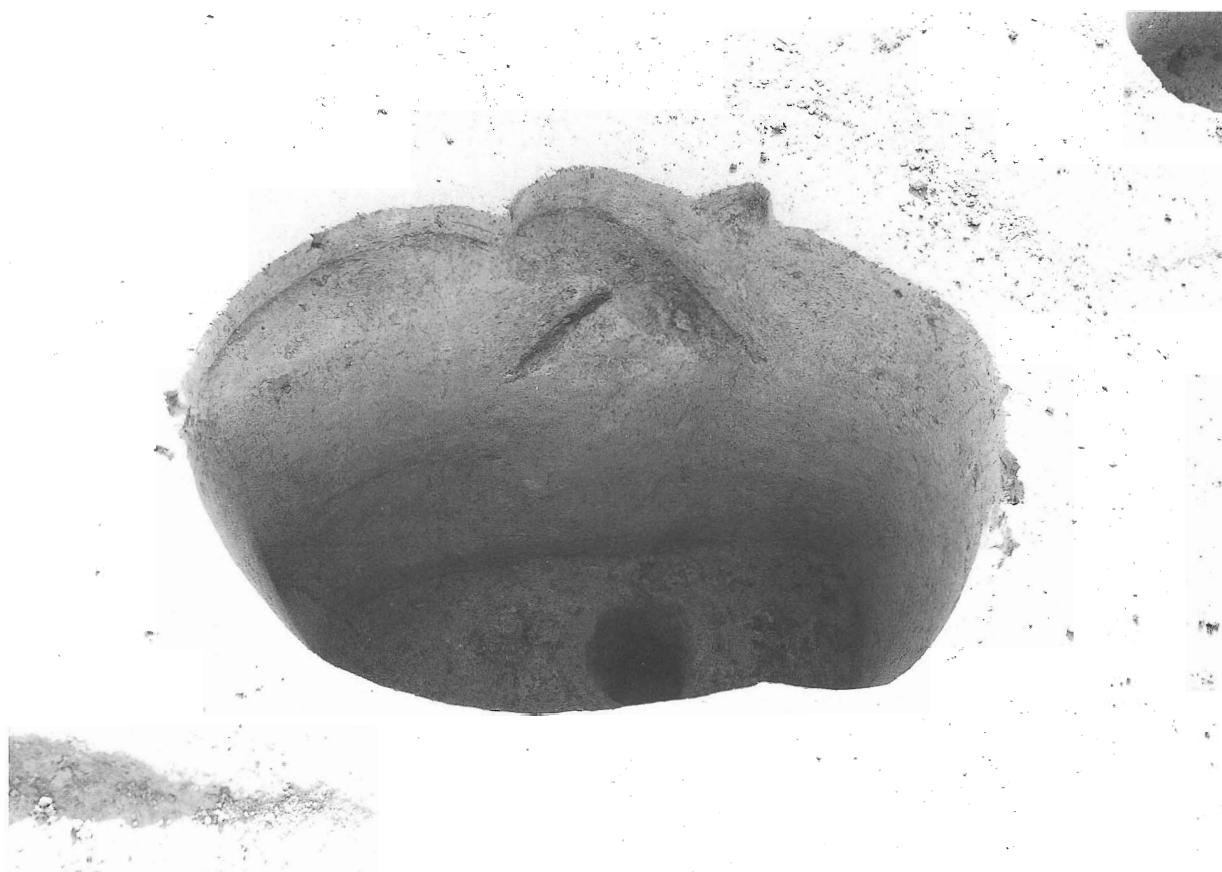
図版10



馬場遺跡 SD02



馬場遺跡 SB01・SX01



馬場遺跡 SK07



馬場遺跡 SX01 土層堆積状況

図版12



馬場遺跡 石組遺構



馬場遺跡 石塔群



杉ヶ撓 1号墳・2号墳（上空から）



杉ヶ撓 1号墳・2号墳（東上空から）

図版14



杉ヶ撓 1号墳 墳丘（東から）



杉ヶ撓 1号墳（北から）



杉ヶ撓1号墳 墳丘 主体部（南から）



杉ヶ撓1号墳 主体部縦断土層

図版16



杉ヶ撓 1号墳 主体部横断土層



杉ヶ撓 1号墳 後背溝・土層断面



杉ヶ撓 2号墳 墳丘（南から）



杉ヶ撓 2号墳 墳丘・主体部（南から）